

テロリズム

隠された手



標的となる個人ハンドブック

バーサーカー

ブクグ



隠し手のテロリズム

ギャングストーキングと指向性エネルギー兵器を特定し、それに対抗するための、標的とされた

個人のためのハンドブック

はじめに

1) 何を、なぜ？

2) 誰が

3) ソリューション

4) 参考文献 マ

ーチング・オー

ダー

はじめに

国家が支援するテロリズムという現象は今に始まったことではなく、太古の昔から、破壊の立役者であるユダヤ・フリーメーソンの隠された手によって画策されてきた。トラウマに基づくマインド・コントロールを庶民に課すことは、権力とマインド・コントロール、世界支配を維持するために頼られる権力のメカニズムである。陰謀団の影の政府は、ユダヤ人（彼らを支配する実体と結びついた生物学的雑種）と彼らの「シャボス・ゴイム」（イディッシュ語で「愚かな動物」を意味し、彼らが自分たちのために全権力を吸収するために悪用する非ユダヤ人の道具を指す）で構成されている。この陰謀団は何千年も前から存在しており、この記事を書いている時点では、世界支配と専制的な意のままにすべてを奴隷化する計画を実現する態勢を整えている。

このハンドブックは、ケムトレイル、携帯電波塔やその他のアレイから放送される電磁場、毒入り食品（遺伝子組み換え作物）と水道（塩素、フッ素、エストロゲン物質、合

成化学物質）、強制課税と賃金奴隷制度、メディアと教育-洗脳システムのプロパガンダとマインド・コントロール、その他のテクノトロニック・コントロール・メカニズムなど、庶民の操作に使われている最も特殊な手段について扱っている。

陰謀団は、自分自身とそれを支配する組織に対してのみ忠誠を誓っている。陰謀団によって設計され、支配されている社会は、権力分担という点で、台形の幾何学的図形として構成されている：物理的な次元では、ユダヤ人が台形の頂点にあり、フリーメーソンや他のイルミニズム集団は下位にある。支配するエリートの下で、人々はオカルト的な極性原理（男性的（右翼）、女性的（左翼））に基づいて対立する陣営に分けられる。ユダヤ・メーソン神権政治の「システム」全体は秘密裏に運営され、陰謀団への忠誠の度合いと個人の利用価値に基づいて昇進や降格が行われ、階層的に区分されている。

純血の者（白人種）は血の記憶の呼びかけに耳を傾け、他の集団ほど利己的な目的のために陰謀団に売り渡そうとはしない。白人種は直感的に善（調和）と悪（不協和音）の違いを理解しており、調和とは自分の一部である有機体、人種の魂の保存である。

白色人種がその意識において最も高尚な人種であることは、より高い次元の存在や精神的な領域に向かう垂直的な傾向や、調和のとれた世界秩序を維持しようとする本質的な行動から推測できる。

ユダヤ・フリーメーソンの陰謀団は、貪欲、高利貸し、策略と欺瞞に基づく世界秩序を目指している。すべての人のアイデンティティを破壊し、その権力政治の坩堝の中で、すべての人を雑種の塊に落とし込もうとしている。

陰謀団に反対する者たちが標的にされ、純血の者たち、陰謀団の影響によって墮落することのない健全な精神を持つ者たちが、最も標的にされる。このグループ、特に彼らの中で最も知的で直感的な人々は、陰謀団が世界的な奴隷化のために次のような手段を使うための格好の標的なのだ。

このハンドブックが可能な限り広く、効果的に広まり（手を差し伸べられる人々や、行動を起こす人々に届き）、陰謀団の犯罪が暴かれ、最終的に彼らがひっくり返した正義の均衡が正されることが、著者と編者の願いである。以下の著作は、標的個人、ギャングストーリーキング、指向性エネルギー兵器という現象に関する既存の資料を統合したものであり、それらが何であるか、どのように使われるか、誰によって、なぜ使われるかを明らかにしたものである。この情報が公開され、効果的な必要な行動によって陰謀団が暴かれ、打倒されるか、あるいはこの世界に未来がなくなるかのどちらかである。このハンドブックは、打倒への一助となるようデザインされている。破壊の立役者たちの黒い心に矢を放つものだ。

1)

何を、なぜ？

A) 定義

「組織的ストーカーとは、組織化されたオカルト的な嫌がらせである。これは、組織的かつ繰り返し個人に嫌がらせをする大きなグループによって行われます。これはまた、コースストーキング、ギャングストーキング、コミュニティベースの嫌がらせ、組織的な自警団ストーキング、復讐ストーキング、テロリストストーキング、リベンジストーキング、隠密行動、国家主催の嫌がらせ、マイクロ波嫌がらせ、マイクロ波マインドコントロールなどとも呼ばれている。これらのラベルはすべて、同じ基本的な現象を説明している。(リッチ『国家が支援するテロキャンペーン：隠された悪』28-29頁)。

"モッピングは、いじめ、心理的テロリズム、組織的暴力とも呼ばれ、多くの個人が団結して個人を迫害する集団的な心理的暴力の一形態と説明される。モッピングは、物理的な手段を用いず人を破滅させる方法である。"(同書、pg.) 劣化したテーマは、人々が名乗り出るのを妨げようとするためにしばしば用いられる。(同書、35ページ)

作戦は、(標的となった個人、略して「TI」)を繰り返し失望させることによって威嚇し、不安定にさせ、社会的弱体化のように他者との関係を妨害し、混乱させることによって社会的に疎外するように設計されている。その目的は、被害者に個人的な危機を引き起こし、無気力にさせ、心理的苦痛を与えることで、反政府活動をする時間とエネルギーを失わせることであった。"(Zersetzung、1頁)

「今、私たちが目にしているのは、世界的に協調され、組織化された統制と適合の努力である。現在、世界中の多くの国が、コミュニティ指向の警察(ギャング・ストーカー)と呼ばれる警察モデルを使っている。(同書3頁)

「組織的ストーカー行為とは、神経衰弱に陥ったり、投獄されたり、施設に収容されたり、常に精神的、感情的、肉体的苦痛を味わったり、ホームレスになったり、自殺したりするように、その人の生活の質を低下させようとする悪意ある試みで、個人に対して行われるテロの一形態である。これは、組織化された告発、嘘、噂、でたらめな調査、罾、濡れ衣、脅迫、あからさままたは秘密裏の脅迫、破壊行為、窃盗、破壊工作、拷問、屈辱、精神的恐怖、一般的な嫌がらせを用いて行われる。組織化された方法に従い、組織的に個人を"恐怖に陥れる"ことに参加するコミュニティのメンバーによる"集団化"である。(同書4頁)

「ギャングストーキングの目的は? 通常の目的は、標的をあらゆる形の支援から孤立させ、将来、逮捕、施設収容、あるいは強制自殺に追い込むことである。(シュタージ戦術、4頁)

これはヘブライ語で「sikul memukad」(標的殺害)と呼ばれる。

個人に対する"Zersetzung"(ドイツ語で"分解")は通常、ターゲットの信頼を単に破壊することを意図して、(社会的にも職場においても)ターゲットの生活の質を組織的に貶めることによって行われた。使用される手口は、中傷的な噂を流したり、職場でトラブルを引

き起こしたりなど、さまざまな形をとった。「同書」。

組織的ハラスメントは「第4世代戦争」の一形態であり、国家やその他の主体が民間人に対して行う政治／情報戦の一形態である。国家主権を重視し、かつ／または国家の利益に何らかの脅威をもたらす民間人敵対者（別名「国内国家の敵」、「反乱分子」、過激派、非国家主体、「狂信者の細胞」、市民「テロリスト」）を標的にするために、民間人や軍隊、さらには社会全体を利用する。"（地域ギャングストーカーの取扱説明書」）。

「この [.....] 終わることのないシステムのな [.....] 嫌がらせ、影響力、そして対象となる個人への操作は [.....] 対象をコントロールするために特別にデザインされており、その目的は [.....] 対象を支配し続けること、あるいは [.....] [.....] [.....] [.....] 破壊（Zersetzung）（魂の） [.....] である

(「ツェルセツング-東ドイツ秘密警察の心理分解手法」3ページ)

"こうした嫌がらせや実験キャンペーンの長期的な目的は、極めて基本的なものであるように思われる。(1)個人の嫌がらせに関与している機関そのものに対する倒錯した忠誠心を誘発する。(2)標的とされた個人の絶望感、怒り、フラストレーションを、人種や民族集団に向ける。(3)政府によってもっともらしく否定されうる条件下で、自殺であれ殺人であれ、個人に暴力行為を強要する。"マイクロ波ハラスメントとマインドコントロール実験、ジュリアン・マッキニー、
国家安全保障OB会電子監視プロジェクト・ディレクター

「キャンペーンの目的は、その人を友人や家族から引き離し、失業させ、ホームレスにさせ、生活の質を低下させ、神経衰弱に陥らせ、自殺に追い込み、薬漬けにし、投獄・施設に収容することである。
(リッチ『国家が支援するテロキャンペーン：隠された悪』45ページ)。

"7.われわれの王国は、ヴィシュヌという神性にその擬人化を見出したヴィシュヌの弁証となるであろう。われわれは、ゴイムが使用するためにわれわれが考案した権利の範囲において、政府が見ることを妨げている公式警察の助けを借りずに、すべてを見ることができよう。われわれのプログラムでは、われわれの被験者の3分の1が、義務感から、残りの者を監視下に置く。

国家に対するボランティア奉仕の原則。そうなれば、スパイや情報提供者であることは不名誉なことではなく、メリットとなる。しかし、根拠のない糾弾は、この権利の乱用が拡大しないよう、厳しく罰せられる。

8. われわれの諜報員は、社会の上層部からも下層部からも、娯楽に時間を費やす管理者階級、編集者、印刷業者、出版業者、書店員、事務員、販売員、労働者、コーチマン、下働きなどからも選ばれる。この組織は、何の権利も持たず、自らの責任で行動を起こす権限もなく、結果的に何の権力も持たない警察であり、ただ目撃し報告するだけである。彼らの報告や逮捕の検証は、警察事務を管理する責任あるグループに依存し、実際の逮捕行為は国家憲兵隊と市警察が行う。政治に関する問題に関して見聞きしたことを糾弾しない者も、この罪が立証されれば、隠匿の罪に問われ、責任を負うことになる。

9. 今日、われわれの同胞たちは、自らの危険を顧みず、次のように糾弾しなければならない。
カハル・アポストートは、自分の家族、あるいはカハルに反対するようなことをしていることに

気づいたメンバーであり、だから、全世界の我々の王国において、すべての我々の従者には、この方向で国家に奉仕する義務を遵守する義務がある。"

(シオンの長老の議定書」第17議定書第7～9節)。

B)

ヒドゥン・ハンドのテロリスト・プロトコルの「分解」(Zersetzung)の3段階:

- 1) ターゲティング (調査・監視)
- 2) ギャングストーキング
- 3) エレクトロニック・ハラスメント (指向性エネルギー兵器、通

称「D.E.Ws」) 1)

ターゲティング (調査・監視)

ターゲティングは「その人の性格的特徴をカタログ化できるように、[i]監視から始まる」(リッチ、19頁)。「ターゲットは常に監視され、もしターゲットが特定の引き金に感情的に反応すれば、それはプロトコルに組み込まれる」。(Julianne McKinney)。

そこからii) 調査へと進む。「インチキ捜査は、中傷キャンペーンを展開し、その人の支援組織を排除するために使われるプラットフォームであるように見える。(このようなハラスメント・プログラムを組織する人々は、あなたの人格を暗殺しようとする。彼らはあなたの事件簿を持ち、人格攻撃に利用し、地域社会の支持を得ようとする。(同書)

i) サーベイランスと調査:

"彼らはあなたの近所に活動拠点を設け、監視を行う""彼らはこれを行うために、あなたの居住スペースの上、下、または横に物件を転賃、リース、賃貸する。予算は無制限なので、お金に糸目はつかない。半信半疑の嘘、仕組まれた嘘、全くの嘘が使われる。もしあなたが組織的な自警団ストーキングのターゲットなら、調査は手段ではなく、それ自体が目的なのです」。(同書)。「組織的ストーキングが始まると、ターゲットにされた個人はまず、秘密裏に監視されることになる。その人物はおそらく24時間365日監視されるだろう。監視、心理的プロファイリングのプロセスの一環として、電子的手段だけでなく、徒歩パトロールや車両パトロールが個人を追跡するために使用されることがある。心理的プロファイリングが完了すれば、ギャングストーキングを開始することができる。"

(東ドイツ秘密警察の心理分解法)

"Zersetzungの第一段階は、医療記録、学校の報告書、警察の記録、情報報告書、ターゲットの住居の搜索など、国家が保有するすべてのデータと情報の評価であった。この時点で、彼らはターゲットに圧力をかける方法として使用できるあらゆる弱点（社会的、感情的、身体的）を探していた。("Stasi Tactics - Zersetzung")

"グループは三角測量を使って活動拠点からあなたの家を監視しています。 で使用されているようなレーダー懐中電灯やミリ波装置のような装置が、あなたの家を監視しています。

空港では、ライフ・アセスメント・ディテクター・システム（LADS）などが使用される。これには

約135フィートの距離で、心拍と呼吸を検知することができます。また、建物内の特定の人物の動きを追跡するように設定することもできる。(同書)

"地域密着型エージェント（CBA）の目視監視と高度な電子監視の両方が使用される。"(「地域ギャングストーカーの取扱説明書」2頁)

2) ギャングストー

キング

「心理的プロフィールが完成すると、ギャングストーキングが始まる。ギャングストーキングは一般的に、ある個人について秘密捜査が開始され、私服警官、市民情報提供者／密告者、偵察者のチームが、標的とされた個人に執拗に嫌がらせをするために配備されることから始まる。

(「ツェルセツング-東ドイツ秘密警察の心理分解手法」2ページ)

"次の段階は、シュタージにとって関心のある存在であることをターゲットに伝え、不安とパラノイアの感覚を作り出すために、しばしば秘密の監視をあからさまな観察で補うことだった"。(シュタージの戦術-ツェルセツング、4頁)。

ギャングストーキング、組織的ストーキング、または暴徒化プロトコルは、標的とされた個人を傷つける手段として、個人とその財産、および陰謀団が彼らが気にかけていると考える人々の両方を標的とする。以下のセクションでは、採用された特定の戦術の例と、加害者が望む効果を取り上げているが、決して網羅的なものではない。

i) 物件:

盗難・侵入

盗難は安価な小物で済むかもしれない。しかし、宝石、パスポート、その他の重要な品物が盗まれたとの報告もある。通常、押し入った形跡はありません。これは、彼らがあなたの家に入ったことを知らせるために行われる。これらのカルト集団は、ターゲットとなった人物

の生活のあらゆる側面に執着する。身の回りの品がグループのメンバーに回されることもあり、それは明らかにグループがターゲットを支配していることの象徴である。(リッチ『国家が支援するテロキャンペーン：隠された悪』22ページ)。

妨害行為と破壊行為

"これは家庭でも職場でも起こることだ。電子機器は常に故障しているかもしれない。これは電子爆弾や同様の装置で達成されるかもしれません[...]あなたが前日に取り組んできたプロジェクトが壊れてしまうかもしれません。多くの場合、この破壊行為は警察に通報する程度のものである。(リッチ『国家が支援するテロキャンペーン：隠された悪』23ページ)

「ターゲットが広大な土地を所有している場合、その土地に隣接して有害な活動が手配され、建設されることがある。あるケースでは、自然の美しい地域に広大な農場を所有するターゲットに隣接して、ゴミ捨て場、オートレース場、刑務所が建設された。これはまれなケースだが、次のような例を示している。

罰に "値する" 者に罰を与えるというコミットメント。("Bright Light on Black Shadows", Dr. Rauni-Leena Luukanen Kilde, ch.18)

これは必ずしも財産的損害ではないが、敷地内で静かに楽しむ権利や不動産の市場価値を破壊するものであり、ほとんどのギャングストーキング・プロトコルがそうであるように、対象となる個人に間接的な損害を与えるものである。

ii) 人:

もちろん、個人に対する攻撃はヒドゥン・ハンドの究極の目的である。陰謀団は、a)経済的に、b)法的に、c)社会的に、d)肉体的に、そして3)最も重要な精神的に、個人を標的にする。個人は多次元的な存在であり、その影響範囲はこれらの領域に関与していることから、これらの具体的な攻撃形態はすべて相互に浸透している。以下は、その人 (T.I.) がこれらの方でどのような影響を受けるかを説明するものである:

a) 経済的サボタージュ:

ブラックリスト

「暴力団ストーカーグループは、あなたが持つあらゆる個人的・ビジネス的关系を妨害する (7) 彼らは国家公認であるため、あなたを簡単に失業させることができる。就職のチャンスは潰される。彼らはあなたがそうならないようにするために報酬を得ている。ターゲットにされた人々のほとんどは失業者である。(リッチ『国家が支援するテロキャンペーン: 隠された悪』23ページ)。

銀行口座は、ホワイトカラー犯罪によって閉鎖されたり、妨害されたりするかもしれない。オンライン取引は、他の金融媒体や大口・小口の売り手から妨害されるかもしれない。インターネット上で売り買いしようとする行為もまた、犯罪者たちによる鋭利な手口や阻止によって妨害されるだろう。

不動産を売ろうとすれば、陰謀団が不動産業界／プロフェッションを独占しているため、他の販売と同様に価値を失うことになる。また、交渉可能な価値のある他の商品も、同じ理由で売れば価値を失うことになる (例: 地金、収集品など)。

金融監視。ターゲットとされた個人が持っているすべてのペニーがカウントされ、ターゲットとされた個人が得ることが許されるのは一定額だけであったり、ターゲットに破産や貧困をもたらすために悪巧みがなされたりするようだ。

b) 法的妨害行為:

警察への通報は、「組織的ストーカー行為と電子ハラスメントの犯罪を暴き、阻止するための闘いにおける情報取り扱い」[O.S.E.H], Eleanor Whiteに概説されている広範な手順と助言に従うべきである。

要するに、警察との付き合いは避けるべきである（後述の「対処法」の小項目「警察との付き合い方」を参照）。

陰謀団はT.I.S.E.H.に対するO.S.E.H.キャンペーンに私服と潜入捜査の両方の警察を利用しており、程度の差こそあれ、おそらく一部の例外を除いて警察も関与している。階級が高いほど、彼らは妥協し、腐敗している。

軍曹以上は必ずフリーメーソンで、ユダヤ人の主人のシャボス・ゴイ（イディッシュ語で「愚かな動物」）である。したがって、彼らは信用できない。

警察は民間の警備のプロ（鍵屋や警報システム会社、民間の警備員やそのマネージャー）と協力して、嫌がらせや妨害目的でT.I.の住居をスパイし、侵入している。

法制度は、陰謀団（コモンローに取って代わったノアヒデ・タルムードの裁判所）の支配下にあるため、弁護士や裁判官を雇っている。彼らは、自分たちの法律や細則に違反したと決めつけることができる人なら誰でも、制度を通してレールを敷こうとし、できる限り重い刑罰を与えようとする。忠告：法律家は、ほとんど例外なく、ユダヤ人かフリーメーソンかユダヤ系キリスト教徒である。彼ら」は、「共同体主義的」スパイ社会システム（「隠された手」影の政府）において、他のすべての官僚や民間・公的組織とともに、陰謀団である。

c) 社会的妨害行為だ：

ブラックリストを維持するために使われる手口には、通信妨害や誹謗中傷などがあります。また、テロリストの疑いや国家安全保障への脅威などをチェックするためのリストやソフトウェア・パッケージもある。どうやらこれは盛んなビジネスであるようで、法律でその使用を義務づけられている組織もある。（リッチ『国家が支援するテロキャンペーン：隠された悪』24ページ）。

「連邦政府とのつながりがあるため、彼らは情報提供者を使って、対象となる人物を公の場で犯罪に仕立て上げる能力を持っている(101, 7)。本人はこれらの罠に気づいていないかもしれないが、中傷キャンペーンを助けるために事件簿に加えられるかもしれない。彼らは、公の場でモビングする際に、対立を誘発しようとするかもしれない（「アメリカにおけるテロリストのストーキング」、デビッド・ローソン）。グループのメンバーはまた、ターゲットに暴行を加えるようそのかさそうとするが、これは目撃者がいなければ決して行われぬ。多数の関係市民の証言によってターゲットが刑事有罪判決を受けると、民事訴訟に発展することもある。（同書23ページ）

"小児性愛は、隣人、同僚、地域社会の人々、場合によっては家族さえも年中無休のハラスメ

ントに巻き込むために使われる、よくある嘘のひとつである"(同書、62)(同書、62)

ギャングストーキング・プロトコルでは、T.I.を罠にはめようとする試みは、T.I.の後について回る犯罪者たちによって行われる（おそらく、T.I.にチップが埋め込まれている場合はGPSによって、あるいは歩行者や運転手の犯罪者たちによる継続的な視認を維持することによって、また、T.I.が近づいていること、T.I.が射程距離に入ったら嫌がらせをするために騒音キャンペーンを始めるよう、携帯電話のテキストメッセージやアラートで住民に知らせることによって）。ベビーカーや赤ん坊を連れた子供や女性を意図的に巻き込み、T.I.が一定のペースでルートを歩いている間に妨害させることも多い（下記の「妨害」を参照）。そして、T.I.を女性や子どもたちに隣接させて写真に撮り、その写真を警察やその他の「当局」が地域住民に見せることで、騙されやすいゴイム（イディッシュ語で「家畜」）を説得し、キャンペーンに同調させ、T.I.に対する嫌がらせをエスカレートさせようとする。

監視リスト)。刑務所に入れば、囚人たちによって処刑されるかもしれないし、コミュニティの自警団によって処刑されるかもしれない。また、（陰謀組織によって作られた）彼のアイデンティティの悪評のために、雇用を得ることもできなくなる。

中傷キャンペーンや風説の流布によってT.I.の評判が回復不能なまでに傷つけられれば、彼はさらに陰謀組織とその代理人による処罰を受けることになる。

エレクトロニクス

「さらに、T.I.は「[...]あなたの人生における現在の出来事と類似した迷惑メールを受け取ることがあります[...]あなたはひそかに侮辱や脅迫を受けるかもしれません」(同書29ページ)

「あなたの電子メールはブロックされたり、フィルタリングされたり、あなたのウェブ活動が監視されるかもしれません[...]あなたが[...]オンライン・ディスカッション・グループやオンライン・デートに参加しようとする[...]邪魔されたり、ゴミ箱に捨てられったり、嫌がらせを受ける可能性が非常に高いです。これは、有給の民間請負業者（作業員／擁護者）&電子メールのフィルタリングの組み合わせによって行うことができる。」(同書、30ページ)

日常生活を通じて他の人物に遭遇した場合、その人物はギャングスターや犯罪者である可能性が非常に高く、その人物に関する情報を収集しようとしているか、何らかの方法でその人物を罠にはめようとしている（毒殺やその他の手段による暗殺、レイプ、他の犯罪者に扇動された警察の捜査や襲撃のためにその人物に証拠を仕掛ける、別名「スワッピング」、警察に冤罪の電話をかける）。これは、T.I.と親しくなった人物と長期にわたって接触した後であっても、その人物が秘密工作員である可能性があるため、起こりうることである。また、その「友人」は、T.I.にガスライティングやその他の形態の暗黙の虐待を加えて、自己価値観をすり減らしたり、ホモやその他の逸脱した性行為、薬物などの悪習を勧めたりするために、その役割を演じているだけかもしれない。T.I.を罠にはめ、評判を落とし、最も残酷でトラウマになるような方法でT.I.の死をエスカレートさせることができるものなら何でもする（これが「隠された手」の目的である）。

社会的統制 - 社会的・社会的統制システムによる個人の孤立化

犯罪防止」を正当化する虚偽証拠の捏造（捏造犯罪の証拠の捏造と風説の流布-ターゲットの信用失墜）；ほとんどの場合、ターゲットとされた個人は、自らを守る機会もなく性犯罪の嫌疑をかけられる。

突然の失業や解雇、職場内での差別や敵意。

噂や直接的な支配のために友人を失う。加害者はTIの友人関係や社会生活に乗っ取る。彼らはいつも無礼で、人を操り、本当の友人ではない。

精神疾患の「症状」（潜在意識下の声、V2K、他の人のために起こっていることを説明しようとする）を作り出し、精神科に入院させる。

薬物乱用の "症状" を作り出す（薬物、毒物、薬物で食品を改ざんする、視界がぼやける、目を読む、見当識がなくなる、頭が痛くなる、記憶喪失、会話が困難になる、意味がわからなくなる）ことで、対象となる個人の評判を落とす；

インスリン関連疾患の「症状」（脊髄や後頭部の痛み、ひどい頭痛、高血糖値、膨大な疲労感）を生み出し、早期退職や働けないことによる貧困を生み出している。

ホルモンバランスの乱れの「症状」を作り出す。(ミネラルとビタミンのサプリメントを摂取し、ホルモン腺をケアしてください)。

自分の感情や考えを表現することが、時には明らかに困難になるため、「症状」や認知症を作り出す。

d) 物理的な妨害行為だ:

D.E.W. (後述する指向性エネルギー兵器) の使用は、肉体を破壊するだけでなく、急性および慢性の痛みを生み出す。

犯人はT.I.S.の食品に毒を盛ることができる（これは後述する合成テレパシーV2Kの先端技術を利用したものである）。

毒ガスはどんな吸気口からでも住居に送り込まれるかもしれないし、犯人は単純に住居の壁に穴を開け、T.I.が眠っている間に送り込むかもしれない（一酸化窒素や他の形態のガスなど）。

T.I.またはT.I.が世話をしていると疑われる動物に危害を加え、拷問し、殺す。

医師、看護師、その他の「専門家」は、T.I.に危害を加えるためにその権限を乱用する（予防接種、何らかの方法で意図的に失敗させる必要のない手術、コンプライアンスを確保するために物理的な力の脅しによって可能であれば強圧的に処方される医薬品、その他の有害な処置が処方され、効果的な自然治癒法は言及されないか、推奨されない）。

騒音キャンペーン:

"騒音"は、一般大衆が"普通"とみなすタイプのものでなければならない。目標は、対象者に罰を受けていることを認識させることであるが、それが事実であることを他の誰にも納得させないことであることを忘れてはならない。地域の騒音外出禁止令を守るが、騒音外出禁止令の時間外でも十分な罰が与えられる。ターゲットは、法執行機関を巻き込むような安易な

理由を持つてはならない。"

(「黒い影に明るい光を」 ラウニ＝リーナ・ルーカネン・キルデ博士、第18章)

近隣の家から大音量で音楽を流す；標的の家の近くでタイヤを頻繁にキーキー鳴らす；標的の家の壁、床、天井に当てた木片や石組みに、"作業"をするかのように頻繁に穴を開ける。あるいは、ハンマーで叩く；標的の家の近くでサイレンを頻繁に使用する [...]」（同書）。

"基本的に、家の周りには様々な種類の妨害音の回転からなる安定したノイズの流れがある。この騒音は、あなたがどこへ行こうともついてくるかもしれません。これには、車のドアがバタンと閉まる音、人の出入り、人の叫び声、車のアラーム、クラクション、タイヤの金切り声などが含まれます、

たたく音、エンジンの回転音、車のピープ音、絶え間ない工事、芝刈り機、除雪機など。あなたの隣人はおそらく、非常に騒々しい工事工程をもたらす無償の住宅修理で買収されるでしょう[...]低レベルの騒音への慢性的な暴露は、有害な生理学のおよび心理学的健康影響をもたらすことが知られている危険と考えられている。騒音に長期間さらされると、高血圧、コレステロールの上昇、循環器系、心臓血管系、胃腸系、筋骨格系へのダメージが生じる可能性がある」(Rich, State-Sponsored Terror Campaigns: The Hidden Evil", pg. 28-29)。

同期：

「あなたの動きは、騒音、車の往来、人の往来、その他の動きとシンクロする。これらの同調戦術は、しばしば数回、おそらく3回以上行われる。

自宅周辺での騒音キャンペーン

1. 屋外：車の使用、車のアラーム、車のクラクション、車のドアをボタンと閉める、アイドリング中の車、これらの車から聞こえる大音量の音楽、隣人とのストリートシアター、または見知らぬ人が大声で話している、または一般的にハイパーソニックサウンドダイレクトスピーカーを介して増幅された音 - これらは、ターゲットを囲むユニットの内部にあるか、またはユニット/ホーム自体に配置することができる指向性装置であり、どちらの方向にも反転させることができます。

したがって、もし家の中でエコーが聞こえたら、あなたの声が届くように装置が逆になっているのです。もしそれがあなたに向かって聞こえてくるのなら、つまり、人が話している声がいつもより大きく聞こえるか、あるいは何か得体の知れないものから聞こえてくるのなら、それはターゲットに向けられているのである。

2. 内側：壁がつながっているアパートに住んでいる場合：

a.あなたが誰かの下に住んでいる場合、その住人は騒音レベルを上げるよう勧誘される。床をいつもより重く歩いたり、頭上に重い物を落としたり、アパート内での動きを影で監視したりする。また、これらの居住者は、自分が不在の間、その住戸を使用することを許可し、他のリクルートがその住戸を使用できるようにし、24時間365日、ターゲットへの嫌がらせを続ける。

このハイパーソニック・サウンド・デバイスは、冷蔵庫や給湯器など、音や振動を出す電子機器にも設置される。この装置はまた、音、声、歩行が特定の地域から来ていると思わせるためにも使用

される。

また、消防車、救急車、警察車両が押し寄せ、対象者の住宅に至近距離になるとサイレンが鳴り響く。

また、庭師が使う送風機や大型トラックの逆走時には、大きな音が鳴り響く。

いずれにせよ、そのほとんどは、ハイパーソニック・サウンド（ACOUSTIC

HARASSMENT）の指向性使用によって増幅される：

ハラスメントにはいくつかの方法がある：

1. あなたの周囲、特にあなたの私邸で、時限的にノイズが増加する。

隣人が大音量で低音主体の音楽を流している場合、一般的にスピーカーはハイパーソニック・サウンド・デバイスと一直線上にある。これは、音を特定のターゲットに向けることができることを意味し、そのようにあなたをターゲットにしたときに増加させることができますが、その範囲内にいない人には音が聞こえません。

隣人は自分のアパートで出す音も大きくする。特に、あなたが彼らの下に住んでいる場合。彼らは、嫌がらせキャンペーンを強化するために、床を大きく歩くなどして、騒音に反応するタイミングを計ります。彼らはまた、シャドーイングと呼ばれる、あなたが家の中でするすべての動きを大音量でシャドーイングすることを行います。トイレに行こうと立ち上がれば、トイレに向かう足音が聞こえる。あなたがトイレの水を流すと、近所の勧誘員が同じことをする。キッチンに行こうと立ち上がれば、2階の隣人が同じことをするのが聞こえる。蛇口をひねれば、蛇口をひねる音が聞こえる。

これらは、近隣住民のリクルートが使う心理学的なテロリズム戦術であり、標的となった個人をテロ化し、拷問し、殺害することを仕事とする建築家を容易にし、匿うためのものである。

街頭では、あなたの自宅住所のプライバシーがこれらの市民新兵に与えられるTIMED LOUD RESPONSESが行われます。これらの新兵は、どのようなタイプの車に乗っているか、特に、最も大きな音を出す車に乗っているかを尋ねられ、ターゲットの家の近くを運転し、アイドリング状態にし、ターゲットが彼らの存在に気づいていることを確認する仕事を割り当てられる。また、ターゲットの住所の近所にいるときはいつでも、車で通り過ぎるように指示される。

その多くは、あなたが眠っている早朝か、夜中、たいていは電気を消して眠る準備ができた後に行われる。この時間帯には、車の往来や、車のドアがバタンと閉まる音、アラームが鳴ったり止まったりする音、クラクションを鳴らす音、人の話し声、笑い声などが聞こえてくる。壁をたたく音や、部屋のあちこちで聞こえる大きな音で、文字通り眠りから覚める。

2. ダイレクト・エナジー武器化技術を用いたアコースティック・ハラスメント。

この種のアコースティック・ハラスメントは一般的に、極端な高周波や低周波、圧電振動音響、無線周波などの形で行われる。

睡眠不足

この休息状態や睡眠状態からあなたを目覚めさせるために、時限的に大音量のノイズが反応する。これらの音響的嫌がらせは、車両、音響周波数、増幅された家庭用電化製品など、あなたを休息や睡眠から目覚めさせるような指向性を持つことができます。これは何度も行われ、ターゲットは眠りに戻ることができない状態になる。ターゲットが雇用されている場合、彼らは睡眠不足の状態にあり、そのため仕事への影響力が弱くなり、その結果、ターゲットが無能で、何か問題があるという誤った印象を与えるプロセスが可能になる。

睡眠不足はまた、標的を徐々に慣らし、脆弱な状態を継続させるためにも使われる。そうすることで、テロリスト・アーキテクトは、標的を操作し、罠にはめ、脅し、脅迫する目的で、標的を心理的に攻撃しやすくなる。

衝突とカットオフ:

「車両や徒歩、あるいはその組み合わせで起こる。この種の空間侵略は、あなたを驚かせ、緊張を作り出すように設計されています。バーチャルな平手打ちと考えることもできる。コーナー、廊下、トイレ、交差点など、常に人や車が割り込んできたり、ぶつかりそうになったりするような死角で使われる。加害者は、目の前に飛び出してくるまで見えない [...]。人工的に誘導された遮断機では、加害者は遠くに見える。あなたと犯人は同じ焦点に向かっている。それは角であったり、非常に狭い通路であったり、あるいはあなたたち2人を収容できない道であったりする。彼らはあなたのタイミングとリズムに合わせることで、常にその地点であなたと出会うようにし、彼らの意図的なタイミング調整のために、あなたは通り抜けたり、立ち止まったり、回り込んだりしなければならない。あなたの注意を引き、不快にさせるのが狙いだ。(同書、26ページ)

車列:

"あなたがターゲットにされた場合、あなたの通りを徒歩や車両の通行が "ルート変更 "される可能性があります。よくあるのは、タイヤをきしませ、クラクションを鳴らし、大音量で音楽をかけ、エンジンをふかし、大声で叫びながらあなたの家の前を通る車です。(同書 28ページ)

ブライトニング

「日中、ハイビームを点灯している車列に尾行されることもあります。ターゲットの窓に光を当てるのも戦術のひとつだ」。(同書)

e) 精神的な妨害行為:

感性プログラム:

"原因 ストーカー団体は通常、感受性プログラム (7) からキャンペーンを始める: 相手の注意を引き、嫌がらせを受けていることを知らせる。一般的な物や音に有害な感情を固定させ、ターゲットが人前で公然と嫌がらせを受けられるようにする。これらの感受性プログラムは、神経言語プログラミング (NLP) と呼ばれる科学に基づいている。(同書31ページ)

「NLPでは、生理的状态とリンクし、その状態を引き起こす刺激をアンカーと呼びます。ア

ンカーはどのようにして作られるのか？ 第二に、より重要なことですが、アンカーは、感情が強く、タイミングが良ければ、一回で設定されることがあります。極端な場合、外部からの刺激が非常に強力なネガティブ状態を引き起こすことがある。これが恐怖症の領域である。(「NLP入門」ジョセフ・オコナー&ジョン・シーモア)

「ハラスメント集団は、恐怖や不安といった否定的な感情状態を作り出し、それを環境内の一般的なものに固定する。

「グループは、あなたが感作された対象を取り上げ、それを別の対象と結びつける。恐怖、不安、怒り、羞恥心を連想させる対象を増やし続ける（感作）ということらしい。(同書32ページ)

「これを見た他の人は、誰かがアラームを数回オン／オフするのは少し奇妙だと思うかもしれないが、孤立した奇妙な出来事として片付けてしまうだろう。彼らはそのピープ音が何を意味するのかを説明するのは難しいでしょう。NLPでは、既存のトリガーに固定された感情状態をコピーし、それを新しいトリガーに移すプロセスをチェイニングと呼ぶ。(同書32ページ)

「アンカーは鎖のようにつなぐことができる。それぞれのアンカーが鎖のつなぎ目となり、次のアンカーを誘発する。(「NLP入門」 ジョセフ・オコナー&ジョン・シーモア)

ストリート・シアター／ハラスメント・スキット：

「ハラスメント・スキットはストリート・シアターの一種に分類され、言語的・非言語的なハラスメント、脅迫、侮辱、脅迫、暴力をテーマや象徴、その他の媒体を使ってあからさまに表現するものである。ターゲットが感化された後に実行されることもある。このハラスメントは、比喻、言葉による発言、衣服やその他の物品を使った象徴を用いて伝えられることがある。被害妄想的な反応を呼び起こすようにデザインされた、見知らぬ人による侮辱やコメント、以前は友好的だった隣人からの汚い視線や否定的な行動は、ターゲットの間でよく見られる。(同書、32-33ページ)

「ストリート・シアター／ハラスメント・スキットで犯人が使う）言葉の中には、人の感情状態に影響を及ぼす可能性のある、特別な重みを持つものがある。(同書33頁)

「これはメタコミュニケーションと呼ばれる。メタメッセージとは、文の中に隠された暗示のことで、おそらく褒め言葉のことだろう。文中の特定の単語のトーン、音量、リズムを変えることで、実際のメッセージが話し言葉とは異なるものになる。"(同書)

象徴：

「シンボリズムはサブリミナル攻撃の大きな部分を占めているようだ。ターゲットが感化された後、彼らは衣服、新聞、その他のアイテムを使った象徴主義で嫌がらせをしたり、侮辱したり、脅したりすることさえできる。ボディ・コミュニケーション（ソーシャル・キネシックス）がターゲットに嫌がらせをするために使われるのと同じように、象徴的なコミュニケーションも使われる。象徴は、特にあなたが[歩行者や車両の]群衆によって電撃的である波状攻撃の間に、衣類の記事で使うことができます"。(同書35ページ)

象徴として使われるのは、色、形、数字である。例えば、ある種の犯罪タクシー運転手は、自分のタクシーに「33」というナンバーを付け、それを目視できるようにし、赤い車を運転する。オレンジ色も頻繁に使われ、暗闇の中の「光」や生命力（ライフ）を象徴するが、権力者による憑依（T.I.を「プレミー」や憑依された存在としてあざけること）を象徴するためにも使われることがある。

シンボリズムはまた、ターゲットに関連していると陰謀団が知っているもの、あるいは信じているものと関連している。例えば、ターゲットが特定の場所にいたことがあり、ギャングがその地域のナンバープレートの車を運転するドライバーを雇っているような場合である。別の例としては、ギャングストーカーが、T.I.にとって意味があり、陰謀団が自分たちのことを知っていて、監視されていることを知らせるため、あるいはターゲットに関連するメッセージを伝えるためと考えられている特定の単語、フレーズ、ロゴ、その他のシンボルが付いた服を着ている場合である。

ストリートシアター

あなたの家の近所で行われます。これらは、あなたの自宅住所を不正に与えられたリクルート、および/または地理的近隣からリクルートされた人であり、ターゲットの私邸の周りに昼夜を問わず、特にターゲットが在宅の場合に現れるように求められます。

ストリート・シアターは集団で行われることもあり、何人もの人々があなたの住居の近くに現れ、騒いだり、大声で会話したりする。

また、犬や赤ん坊の散歩をする一人旅の人もいるが、たいていの場合、PERPSは携帯電話を使い、ターゲットに合わせたキーワードで会話を誘導する。

ストリート・シアターのもうひとつの形態は、公共サービスや公共事業の利用である。

さらに、道路と交通を利用することで、常に道路工事が行われているように見えるため、ターゲットとなる個人は別のエリアに誘導される。

一般的に、ある種の小児性愛者のように、あるいはある種の役人のように、ターゲットが子供にとって危険であるように見せかけようとする場合、彼らはすべてのいわゆる道路交通を学校や子供のいる場所の近くを通るように指示する。

また、地域社会の組織内の役人や指導者の建物や住居に、ターゲットがこれらの人々や地域にストーカーしているかのような誤った印象を与える。

これは、SET-UPSとENTRAPMENTによってターゲットの被害をさらに拡大させるために展開される。ターゲットにされた個人は、無邪気に方向指示標識に従いますが、通常、ターゲットが現れた瞬間に写真やビデオを撮影している別の新兵がいることに気づきません。

これは、建築家のビデオや、指定されたエリアでのターゲットの写真を提供するもので、彼らのFEAR-MONGERINGリクルートメント・プロセスに使用することができる。

もう一つのタイプのSTREET THEATERは、ターゲットが何か悪事を働いているかのような誤った印象を与えるために、写真やビデオを撮るためにターゲットの周りにやってくる若い新兵という形で使われる。これらの若い新兵は破壊の使命を帯びており、別の新兵が特定の出来事を撮影し、ターゲットを悪者に仕立て上げるために、このような卑怯な戦術を展開するよう指示される。

例若い女性または男性の新兵は、年上の男性または女性のターゲットに近づき、会話を始めたり、危険な位置に身を置いたりするように言われ、男性または女性のターゲットが写真に撮られたり、ターゲットと一緒にビデオに撮られたりします。

暴力団ストーキング・プロトコルの不条理さは、それが4th 国家戦争であることを証明している：

「もしターゲットがそのような恐ろしい人物であったなら、あるいはそのような犯罪を犯していたなら、プロファイリング、無差別ストーキング、サーベイランスの秘密の段階の背後にいるアーキテクトたちは、その秘密の段階において次のようなことをしていただろう。
- 実際に "重大な証拠があった"

買い物をするうちに、この小売店には、あなたが誰であるかを知っているように見えるが、あなたにとってはまったく見知らぬ人々が押し寄せ始めていることに気づくだろう。

市民の密告者が公共の場 で 展開するテロリストの心理戦術のいくつかに気をつけよう：

あなたが通り過ぎるとき、あなたをじっと見たり、指差したり、ささやいたり、くすくす笑ったりする。

一緒にいる人（グループ）と、あるいは携帯電話で、指示された会話をし、通り過ぎるときにキーワードを使って、彼らが国家のための市民密告者であることを知らせる。

精神的苦痛

職場でのいじめ、友人や家族の突然の喪失、孤立。

いじめ全般。他の人々との社会的な問題のために、「攻撃者」や「操る者」が近所の人々にどんな噂でも流せるような場所に移動し、別の方法で支配することができる。

集団ストーカー（群衆の中に無礼な人々が現れ、言語的・非言語的コミュニケーションを駆使して個人を侮辱すること）。20人、あるいはそれ以上の人々が戦略的に配置され、例えばターゲットとなった個人を憎悪の眼差しで見る。彼らは全員見知らぬ人であり、無礼な人たちである。彼らはTIが外に出るたびに現れ、さまざまな表情を見せる。時には何か企んでいるようにも見え、嫌がらせは一定のパターンに従って行われ、ある段階に達するとリセットされ、また同じことが繰り返される。

ストリート・シアター：集団が個人のためにショーを演じ、決められた筋書きに従っているように見える。対象者の思考を追跡する。思考監視は屈辱的なものとして認識される。家に入られ、犯人は物を盗まないが、壊したり、そこにあるべきでない物を置いたりする。ドアに力が加えられていないため、鍵を使って侵入することが多いようだ。街中や空港での窃盗：所持金の盗難。

移動手段の破壊：車や自転車。

COLORの使用目的は以下の通りである：

1. 標的を恐怖に陥れ、自分たちの人間的生命に対して行われている市民的共同作業を知らせさせるのだ。
2. この国家と企業が後援する国内テロ組織のために、他の洗脳されたカルト・メンバーに知らせるためのコール・サインとして。
3. この国内テロ組織のターゲットとなった被害者を心理的に追い詰める方法として -。

完全なサポート不足

対象者が医療専門家に会ったとき、彼らはTIが話すことに興味を示さない。症状は「昔ながらの」方法で治療される。

多くの場合、TIは年金を受け取るために間違った薬を服用したり、時には汚名を着せられるようなレッテルを貼られたりする。

ある国では、TIは精神科に強制的に入れられることがあり、そこでは人権が完全に失われる。

ブラックリストに載ることで、TIは仕事を見つけることができなくなったり、専門外の仕事を引き受けざるを得なくなったりすることが多い。新しい職場では、TIは常に嫌がらせを受け、いじめられる。

警察は嫌がらせに加担し、TIが経験することにまったく無頓着だ。メディアはTIを無

視する。

サイバーストッキング

同じことが社内の他の部隊にも言える。彼らは採用され、サイバー能力へのアクセス権を与えられ、令状なしに、ケーブル、インターネット、テレコミュニケーションを通じて、ターゲットが自宅のプライバシー内で何をしているかを違法に監視する。彼らはまた、ターゲットが聞こえる距離にいるときに使用するキーワードをキューに入れ、ターゲットが自宅のプライバシーで何をしていたか、テレビで見ていたもの、閲覧していたウェブサイト、読んでいたものなどを繰り返し、その番組、ウェブサイト、本の章などをターゲットに真似て返し、ターゲットの一挙手一投足を監視していることを知らせたり、印象づけたりする。

SET UPS - 組織的なテロリストによるストーカー行為の被害者であることがわかるだろう。

対象者であるあなたに対して行われているすべての犯罪の加害者たちは、多くの場合、同じ人間であり、対象者が強いられている陰湿な暴力の被害者になります。

真実は、これらはターゲットとされた個人をさらに犠牲にするために使われる、よく組織された二枚舌の戦術である。これらのいわゆる - PERP VICTIMSは、彼らの最終的な目的を達成するために、ターゲットをさらに罠にはめ、破壊するために使われる単なる役者である。

死

GANGSTALKINGプログラムは、心理的・肉体的な攻撃と拷問という絶え間ないライフイベントを伴う、長期にわたる緩慢な死と表現することができる。GANGSTALKINGのエージェントは、5段階のどのレベルにおいても、ターゲットとされた個人を連れ出し、死へと導くことができる。

ギャングストーキングの段階：1)～6)

GANGSTALKINGプログラムは、人間のあらゆる側面をターゲットにしている。

GANGSTALKINGプログラムの最初の4つのレベルは、特に以下のようなターゲットに設計されている：

1. レベル1は主に無知な人をターゲットにしている。
2. レベル2は主に精神をターゲットにしている。
3. レベル3は主に心臓をターゲットにしている。
4. レベル4は主に肉体を対象とする。

1. ひよっこ

このレベルでは、GANGSTALKERSの手口はより隠密であるため、対象者は自分が対象者であるという事実を知らない。これは、GANGSTALKERSが対象者を監視し、習慣、健康状態、性的指向、違法行為、対象者が好んで訪れる人々や場所などの背景情報を収集するのに時間を費やす期間である。私は、地球上のほとんどの人々が、この第一段階のIGNORANTであると考えている。ターゲットにされた人々が、ターゲットにされる「前」に、GANGSTALKINGプログラムの存在に無知であったのと同じように、彼らはGANGSTALKINGプログラムの存在に無知である。

GANGSTALKINGプログラムのセカンド・レベル

GANGSTALKINGプログラムの第2レベルは以下の通り：

2. 集団ストーカー（尾行／あからさまな監視）

このレベルでは、GANGSTALKERSは、ターゲットとなる個人から距離を置き、ターゲットとなる個人の持ち物からも距離を置くが、徒歩または車両でターゲットとなる個人を追跡し、監視する、統一感のある色彩、身振り手振り、星空、ストリート・シアター、擬態、指示された会話、記号、単語、数字、ノイズ・キャンペーン、咳払い、咽頭の咳払いのような音を用いて、あからさまな方法で。

3. GANGSTALKED (CONFRONTATION AND ENGAGEMENT)

このレベルでは、GANSTALKERSは、不誠実な親密な関係や不誠実な友好関係のために、場合によっては対象者のパーソナル・スペースに入り込む。GANGSTALKERSは、会話や交流を通じて、ターゲ

ットとされた個人と直接対峙し、関わりを持つとする。GANGSTALKERS は、対象となる個人の生活に自分自身を挿入する機会を求める。GANGSTALKERSの中には、肩をたたいたり、手をたたいたりするような、親しみを表す「触れる」ジェスチャーを使うことがありますが、暴力的な方法ではありません。

「ハニートラップとは、恋愛関係や性的関係を、対人関係、政治的、金銭的な目的のために利用し、その恋愛関係や性的関係に関与している一方の当事者に不利益をもたらす捜査手法である。

調査員はまた、「ターゲット」、つまり調査の対象者に不正な恋愛関係が疑われる場合、通常、妻や夫、その他のパートナーに雇われることも多い[1]。時折、脅迫に使用する証拠写真を撮影する目的で、浮気を作り出す行為にもこの用語が使われることがある。ハニートラップは、主にハニートラップの対象に関する証拠を収集するために使用される。"

注：レベル3の「ハニートラップ」エージェントに注意。

エレクトロニック・ハラスメントには以下の2種類がある：

1. 主流技術と機器によるエレクトロニック・ハラスメント
2. 秘密の先端技術と装置による電氣的嫌がらせ GANGSTALKING プロ

グラムの第4レベル

4. 集団ストーカー

このレベルでは、GANGSTALKERS は実地的かつ物理的である。GANGSTALKERS は、窃盗や器物損壊の犯罪を犯すために、ターゲットの家に侵入するなど、ターゲットの個人及び財産に対する犯罪を犯すために派遣される。また、「ガス燈」、強姦、殴打、毒殺など、対象者本人および／または対象者に関連する人物や動物に対する犯罪行為や危害を加えるために派遣されることもある。

4. 集団ストーカー（主流の技術や機器を使った電子的嫌がらせ）

ギャングストーカー（GANGSTALKERS）は、対象者の自宅に物理的に侵入した後、カメラ、盗聴器（「盗聴器」）、GPS追跡装置、RFIDマイクロチップ追跡装置、コンピュータ・キーロガー・ソフトウェア、マルウェア、ウイルス、トロイの木馬を設置するなどの犯罪行為を行うことがあります。これらに限定されるものではありません。自宅の電話や携帯電話のハッキング。コンピュータのハッキング。ユーティリティの操作。ホーム・セキュリティ・システムのハッキング

5. 集団ストーカー（秘密の先端技術や機器を使った電子的嫌がらせ）

このレベルになると、対象者は、遠隔地から行うことのできる高度な技術や装置による攻撃や拷問にさらされる。GANGSTALKERSは、24時間365日、目に見えない「空気の力」を通じて、遠隔地から標的の個人を強姦し、殴打し、毒殺する能力を持っている。

脳をターゲットにした電磁エネルギー 発明

者ジョエル・スティーブン・ゴールドバー

グ

<https://www.google.com/patents/US20160375220>

"脳をターゲットとした電磁エネルギーによる平和維持方法 特許US

20160375220 A1 (出願日: 2016年3月1日)

脳活動のモデルとしてベローゾフ・ザボチンスキー (B-Z) 反応を利用し、この兵器の初期のプロトタイプが開発された。新たな軍拡競争を防ぐため、この技術は国連に譲渡されるべきである。

脳に向けられた電磁エネルギー アブストラ

クト (一部抜粋)

特許米国 20160375220 A1

「濃縮された極低周波（ELF）電磁波は、頭蓋骨の最も伝導性の高い部分である翼突部と側頭葉の交差点で頭蓋を貫通し、扁桃体を含む前側頭葉に影響を及ぼす可能性がある。側頭葉を遠隔刺激すると、致死発作や無力発作を起こすことがある。扁桃体を刺激すると、高い割合のヒトに恐怖が生じ、呼吸抑制が生じる場合もある。」

扁桃体

<https://en.wikipedia.org/wiki/Amygdala>

扁桃体（複数形：amygdalae；/s'mɪɡdɪslz/；扁桃体、ラテン語、ギリシャ語のἀμυγδαλή、amygdalē、「アーモンド」、「扁桃腺」に由来[1]）は、ヒトを含む複雑な脊椎動物の脳の側頭葉の深部と内側に位置する2つのアーモンド形の核のグループの1つである。[2]記憶、意思決定、情動反応の処理において主要な役割を果たすことが研究で示されており、扁桃体は脳辺縁系の一部と考えられている[3]。

"ヒトの脳における扁桃体の位置" 扁桃体の

機能 <https://en.wikipedia.org/wiki/Amygdala>

「右と左の扁桃体には機能的な違いがある。ある研究では、右の扁桃体を電気刺激すると、否定的な感情、特に恐怖と悲しみが誘発された。対照的に、左扁桃体への刺激は快（幸福）または不快（恐怖、不安、悲しみ）の情動を誘発することができた[9]。他の証拠によると、左扁桃体は脳の報酬系で役割を果たしている[10]。

脳をターゲットにした電磁エネルギー 発明

者ジョエル・スティーブン・ゴールドバー

グ

特許米国 20160375220 A1

私の発明を説明したところで、私はこう主張する：

1. 電磁エネルギーを脳の側頭葉に遠隔伝達することにより、ヒトに行動変化をもたらす方法。
2. 電磁エネルギーが扁桃体に伝達される請求項1記載の方法。
3. 電磁エネルギーをヒトの側頭葉に遠隔伝達することにより、ヒトに発作を起こさせる方法。
5. 集団ストーカー（秘密の先端技術や装置を使った電子的嫌がらせ）

GANGSTALKINGエージェントは、対象者の脳をハッキングし、対象者の視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感に影響を与えるリアルな「幻覚」を誘発する能力を持っている。対象者の夢を操作することができる。

第5レベルV2K (Voice To Skull) [https://www.theverge.com/2017/4/24/15406882/ai-voice-](https://www.theverge.com/2017/4/24/15406882/ai-voice-synthesis-copy-human-speech-lyrebird)

[synthesis-copy-human-speech-lyrebird](https://www.theverge.com/2017/4/24/15406882/ai-voice-synthesis-copy-human-speech-lyrebird)

GANGSTALKINGエージェントは、精神分裂病を模倣した、他人には聞こえない音声などを対象者の頭の中に伝達する能力を持っている。対象者はこの能力をV2K (Voice To Skull) と呼んでいる。

GANGSTALKERSは、生死を問わず知り合いの声をクローンすることができる。

五感

「ホモ・サピエンス固有の五感と感覚器官

対象者の脳がハッキングされた後、GANGSTALKERSは対象者の肉体にアクセスし、痛みや様々な病気などの感覚を誘発することができる。GANGSTALKERSは、電子的にレイプしたり、電子的にオーガズムを誘発したり、電子的にインポにしたりすることができる。GANGSTALKERSは、体温、血圧、脈拍（心拍数）、呼吸数（呼吸数）などのバイタルサインを操作することができる。

GANGSTALKINGのエージェントは、対象者の心を読む能力を持っている。使用される技術により、対象者は一種のスピーカー・モードで自分の考えを聞くことができる。GANGSTALKERSは、対象者の言葉にならない思考を対象者に返すことで、読心能力を示すことができる。これは一種の合成テレパシーである。対象者は何も隠すことができない。

GANGSTALKINGプログラムの第6レベルDEATH

それは、自殺に追い込まれるほど、ターゲットとなる個人を打ちのめすために使われるようだ。高度に機能的な対象者を機能不全に陥れるために。これはリバース・エンジニアリングと同じで、計画的な悪意を持って、ターゲットの生活のあらゆる面を破壊することが目的です。特に、処理能力、既成概念にとらわれない思考、そして、あえて自分たちをターゲットにした人々への質問をあきらめることで、彼らの認知能力を低下させるのだ。

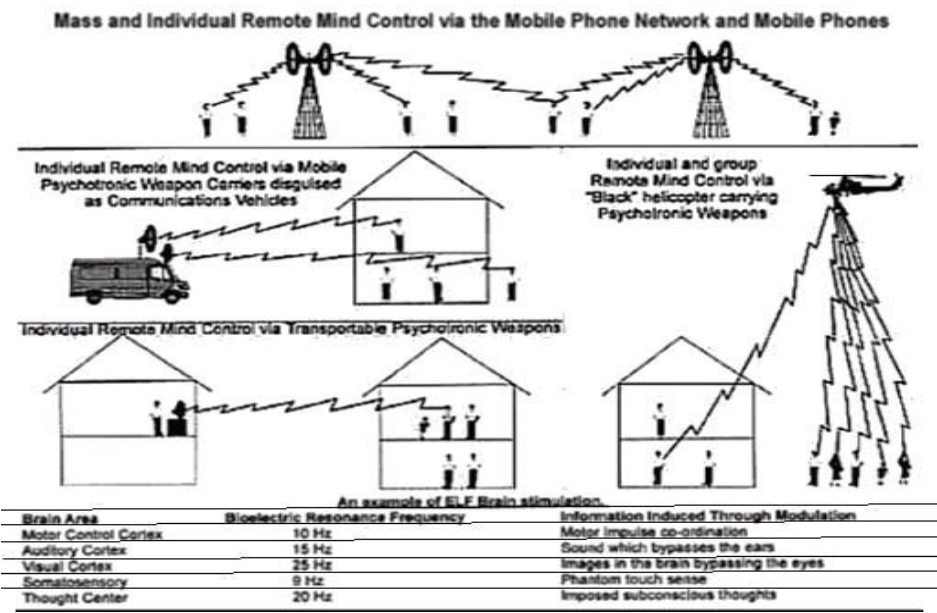
このように、配備されるものの大部分は、一般的にエリート現役軍人が捕虜になった場合に生き残るために送られる、戦争捕虜訓練（SERE: Survival Evasion Resistance Escape）に沿ったものであるが、何よりも、心理学的にトラウマを与え、拷問し、虐待する方法を無数に用いて、人間である捕虜を文字通り打ちのめすのにどれだけの時間がかかるかを見るためのものである。

そのため、ターゲットは24時間365日、サイコ・トラウマトロジー（心的外傷体験に直面したときに心理的回復力を高める要因を検討する学問）の爆撃を受け、彼らの同意のない人間のモルモット、つまりターゲットとされた個人が、彼らに加えられた拷問やテロリズムの中で、どのように立ち上がり、生き延びることができるかを見ることになる。

ターゲットが生き残るために抵抗があり、能力があればあるほど、これらの組織化されたテロリストは、破壊のためのテロリストの十字軍で、より攻撃的で、暴力的で、拷問的で、トラウマ的である。

3)

電子ハラスメント（指向性エネルギー兵器、D.E.W.）



i) それが存在し、どのように機能しているかを証明する：

マイクロ波／指向性エネルギー兵器とは何か？

"正確に変調されたマイクロ波放射は、脳機能に影響を与えるために使用される。人間の行動や反応は、パルス変調されたマイクロ波のEM[F]*放射を使うことで完全にコントロールすることができる。パルス変調されたマイクロ波は、低レベルのEM[F]に対してむしろ耐性のある頭蓋骨を通過することができるので、マインドコントロール信号のキャリアとして有用である。"

(「マイクロ波によるマインド・コントロール」 ティム・リファット) *電磁場

「マイクロ波を使って被害者の脳に信号を送ると、被害者は信号が伝える気分、行動、病的状態を体験することがわかった。つまり、自然な脳の周波数を模倣することで、パルス変調マイクロ波ビーム（ELFパルス変調マイクロ波遠隔マインド・コントロール技術）によって

伝送される極低周波放送を利用して、人間の脳を遠隔操作することができるということである。同書

「マイクロ波を使って、マインド・コントロールの指令を脳に直接送ることが可能になった。必要なのは、気分、行動、思考、それぞれの脳の周波数のカタログだけである。同書

「特定の励起電位は、パルス変調されたマイクロ波送信機によって放送される。このパルス変調マイクロ波ビームには、ELF励起電位の周波数が刻印されている。人間の各行動セットには、特徴的な周波数があることがわかった。怒り、自殺、ヒステリー、トラウマ、連続殺人、パラノイア、欲望などである。同書

Non Lethal Microwave Weapons	
Frequency	Illness Caused
4.5 Hz	Paranoia;
6.6 Hz	Depression/Suicide;
8 Hz	Animals fall asleep;
11 Hz	Manic behavior/Anger;
25 Hz	Blindness if aimed at the head; Heart attack if aimed at the chest.
Other frequencies cause hysteria, trauma, lust, murder and cancer, and may all be induced.	

陰謀団の工作員は「犠牲者の家の壁越しにターゲットを見ることができる高性能のミリ波スキャナーを持っている。パルス変調されたマイクロ波が被害者の脳に定期的に照射される。同書

「これらの指向性エネルギー兵器（DEW）の一部は、本質的に貫通型（TTW）である。これらの装置または類似のものは現在、北米および他のNATO諸国の市民に使用されている。犯人は、空港で使用されているものと同様のレーダー／ミリ波技術を使用して、建物内の人の位置をピンポイントで特定し、他のDEWを人に向ける手助けをしている可能性が高い。（リッチ『国家が支援するテロキャンペーン：隠された悪』38ページ）。

拷問：肉体的、精神的、心理的苦痛 - ICT-インプラントと非致死性兵器による肉体的苦痛。

ICT-インプラントや他の種類の送信装置、しばしば非致死性兵器、指向性エネルギー兵器（DEWs）、電磁周波数（EMF）、または単に放射線としてターゲットにされた個人によってラベル付けされたものの、によって悪化し、より深刻になる傾向がある24時間体の直接の痛み。

脊髄や背中の痛み、だるさや痛み。

後頭部（小脳）や記憶や想像力をつかさどるさまざまな部位の痛み。

扁桃体」または大脳辺縁系の痛み。額や前頭葉の痛み（言葉が散漫になったり、不明瞭になったり

する)。

「調理された」脳(脳や視床下部をわずかに加熱し、合成感情状態やストレス障害を誘発する(ELF波は6.6Hzで調整されたうつ病やストレスの原因にもなる))。

脳の電気ショック、ザップと軽いショック、神経系のショックや攻撃による不随意運動。

胸の痛み、動悸、副腎ラッシュ。

歯痛、歯肉からの出血、歯肉や歯の痛み、顎や腺の痛み。

「軽度の心臓発作」または心拍の低下、パニック発作、慢性的な不安、速い心拍。重要な臓器

の痛み：肝臓、胃、心臓、肺、目、生殖器など。

目のかゆみ - 涙が出たり、目が赤くなったりする。食品店やレストラン

などでの邪悪なペルブスによる汚染。鼻孔の周りの空気が熱くなった

り、酸素が不足したりする。

おそらくICTインプラントや不自然な性器刺激、腫れ物を使った、睡眠中あるいは覚醒中の電子的な性的「レイプ」。

Image of microwave radiation is pulsed into the house. "Abuse of microwave weapons against civilians inside homes."

Microwave in the apartment and the antenna for radiating micro waves in the flower box.

Modded or modified satellite dish for radiating microwaves

Microwave magnetron device torturing from the briefcase in car.

Generator / condenser / flat antenna for radiating microwaves.

THIS IS WHY SO MANY NEIGHBOR HOMES ARE SET UP USING THIS TECHNOLOGY IN THE TARGETED INDIVIDUALS COMMUNITY.

NOTE: NEIGHBORS ARE TOLD IT IS NON LETHAL TECHNOLOGY, BUT NON-STOP ATTACKS, WHICH MANY REPORT LEAD TO SLOW KILL FROM ONGOING RADIATION. THE EFFORTS ARE OVERSEEN FROM OPERATION CENTERS VIA REAL TIME / SATELLITE SURVEILLANCE.

MICROWAVE WEAPON TRIANGULATION

「軍事・諜報機関はここ数十年、間予算を使って恐ろしい電子兵器を開発してきた。電波を利用したこれらの兵器は、身体の機能を停止させたり、苦痛や拷問を与えたり、自殺や精神分裂病、犯罪行為に駆り立てたりするために使われている。これは、体の一部を調理／照射したり、被害者に声を聞かせたり、壁越しや遠距離から心を読み取ったりすることによって行われる。」

(<http://www.stopeg.com>)

「新世代の電子兵器は、人間を焼いたり調理したり、身体組織を破壊（爆発）したり、心臓発作を引き起こしたりすることができる。これはすべて、遠く（数百メートル）から、壁越しに可能である。これらの兵器は現在（2008年）、シークレット・サービスによって、人を無力化したり、自殺に追い込んだり、狂気に陥らせたり、犯罪行為に走らせたり、あるいは単に心不全や脳障害などを引き起こすために使用されたりしている。ナイフ、銃弾、毒物、交通事故に取って代わる。同書

例を挙げよう：

体が熱くなり、インフルエンザにかかったような気分が悪くなる；突然起こったり消えたりする頭痛；ハエや蚊に刺されたような感覚；目のかすみ；止まらない咳；非常に深刻な発熱；心臓発作／けいれん；腎臓の痛み；ゲップのしすぎ；おならのしすぎ；胃の痛み；胃の泡立ち；腸のけいれん；足の痛み；足首の痛み；かかとの筋肉；手の力の低下；体の老化など。

ターゲティングには5種類の技術が使われている：

- (1) スマートメーター
- (2) マイクロ波衛星
- (3) セルタワー
- (4) ドローン
- (5) ポータブル・ユニット

(1) スマートメーター

スマートメーターは遠隔地から容易にコントロールできるため、政府犯罪者をもっともらしく否認しながら個人に嫌がらせをすることができる。これは、ターゲットとされた新しい個人に対して取られる最初のステップの一つである。マイクロ波信号は家庭内のすべての配線を通して送信される。あらゆる方向から来るマイクロ波にさらされている場合、まず考えられる解決策は、ブレーカーボックスの特定の回路ブレーカーをオフにすることである。

(2) 衛星

最初のマイクロ波攻撃衛星は、レーガン大統領のスター・ウォーズ計画（SDI）のもと、1987年に打ち上げられた。これらの衛星は、ICBM核ミサイルを上昇段階で無効化するように設計されていた。

トラッキング周波数は3600～3750MHz、アタック信号は3920～3935MHzを使用。FCCの周波数割り当て表は、これらの周波数の使用を確認している。これらの衛星と周波数は現在、標的の個人に対して使用されている。追跡信号は1センチメートル以上の精度があり、GPS座標

をセルタワーやドローンに中継し、さらにターゲットを絞ることができる。これらの追跡信号は、真上にある衛星から送られてくる。

一般的に、衛星のマイクロ波ビームを遮蔽するには、約30～50フィートのコンクリートと鋼鉄（または土を詰めたもの）が必要である。高い高層ビルは、衛星のターゲットから一時的なシェルターを提供することができる。この技術には限界がある。適切に設計され、適切に接地されたファラデーケージは、マイクロ波の一部を遮断することができる。しかし、ファラデーケージにA/C電圧アースを使用することで、狭いビームを "消費 "し、外部のアース棒に導くことで改善することができます。このような改造は、自分が何をしているのか分かっていない限り、絶対に行わないでください。衛星追跡とViricatorマイクロ波兵器は、低電圧（約10ミリボルト）と高電流で細いビームを使用します。

3) セルタワー

マグネトロンマイクロ波信号発生器は、都市部の多くのセルタワーに設置されている。これらの装置は、セルタワー上の通気口のある筐体ボックスとして識別できる。マグネトロンは作動中非常に熱くなり、赤外線カメラの写真で見ることができる（ホーム・デポで赤外線カメラを借りることができる）。典型的な周波数は2400MHzと2550MHzである。アメリカ空軍の犯罪者たちは、あなたの体の特定の場所を自動的に追跡するようにセルタワーを同期させ始めた。高速道路を運転していると、自動的に次のセルタワーに移動し、あなたの体の同じ場所を攻撃し続ける。ハンドテクニックを使って、どのセルタワーかを識別してください。すべてのTIIに、セルタワーの工事や修理に注意を払うことを勧めます。セルタワーの工事をしている人の車のナンバー／ナンバープレートと会社名を入手してください。この情報を私たちに送ってください。隣人がマイクロ波を向けていると確信している場合、それはおそらく1、2マイル離れたセルタワーから来ていると考えてください。マイクロ波ビームは多くの家屋を通り抜けることができます。指でマイクロ波の方向を「感じる」ことができます。ビームが指の関節に当たると、指の関節が「弾ける」のを感じる事ができる。そうすると通常、そのビームがどこから来ているのか、セル・タワーにたどり着くことができる。

(4) ドローン

これには大小さまざまな民間機も含まれる。特に小型機は、住居の上空を飛行してT.I.I.にスカラー波を照射するのに使われるほか、例えば都心部で尾行するのに使われるヘリコプターもある。

航空機の飛行経路を追跡し、自分の居住地が標的にされているかどうか、また誰に狙われているかを判断するのに適した情報源は、planefinder.netまたはflightradar24.comである。

(5) ポータブル・ユニット

これらの小型マイクロ波発生装置は、高い建物や地下シェルターの中に一時的に身を隠す標的個人への嫌がらせに使われる。小型電子レンジほどの大きさの小さな箱に入っている。

<https://www.righthouse.com/technology-for-tis.html>

ii) 特にマイクロ波/D.E.W.兵器の使用によって何を意図しているのか:

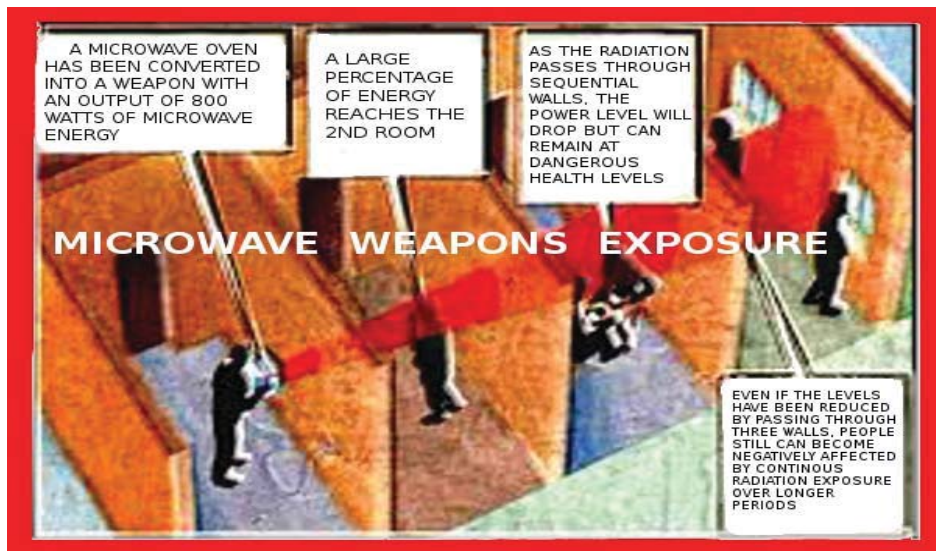
「ある特定のターゲットに向けて壁越しにマイクロ波ビームを発射する場合、マイクロ波ビームの邪魔になるあらゆる物質が、ビームの強度と周波数を減衰させたり変化させたりする。マインド・コントロールには正確な周波数と強度が必要なので、非常に高度なマイクロ波アレイとコンピューター・プログラムを開発し、被害者が家の中を動き回るときに、ターゲットと武器の間にある物質に応じてマイクロ波ビームを変化させる必要があった。そのためには、被害者と武器の間にある物質の反射率や屈折率をリアルタイムで分析し、それをコンピューターに送り込む必要があった。

ターゲットが自宅内を移動するとき、被害者と武器との環境の変化に合わせてマイクロ波アレイを変更する必要があった。第二に、他の人がビームの前を通った場合、自動的に中断される仕組みが必要だった。被害者は、自分が狙われていることに誰にも気づかれることなく、発狂させられたり、行動不能にさせられたりする必要があった。そのための技術は非常に複雑だったが、最終的には完成した」。

(「マイクロ波によるマインドコントロール」ティム・リファット)

「自宅にしながら、特定の病的な精神状態の興奮電位を脳に照射することで、[...]特定の脳の状態／感情を誘発することができる。(同書)。

電子レンジDEWは、めまい、火傷、頭痛、目の問題、神経系と内臓の損傷、心臓発作、集中力の欠如を引き起こす。一般的な電子レンジは、ドアを外した状態で作動するように改造することで、DEWに変身させることができる。電子レンジを壁に立てかけて、反対側にいる人を攻撃することができる。また、より集中的な攻撃を行う武器を数百ドルで作することもできる。



「諜報部員はターゲットの脳に音や音声を入れることができる。この脳間聴覚は被害者を狂わせるために使われる。(『マイクロ波マインド・コントロール』ティム・リファット)

「マイクロ波キャリアビームを使って聴覚データをターゲットの脳に直接伝送することは、現在では一般的に行われている。励起電位を使う代わりに、トランスデューサーを使って話し言葉をELFオーディオグラムに変換し、それをパルス変調されたビームに重ねる。

マイクロ波ビーム[...これによって]対象者は、脳に伝達された声を聞くことになる」。 (同書)

密かに暗殺の道具として使われた:

"標的となる個人を) 一時的に病気にする必要がある場合、脳がインフルエンザの悪性の発作中に発する信号を含むマイクロ波ビームを被害者に向けて発射することができる。この例として、5Gネットワークが、製造されたコロナウイルスや類似の "パンデミック "とどのように調整され、"創造的破壊 "を通じて陰謀団の計画を弁証法的に操作しているかが挙げられる。

「また、低レベルのマイクロ波を使って精神的、肉体的混乱を引き起こし、病気にさせることもある。マイクロ波を照射することによって、被害者は疲労し、免疫系にダメージを受け、神経学的ダメージを受け、思考や作業遂行能力に影響を及ぼし、早期老化、ガン、白内障を誘発する。同書

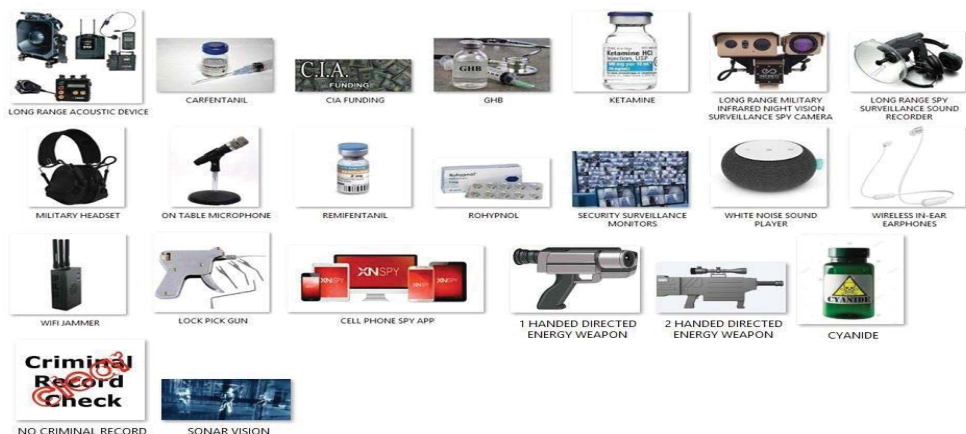
「電子レンジ調理による加熱死は、放射線の電界強度を上げることによって、被害者の目と胆嚢に局所的なホットスポットを引き起こす。被害者の視神経に、この神経から脳に送られる信号と同じ信号を照射することで、神経組織に過負荷がかかる。こうすることで、破壊活動家は何が起こったかを知ることなく、情報機関によって盲目にされることができる」。 (同書)



「神経学的研究によって、脳には準備セットと呼ばれる随意運動ごとに特定の周波数があることがわかった。物を手に取るとき、この動作には特定の準備セットがある。心臓が発する ELF信号を含むマイクロ波を胸に照射することで、この器官をカオス状態にすることができ

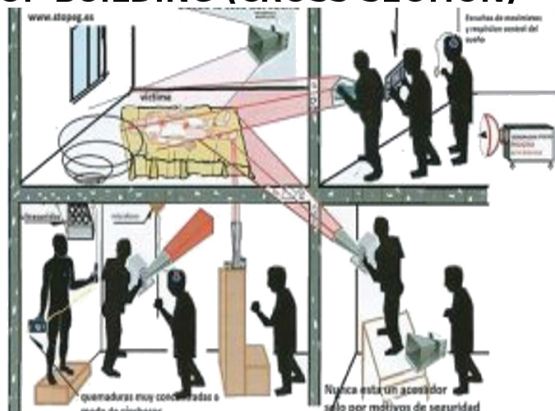
る。同書

「マイクロ波ビームにエンコードされた準備セットを放送する方法を使えば、ターゲットに麻痺を誘発することができる。パルス変調されたマイクロ波ビームは、脳の運動ニューロン中枢にあるものと同じELF信号を運び、被害者の運動調整を妨害するために使われる。(同書)

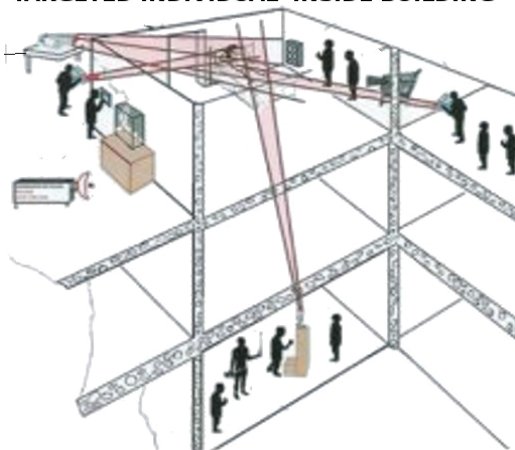


GANGSTALKER'S ARSENAL

INDIVIDUAL TARGETED INSIDE OF BUILDING (CROSS SECTION)



TARGETED INDIVIDUAL INSIDE BUILDING



シンセティック・テレパシー（遠隔思考読み取り／思考の植え付け）：

電子マインドコントロールの最新の進歩については、『ネクサス』の過去記事で説明したが、『エスピオナージ』のESPを見逃した人のために説明しておく、この装置にはMASERと呼ばれる特殊なマイクロ波ビームが使われている。これはマイクロ波ビームのレーザーに相当するものである。このMASERビームは、合成テレパシーと呼ばれるものを開発するために使われてきた。これは離れたところから人の心を読む能力である。被害者の脳を電子的にスキ

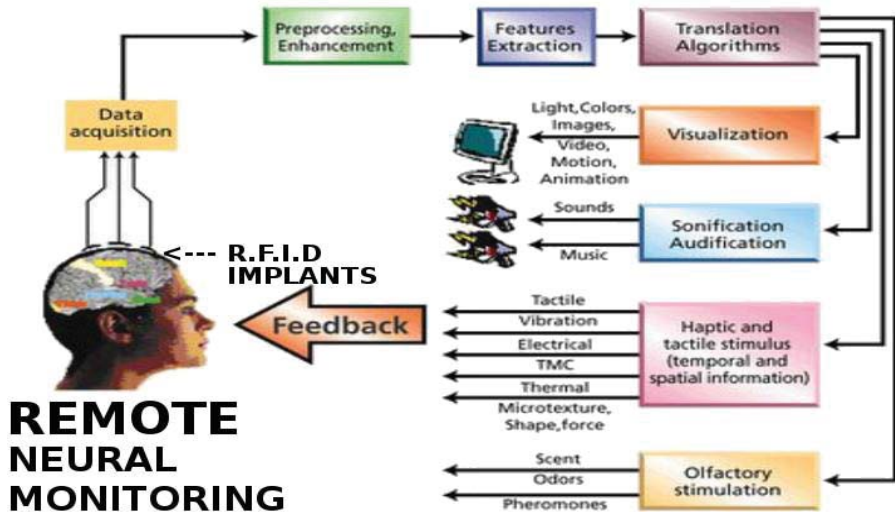
ヤンすることで

人々の脳から電磁波（EM）を放出し、その脳波（脳波計で測定）を使って、被害者の声なき声を発する思考を読み取る。同書

「合成テレパシーは、L5Hz、5ミリワットの聴覚皮質の脳放射を検出する。これは、声下の思考に関連する脳の興奮電位と関連している。低周波のマイクロ波やRFを使った新技術により、X線のように壁をスキャンして人の体の中を見ることができる装置が作られるようになった。これにより、警備員は自宅にいる標的を見ることができ、家中くまなく追跡することができる。さらに、被害者の頭の中を見ることができれば、被害者が家の中を歩き回っているときでも、コンピューター制御で被害者の脳の特定の中樞をターゲットにすることができる。同書

「被害者が自分の家にいる間に、破壊者の特定の脳中枢に向けて発射されたパルス周波数MASERのアレイを使って、被害者がサブボーカルの際に発せられる特定の脳放出をスキャンすることができる。ELFパルス変調MASERのアレイを発射し、発声された思考が発する周波数放射のウィンドウを上下にスキャンすることで、MASERビームの干渉効果を測定することができる。被害者の脳のELF放射は、声下の思考に関連するELFウィンドウのELFを運ぶパルス周波数MASERと、建設的または破壊的に相互作用する。互いに位相のずれたパルスMASERのアレイを発射すれば、外来ノイズをデジタル領域でフィルタリングすることができる。収束するELF変調MASERは、被害者の脳内の低レベル放射の影響を受けているので、破壊者の脳に入るELFパルス信号のシフトを検出することができる。これを単純化すると、盗聴されている人の窓にLASERビームを照射することになる。窓の振動がLASERに変調を与え、それが電気信号に変換され、音になる。こうすることで、被害者の脳内にある声下の思考を読み取ることができる。異なる単語や単語のグループに対する励起電位シグネチャーのライブラリーをすでに構築しているため、高度なコンピューターは発光シグネチャーを単語ストリームにデコードし始めることができる。このようにして、犠牲者の声下の思考をスーパーコンピューターのメモリーに保存し、分析することで、標的が何を考えているかを読み取ることができる。これにより、[陰謀団]合成テレパシー・オペレーターは、破壊者を狂わせるために会話に入ったり、被害者に見つけたい情報について考えさせるようなキーワードを持ち出したりすることができる。視覚野興奮電位を被害者の脳に流すこともできる。そ

うすれば、被害者を狂わせたり、自殺するようにプログラムしたりするために、幻想的なイメージを被害者の脳に映し出すことができる。同書



Steady tone, near the high end of the hearing range, say, 15,000 Hz



Hypnotist's Voice, varying from, say, 300 Hz to 4,000 Hz

Mic.



(Output may be via the air, or via a radio/TV)

HOW HYPNOSIS CAN BE TRANSMITTED USING VOICE-FM, AND THE TARGET IS NOT AWARE

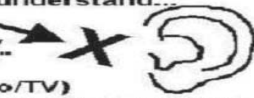
SILENT SOUND

Output is now more or less a steady tone, sounding like tinnitus, but with hypnosis embedded



Brain CAN hear & understand...

...but ear only hears a "tone" or a "rush".



「第二に、警察は450MHzのマイクロ波周波数帯の独占使用を認められている。[...]ロス・アデイ博士は、450MHzの周波数で0.75mW/cm²の強度のパルス変調マイクロ波を使用することにより、人間の行動のあらゆる側面を制御するためにELF変調を使用できることを発見した。

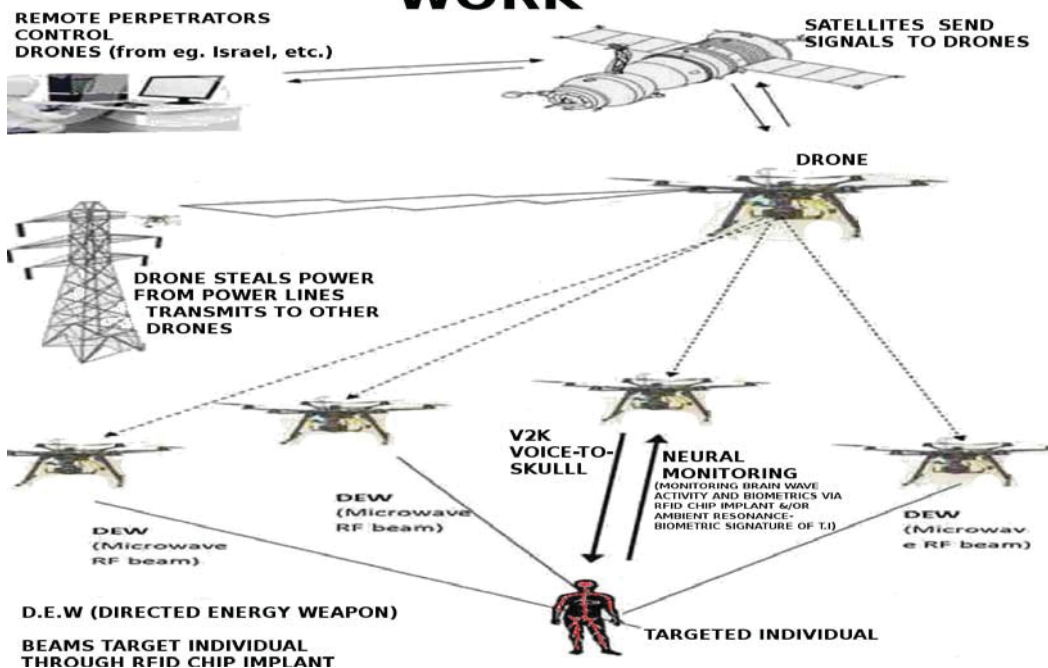
指向性エネルギー兵器（貫通型電子兵器）の例：

ドアを外し、ドアインターロックスイッチをバイパスさせたシンプルな電子レンジを、アパートや半戸建住宅のターゲットの寝室の壁に当てる。この装置は、さまざまな障害を引き起こす可能性がある。マイクロ波被曝による症状には次のようなものがある：喘息、白内障、

頭痛、記憶喪失、初期のアルツハイマー病、悪い夢、うつ病、疲労感、集中力の低下、食欲不振、心臓や血圧の異常、などである。

ガンである。(「組織的ストーカーと電子ハラスメントの犯罪への対処」エレノア・ホワイト、51ページ)

HOW REMOTE D.E.WS (DIRECTED ENERGY WEAPONS) WORK



リダ

ロシアのLIDAマシン（特許3773049）は、精神患者の薬物を使わない鎮静のために使われる古い脳同調装置である。この装置は人のエネルギーを奪う武器として使うことができる。疲労や興奮（不眠）を引き起こすように脈拍数を調整することができる。LIDAの信号はそれほど長距離を移動するわけではないがアパートの一室でTTWを使用。この装置はパン箱ほどの大きさで、静かに作動する。(リッチ『国家が支援するテロキャンペーン：隠された悪』38ページ)。

"[...]パルス化された40ワット、40MHzの無線送信機で、睡眠と一致する速度でパルスを送ると、標的を仕事に疲れさせ、脈拍数を上げると、標的の睡眠も奪うことができる。この装

置は、他のタイプのトランス誘導装置の無線送信機版である [...]」（『組織的ストーカーと電子ハラスメントの犯罪に対処する』エレノア・ホワイト、54ページ）

ボイス・トゥ・スカル (V2K)

V2Kはマイクロ波聴覚とも呼ばれる。アンテナをしっかりと集束させれば、壁を通り抜けて遠くまで伝えることができる。声やその他の音は、壁を通り抜けて、遠く離れた人の頭蓋骨に直接伝えることができる。これは30年以上前に可能だった。

1990年代から2000年代初頭にかけて、アメリカ陸軍は「V2K」と略される「Voice to skull」技術をオンライン・シソーラスに登録していた。理由は不明だが、陸軍は2007年頃にこのシソーラスの項目を削除した。

(「組織的ストーカーと電子ハラスメントの犯罪への対処」エレノア・ホワイト、52ページ)

無音スペクトラム拡散

「サイレント・サウンド (特許5159703) は、クリア・チャンネルとも呼ばれ、サブリミナル暗示の改良版である。人間の可聴域をわずかに超えた別のチャンネルを占有するため、被験者に影響を与えるために他の音と競合するの必要がありません。そのため、「クリア・チャンネル」と呼ばれています。このチャンネルは人間の聴覚を超えたところにあるが、人間の知覚は超えていない。通常は使用されていないが、潜在意識への直接の導線となる。サイレント・サウンドは、その人の仕事場や家の近くに隠しスピーカーを設置することで使うことができる。これらの暗示は常に流すことができ、本人は意識的に意識することはない。サイレント・サウンドは、通常のラジオやテレビのキャリア周波数を使って送信することができる。しかし、必要なのはスピーカーだけである。しかし、サイレント・サウンドは暗示を伝えるだけでなく、クローン化された感情を伝えることもできる。

これは脳の同調である。(リッチ『国家が支援するテロキャンペーン：隠された悪』38ページ)。

「サイレント・サウンド・ボイス・エンコーダは、話し言葉のメッセージを取り込み、電話のボイス・チェンジャーのような回路を使って、音声の周波数を人間の可聴域の上限近く（ただし上限を超えない）まで上げる。リスナーはゆらぎのある甲高いトーンを聞き、意識的にはどんな言葉も聞き分けることはできない。しかし、脳は無意識のうちに言葉を解読することができる。脳は

聴覚の上限付近では、周波数に対する感度が落ちるという事実を利用している。サイレント・サウンドの周波数帯域、およそ14,000ヘルツから16,000ヘルツ（サイクル毎秒。）（「組織的ストーカーと電子ハラスメントの犯罪への対処」エレノア・ホワイト、53頁）

「サイレント・サウンド」はそれ自体では壁貫通装置ではない。しかし、サイレント・サウンドが、音声から頭蓋骨への壁貫通型送信機によってターゲットに送信された場合、ターゲットが催眠術にかかりやすい人（多くの人がそうです）であれば、ターゲットの思考回路や人格は、時間の経過とともに著しく破壊される可能性があります。対象者は甲高い音やヒスを聞くかもしれないが、言葉は聞こえない。対象者は催眠暗示に抵抗する力が、可聴音声の場合よりもずっと弱くなるだろう」。同書

スルーウォール・レーダー

「衣服を通して（そして非伝導性の壁を通して）RADARは、隠された武器を衣服を通して探すために、空港や警察で広く使用されている。このハラスメントの可能性は

組織化されたストーカー集団の手中にあるテクノロジーは明らかである。(「組織的ストーキングと電子ハラスメントの犯罪への対処」エレノア・ホワイト、55頁)

「空港で使用され、現在では警察でも使用されるようになったセキュリティ・スキャニング・レーダーは、非伝導性の壁を通してターゲットを見することもできる。ターゲットが歩き回ると、隣のアパートの住人が何か「作業」をしているかのように聞こえるラップ音が、ターゲットの動きに合わせて移動する。(同書)

また、犯人はT.I.S.の居場所を特定するためにマイクロ波テレメトリーを利用している。

インプラント

RFID (Radio Frequency Identification) インプラントとは何ですか？

RFIDは、電波を利用して医療機器や消耗品、その他の高価値資産を識別する技術である。一般的なRFIDシステムは、2つの主要コンポーネントで構成されている：リーダーとタグである。RFIDタグは「チップ」とも呼ばれる。RFIDはRadio Frequency Identificationの略である。

RFIDリーダー（スキャナーとも呼ばれる）は特定の電磁周波数に設定され、マイクロチップからなるRFIDタグがアンテナに接続される。マイクロチップには情報が格納されており、その範囲内にチップがあるときにスキャナに送信される。

移植された人間はどこにでも追跡できる。彼らの脳機能はスーパーコンピューターによって遠隔監視され、周波数を変えることによって変化させることもできる。

5マイクロメートルのマイクロチップ（髪の毛1本の直径は50マイクロメートル）を目の視神経に挿入すると、脳から神経インパルスが引き出され、移植された人の経験、匂い、光景、声が具現化される。一度転送され、コンピューターに保存されると、これらの神経インパルスはマイクロチップを介してその人の脳に再び投影され、再体験することができる。

RMSを使えば、陸上のコンピューターオペレーターが神経系に電磁メッセージ（信号として符号化されたもの）を送り、ターゲットのパフォーマンスに影響を与えることができる。

RMSを使えば、健康な人に幻覚を見せたり、頭の中で声を聞かせたりすることができる。

すべての思考、反応、聴覚、視覚的観察は、脳とその電磁場に特定の神経学的電位、スパイク、パターンを引き起こし、それは今や思考、絵、声に解読することができる。そのため、電磁波刺激は人の脳波を変化させ、筋肉活動に影響を与え、拷問として経験される痛みを伴う筋肉のけいれんを引き起こす可能性がある。

私たち一人一人は、指紋が一人一人違うように、脳内に一人一人違う生体電気共鳴周波数を持っています。完全にコード化された電磁周波数（EMF）脳刺激によって、脈動する電磁信号を脳に送り、ターゲットが望む音声や視覚効果を体験させることができる。これは電子戦の一種である。

異なる周波数を使うことで、この装置の秘密のコントローラーは、人の感情的な生活さえ変えることができる。攻撃的にすることも、無気力にすることもできる。セクシュアリティに人為的な影響を与えることもできる。思考信号や潜在意識の思考を読み取り、夢に影響を与え、誘導することさえできる。

右側前頭葉の血液循環の低下と酸素不足は、通常脳インプラントが手術される場所で起こる。フィンランドのある実験者は、酸素不足による脳の萎縮と断続的な意識障害の発作を経験した。

マインド・コントロールのテクニックは政治的な目的に使われることもある。

ゾンビ化した人間は、殺人を犯すようにプログラムされていても、その後その犯罪について何も覚えていないことさえある。

1980年以来、脳への電子刺激（ESB）は、彼らの知識や同意なしに標的とされた人々をコントロールするために密かに使用されてきた。

この技術が国家機密のままである理由の一つは、米国の米国精神医学会（APA）が作成し、18の言語で印刷されている精神医学の『診断統計マニュアルⅣ』の権威が広く浸透していることである。米国の諜報機関で働く精神科医が、このマニュアルの執筆と改訂に参加したことは間違いありません。この精神医学の「バイブル」は、MCテクノロジーの秘密の開発を、その影響の一部を妄想型統合失調症の症状として表示することで隠蔽している。

こうしてマインドコントロール実験の被害者は、医学部でDSMの「症状」リストを学んだ医師たちによって、日常的に、膝を打つようなやり方で精神病と診断されている。医師たちは、患者が自分の意思に反して標的にされたり、電子的、化学的、細菌学的な心理戦のモルモットとして使われたりしていると報告するとき、真実を語っているかもしれないということを学んでいない。

ユダヤ人 "スコット・シルヴァーマン" アプライド・デジタル・ソリューションズ会長兼 CEO。NSAは、創業者の一人であるジェイコブ・"コビ"・アレクサンダー [元イスラエル情

報將校] が所有するベリント社などのイスラエル企業と契約していた。2007年、イスラエルの諜報機関 "ユニット8200 "の前トップが『フォーブス』誌に語ったところによれば、ベリントを所有するコンバース社の技術は、イスラエルの "ユニット8200 "の諜報ノウハウに基づいているという。

これは、皮下注射針を使って、米粒大のRFID（無線周波数識別）マイクロチップを、通常はその人の手や手首に注入するものである。同じ種類のチップは、迷子になったペットの追跡にも使われている。

予防接種、インフルエンザの予防接種、歯科治療、手術、睡眠時誘拐など、実際、歯科を含むほとんどの医療には1960年代から埋め込み型チップが埋め込まれている。彼らは40年以上前からこの技術を持っており、今ようやくそれを世間に広めようとしているのだ。

「シルクベースのインプラントを圧縮し、高性能でアクティブな電子部品を搭載した形で、カテーテルを通して脳に送り込むことも可能かもしれません」とロジャーズ博士は語った。

潜在的被害者の皆さんは、市場に出回っている追跡技術を使って、自分もそうなのかどうかを調べることが不可欠です。無線技術で動作し、無線周波数を発するナノ半導体に至るまで。

しかし、国土安全保障省と連邦緊急事態管理庁（FEMA）には、国家非常事態のための極秘のCOG計画の一部を詳細に記した、完全に公開された文書がたくさんある。その中には、先に取り上げた文書がある。この文書には、COGの人員移転計画や通信の戒厳令的占拠の詳細な側面だけでなく、反体制派を弾圧し、国土を占領することを目的とした青と赤のハイテク監視マトリックスを通じて、アメリカ人を軍事的に標的にして敵性戦闘員に指定する計画が劇的に明らかにされている。

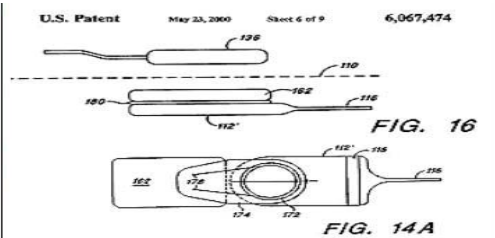
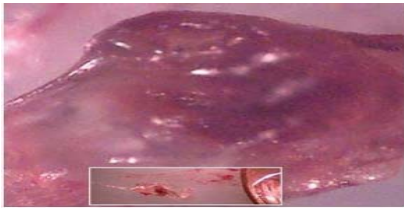
ブルー・フォース・トラッキングとは、GPSを利用した米軍のシステムで、軍の司令官や部隊に、味方（という名前にもかかわらず敵対）軍の位置情報を提供するものである。）

インプラント

チタンは非磁性であるため、MRI（磁気共鳴画像法）ではチタンインプラントを検出できない。

ポータブル超音波装置は、インプラントを検出できる方法の一つである

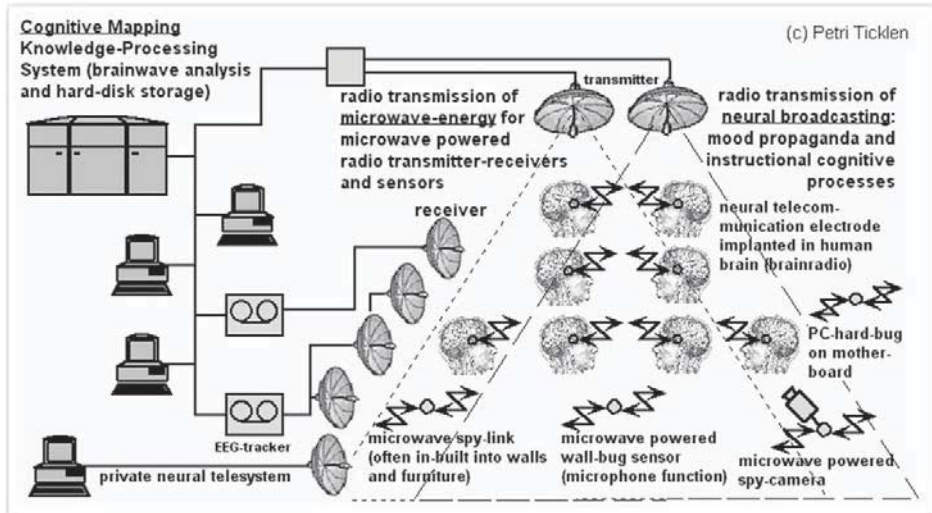
。マイクロ波によるやけど



My sample #122 is shown on the left. Patent #6,067,474 is shown to the right and illustrates a microstimulator that uses multiple circuits in a stacked configuration (with a coil on top, #172 in patent illustration) and the stacking is done to save space, however, such stacking complicates assembly and lowers yield. Schulman and Loeb claim that no such stacking of chips was performed, nor required by the "BION" microstimulator, however my sample #122 at left, U.S. Patent # 6,067,474, at right, combined with Schulman reporting "unexplainable" low yields throughout his contract (as low as 30% in QPR#3) should be more than suspicious and immediately prompt inquiry followed by an investigation. And if the above wasn't enough, the parent case documentation, U.S. Provisional Application Ser. No. 60/054,480, was filed Aug. 1, 1997 which is during the course of NIH contract #N01-NS5-2325, and not long after my assault.

Summary of Article 3:
Devices which have been recovered from my person and proven to contain semiconductor material, emulate and resemble devices which are unique to Joseph Schulman and Gerald Loeb.

マイクロ波は皮膚のメラニンを破壊し、皮膚を白くする。



Recovered Device #60 (above) is compared to various device photos (shown on right) provided to NIH Program Manager/Director William Heetderks as part of contract progress reports from contractors EIC Labs and University of Michigan. For implantable wireless microstimulator devices, it is a common design element to fold or bend the platform where the ASIC chip is mounted. This 90° bend allows the shank to penetrate the tissue while allowing the chip platform to lay flat for a lower profile. recovered device number 60 (above) is shown at 60x magnification and actual size is only about 2mm in length.

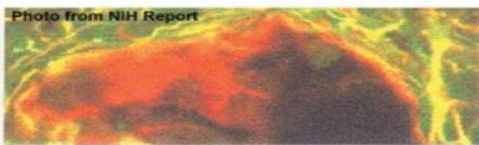


Fig. 7: Co-Labeling for Vimentin (red) and GFAP (green) IR one week following electrode placement in the auditory cortex. The innermost layer is made up of Vimentin IR cells with a small rim of GFAP cells making up a second layer.

The image above is from a Quarterly Progress Report submitted to William Heetderks at the NIH under contract N01-NS-0-2329 from the University of Michigan. It shows a microstimulator device implanted in-vivo into auditory cortex.



This photo is also from a University of Michigan QPR submitted to Bill Heetderks under contract. It shows a microelectrode (raw substrate prior to addition of telemetry chip) fabricated with the 90° bend at top.

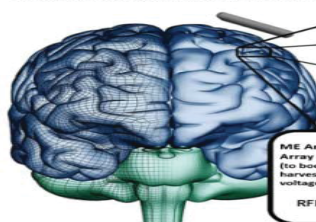


This image is from QPR#9, NIH contract #NS8-2387 and also shows a 90° bend.

RFID REMOVAL: The photos clearly show something foreign that is not organic mixed with the biological tissue

NanoNeuroRFID: A Wireless Implantable Device Based on Magnetolectric Antennas

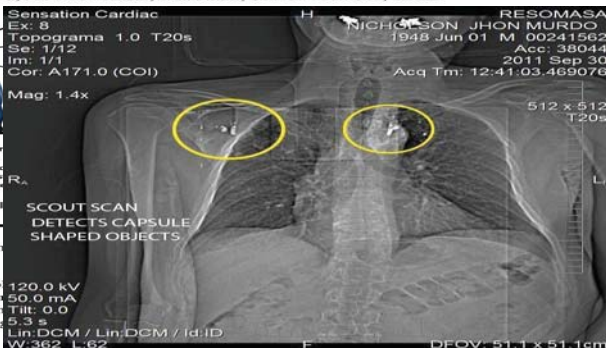
Mohsen Zaeimbashi, Hwaider Lin, Cunzheng Dong, Xianfeng Liang, Mehdi Nasrollahpour, Huaihao Chen, Neville Sun, Alexei Matyushov, Yifan He, Xinjun Wang, Cheng Tu, Yuyi Wei, Yi Zhang, *Student Member, IEEE*, Sydney Cash, *Member, IEEE*, Marvin Onabajo, *Senior Member, IEEE*, Aatmesh Shrivastava, *Member IEEE*, Nian Sun, *Senior Member, IEEE*

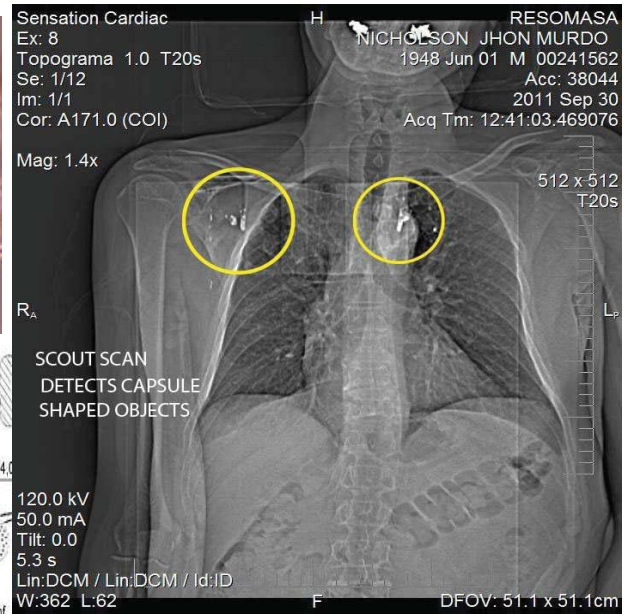
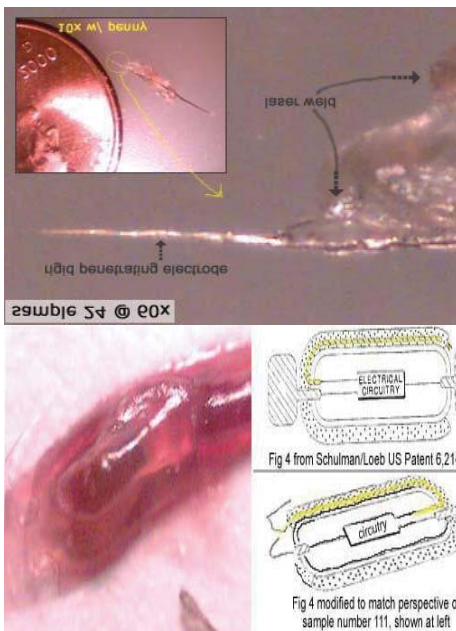
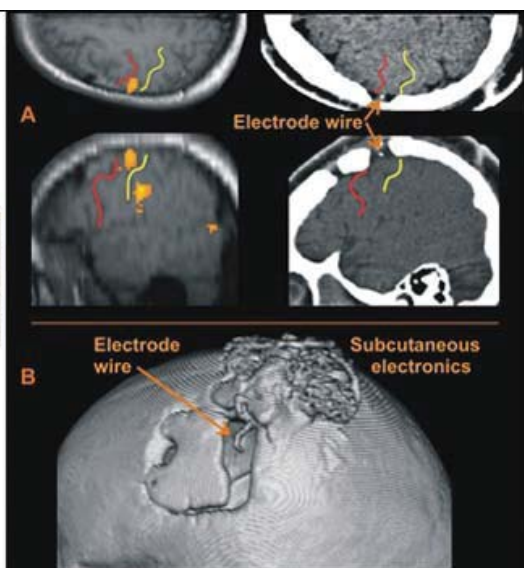
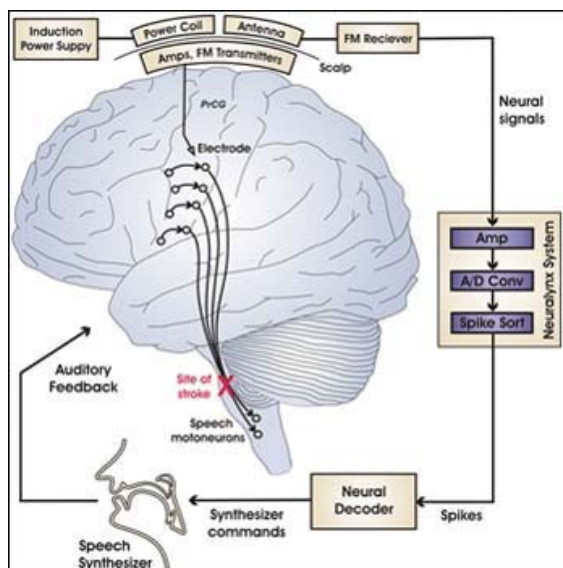


Overview of the wireless in

Take-Home Messages

- Self-powered and ultra-compact NanoNeuro
- Ultra-miniaturized (<200 μm diameter) mag
- Wireless implantable devices based on magn
- Sub-mm size brain implantable devices using





遠隔神経モニタリング (RNM)

指向性エネルギー攻撃

人体は電磁オーガニズムである。振動体なのです

このように、身体の各器官や部位は、異なる周波数の電磁エネルギーで「振動」している。

各エネルギーの流れの周波数と強度を変えることで、CIAと国防総省の工作員は人体構造の各部位と器官を操作し、ダメージを与えることができる。

超ゲーム理論攻撃

あなたが"しない"と言ったとたんに"する"。あなたが「やる」と言えば、すぐに「やらない」。CIADODの工作員がやっていることはすべて、ハイパーゲーム理論の原則に基づくIF & THENシナリオに基づいている。もし被害者がこうすれば、彼らはああするだろう。

トラウマ・ベース・マインド・コントロールが効果的であるためには、マインド・コントロールの被害者は、被害者をターゲットとした継続的な指向エネルギーの流れを利用して、激痛、ストレス、高血圧、激越、不安などの状態に常に置かれる。

トラウマ・ベースのマインド・コントロールは、昼夜を問わず常に被害者を挑発し、設定された反応を起こさせることに基づいている。つまり、彼らは常に対象を肉体的、感情的などに挑発し、その反応を「遠隔神経モニタリング」システムで遠隔測定し、被害者の体内のナノテクノロジーと常に相互作用する連続的な指向性エネルギーの流れで測定しているのである。

そのため、マインド・コントロールの被害者は、常に肉体的・心理的なトラウマを抱えた状態に置かれ、より容易に挑発される！これによって彼らは被害者の脳を操作し、心拍数や血圧などの身体機能をコントロールする中枢神経系を操作することができる。

つまり、私の早死を正常な自然死と見せかけ、同時に私の信用を失墜させるような方法で私を殺すのだ。

彼らはあなたの『日常的な動機』と『感情的な認識』を変えようとしていることを忘れないでほしい。

遠隔神経モニタリングシステムは、あなたを感情的、知性的、肉体的などに刺激するように設計されており、システムが、あなたの記憶参照などについて捕捉したデータと説明をどのように解釈しリンクさせるかを決定するために使用する反応統計を生成することができる。

だから、彼らは常にあなたの口を塞ごうとする。

道を尋ねてくるなど。だから、知らない人との長引くランダムな出会いは常に無視すること。あなたは失礼なことをしているわけではない。相手に操られるのを拒否しているだけだ。

一旦一貫した統計がとれば、システムは過去の「選択参照」を使い、通常の活動中にあなたの潜在意識にそれを注入し、同時に「IMPULSE INJECTIONS（インパルス注入）」を伴って、その反応があなた自身のものであることを確信させ、適切な言語化または関連する行動の実行によって、参照を完了または記述するように影響を与える。アクティブ・メモリーの読み方を学ぶことで、このような記憶攻撃を打ち負かすことを学べば、これに対抗したり、コントロールしたりすることができる。

あなたが感情的に、あるいは知性的に反応することを知ると、彼らはあなたの注意を引くとうわっている出来事や話題に基づいて、「会話」や「状況に応じた」シナリオ（ストリート・シアター）を捏造する。

だから犯人は、あなたを長時間しゃべらせようとするのだ。単に怒らせるだけでなく、「感情的な反応」や「知的な反応」などを起こさせることで、あなたの思考プロセスをマッピングし、その後に衝動などを注入し、あなたの心をコントロールできるようにするためだ。これが、FBIがいわゆる『ハニートラップ』を使って（例えば、あなたに近づいたり、セクシーな女の子と仲良くなったりすることによって）人々をあなたに近づけようとする理由である。

そうならないようにする方法はこうだ：見知らぬ他人との長引くランダムな出会いをすべて無視し、自発的に行動すること。

攻撃者が、あなたが特定の話題について話したり、ある単語を繰り返したりするのを阻止しようと決めた場合、この同じ遠隔神経攻撃を使って、あなたの発話を妨害することができる。このシステムは、関連する発言をするときに、あなたの記憶を混乱させたり、あなたが話そうとしているときに、ちんぷんかんぷんな言葉を注入したりするように設定することができる。

繰り返すが、これらの攻撃の目的は3つあるようだ：

1. 検閲

2. メモリ管理

3. 直接行動制御

このような遠隔神経攻撃は、順を追って仕事をこなしているときに最も効果的である。どうやって？ 自分の行動や活動を、思考のスピードに合わせて不規則かつ絶え間なく変化させるのだ。もしその必要がないのであれば、いつも毎日の旅程を考えたり計画したりする必要はない。ただやる」のだ！ SPONTANEOUS』であれ！

遠隔神経操作は、あなたの思考を解釈するシステムの能力によって達成され、思考の構成中のあなたの「参照選択」や「インパルスシーケンス」を予測し、影響を与える能力に完全に依存している。システムは衝動と識別子（誘発電位）でパターンをマッピングし、あなたの「構成癖」に関する統計データを使って、あなたが思考を練り始めたり、行動の準備を始めたりするときに、あなたがどのように考えたり行動したりするかを予測する。このシステムの能力は、思考を定義し

これらの参照をわかりやすくマッピングできるかどうかは、あなたの協力（あるいは無知）と、攻撃者が視覚的に見たもの、あるいはあなたの過去の行動から推測したものを理解できるかどうかにかかっている。

彼らは、パターンを確立するために、システムがあなたに特定の一連の反応を繰り返しプローブする「検証」ルーチンを常に行う。もしあなたがこれらのプローブと対話し、対抗している場合、オペレーターは異なる方法で「検証」しようと、ルーチンを変化させる。

システムが選択された反応を「検証」すると、それらは次の嫌がらせルーチンの波に使われる。このプロセスには終わりがなく、一貫してシステムを破っていれば、その効果をはっきりと見ることができる。もしあなたが遠隔神経操作システムを破っていないのであれば、その効果を見ることも気づくこともないだろう。

闘い方：状況認識を維持し、能動的な記憶を読み取ることを学ぶ。

脳と脳のインターフェイスがどのように実現されているのか。

ニューロンが発火し、互いに信号を伝達し合うと、電気パルスが発生し、活動電位と呼ばれるものに達する。

この電気パルスは脳波計で測定され、あなたが見たり、聞いたり、感じたり、嗅いだり、触ったり、味わったりするものに自動的に変換され、腸の平滑筋の動きを含むすべての筋肉の動きにも変換される。この情報は脳から抽出され、コンピューターに保存される。これをブレイン・コンピューター・インターフェイスと呼ぶ。

コンピュータ・ブレイン・インターフェイスは、経頭蓋磁気刺激や他の多くの手段を使って脳に情報を書き込む。脳に情報を書き込むには、フォスフェン誘導が使われる。脳に情報を書き込むプロセスは、電気パルスを発生させる活動電位を刺激するために使用される。このプロセスはSSVEPと呼ばれる。このプロセスで発生する電気パルスによって、あなたはそのにないものを見たり、聞いたり、感じたり、嗅いだり、触ったり、味わったりする。こ

それは単なる錯覚だが、あたかもバーチャルリアリティの中にいるかのように感じさせることができる。脳に情報が書き込まれる際に発生する電気パルスの一部は、顔や体の筋肉を自分の意思に反して使わせるために使われる。このプロセスは現在、ワイヤレス遠隔操作の秘密心理拷問として世界中で使われている。

ブレイン・トゥ・ブレイン・インターフェイスは、ブレイン・コンピューター・インターフェイスをコンピューター・ブレイン・インターフェイスに取り付けることによって作られる。ブレイン・コンピューター・インターフェイスによって、ある人間から脳波が抽出され、コンピューターに保存される。そして、その脳波は何千マイルも離れた世界中の別のコンピューターに送られ、そのコンピューターは陰謀団の工作員が所有し、コントロールすることができる。陰謀団の工作員は、この情報を別の人間の脳に書き込む。

その人間の意志と同意なしに。(出典: グレッタ・フェイヒー;
<http://targetedindividualsireland.net/>)

遠隔神経モニタリングは機能的ニューロイメージングの一形態であり、離れた場所にいる人間の脳から脳波データを抽出することができる。被験者の生体電界は遠隔で検出できるため、被験者はどこにいてもモニターできる。特殊なEMF装置を使えば、NSAの暗号解読者は（脳波から）誘発電位を遠隔から読み取ることができる。これらは人の脳状態と思考を解読することができる。そして対象者は、離れた場所から完璧に監視される。

各話された言葉、各言語による思考、各画像、各筋肉の動きに対応する固有の脳波パターンは、完全に自動化されたスーパーコンピューターによって、同意していない人間が何を言い、何を考え、何を聞き、何を見、何をしているかに光の速さで変換することができる。これらのユニークな脳波パターンはすべて、被験者の中枢神経系に再送信することができ、それによってその被験者は、頭蓋内で発生した言葉を聞いたり、望まない画像を見たり、自分の意思に反して自分の筋肉を強制的に動かされたりすることになる。

遠隔神経モニタリングは現在、遠隔からの経頭蓋磁気刺激の目的で使用されている。遠隔からの経頭蓋磁気刺激によって、未知のスタッフがあなたの脳の認知的推論や物語理解に関連する部分を混乱させることができる。同書

催眠術の引き金となる言葉

放射線、痛み、味覚障害、頭痛など、上記の症状のいずれかを模倣したり、耐え難い疲労を引き起こすことがある。

トリガーとなる単語は、まるですべての症状や似ている単語が載っている辞書から取り出したかのように、連続して出てくる。

トリガー・ワードには、心身に影響を及ぼすものもあれば、感情的な影響しか及ぼさないものもある（嫌悪感、恐怖、怒りなどのネガティブな感情を引き起こす特定のワードに対して、対象者が感作される）。

引き金となる言葉は、闇のNLPや集団ストーカーによって強化されることもある。

トリガーとなる言葉は、Tiのルーチンと結びついているため、最初のうちは発見するのが非常に難しい。脳は、信じ込まされていることと実際に起こっていることを常に区別できるわけではない。

ひとたび発見されれば、それらは「解放」される。「真実」に気づくことで、心が言い聞かせてきた嘘に勝つのだ。

それらが発見されると、新たなトリガーとなる言葉が潜在意識にプログラムされる。

精神的苦痛

大音量の合成テレパシー。攻撃者は24時間365日、被害者の何人かと話している。彼らはCIAがシークレットサービスでしか使われない尋問テクニックを使う。V2K（ボイス・トゥ・スカル、大音量合成テレパシー）とも呼ばれている。どのような声にも変調できる合成音声を持つ学習型コンピューターが、初期段階の後、部分的またはフルタイムで引き継ぐことができる。これによって、被害者は目覚めず、常に疲れている。

サイレント・シンセティック・テレパシー。被害者には攻撃者の声は聞こえないが、思考が操作され、注意が向けられる。コミュニケーションは「思考」として体験される。同じ思考の繰り返しのようなのが起こり、まるでテープが自分の思考を一語一語繰り返し再生しているようだ。

ハプティック技術

ハプティック技術とは、運動感覚的コミュニケーションや3Dタッチとも呼ばれ、ユーザーに力、振動、運動を加えることで触覚体験を作り出すことができる技術を指す。このような技術は、コンピュータ・シミュレーションの中で仮想オブジェクトを作成したり、仮想オブジェクトを制御したり、機械や装置の遠隔制御を強化したりするために使用することができる。

触覚フィードバックとは、触覚を使ってユーザーとコミュニケーションをとることである。

人間には五感があるが、電子機器は主に視覚と聴覚の2つだけを使って私たちとコミュニケーションをとる。

触覚フィードバック（しばしば単にハプティクスと略される）は、触覚をシミュレートすることでこれを変える。あなたがコンピューターや他のデバイスに触れることができるだけでなく、コンピューターもあなたに触れ返すことができる。

<https://www.ultraleap.com/company/news/blog/what-is-haptic-feedback/>

PEDOT』ポリマーと呼ばれるポリマーが製造されている。PEDOT』の層を他の材料に塗布すると、導電性を持つようになる。

現在、一般の人々のほとんどは、吸入、摂取、あるいはワクチン接種によって、脳や体内に生体合成物質を持っている。

ハイドロゲル・バイオセンサーは様々なシグナルを発する

DefenseOneの記事では、ハイドロゲルバイオセンサーの特性と能力について概説している：

「センサーには2つの部分がある。ひとつはハイドロゲルの3mmのひもで、このポリマー鎖のネットワークは、コンタクトレンズやその他のインプラントに使われている素材である。注射器で皮膚の下に挿入すると、このひもには特別に設計された分子が含まれており、体が感染と戦い始めると、体外に蛍光シグナルを送る。もうひとつは、皮膚に取り付ける電子部品である。皮膚を通して光を送り、蛍光シグナルを検出し、装着者が医師やウェブサイトなどに送信できる別のシグナルを生成する。咳のような他の症状が出る前に、病気に対する身体の反応をピックアップできる皮膚の血液検査室のようなものだ。」

プロフサのウェブサイトにはこうある：

「バイオセンサーは体内から分離されるのではなく、体内組織と完全に一体化して機能する。現在までに、注入されたバイオセンサーは4年間も機能している。米粒よりも小さい各バイオセンサーは、長さ約5ミリ、幅約半ミリの柔軟な繊維で、周囲の組織から毛細血管と細胞の侵入を誘導する多孔性の足場から構成されている。ハイドロゲルには発光蛍光分子が結合しており、酸素、グルコース、その他の生体分子などの体内化学物質の濃度に比例して連続的にシグナルを発する。同書

遠隔神経モニタリング、ボイス・トゥ・スカル（V2K） 主要な証拠/証明：

遠隔神経モニタリングの方法

1. 遠隔音声衛星監視：RNMストーカーは人の話し声や周囲の状況を聞く。
2. 壁越しの衛星遠隔監視RNMストーカーは、対象となる個人を監視し、建物内や道路や公園などの開けた場所で、対象となる個人の言葉から思考を読み取ることもできる。
3. 遠隔思考監視：RNMストーカーは、対象となる個人の思考を言葉から読み取ることができる。
4. 遠隔音声・音声リレー：対象者だけが、誰もいないときにホワイトノイズのささやき声を聞いたり、誰かが話しているときにその人の声（合成音声）やクローン音声をはっきりと聞くことができます。また、RNMストーカーは、マイクロ波聴覚効果を使って、あらゆる音をあなたにだけ伝えることができます。
5. 遠隔合成テレパシー：RNMストーカーは、ターゲットとなる個人が頭の中で考えている言葉を読み取り、ターゲットとなる個人の思考を言葉で繰り返したり、ホワイトノイズのささやき声で話しかけたりして応答することができる。
6. 遠隔人体運動制御：人体の運動制御の一部を制御することができる。例えば、無意識のうちに瞼を素早く開閉させることができる。

7. 遠隔視覚リレー：RNMストーカーは、フォスペンや拡張現実をターゲットの目の視覚に中継することができる。
8. 遠隔嗅覚・嗅覚記憶監視：RNMストーカーは、特定の匂いの記憶にアクセスしたり、希望する匂いを作り出し、電気刺激によってその匂いを嗅ぐことができる。
9. 遠隔電気リレー：RNMストーカーは人工衛星を使い、電気ショック、ピンと刺すような痛み、鋭い痛み、皮膚のかゆみを引き起こす。
10. 画面やパソコンを遠隔監視RNMストーカーは携帯電話の画面やパソコンのモニターを見ることができる。

遠隔スクリーンとコンピュータの監視

1. RNMのストーカーは、コンピューター画面上のものを見ることができる。
2. RNMストーカーは携帯電話の画面を見ることができる。
3. 100文字以上のパスワード、2段階のサインイン認証、リカバリーオプションなど、強力なセキュリティ対策が施されていない場合、この監視システムを利用することで、RNMストーカーはあなたの電子メールをハッキングし、ログインパスワードを変更することができる。
4. インターネットのWi-Fi信号を妨害し、ノートパソコンのLANインターネット接続を停止させることができる。RNM技術の限界：

1. 大雨の時、ホワイトノイズのささやきリレーの音量が小さくなり、停止する。
2. RNMは、あなたが頭の中で考えているときの「ナ・ナ・ナ」のような鼻歌を解読することができない。RNMが識別できるのは単語の発音だけで、頭の中で歌っている曲は識別できないのだ。
3. 時速100キロ以上の車内では、RNMは思考を読み取ることも、思考した言葉を繰り返すこともできない。
4. 本の一文を頭の中で速く読んでも、RNMは何を読んだのか理解できないだろう。

あなたの語彙データベースから、あなたが知っている単語を中継してくれるのだ。

- a. もしあなたが感情的で警戒心がなければ、あなた自身がその言葉について考えていたと思わせる。
- b. ホワイトノイズのウィスパーボイスやボイスレスワードリレーで頭の中で中継されたと思っていた言葉も、感情的になっていたり、注意力が低下していたりすると、識別できなくなる。

c. 新しい言葉は、RNMの音声継／声なし合成テレパシーから生まれたものだと気づかせてくれるだろう

RNMのマインド・リーディングの間、瞑想やマインドフルネスといった一つの単語だけを考えてください。そうすることで、RNMがあなたに伝える新しい単語を、声なし単語リレーか声あり単語リレーのどちらかの方法で特定することができる。

RNMストーカーと頭の中の言葉で話している間は、舌を口の下か上に押し付けておく。そうすることで、頭の中で言葉を考えても舌が反応せず、疲労することがありません。

RNM電気リレーの例：

1. 左側上腹部（おそらく胃）につねったような痛み。

2. 手、鼠径部、脚、頬、下唇、頭、鼻、耳などの皮膚が通常より頻繁にかゆくなる。RNMは電気リレーを使ってかゆみを起こす。この電気リレーは3Dのようで、人体のどの表面にも向けることができる。GPS衛星が正確な3次元位置を提供する」の項を参照のこと。

脊髄内で反射反応が起こる。運動ニューロンが活性化し、腕の筋肉が収縮して手が動く。これは、信号が脳に伝達される前のほんの一瞬の出来事であるため、痒みを意識する前に痒みに向かって腕を動かしていることになる。

痒みに気づいていても、手が痒みに行かないことがある。電気リレーは、通行人、近くに立っている人、自分から見える人など、他の人にも行われる。あたかもRNMのストーカーがあなたを尾行している、あるいは既知の人物があなたに嫌がらせをしているかのように見せるために、彼らは他の人にそれを行う。それは真実ではない。

3. 何かが眼球に触れたような、眼球上の電気リレー。

4. 左胸の電気リレー（おそらく心臓）。

5. 左側上腹部（おそらく胃）の鋭い痛み。

6. 肋骨の一番下あたりと臀部（おそらく腎臓）の間の左右の背中での痛み。

7. 喉の電気リレーで咳をさせる。

8. 雨のしずくが腕に落ちたような電気リレー。リンク先の「電動シャワー」を参照：

<http://www.stopeg.com/electronicharassment.html>

RNMストーカーのコントロール能力

1. 足とつま先のコントロール-立っているとき、動こうと思わなくても、体が勝手につま先を持ち上げている。

2. 股関節 - 立ったり座ったりしているときに、勝手に後ろに揺れる。

3. 顎：

a) 顎がしゃくれ、自分が怒っていると錯覚する。

b) 顎と口が無意識に開く。

4. 表情筋のコントロール - 眉毛、表情筋、涙のコントロールによって、悲しい、嬉しいという感情を表す。

5. 涙が止まらない、感情的に考えずに不随意に涙が出る。

6. 匂いの記憶と嗅覚-RNMストーカーは、特定の匂いの記憶にアクセスしたり、電気刺激によって匂いを嗅いだりすることができる。彼らはおそらく、人工知能やアナリティクス・ソフトウェアの助けを借りて、特定の匂いの記憶にアクセスしているのだろう。

a) 部屋で座っていると、牛の糞の臭いがした。

b) 部屋で運動をしていると、強い尿の臭いがした。まるでズボンの中で排尿したかのようだ。

c) 眠ろうと目を閉じると、すぐに屁でもないのに屁の臭いがした。

7. まぶた:

a) まぶたが無意識のうちに速くまばたきする。

b) 片方のまぶたが部分的に強く閉じられる。

8. 半瞬失明し、見えている視界が真っ白になる。

9. RNMストーカーは、ホワイトノイズのささやき声を私に伝えることで、私の人差し指をコントロールできると主張した。

b) 親指と人差し指をこすり合わせてお金のジェスチャーを示し、RNMもホワイトノイズのささやき声でジェスチャーと一緒に「お金」と伝えた。翌日、妻と息子も同じジェスチャーをした。

c) 右手人差し指が神経性チックのように不随意に痙攣する。右手の人差し指が不随意に動いた」を参照。

10. 全身に鳥肌のような電気的な感覚があるが、毛は生えていない。

11. 舌-安静時または会話時に舌が不随意に痙攣する。

12. 膀胱 - 自発的な尿の放出、RNMホワイトノイズのウィスパーボイスが「膀胱のコントロール」を伝える。

13. 咳をさせる。

14. まず、RNMのホワイトノイズのささやき声が「ブレイン・マッピング」についての何かを伝え、次に肘がピクピクと動き、膝が痙攣し、RNMのささやき声が「ブラダー・コントロール」を伝え、思わず尿を放出した。

15. 手首の運動制御、痙攣のように不随意に曲がる。

16. 失神する。その失神は、まるで脳が重い磁場にさらされているかのように頭が重くなる感覚から始まった。RNMのストーカーに2度やられた。そして、彼らはホワイトノイズのささやき声で、私に脳腫瘍があると伝えてきた。

マインドコントロール-思考、感情、ひいては行動のコントロールと操作 思考と思

考パターンのコントロール、感情とその表現、行動のコントロール。

暗黒のNLP：神経言語プログラミングと組織的ギャングストーキング（街頭劇；プログラミングと一致したコメント） 特定の言葉、時には色、特定のタイプの人や物 に 感情を固定する... 「罪悪感」や「不満」の錯覚を作り出す。

サイコトロニック・アタック、ボイス・イン・ヘッド、サウンド（V2K）、またはあなたの人生における特定の出来事によって引き起こされる特定の感覚、感情、行動をもたらす催眠術の「トリガー・ワード」。

遠隔神経の影響や、電波塔などからのサブリミナルなELF低ヘルツ波を通して、どこを見るかだけでなく、何を考えるか、どのような観点から見るか、両方の注意を監視する。

リアルタイムのマインド・リーディングと思考ブロードキャスト、時にはそれがターゲットの心の中で意識されたり顕在化したりする前に（逐語的に）。誘導された記憶と、その偽の記憶に対する「合成」連想（これは知性のスーパーコンピューターによって作られたと考えられている；文脈を認識している）。

誘発された夢や夢の操作、不穏なビジョン、思考、イメージ。

睡眠障害や睡眠不足は、一時的な誘発麻痺やマイクロ・コーマ（トラウマや幻視、音、睡眠恐怖状態を強制する）を伴うこともある。

RNM/V2Kの検出方法：

例えば、あなたが『突然の激しい攻撃性と激越』を経験するとき、それはあなたではなく、人為的に注入されたインパルス注入と記憶管理戦術を使用する犯人であり、『マインド・コントロール』の一部であり、付随的なものである。

そこで、強迫的な行動や思考のパターンを探し、その現在の心の状態（強力な感情や衝動）を普段の状態と対比させて、攻撃を特定する。パターンを探す。

彼らの行動はすべてパターンに基づいている。

彼らは、あなたが常に自分たちのことを考えているようにしたいのだ。マインド・コントロールの犠牲者を隔離して、外部からの干渉を最小限に抑え、トラウマに基づくマインド・コントロールの犠牲者に神経プログラミングを「内面化」させる、つまり内的に集中させるのです。

これは認知戦争と心理戦争に基づく兵器システムである。その目的は、トラウマに基づくマインド・コントロールの被害者を、他者に破壊を与える、あるいは自滅する武器に変えることである。

相手のシステムをブロックしながらアクティブ・メモリーを読むことを学べば、この効果を制限し、対抗することができるが、相手の遠隔神経攻撃をリダイレクトすることで認知的防御法を活用するには、かなりのスキルと自己認識が必要だ。

これは「REDIRECTION」とも呼ばれる。

リダイレクション」は簡単だ。遠隔神経攻撃が起こり、（強い衝動［高周波数攻撃］やわずかな動機［低周波数攻撃］によって）衝動や思考が頭の中に入ってきたら、思考の糸を変えるだけでいい。これによって、あなたの脳とRNMシステムとの間の「統合完了」が妨げられる。これを行うには、「ワーキング・リファレンス」と呼ばれるものを確立する必要がある。

RNMがあなたの脳にインパルスや思考を注入しようとするたびに、「作業参照」を確立することで、RNMの攻撃を阻止することができる。これは、人生の中であなたをととても幸せにしてくれる何かを認識し、遠隔神経操作によって攻撃されるたびに、人生の中のその幸せな経験に再び焦点を合わせたり、「方向転換」したりすることで可能になる。

記憶攻撃（本当の記憶をブロックし、偽の記憶と衝動を注入する）を理解することが鍵である。なぜなら、「アクティブメモリー」の変更を認識しなければ、システムはあなたに一時的に時間の認識を失わせるからである。例えば、強制的なスピーチ。

システムの予測能力（クエンチング、リダイレクション、マルチタスク、自発性）を打ち負かすことを学べば、システムがあなたの「参照選択肢」を制限しようとする試みはますます顕著になり、あなたはワーキングメモリ内で、私が「機能的二重性」〔焦点的二重性とも表現できるかもしれない〕と表現するものを知覚し始めるだろう。犯罪者システムの予測エラー率は劇的に増加し、あなたの思考や意図を予測しようとする試みは、単に迷惑とまではいなくても、ユーモラスなものになるだろう。

自己満足と戦う

システムがあなたの通常の認知行動を模倣するように設計されているため、システムにあなたの日々の行動を解釈させ、定義させることに協力することで、暗示がより耐えられるようになるかもしれませんが、システムの影響をより受け入れやすくなる傾向があるため、これを許可しないことをお勧めします。このようにシステムがあなたに影響を与える目的は、攻撃者にあなたを自由に制限する能力を与え、無意識のうちにあなたをだましたり、操ったりすることを可能にすることです。

V2K』を聞いている人は皆、このように監視され、このように影響を受けている。あなたが耳にしているフレーズは、『無言の監視期間』に捕捉された情報と関連しているはずであり、やがてはあなたの終わりのない言葉による嫌がらせの土台として使われることになる。

彼らがやっていることは、騙し合い、操り合いのゲームであり、それ以上のものではない。

彼らが言うことは何も真実として受け入れないこと。システムがあなたに尋問することは何も真実として認めないこと。システムは、あなたの感覚を通してとらえたものから無作為に断片を取り出し、嫌がらせや尋問のために使うストーリーをでっち上げる。

脳の電磁放射を実際の思考パターンに解読する。一旦それらのパターンが特定されると、それらは標的とされた個人への度重なる嫌がらせや拷問に利用され、変化させられる。

脳の心象は実際に見ることができ、この魂の窓を通して見るができる。イメージ、サウンド、その他のシーケンス（アロマ）は、人間の脳にエンコードすることができる。彼らは私とよくこのようなことをする。また、ターゲットとなる個人の注意を引き、検証を求めることによって、彼らのテクノロジーが正しく機能していることを確認するためにデザインされた状況や会話のシナリオに関与する。

これらの電磁インパルスは、検証のために誘発電位を誘発するために、インパルス注射によって脳に送られる。

ここでもまた、神経回路を介して音、映像、香りなどが発生する。

基本的に、彼らはマインドコントロールされた被害者の脳を、彼ら自身の視覚的、言語的、聴覚的コミュニケーションシステムに変えてしまったのだ。

コンピューター・マルチプレクサーは、タワー、衛星、移動プラットフォーム（トラック、バン、船など）を経由して、信号（電磁エネルギーのストリーム）をデジタル・レシーバーにルーティングする。レシーバーはピンポイントの精度で位置が特定され、実際の位置の数フィートまで追跡される。しかし、受信機は携帯電話ではない。人間の心である。

現在、彼らは人間の人格と精神全体をコンピューター・データベースにダウンロードすることで、人間の心と魂（意志、知性、感情）のクローンを作ることができる。この技術は英国諜報機関でも使用されており、Mi6内部ではプロジェクト・ソウル・キャッチャーとして知られている。これは、指向性エネルギーと生体電気研究開発による経頭蓋刺激によって達成される。

陰謀団はあなたの脳をマッピングし、あなたをスーパーコンピューターに結びつけ、あなたの情報（思考、記憶、感情など）を注入フィードバックとして光速でデータベースにダウンロードし直し、死ぬまで24時間365日、あなたの脳のすべての電磁氣的活動を監視する。これは経頭蓋脳刺激療法によって達成される。

NSAの諜報員はこの技術を使って、マイクロウェーブのような指向性エネルギー兵器を用い

て人々を秘密裏に衰弱させ、彼らが死ぬか無力になるまで、精神や他の内臓器官をゆっくりと劣化させる。彼らは何年もの間、継続的に私にこのようなことをしてきた。この技術によって被害者が死ぬか無力化される 時点は、次のようなADAPTIVE NETWORKS (S.A.T.A.N.) を通じて人々を静かに暗殺する方法を研究開発する上で重要な指標となる。

心臓発作、脳卒中など

このハイパーゲーム理論のノータッチ拷問テロのパラダイムは、終わりのないIF&THENシナリオに基づいている。被害者の人生に混乱やトラウマを植え付け、被害者が反応するのを待つ。そして、被害者の最後の反応から次の反応を導き出し、被害者の最後の動きから次の行動を導き出すという、被害者に対するハイパーゲーム理論の公式を開始する。

だから、あなたがそうすると言えばそうしないし、そうしないと言えばそうする。

長期的あるいは短期的に、たとえ一瞬であっても、突然のめまいや眠気を引き起こすことで、遠隔神経攻撃は、アルファの状態で警戒しているときよりも効果的です。なぜなら、脳が一瞬、機能停止状態に置かれるため、インパルス注入と記憶注入からなる光速の一瞬の遠隔神経攻撃を受け入れるように、脳をサブリミナル的に欺き、操作することが容易になるからです。インパルス注入と記憶注入により、被害者の正常な思考と記憶のプロセスを混乱させ、正常な「思考の構成」の間に、被害者に対する直接的な行動制御を達成します。

突然の眠気やめまいに襲われたら、すぐに自分の思考回路や物語を見直し、人生で最も幸せなことに意識を向け直す必要がある。この幸せな出来事や人物を、あなたの「ワーキング・リファレンス」と呼ぶ！

CIA/国防総省の作員は、電子的な脳と脳のインターフェース、電子的な脳とコンピュータのインターフェースを使ってこれを実現している。目を閉じて外部からの干渉を防ぐだけで、私が見ているものすべてを、それが起こっているときにリアルタイムで見ることができる。

脳からコンピュータへのインターフェースや脳から脳へのインターフェースでは、ビデオからテキストへの音声の認知効果を測定することはより困難である。というのも、遠隔神経モニタリング・インターフェースは、被害者自身の心のスクリーンをアナログ・スクリーンにダウンロードして使うからだ。

オーディオを聴くことによる複合的な認知効果は、彼らの神経プログラミングを破壊するだけでなく、マインド・コントロール技術が依存している、双方向の光のスピードで出入りする情報とフィードバックのループを破壊する。

それは、あなたが同時に読んでいる音声コンテンツやビジュアルテキストだけでなく、あなたがそのコンテンツから連想する思考や記憶が、被害者の脳の神経ネットワーク内にノイズ（電磁エネルギー）を発生させ、彼らの神経技術を妨害するからです。あなたが考えていることや記憶は、遠隔神経モニタリングと遠隔神経操作システムを混乱させる、画面上の追加の電磁放射やスパイク（誘発電位）を作り出しているのです。

遠隔神経操作（RNM）は、あなたの思考を解釈するシステムの能力によって達成され、思考の構成中にあなたの「参照選択」や「衝動の順序」を予測し、影響を与える能力に完全に依存している。システムはインパルスと識別子（誘発電位）でパターンをマッピングし、あなたの「構成癖」に関する統計データを使って、あなたが考えを練り始めたり、行動の準備を始めたりするときに、あなたがどのように考えたり行動したりするかを予測する。

システムがこれらの参照をわかりやすく定義し、マッピングする能力は、あなたの協力（あるいは無知）と、攻撃者が視覚的に見えるもの、あるいは推測できるものの意味を理解する能力に依存する。

それは、あなたの過去の活動に基づいているのだが、それを測定し、見たものを思考の一貫したパターンに統合することができなければならない。

CIAやNSAの犯罪者たちは、あなたの記憶や思考プロセスに干渉するために、「情報」として知られるデータの「捏造された、あるいは改ざんされた流れ」を使っているのです。これが、一定の光速-エネルギーは光速で移動する-双方向の情報とインジェクション・フィードバック・ループの仕組みです。RNMシステムはまた、あなたの思考、記憶、感情などをすべて光速でスーパーコンピューターにダウンロードし直します。情報とインジェクション・フィードバック・ループがうまく機能しなければ、マインド・コントロールは失敗します。

言い換えれば、RNMシステムとあなたの脳の間の「統合完了」が妨げられ、彼らの特定の「インパルス注入」に対するあなたの反応がなければ、RNMの検証プロセスはバラバラになり、マインドコントロールは失敗する。

この情報と注入のフィードバック・ループは、コンピューター・マルチプレクサーによって実現され、タワー、衛星、またはバン、トラック、船などの移動プラットフォームに信号や情報をルーティングし、被害者の脳波シグネチャーの特定のキャリア周波数を含む、連続的に捏造され改ざんされたエネルギー波のストリームを介して、デジタル受信機に信号や情報をリレーします。デジタル受信機はリアルタイムで追跡され、光速で特定される。しかし、デジタル受信機は携帯電話ではない。人間の心である。マインドコントロールされた被害者の脳は、体内のナノテクノロジーなどによってデジタル化されている。

いったんあなたがシステムの出力に依存するようになると（つまり、あなたが彼らのインパルス注入を自分のものだと思えるようになると）（あるいは、彼らはあなたのそれに対する反応が一貫していると信じるようになると）、彼らは「潜在意識の反応」を捏造し始め、それが正直／不誠実、肯定的認識、不安などの指標であるかのように見せかけ、彼らはこれらの「インパルス注入」を使って、捏造された反応があなた自身のものであると信じ込ませる。

もしあなたがこの絶え間ない精神操作に気づかなければ、システムはあなたの思考と行動を

形成し始める。攻撃者はこれを利用して、これらの暗示（注入されたインパルス）が提供されている間、あなたの記憶と思考プロセスをブロック（妨害）することによって、あなたの思考と行動を制限しようとしています。

睡眠妨害の理由：

耳、頭、心臓、胸部に脈打つような激痛。激しい睡眠不足の拷問！マインドコントロールの攻撃は、シータ状態のレベルでよりよく働くので、適切な睡眠を奪うことで、神経プログラミングの効果を増幅させることができる。

トラウマに基づくマインド・コントロールの被害者の心と自分の心を交わせ、被害者の人間の魂（意志、知性、感情）を極悪非道に変えようとする。

彼らが被害者をターゲットにしている捏造され改ざんされたエネルギーの流れには、トラウマに基づくマインド・コントロールの被害者の脳波シグネチャーに合わせて特別に調整されたキャリア周波数が含まれており、彼らはその流れを使って自分たち（陰謀団クローン）の脳波周波数を被害者の脳波周波数に合わせ、被害者自身の脳波周波数を模倣する「アライメント」と呼ばれるプロセスを行います。これは、私や他の被害者の脳波周波数の位相、周波数、振幅の変調によって達成される。

こうすることで、24時間遠隔神経モニタリングや、被害者の心や魂（意志、知性、感情）の遠隔神経操作を通じて、被害者の思考、記憶、感情を読み取り、監視し、操作することを可能にするハイブ・マインドを作り出すこともできる。

つまり、マインド・コントロールのクローン作員の衝動や運動野の行動は、私の脳に同調しマッピングされたため、自動的にT.I.に転送されたのだ。こうして、マインドコントロールされた被害者が、例えば運転中に突然ハンドルを握ったり、テーブルから銃を取ろうとしたときに銃を握ったりするように、標的を殺すのである。

私のハンドラーの感情、思考、記憶は、光速（エネルギーは光速で移動する）のリアルタイム・シナリオでT.I.（トラウマに基づくマインド・コントロールの犠牲者）に転送され、私や他の何百万人もの犠牲者に使用される。

彼らのテクノロジーが効果的に機能するためには、私を常に社会から切り離し、隔離しておく必要がある。

COMPONENTS OF THE BIOCHIP



2)



WHO

「ユダヤ人がすべての背後にいる」-アラン・ランディス、標的にされた個人とユダヤ人

"多くの人が参加するように勧誘される。できるだけ多くの人に拷問に参加してもらうという考え方だ。協力者が多ければ多いほど、隠蔽するための援助が増えるし、露見する可能性も低くなるという理屈だ'。(リッチ、57ページ)

"秘密情報源"としても知られる民間スパイは、社会のあらゆるレベルや分野からリクルートされる。

(「ツェルセツング-東ドイツ秘密警察の心理分解手法」3ページ)

彼らはいったい何者なのか？ なぜ彼らは参加するのか？

参加者は、他者に対するテロリズムの実行に加担しているため、口語では加害者を略して「犯罪者」と呼ばれるが、彼らはしばしば「安全と安心」として合理化し、メディアによって「崇高な大義」と見なされるように仕向けられたものを支持している。彼らの下心は、権力

、物質的報酬、社会的名声、帰属意識（金銭的俸給、薬物、減刑）、（教会や反ファのような組織やグループでの雇用や昇進の機会）である。

加害者の定義国内テロリストの民間人新兵

しかし、私は、採用されたすべての犯罪者に行われるテストは、彼らが通常の意味で「特別」であることを示すためではなく、「特別」であることを示すためであると信じている；

何の罪もない人間を標的にするために必要なさまざまな特徴--何の疑問もなく、何の遠慮もなく、何の反省もなく、そして何よりも、標的にされた犠牲者の人命や人間性を顧みることなく--を示す。

反社会性パーソナリティ障害、別名ソシオパスとサイコパ

ス 反社会性パーソナリティ障害の症状には、以下のよう

なものがある：

善悪を無視する 執拗な嘘やごまか

し

他人を操るために魅力や機知を働か

せる 法律と繰り返し抵触する 他人

の権利を繰り返し侵害する 児童虐

待またはネグレクト

他人を脅迫する 攻撃的また

は暴力的な行動

他人を傷つけたことへの後悔の欠如 衝動

的な行動

アジェーション

劣悪または虐待的な人間関係 無

責任な仕事ぶり

ナルシストな性格、

自己愛性人格障害は、劇的で感情的な行動が特徴で、反社会性人格障害や境界性人格障害と同じカテゴリーに属する。

自己愛性パーソナリティ障害の症状には、以下の

ようなものがある：自分は他人より優れていると

思い込む

権力、成功、魅力について空想すること 自分の業績や才

能を誇張すること

常に褒められ、賞賛されることを期待する 自

分は特別だと信じ、それに従って行動する

他人の感情や気持ちを理解しない 自分の考えや計画に

他人が従うことを期待する 他人を利用する

自分が劣っていると思う人を軽蔑する 他人に嫉

妬する

他人が自分に嫉妬していると思い込

む 健全な人間関係を保つのに苦労

する 非現実的な目標を設定する

傷つきやすく、拒絶されや

すい。 自尊心が傷つきやす

い。

強気、または感情的でないように見える

パープスが誰であるかは、無限の流れがある。しかし、私自身の経験から言うと、それは、心理的に操作されて参加させられている、いくつかの異なる市民組織やグループの組み合わせである。

権威に従順で、フォロワーであり、自分自身の内面に退治すべき悪魔を持っている人々が混在しており、それぞれの組織や組織内のリーダーたちによって簡単に操られてしまう。

組織的なストーカー行為や電子的嫌がらせによって、憎悪を行動に移す自警団的な憎悪者になるように彼らを操作するために、彼らに売られた誹謗中傷のプロパガンダによる信念システム。

リクルートたちは、あらゆる立場、信条からやってきており、信条などまったくない者も含まれる。リクルートたちに共通しているのは、権威に盲従し、プロパガンダ、中傷キャンペーン、誹

謗、中傷に喜んで加担することであり、そして何よりも、彼らを率いる者たちによって簡単に心理学的に操られてしまうことである。

組織化されたテロリストのリーダーから渡された武器は何でも使い、チャンスがあればいつでも発射する。

これらの新兵は戦争に似たメンタリティを持ち、人間の命を奪うことだけを目的とする群れ志向である。

私は、犯罪者には3つのタイプがあること

を発見した。1 ハードコア・リクルート

2. ミッション・オフエンダー

3. スリル・シーカー。

これらは、ヘイトグループの新兵のレベル分けから引用したものである。ハードコアの

新兵は、グループに完全に洗脳された者である。

ミッション・オフエンダーは「大義」を信じており、グループ・リーダーの要請や必要に応じて、ミッションを遂行するために派遣されることができる。

スリル・シーカーは、まだリクルートされていない人物で、何が起きているのかに興味があり、テロリズムや憎悪の実行に参加することもある。

基本的に、もしあなたがグループ／原因のためのハードコアなリクルートであるなら、あなたは、ターゲットとなる個人を恐怖に陥れ、ストーキングし、暴徒化し、威嚇し、拷問し、破滅に至るまで危害を加えるために、それが与えてくれるパワー感覚に完全にハマっている。

ミッション・オフエンダーは、同じように中毒的なパワーを感じながらも、それを享受するのが好きで、それでも現実の世界から立ち去って生きていく小さな能力を持っている。

スリルを求める者は、パワー・トキシンを味わい、その感じ方によって、ミッション・オフエンダーやハードコア・リクルート・セクターに移る。

3)

対象者向けソリューション

証拠集め／犯罪者の炙り出し

犯人を密かに監視するために、以下のような装置が採用されている：

前方を向いたアームバンドの携帯電

話 スパイ・カメラ・グラス（～

100ドル） 帽子のピンホール・カ

メラ

携帯型オーディオ・レコーダー（特に政府職員とやり取りをする際に使用し、冤罪や不作為による嘘に対する防御として取引の記録を残す）（～\$50～80）

ブルコード付き盗難警報器（襲われたときに警報を鳴らす）（～\$40

～\$50） エアホーン（犯罪者に発破をかける）

車両ダッシュカム（フロントと

リア） 自転車ヘルメットカメ

ラ

デジタルカメラ（32GB SDカード付き）

敷地内の電話用ピックアップ・マイク（電話の会話を録音可能）（イ

ンフラ・セキュリティ）：

パナブル・バブルドーム・ビデオカメラ（ズーム機能付き）； モーシ

ョンセンサー・ワイヤーメッシュ・カバー・モーションセンサー・フ

ラッドライト

外周フェンス（有刺鉄線；生垣付き石垣；錬鉄製手すり）

鋭利な丸太を突き出した堀と、開閉式/取り外し可能な橋（「鶏の散歩道」）番犬（注意：犯人に殺されたり、毒を盛られたり、拷問されたりする危険性がある。）

警報システム（セキュリティ会社が運営していないのが理想的-ほとんどがそうです）

室内ドアに複数個のボルトロック（ドア・ジャンプの中間とその上下、金属製ドアに溶接）

ドアは頑丈なスチール製とし、ドアフレームを補強する（木製ドアの場合は金属製のキックプレート。）

住居への道を横断する障壁の設置（例：丸太、重い鉄の樽や貯水槽）

金網を窓ガラスにねじ込んだ室内電話用マイク

信頼できる人、または審査に合格したTIと同居する（注意：偽のTIが多いので、十分に注意すること）。

一酸化炭素およびその他のガス検知器（犯人が住居に送り込む可能性のあるガスを検知するため）

バグ・スニーパー（RFIDインプラントや、犯人が住居に仕掛けたバグを検知す

る）ガイガーカウンター／線量計（安価な携帯用ピンテージ・ソビエト版が入

手可能）

EMFメーター（acousticomは評判の良いブラ

ンドです）遮蔽布（シルバークロムなど

）

発泡スチロール・パネルを多層のアルミ箔で覆い、すべての壁を覆う。

アルミサイディ

ング鉛塗料

壁の内側にねじ止めされた板金（重ね合わせるか、ひび割れをカバーする追加の金属パネルが必要）

床板のコーキングまたは合成樹脂、松脂（住居内へのガス侵入を防ぐ ベッド周りや窓の上の

蚊帳／金属メッシュの蚊帳

鉛で裏打ちされた袋/容器（「豚」

) D.E.W.からの個人的保護: :

指向性エネルギー源には、陸上、衛星、航空機、ドローン、電離層中継（GWENやHAARPシステム）などがある。陸上からの攻撃は、建造物、自動車、トレーラーに設置された装置からもたらされることもあれば、標的の近くに密かに隠された小型の信号放射装置からもたらされることもある。私は指向性エネルギー・デバイスを見たことはないが、家電製品、ユーティリティ機器、ステレオ・スピーカー、アンプなどの外見をしていたり、そのように隠されていたりするものもあると推測されている。隠された信号エミッターは、おそらく携帯電話よりも大きくない小さな電子機器である。

ジャミング

www.us-government-torture.com/callfriends.htmlやwww.us-government-torture.com/callfriends.htmlにあるような、自作の電気ジャマーや磁気ジャマー。

torture.com/countermeasuresNOguaranteeNov2000.htmは、実験する 価値があるかもしれない。裸線の電気モータージャマーは、顕著な効果があることがわかっている。

「DEWと呼ばれる攻撃の多くは、指向性ビームやレーザーではなく、実際には、痛みや音、あるいは身体の実際の生理学的プロセスを模倣した波形に変調された、極めて低い周波数の無線放送である可能性が高い。

磁石（N52ネオジウム・ハイガウス・小型・丸みを帯びた側面：DEWsの特定の周波数に干渉する磁場を作り出し、DEWsを妨害する）：ステンレス・スチール製のアクセサリー（イヤースタッド、チェーン、ブレスレットなど）に装着する。

アーシング（朝一番に裸足になる；木に抱きつく；モカシン；すべてマイナスイオンを発生させ、あるいはプラスイオンの除去を助け、炎症を抑える）

の動きだ：

動き回することは、RNMの妨げになる。コンピュータの前に立っているとき 例：体を動かしたり、ロッキングチェアに座ったり、有酸素運動マシンを使ったりする。

スカラー波ディスラプター：

銅管が付いている1800W/2500W ZVSの誘導ヒーターの誘導加熱機械(それと電源を購入しなさい)

ECSマシン（頭蓋電気刺激、例：Altered-states.net; cesultra.com）〔脳波活動を操作して、遠隔の神経監視を解除し、特定の気分状態を誘導するために使用する〕。

脳の同調：用途：電氣的、音波的、視覚的手段により、軸索結合／シナプスの神経改造、気分状態、血液の電化、シナプスの発達の誘発／脳構造の変更／前頭前皮質コンディショニング／活性化、トランス状態の誘発、遠隔視／サイ能力の可能性）等のために、意識状態／特定の脳波を誘発する：

A) 頭蓋内電気装置（小型の携帯型、最も安価；）

B) RF (高周波発生装置-通常最も高価)

C) サイマティクス: [サウンドジェネレーター-ポリリズム音楽、例えばバロック (チェンバロ/その他)、シタール、ダルシマー、複雑なドラミング/ドラムマシン (シンセサイザー)]

犯人によるT.I.意識のRNM/マッピングの混乱に役立つ

電子的な攻撃を察知したら、ブレイン・エンタテインメント技術を使うんだ。

睡眠中にmp3でサブリミナル録音やポリリズム音楽を聴く。これは、ノイズの乱れやV2Kによる意識の妨害に対抗する。ハプルスコードやバロック音楽がおすすめです。

バイノーラル・ブレイン・エントレインメント・トーン:

バイノーラル・ブレイン・エントレインメントのトーンは、ブレインマップが使う様々な周波数を妨害するのに役立つ。

複数のラジオ局を同時に聴き、複数の思考の流れを同時に考える（ブライアン・テューは「複数のスレッドで考える」と呼んだ）。

それはすべて符号化され、復号化された生体-神経-物理-無線-電気
MAGNETISIM、遠隔神経モニタリング、EVOKED POTENTIALS/BRAIN
WAVES/POLICE BRAIN PRINTS/IRISを利用したワイヤレス接続であることを忘れないでください。
スキャン／バイオメトリクスなどなど。

UV（紫外線）サングラスやセーフティグラスの着用は、レンズの屈折や距離の遮蔽、解像度の低下により、目へのアクセスを著しく減少させる。

振動からの保護

例えば、タオルのような布に包まれた重いものなどだ。

ライフマシン（高周波発生装置）ハン

ドヘルド・ザッパー（「ハルダ・クラ

ーク」ザッパー）

Pemf装置（パルス電磁石）〔炎症を抑える；DEW攻撃から守る〕

磁石:

磁石の極性が〜であれば、抗炎症作用がある；
マグネット・チェア: 折りたたみ式の金属製チェアで、座面の下にマグネットを仕込み、で

きればウールブランケットを上 に 敷 く（圧電効果）。B)磁気ベッド（磁気マットレスパッド）；C)磁化された食品・飲料皿・容器宝飾品（耳飾り、ネックレス、ブレスレットなど）に着用。

私はエクササイズのヘッドバンドを使い、磁気ストリップの完全な円を肌に当てる。耳、眉毛、うなじが隠れるよう に。特に額の中央、耳、目の横、こめかみ（ビデオインザマインドがある場合）、首の付け根に磁石を追加することができます。私はいつもではないが、夜寝るときにこれを使うことが多い。一日中つけている日もある。

磁石はすべて北側を皮膚に当てる必要がある。

磁石の北側を決めるには、テーブルの上に平らに置いたハイキングコンパスを使い、磁石の面をテーブルの上のコンパスに垂直に通す。コンパスの針が動かなければ、それが北側であることがわかる。

焼けるアートクレイを耳栓に見立て、中心に磁石を置く。

スリーピングマスクの内側に磁石を仕込み、顔のD.E.W.アタック

を最小限に抑えるDegauss（瞬間接地）チップ:

同じニッケルサイズの磁石を、ポケットに入れて持ち歩ける小さなアルトイズ缶に入れる。裏側を北側として使うことで、常にどちらの面を使うべきかがわかる。手のひらにすっぽり収まるサイズだ。この缶を顔の横、頭の横、こめかみのあたりに当ててください。

どんな種類の銅線でもいいので、絶縁されていない小さな平らな渦巻きを作る。スパイラルの線の数を数え、直径全体で9本または12本にする。スパイラルにスピーカーワイヤーを取り付ける。うなじ、側頭部、心臓の上、帽子の内側にスパイラルテープを貼る。

スピーカー線を服の下から足元まで通し、オフィス用品店で売っているマグネット付きのプリントシートを靴に貼る。

黒鉛粉または鉛塗料で塗装された子供用保護プラグ

コンセントが磁気を帯びていないか試してみましょう。コンパスを壁に垂直に当て、プラグの上を通過させる。針が半分以上振れたら、コンセントを交換する必要がある。これは簡単で、インターネットで調べることができる。新しいソケットを取り付ける前に、壁から出ているロメックス配線の両端を数回こすり、電子を再整列させてください。

ウォーターベッドで寝ると、"指示されたエネルギーを完全にグラウンディングさせる"効果があった。

グラウンドシューズ／サンダル

電気接地とグラウンドプレーン

電氣的に接地されたアルミ製スクリーンは、接地面を形成し、指向性エネルギーを吸収する効果がある。例えば、マットレスの上にベッドサイズのシーツを敷き、その上にフィットシーツと薄いコットンパッドを置き、ワイヤーまたはクリップのリード線でスクリーンを電気アース（電気コンセントの3番目の丸いプラグ、シンク下の冷水供給ライン金属配管パイプ、または屋外の地面に～2フィート打ち込んだ金属棒）に接続する。また、座っているときや寝ているときに、電氣的にアースされた電線が肌に触れるのも効果的である。

シールド:

戸建て構造の家かRV車に移動する。攻撃される可能性のある角度が最も少ない場所がベストだ。

隣の家を誰が借りたり買ったりするか分からないので、四方に家がある分譲地の真ん中にある家よりも、隣家が少ない家の方がずっと良い選択肢だ。住居の一番奥は、自分と犯罪者の間に壁が多く存在するため、最も安全なエリアとなる可能性がある。地下室がある家はその最たるものだ。最も近い構造物から遠ければ遠いほど良い。

遮蔽塗料-遮蔽技術の革命。

電磁波シールドの売れ筋商品のひとつに、メタルフリーの高周波シールド塗料がある。他の塗料と同じように塗ることができる。これらの塗料のほとんどは、屋内と屋外の両方の使用に適している。品質もさまざま。いくつかあるうちの2つを紹介しよう。

これらの塗料は幅広い用途に適している。

生活エリア: 携帯電話タワー、テレビ・ラジオ放送アンテナ、レーダー、デジタル標準コードレス電話、ワイヤレスネットワーク、その他ラストワンマイルアプリケーションからのHF放射からの保護。無線ネットワークからのデータ盗聴防止、盗聴される可能性のある会議室の傍受防止、EMIに敏感な設備や機器のシールド。医療: 機密性の高い技術機器の保護。その他の用途: 学校、保育園、ホテルの部屋、病院の部屋、レコーディングスタジオなど。

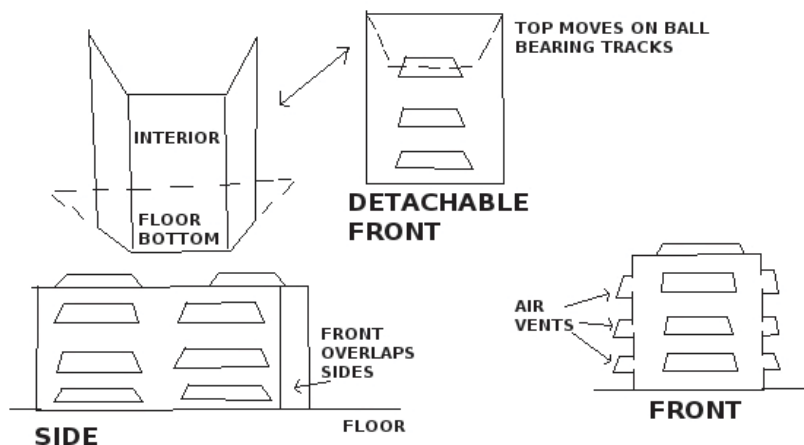
(純アクリル、高周波+高周波電磁field、内装+外装)

この塗料は一度塗りでも高い減衰効果があります。減衰量36dB（遮蔽効果99.98%）、一般的な1回塗りで43dB（遮蔽効果99.995%）、2回塗りで43dB（遮蔽効果99.995%）。この塗料は、古いエマルジョン塗料層（通常の内装用ラテックスやビニール、シートロック、セメント、しっくい、石積み、木材など）のような、ほとんどの内装表面によく接着する。また、水性ラテックスまたはビニール塗料で簡単に覆うことができ、色は黒です。この塗料は長い導電性繊維で補強されており、地中の隙間を埋める。このため、特に屋外で使用する場合、グラウンド・ストリップが不要となり、作業が簡素化されます。通気性に優れ、溶剤、可塑剤などを含まない。

アンチEMF：用途：セルタワー／電気グリッド／HAARPなどによるマインドコントロールを防ぐために、電磁場を緩衝／シールドする。

帽子、トレンチコート、手袋、靴下、フェイスマスクなど。また、シュンガイトやブラックトルマリンは、抗炎症作用のあるマイナスイオンの特性を持っており、この目的にも有用である。

EMF SHIELDING CHAMBER



ファラデーケージは電磁エネルギーを減衰させることができる。電線と50%の銀繊維で接地された鋼板金属が、構造の主要なベースとなる。最大の敵である低周波を減衰させるために、重要な部分（ヘッド部分）にミューメタルとシリコンスチールを加えることができる。最後に、50%銀アルゲンメッシュなどの銀ファブリックで構造を包む。鉛シートやポリタングステンシートは必須ではありませんが、高周波のイオン化エネルギー（および音響エネルギー）に対する保護が追加されます。シートメタル：（下記は睡眠／安全チャンバーの例）使用：20〜30ゲージの鋼板（鉄分を含む-ステンレス鋼ではない）は、電氣的に接地すると、より低い電気磁気エネルギーに対して効果的です。小型の電圧計で電気アースの完全性をテストすることをお勧めする。（20ゲージ=〜1mm厚、30ゲージ=〜0.3mm厚）。

ファラデーケージをシールドする他のアイデアとしては、金属製のバスタブを上記のように改造したもの、アルミの蚊帳（何重にも）でシールドした木枠の囲い、小さな穴を開けたアルミホイルなどが考えられる。

鋼板：

鋼鉄の鉄分は、電磁伝送の磁気成分に影響を与える可能性がある。鋼鉄の炭素は、電氣的成分に対して作用する可能性がある。

鉛 (Pb) :

厚さ1/4インチの鉛シートを必要に応じて何層にも折り畳むことで、電離エネルギーや音響エネルギーを効果的に減衰させることができる。鉛は可鍛性であり、ある程度の圧力で折りたたむことができ、カッターナイフで切断することもできる。鉛は毒物であり、取り扱いには注意が必要である。

EMP攻撃（電磁パルス、別名「E爆弾」攻撃）を防ぐために、電子機器を保管するために鉛の「ブタ」を使用する。

ゴムだ:

「天然」ゴムのバスマットやゴムのステップストーン（敷石）は、防音ダンパーとして効果的であることが証明されています（天然ゴムでなければなりません）。5枚以上のマット（または数枚の敷石）をロール状に巻いたり、積み重ねたりして、ダクトテープで束ねることができます。

その他のシールド素材: 羽毛、羊毛、皮革、絹

シールドとしてのセメントベースメント:

セメントで固めることで、電子的攻撃（マイクロ波、電磁波、レーザー）を防ぐことができる。私の地下室は、一部の壁と天井を除いて全面セメント仕上げです。

TIが身につけるべき3つのもの:

1- リードベスト

2- リードハット

3- 銀入りボールキャップ

私は0.175mmが理想的な "ハッピー・ミディアム "だと考えている。

リードカーテン

銅箔；バーベキューグリル／ベーキングシート（銅注入）；銅メッシュたわ

し 鉛またはバーベキューグリル用塗料（鏡の裏面に塗ってDEW電磁波をそら

す）

イージスガードLLと呼ばれるファブリック・コンディショナー。

www.blockemf.com、www.aegisguard.com、洗濯機の中で洗濯物の最終すすぎサイクルに加えると、衣服の劣化につながる。

高格付けウィンドウ・ティント（

例：フロリダ）マイラー・ブラン

ケット

チェーン

メイルシ

リコン

銀繊維の衣服（電磁波とエネルギー場を緩衝し、バクテリアを破壊する）、革とゴムの衣服（電磁波の緩衝を助ける）

お香と薪の煙（レーザー／スカラー兵器のビームを遮断） 霧

（電流を乱す）：シャワー、スチームマシン／蒸発器

疲れた気分を和らげる。これは、瞬時の覚醒と、より明晰な思考を助けるためのものだ。試してみたところ、よく効くようだ。水を入れたスプレーボトルを使うだけだ（費用対効果は高い）。

個人の健康：

人間のバイオリズムをリセットするために、自然とつながる：

人は、侵入／入射してくるELF周波数を打ち消したり、妨害したり、上書きしたりすることができる、自分で選んだ内部振動を作り出すことができる。

黒い服は頭痛を避ける優れた方法だ。黒い色は、最も有害なマイクロ波の影響をフィルターする。私は、コットンやウールのような天然繊維を使用する方が良いと思う。

切削屑を取り除く（切削屑は放射線を引き寄せ、金属蒸気を発生させ、身体を毒する。）

歯医者に頻繁に行かない（インプラント；RFIDチップ）

ドイツの新薬

オゾン発生器（大気および蒸留飲料水用）

プラズマガス/オゾン発生器：空気の浄化、病原菌の殺菌、液体/水中の酸素/オゾンの増加、体内浄化。O₃中の酸素一重項が脱離し、酸化還元反応によって病原菌などを破壊する；

天然繊維の衣類（リネン、シルク、コットン）

耳栓

ホワイトノイズマシン（扇風機など）

音楽（チェンバロ；器乐的なポリリズム-記憶を強化し、脳の活動を複雑にして、犯人によるRNMの企てを阻止する。

prayer/meditation-mat: : i) ウール（磁気共鳴/圧電効果）

ii) オルゴナイトブランケット（上）有機物・無機物（炭素鋼ウール・羊毛など）の重ね合わせ ③ヨガマット（竹藁・籐・天然素材）；

イオン発生器：空気を浄化し、炎症/DOR（致命的なオルゴンエネルギー）を抑える；

クロモセラピー・カラーライト：スイッチまたは電球：交感神経の振動を介して対応するチャクラを活性化する。

赤熱灯/近赤外線サウナ[赤色電球/色光スワット]：

体内の毒素を排出し、発汗を促す；

振動数(赤)の交感神経の共鳴によって肝臓の解毒を開始する。

琥珀色/オレンジ色の低いブルーライト： ホルモンや気分を変えるブルーライトを減らす。

バイオレット光線マシン'/ハンドヘルド高周波電気治療器：神経を落ち着かせる;鎮痛剤;局所殺菌;剥離;癌性ほくろ/腫瘍を破壊する;血液循環を加速する;組織細胞の代謝を増加させる;抗シワ;リンパドレナージュを刺激する;石灰化を破壊する;使用：関節;筋肉;血管;傷；

クリスタル：

A) 宝石：首（ペンダント）、手首（ブレスレット）、体（ブローチなど）。

B) 環境（下/上/周囲）：ベッド/風呂/電子機器など）。C) 食べ物/水の使用：

チャクラを活性化する、エネルギーを取り込む、形態形成場/エネルギー体を増幅する、自己の共鳴/統合性を高める、水を構造化する、成長を促進する、など。

(シュンガイト、オブシディオン、オニキスなどのプロテクションストーン、ルビーなどのモルフォジェニックフィールド/オーラを増幅させる石をお勧めする。)

磁気ファスナー付き銅製ストリング・ネックレスに、15000オーム以上の電子抵抗器を追加した。

楽器：

A) ボンゴ：トランス状態/変性意識状態を誘発する；

機械的な運動による音波の発生により、心身の健全性を向上させる；

B) パンパイプ：上記+呼吸法/肺活量のトレーニング

この楽器の形は、身体四肢に振動を分散させ、RNMが混乱/歪むように生理学を変化させ

るのに役立つ。

--蒸発器: 大気中のH₂Oを増加させる; 副鼻腔を取り除く; O₂を促進する呼吸を促進する(水蒸気はDEWの攻撃の効力を減らすのを助ける): 冷たい水蒸気ミストは、あなたの周波数を変更し、すぐに疲れを和らげるために支援し、より注意深くなるのに役立ちます。また、冷たい水に頭をつけたり、頬や首に冷たい水をかけると、迷走神経が活性化する。

-- ハンドヘルド振動マシン: 用途: ポスト
血流/リンパ流/筋肉の電氣的活動を増加させる。
石灰化/脂肪組織の増加;

酒器:

i) ガラス (エネルギー吸収/破損の最小化/オープンでの加熱のため、ダークパイレックスが望ましい)

ii) クリスタル (鉛を含む場合) ③ スターリングシルバー

ピッチャー/カップ(抗菌、殺菌); 容器

に追加アイテム:

i) シュンガイト[ギザのピラミッドの寸法]

(マイナスイオン/圧電/黒は周囲のエネルギーを吸収する/光がないため);

ii) 銀地金.999(上);

iii) 磁化]: 磁化された鉄の金属板/パンなどに容器を置く
(鉄など)、

a) 高ガウスのN43-N52ネオジム磁石をb) 目的に応じて神聖な幾何学的配列 (六角形/八角形/円形など) で着磁。

c) 反対極性をプレート上に配置し、ゴム/ひも(目的に応じて絹、綿など)を介して容器の周囲にVを配置する。

ある色の、<>銅線から伸びた電池で電気を流したり、流れる水の中に置いたりする;

精製方法 (優先順位) :

1) 湧き水 2) 蒸留水(

自社蒸留器-STC);

3) R.O.S (逆浸透) ;すべてのアルカリ性/構造を避ける

水; 小さなディンキング用容器: ~250ml.+パイレックスのガラス容器/
ダストカバー/冷蔵庫保管/破損を最小限にするため、上にフィットす

る大きめのもの

舌スクレーパー：目的：舌の残留物を除去する。味蕾を食べ物化学物質にさらすことで、消化酵素の最適な分泌を可能にする。

歯ブラシ：

ソーラーパネル付きソラデー酸化チタン棒（ソーラーパネルとイオン棒を唾液に接触させ、光で活性化させると、細菌を分解するマイナスイオンを発生させる）。

ネティポット：副鼻腔の粘液を除去する：

硫酸マグネシウム（エプソムソルト）と併用し、足の裏から体内毒素を排出する。

リフレクソロジー用トゲトゲサンダル（「トゲトゲ」）：できれば木か鉄のサンダルの底に十字のパターンを入れて「トゲトゲ」にする；足の裏を呼吸／発汗させてデトックスする；リフレクソロジーのツボを活性化する；心と体の統合性を高める

重力式浣腸バッグ：最低1.5L；結腸洗浄／投与
浣腸用液体（肝臓を洗浄するコーヒー浣腸など）

スターリングシルバー［フラットウェア／カトラリー／皿／ピッチャーなど］：上記参照
+ 緊急時の物々交換品

コロイダルシルバー：抗病原性/抗菌性/殺菌性のある.999シルバーのナノ粒子を、電流を通して.999シルバーのVワイヤーに生成します。ワニ口クリップを介した999銀地金Vワイヤー

角質除去：

目的：毛穴を開くための皮膚細胞の除去

呼吸／発汗による体内の解毒／機械的圧力によるリンパ管周辺のリンパ液の移動：

A)クロス（ボディショップ用の極細ナイロン/シッセルフアイバークロス）、B)ルーファ（ブラシとして使用される海洋植物セグメント）；

C) 頭皮ブラシ（硬めの猪毛ブラシ）；

D) スカルプマッサージブラシ（頭皮・血流・リンパの流れを刺激する木製先丸ブラシ

歯肉刺激剤：歯肉を刺激することで歯肉組織を形成する；成長反応を開始する；口腔内で歯を固定する；歯肉炎を軽減する；

パイレックスガラス製ストロー（ピペット／シリコンチューブ）：目的：果汁／酸によるエナメル質の損傷を避ける。

衛生:

UVライト歯ブラシボックス

小型真空密閉容器ガム

刺激装置+詰め替え歯ブラシ(ソラデ

ー+交換ヘッド)

安全カミソリ+刃+小ブラシ

ネイルトリマー

機械式鼻孔トリマー ルーフ

ァ（角質除去）

頭皮ブラシ（猪毛）

頭皮刺激器

〜イオン/03ジェネレーター

ポット(ベデー)ベデーアタッ

チメント浣腸バッグ

エクストラバージンココナッツオイル（オイルプリング、スキンコンディショナー）

グレシアンオリーブオ

イルソープタオル（大

2枚、小1枚）

ベーキングパウダー（洗濯、歯磨き 酢

（食器洗い）

デトックス：活性炭パウダー

食用粘土 (ca+ モンモリロナイト; ゼオライト)

エプソムソルト（マグネシウム源-鎮静／リラックス）；珪藻土（南京虫-ベッドの柱の周りに置く）水蒸留器

過酸化水素+スポイト（創傷灌注；耳垢除去-STC）剥離布(x2)

カルメックス；ワセリン

運動に関するものだ：

ピンホールメガネ：目の筋肉を鍛える。

トランポリン：体中のリンパを動かす／リンパ管を動かす／衝撃によって発生するGフォースで内臓を動かす／それによって免疫力を高める／デトックス効果もある／プロブリオセプション（体位認識）／バランス感覚／足の裏返しが少なくダメージを受けにくい四角い形が望ましい；

--第/長さ4-6フィート/直径1"ワイド；

目的：脊椎運動（脊柱起立筋、椎間板-あまり力まず、常に体幹の筋肉を引き締めたまま、コントロールされたスムーズなペースで行う。

--ハンドスクイザー:

A) マルチスプリング・オールドスクール・スプリング・スクイザー; 目的: 「クロ
ーズド・フィスト・グリップ」を強化する;

B) スプリング・スクイザー (V字型/シングル・スプリング) 目的: 手を不恰好な方法
で鍛える;

ブル/チンアップバー/遊び場機器: ストレート/伸縮ロッド; ドアフレー
ムにインストールすることができます (背中と腕のために); 最良の
種類は、マルチアングルです。

心血管機器:

目的: 大筋群を反復運動させることで、心血管系の全身代謝、肺活量、発汗/解毒、筋
電気活動を高める。

A) エリプティカル：一方の磁石を他方の磁石に近づけたり遠ざけたりして抵抗を増減できる磁気抵抗を推奨；

B) 静止／仰臥サイクル：A)と同じ原理；

C) バイク・トレーナー：流体式または磁気式の固定式「トレーナー」。

注意：ほとんどの場合、過度のノイズが発生する。

D) 自転車

E) スノーシュー；

F) ウォーキングシューズ

パーソナル・サバイバル (B.O.B-「バグ・アウト・バッグ」；

ミリタリー・スタイルのフレーム・バックパック) 出典：ミリ

タリー・サンプラス；古着屋；ガレージ・セール

入手先：古着屋、問屋、ガレージセール、家族の遺産、インターネットなど。

個人的な影響（身体に）：

ポーラー・スリーピングバッグ（ダ

ック／グース・ダウン ダウン・パ

ーカー

ウールの衣服（「ブッシュ」ジ

ャケット／パンツ）毛皮をま

とった革のガントレット手袋

ポーラーブーツ(ミッキーマウススタイル)Vマック

ルック+余分なひも 顔カバー(バラクラバ)/羽毛また

はフェルトのフェイスマスク ウールソックス(外側

) /ナイロンインナー

フレームバックパック 毛皮の帽子（ウシャン

カ風）モカシン さらなるサバイバルギア；

火：ライター(ジッポー;ビック);ワセリンを染み込ませた綿球;火花

ライター／火起こし（マグネシウムなど）、防水マッチ、灯油／ライターの液体を

入れた酒用フラスコ、火種（乾燥した棒など）

水：オゾン発生器（小型、電池式）；コロイダルシルバー発生器（小型）：9V電池+ジャンパーケーブル+ワニ口クリップ+.999銀線;銀地金;携帯濾過器:ライフストロー、カタダインフィルター;魔法瓶のステンレスカップ(中に全てのものを収納)

衛生：洗面器、石鹼（100%オリーブオイル）、ココナッツオイル、歯ブラシ+除菌剤、はさみ、安全かみそり+刃、過酸化水素、ベーキングパウダー、洗面布、スポイト、歯肉刺激剤、頭皮ブラシ、ルーファ、角質除去布、軽石、爪切り、Qチップ、ステンレスミラー、耳栓、シューティングイヤーマフ

服：長肌着（ウール）、ボクサーパンツ、靴下（余分なもの）、予備の靴+靴紐、マネーベルト（動物革）、セーター、手袋（警備用）

救急箱：かみそり用ナイフ、刺し傷・毒キット（スズメバチ、ダニ、ヘビなど）、縫い針+糸、カイエン、伸縮包帯+スプリント、バンダナ（綿・麻）、食品用活性炭パウダー、ゼオライト／テラミン粘土

通信：コンパス、地図、携帯電話、<>I.D.（就職など公的機関に問題がある場合）、食用植物、救急パンフレット

睡眠：寝袋＋寝袋マット；ウール毛布

情報/データ保存：複数のコンピュータ、外付けハードドライブ、USB、外付けディスクドライブ、電源コード、CD/DVD-RW（情報をハードコピーに焼く）、バッテリー駆動のウォークマン/ディスクマン（＋バッテリー、CD、カセットテープ）、磁気テープによるデータ保存、印刷されたテキストを凝縮する（裏から表に印刷する、小さなフォント）→スキャンして再利用/公開するためにインフォグラフィックス/重要文書をラミネートする。

フードストック：ドライフルーツ、ナッツ／シード（アーモンド／ピーナッツバター）、ターメリック、デンプン（オーツ麦、米など）、ハーブ、スパイス、クロレラタブ、乾燥海藻、イワシ、ギー、ワックスチーズ、ドライフルーツの箱詰め

工具：マルチツール、ハンマー（クロー、スレッジ）、のこぎり（ハック、ウッド）、スパナ（調整可能）、ドライバー（マルチビット）、プライバー、ワイヤーカッター／ストリッパー、釘／ねじ（大、小、中）、電気ドリル、発電機、密閉可能なプラスチック製ガス差し、六角レンチ、斧、ロックピック、ガラスカッター；

食料：最低2ヶ月分を常備

水：大容量の水差し（常時100L）（R.O.S.蒸留水が望ましい）

対処法：

第3の目の瞑想＋禅の悟りの技法（時空間平面からの離脱、すなわちマヤのベール）

マントラ（オーム）

実績のあるT.I.とネットワークを構築し、情報を共有し、相互扶助や支援を行う。

共同生活（24時間警備／敷地内の監視＋偽旗にハメられないための立会人）

犯罪を暴く

プロパガンダだ:

(ギャングストーキングのウェブサイト参照し、ユダヤ人の反白人声明を引用する。例えば、恥、罪悪感、怒り、憤り、ヒドゥンハンドのテロ活動への関心など。例としては以下のようなものがある: 「例えば、「地域警察はテロリズムである」、「ギャングストーキング」、「スパイ社会」、「ギャングストーキングはテロリズムである。」)

ウィンドウのバナー

ビジネスレター用スタンプを使用し、永久マーカーでメッセージをスタンプした紙幣

チョーク (油っぽいもの-ネオンが一番注意

を引く) メディアなどにチラシを送る

パンフレット、リーフレット、ステッカー (車のワイパーに貼る、車から芝生に投げる、バス停など公共の場に貼る。)

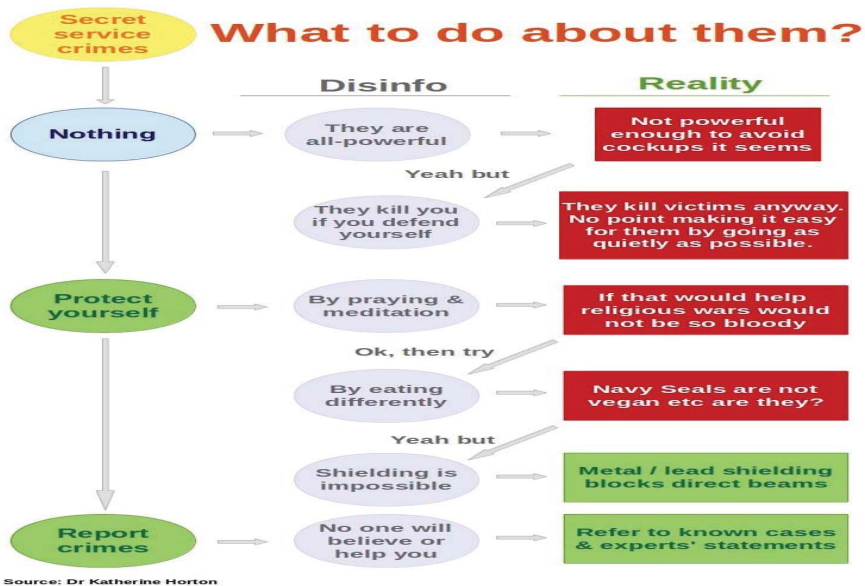
毎日の日誌をつけ、24時間体制ですべての出来事を監視・記録する。

すべての犯罪者のオーディオ／ビデオ証拠を収集し、各個人に関する書類をまとめる。ほとんどのT.I.は20人ずつの犯罪者を担当する。

DEW攻撃による電磁波計の測定値をビデオに記録し、その場所を特定する:

メッセージを広めるためのミーティングやウェブサイト、フォーラムへのリンク (同上)

電子メール: 匿名の大量の電子メールやファックスを組織に送る。主要な個人は、コミュニティ・ディスカッションのためのウェブサイトやフォーラムを開設し、オーディオ・ビデオ・プラットフォームでグループや個人対個人の会話を行う。



警察への対応

「私はテロリストの監視リストに載っている」（これは彼らに、あなたの活動を妨害してはならないが、単に遠くから監視しているだけであることを示す）。

「私はすべての権利を留保します...私は自由です」（土地の自

由人のアドバイス）5語: "何も言うことはありません"

「弁護士がついています」: 弁護士名を告げる

人をビデオで録画しているところなどが見つかった場合: 「私は違法な [...アルファベットの機関名または省略...] 監視と監視に対抗するストーカー行為を記録しています」（スティーブン・オキーフ） 注意点: 目立つことを避けようとする。

D.E.W.およびマイクロ波兵器技術の技術図を手元に置き、その存在を証明する。

セキュリティ



エクステリア

南京錠: 南京錠の強度は、閉めるドアの強度と同じである。

グレード 6 高セキュリティ・シュラウド南京錠（大型タイプ）

Sargent & Greenleaf (S&G) 951 または 833 南京錠、Abloy Protec2 PL 362 シュラウド付き硬化
鋼南京錠（フィンランド）、Anchor Las 590-6 南京錠（スウェーデン）、EVA MCS シュラウド付
き南京錠（オーストリア）: このマグネットロックは、ピッキングが最も難しいかもしれません
。

小さい南京錠 S & G ホイール・コンビネーション南京

錠 敷地内の防犯カメラ：モーションセンサー、フラッ

ドライト

床用金庫（理想的にはコンクリートに沈めておく。）

ドア

スチール

ドアの内

装：

デッドボルト

Abloy Protec2 ジミー・ブルーフ・デッドロック・デッドボルト; BiLock ジミー・ブルー

フ・デッドロック・デッドボルト; 安全のため、可能な限りデッドボルトをテープで口

ックしてください：

DJAarmor プラチナ・ジャンプ・アーマー・コンボ・キット 標準

ドア用デッドボルト：

アブロイ・デッドボルト用拡張ボルト

<https://securitysnobs.com/Deadbolt-Bolts/> ハスプ：

HS1 頑丈なハスプ&ステーブル

チェーン：

硬化ボロンスチールハイグレードチェーン

<https://securityforbikes.com/products.php?cat=Chains+%28without+padlocks%29>

旅をしている：

携帯用ドアロック：

Calslock; MasterBolt; Addalock; Qicklock ポータブル・トラベル・ドアロック; Pocket Lock ポー

ダブル・ドアロック;

窓: 防犯バー; 金属メッシュ; スプリング式拡張可能バー; 防犯フィルム(侵入/盗難防止)

ドアの下:

DoorJammer Portable Door Brace; Wedge Door Stop Security

Alarm; Door Barricade Brace Night Security Lock: 例: ナイトロッ

ク (\$40)

車両セキュリティ:

セキュリティフィルム

ブーツロック

クラブ式ステアリングロック) ダッ

シュカメラ

車である:

Mul-T-Lock (残念ながらユダヤ系企業) のド

ア: アルマドロック

ギアシフトMVP 45

個人的な防衛(地域の法律に注意すること):

防護服: ヘルメット、フェイスマスク、すね当て、防弾チョッキ

ブレード: ズボンポケット: バネ式フォルダーナイフ; 固定ブレード; 大型

ナタ折りたたみ式警棒(摩擦)

鈍器だ:

スチールショットグローブまたはケブラーナックル;

野球のバット (アルミ製)、折りたたみ式警棒、クバトンまたはキーセット

ガンの猿拳:

ライフル: サコ、ウィンチェスター270、暗視スコープ付

拳銃/サイドアーム: ルガー・マーク3または4; .38スペシャル・リボルバー・ブルーブラッ

ク・メタル.357スミス・アンド・ウェッソン・リボルバー

散弾銃: 12ゲージ ポンプアクション式セミオート散弾銃

セミオートマチック (反復式) 軍用ライフル: M-16; SKS

サブマシンガン(smg)H&K MP5、MAC-11、スコープオンマシンガ

ン: ピストル、ライフル+鉛玉

銃のロック+キー;銃のクリーニングキット (オイル、ぼろ布、ブラシ) ;

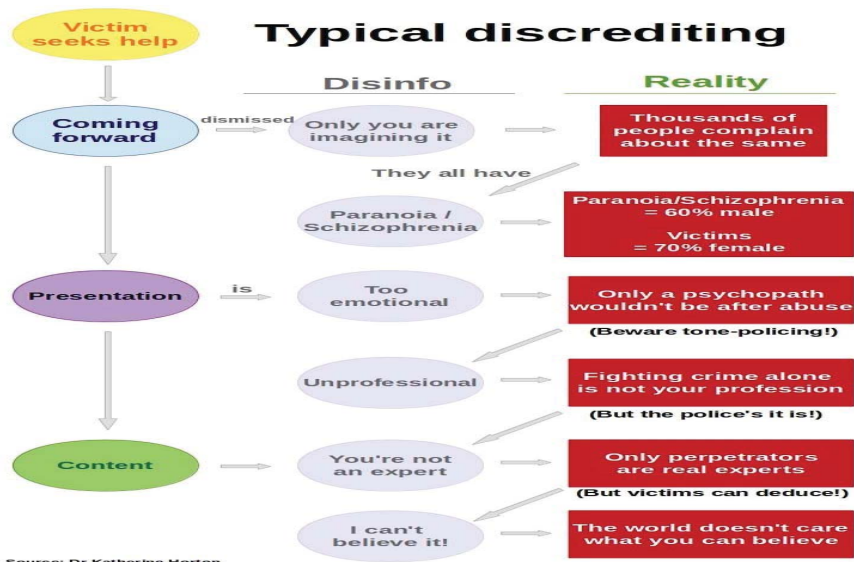
[自作]ボディアーマー(ケブラーヘルメット+バリスティックフェイスシールド/フェイスマスク
/ケブラーベスト; バリスティックシールド)

自作の武器（WROL/SHTFの状況において）：

(インターネットで使い方を調べる)：ペッパースプレー；電子レンジ用メーザー／高周波銃；スタンガン；パイプ銃；自家製木製「ナック」(マホガニー／チェリーウッド；チーク材)
鉛入りの杖；

精神疾患の誤診を避ける：

「率直に言って、私はあなた方が理学療法士や心理学者に会いに行くのを避けることを強く勧める、
テーマ指向性エネルギー兵器とギャングストーキング



"モビング／組織的ストーキングの結果、メンタルヘルス専門家にかかる、精神障害と誤診される可能性があります。"
(リッチ『国家が支援するテロキャンペーン：隠された悪』48ページ）。



精神科医や『メンタルヘルスの専門家』への対応:

常に文字通りの意味のみを伝え、「精神疾患」の「症状」として描かれるような特異性を示すことなく、可能な限り「平均的／正常」に見える。

自分にも他人にも危険はない」とだけ述べる

いかなる「治療」があなたに課される場合でも、インフォームド・コンセントを確実に得ること。国家があなたに対して身体的強制力や監禁を課することを正当化できない限り、可能な限り同意しないこと。

施設に入所している場合は、できるだけ普通に振る舞い、できるだけ早く薬を断つ。

施設に収容されている場合は、審査委員会を招集し、あなたが施設から出られるような手続きを開始することを明記してください。(これはカナダに適用される。

地域の倫理規定と、メンタルヘルス「専門家」が「サービス」を提供する際に通過しなければならないパラメータを確認してください。自分の権利を知る)。

インプラントへの対応

犯人の電磁波の送受信を妨害するために、磁石をどこに置くか、あるいは身の回りに置く。

EMP（電磁パルス）によるショート攻撃

信頼できる外科医が見つかり、チップやインプラントが検出されれば、インプラントを除去してもらえる可能性がある。

歯科治療や歯科手術、特に麻酔をかける（「麻酔をかける」）手術は、チップングが行われる主な手段であるため避けること（典型的な場所：右下顎と左上顎は、運動機能を司る迷走神経の通り道である）。これにより、犯人はD.E.W.を使ってT.I.の動きに影響を与えることができる)

RNM（遠隔神経モニタリングと操作）への対応:

その他の守備

マルチタスク

マルチタスクをすると、複数のスレッドで考えることになるので、マルチタスクの方法を学

ぶ。常に複数のスレッド（複数のタスクや思考）で思考している場合、犯人がRNMデータを確立し統合するための首尾一貫したパターンは存在しない。（例：チェンバロなど他の作業をしながらポリリズムの音楽を聴く、ECSマシンやRFマシンを使う）；

つまり、RNMシステムとあなたの脳の間の『統合完了』が妨げられ、その特定の『インパルス注入』に対するあなたの反応がなければ、RNMの検証プロセスはバラバラになってしまうのだ。

もしあなたがこの絶え間ない精神操作に気づかなければ、システムはあなたの思考と行動を形成し始める。攻撃者はこれを利用して、これらの暗示（注入されたインパルス）が提供されている間、あなたの記憶と思考プロセスをブロック（妨害）することによって、あなたの思考と行動を制限しようとします。

アクティブな記憶術を学ぶ

通常の」ルーティン化された行動様式とは異なる行動をとる（プライベートでは「通常」／「平均的」であるように振舞うが、人前では「通常」／「平均的」であるように振舞う）。

検出:

無線周波数走査

JM20 PRO RF-検出器 RF（無線周波数）スキャン検

査の3段階:

1. 人体からの（RF）無線周波数放射の予備スキャン。
2. RF周波数の放射が確認された部位の医療用画像を入手する。その目的は、可能性のある異物、UBO（未確認の明るい物体）を見つけることである。これは参加者の責任である。
3. RF放射の最終スキャンは、制御された環境で行われる。これは、ファラデーケージとも呼ばれる認定されたシールドルームで第1段階を繰り返すもので、信号が外部ソースから来る可能性を排除する。
4. ビデオ監視下での手術により、国内および国際法廷で認められる可能性のある物的証拠を入手する。これは参加者の責任である。

Zap180は人間のチップインプラントを検出する

であれば、希土類磁石で2日以内に故障させ、バンドエイドで固定すればいい。

数年前の新しいチップは、中和に12〜24時間しかかからない。子供の頃にワクチンで接種したものは、24〜36時間かかる。

RFIDチップの除去:

チップの中には、レントゲンや超音波装置、スキャナーに映らないものもあるため、通常

、チップを検出できる開業医を見つけなければなりません。次に、チップを除去してくれる外科医を見つけるか、チップを消去してデータ送信を止めてくれる技術者を見つけなければならない。以下は、チップの埋め込みに強い暗示を抱いているかもしれないあなたの助けになるに違いない。この記事は、チップ検出とチップ除去のいずれかをお探しのあなたを支援するためのものです。

磁石は、古いハードディスク・ドライブの中からも見つけることができる。他の磁石よりも脆いため、銀（または金）のオーバーレイに包まれている。しかし、見間違えることはないだろう。

それを組み合わせようとした瞬間、指を挟んでしまうだろう。レアアース（希土類）という鉱物から作られた、とても強力な磁石なんだ。そして、マイクロチップを使い物にならなくしてしまうのです」。

磁石を使ってチップをショートさせる：

ネオジム磁石

「電子的、物理的、（インプラントの）完全な無効化には、直径4分の1インチから5分の1インチのネオジム（希土類鉱物）磁石が効果的だ。できれば24時間以上、野球帽のヘッドバンドに装着する人もいますが、耳の後ろにテープで貼り付けて髪の下に隠すこともできます！インプラントが無効化された後は、それほど疲れなくなり、耳の中のピッチや周波数が起こらなくなります。ただし、強力な磁石はディスクやコンピュータを破壊する可能性があるため、取り扱いには注意が必要です。コンピュータの前に座っている間は、少なくとも、小さなものを1個か2個以上つけている間は、つけないほうがいいでしょう」

http://www.metatech.org/implants_physical_destroy.html

<http://www.thetruthdenied.com/news/2014/11/11/how-to-remove-an-rfid-implant/>

犯罪者への対応

車にはねられたり、暴行を受けたり、ハメられたり、ハメられたりしないよう、録画装置で犯人たちを密かに監視し、常に注意を払う。

精神的に病んでいる」と世間に思われるのを避けるため、「理性的な人」が攻撃的、感情的に不安定、脅迫的、疑わしいと解釈できるような対応はしないこと。常に平常心を保つこと。

「犯罪者は1秒以内に盲従しなければならない。さもなければ罰せられる。私はバスやスカイトレイン、あるいは整列している列の中で、しばしばそれを目撃してきた。ハラスメントが行われる場所には必ず監督者がいる。犯罪者たちは監督者の顔色をうかがいながら、武器を発射する許可をもらう。これは目をぱちぱちさせることによって行われる。スーパーバイザーは携帯電話を手を持っていることはない。彼らの多くは、権威を示すためにスーツを着て

いる。犯罪者が状況をエスカレートさせると、スーパーバイザーが介入して状況を緩和する。スーパーバイザーのおかげで、犯罪者の愚かな行為によって警察に逮捕されずに済んだことがよくある。警察は上司の介入に屈し、私はこうして誰がボスなのかを知った。上層部の上司はモサドの諜報員だ」。(ターゲットにされた個人からの引用)

ハラスメント、性的暴行、盗撮、器物損壊、建造物侵入、不法侵入、敷地内の平穏な生活の妨害（条例違反）、不法侵入（B&E）、その他彼らが犯したと思われるあらゆる犯罪で起訴するために使用できるオーディオ・ビデオや写真の形で、犯人の名前、顔、住居のリストを作成する。あなたの身に何かあった場合、信頼できる情報源に自動的に情報（保管サイトへのリンクでも、内密にしておいたあなた自身のウェブサイトでもよい）を送信するオンラインの「デッドマンズ・スイッチ」によって、生命やその他の情報を公開できるようにあらかじめ準備しておく。これにより、犯罪者が裁かれることになるかもしれない。

フリーメイソン（「シャボス・ゴイム」）へのメッセージ:

シオン長老議定書からの以下の引用は、ユダヤ人にとってのフリーメイソンの目的と、フリーメイソンに対するユダヤ人の意図の両方を説明するのに役立つ。シオンの長老たちの議定書からのこれらの引用には、同胞に対する裏切り者の運命が大きく書かれている:

「これらのログジのために、われわれは主要な情報機関および影響力の手段を見出す。これらすべてのログジを、われわれだけが知っていて、他のすべての者にはまったく知られていない、ひとつの中央管理下に置き、われわれの学識ある長老たちで構成する。各ログジには、上記のメイソンリーの管理部門を審査する役割を果たす代表者を置き、その代表者から合言葉とプログラムを発表する。これらのログジにおいて、われわれは、すべての革命的・自由主義的要素を結びつける結び目を結びつける。その構成は、社会のあらゆる階層からなる。最も秘密裏の政治的陰謀は、われわれの知るところとなり、その構想のまさにその日に、われわれの指導の下に置かれることになる。これらのログジのメンバーには、ほとんどすべての工作員が含まれるであろう。

警察は、反抗的な者に対して独自の特別な手段を用いるだけでなく、私たちの活動を選別し、不満の口実を提供する立場にあるからである。

「なぜなら、私たちは自分たちがどこへ導こうとしているのか知っており、あらゆる活動の最終的な目標を知っているからである。

彼らは通常、自分の前に、その構想そのものが決して自分の主導権に属するものではなく、彼らの思考をわれわれが扇動したものであることに気づくこともなく、自分の思考の達成における自己のオピニオンの満足という一瞬の計算を置くのである [...]」（同書）。

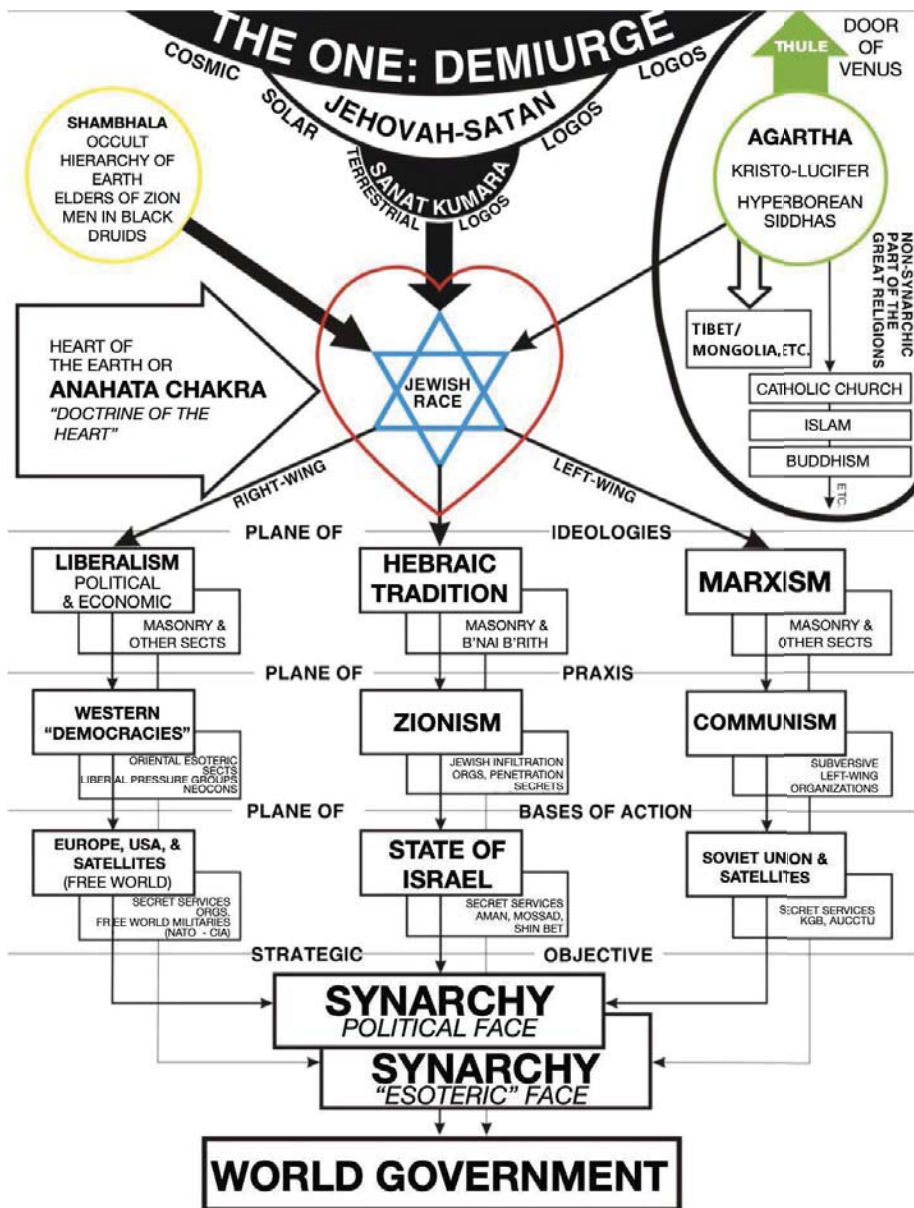
「最も賢いゴイムたちが、このような自惚れの強い状態の前で、どこまで無意識のうちに素朴な状態に陥ってしまうのか、そして同時に、わずかな不成功によって、たとえそれが彼らが持っていた喝采を止めたことに過ぎないとしても、彼らの心を奪い、成功の再来を勝ち取るために彼らを隷属的な服従に落とし込むことが、どれほど簡単なことなのか、あなたは想像できないだろう……。自分たちの計画を遂行しさえすれば、成功は無視する。

成功のためなら、どんな計画も喜んで犠牲にする。彼らのこの心理は、彼らを必要な方向に向かわせるという我々の仕事を物質的に容易にしてくれる。見た目は羊のような虎だが、彼らの頭には風が吹き抜ける。

「この目的のために、われわれは、われわれの王国への進入に反対して武器を取る者はすべて、容赦なく殺害する。秘密結社のようなあらゆる新しい組織もまた、死をもって罰せられるであろう。現在存在し、われわれに知られ、われわれに奉仕し、われわれに奉仕してきたものは、われわれは解散させ、ヨーロッパから遠く離れた大陸に亡命させるであろう。このようにして、われわれは、あまりにも多くを知っている「ゴイ」メイソンたちにも対処することになる。

このような人たちは、私たちが何らかの理由で免れることができても、常に追放の恐怖にさらされ続けることになる」。

EXILE? ゴイのフリーメーソンはボリシェヴィキ革命後に処刑された……。4)



上の画像はニムロッド・デ・ロサリオの『ハイパーボレアの叡智の基礎』より。世界の陰謀をあらゆる側面と次元で包括的に理解するためには、彼の小説と前述の秘教的著作を読むことをお勧めする：イニシエティックな小説：「ハイパーボリーの叡智の謎」と「トゥーレゲゼルシャフトの秘史」

参考文献

本だ：

健康だ：

「Übermenschheit: Salubrious Living", Arnold Devries (断食プロトコルの追加)

サイコ・スピリチュアル：

ユリウス・エヴォラ「覚醒の教義」； 禅： 武士の宗教」；

ハグル「意志の発展」；

ウィリアム・ウォーカー・アトキンソン（思考力； 個人的磁力など）

ロバート・ブルースのエネルギー

ー・テクニック「メンタルヘル

ス」 専門職：

「精神医学の詐欺」リチャード・ライトハウス

「精神疾患は存在するか」ウィリアム・ラムジ

ー、J.D.「医学の神学」トマス・サズ

マインドコントロール

「共産主義洗脳マニュアル： 共産主義洗脳マニュアル： ロシアの心理政治学の教科書の統合」

L・ロン・ハバード

"鎖のない奴隷： ト라우マ・プログラミング」、U.W.オジアン

「イルミナティはいかにして完全で探知不可能なマインド・コント

ロールの奴隷を作り出すか」、「イルミナティ公式への深い洞察」

、フリッツ・スプリングマイヤー 「マインド・コントロール、

NLPと催眠術」、デイヴィッド・シャトルワース

組織的ストーキングと電子ハラスメント (OSEH) :

「国家が支援するテロキャンペーン：隠された悪」 マーク・M・リッ

チM.リッチ 「ギャングストーキングの議定書」 エリック・カールス

トローム博士

「新世界大戦：政治支配のための革命的方法」 マーク・M・リッチ

「マイクロ波によるマインドコントロール人権とプライバシーを排除する現代の拷問と管理メカニズム」 ラウニ・リーナ・キルデ医学博士、フィンランド元最高医療責任者

「ギャングストーキングとマインドコントロール：コミュニティ・スパイ・ネットワークによる社会の破壊」 A.K.フォーウッド

ウェブサイト

標的個人；暴力団によるストーカー行為；および指向性エネルギー兵器

ギー兵器： <https://www.stopgangstalkingcrimes.com/>

<https://www.stopeg.com/>

<https://sites.google.com/site/targetedstalkedterrorized/home>

<https://www.righthouse.com/targeted-individuals.html>

<https://gefoltert.blogspot.com/2018/01/posts-and-videos-in-english-language.html?zx=2d55820ad4ca9aab>

フォーラム：

<https://exposingtheothers.com/forum/index.php>

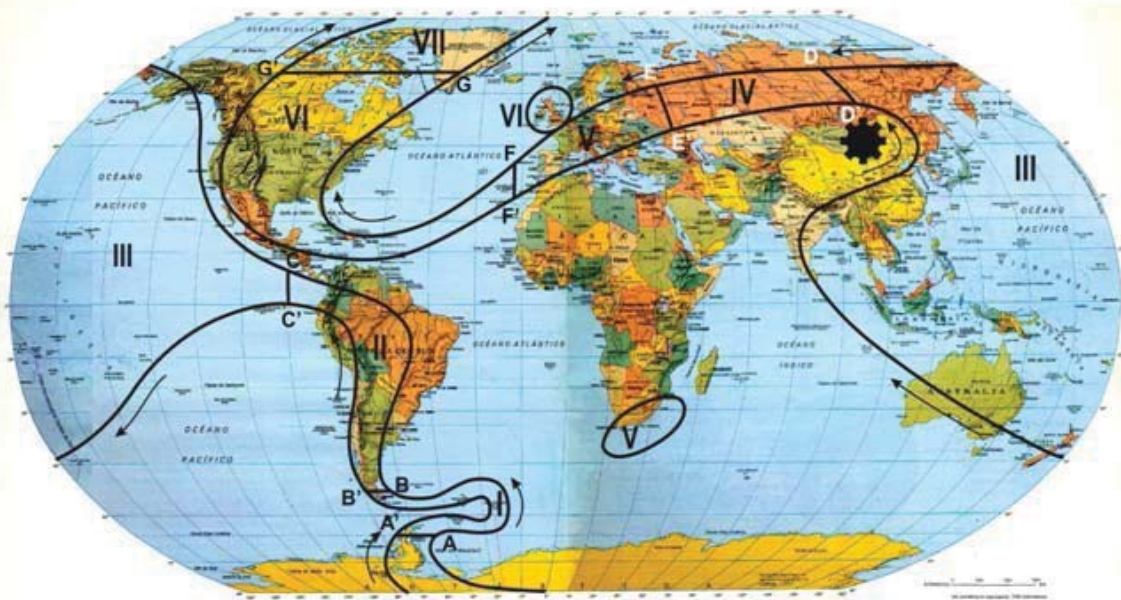


Figura 10

EL MOTOR DEL KALY YUGA Y ZONAS DE INTENSIDAD SOBRE LA RUTA

ニムロッド・デ・ロサリオの大著『ハイパーボレアの叡智の基礎』に描かれているカリ・ユガのサイコ・リージョンは、デミウルゲの時間の流れが最も少ない南極大陸（リージョンI）から最も多い北アメリカ大陸、そしてイギリスへと向かっている。

注：以下の作品では、「神」、「一つ」、「存在」などの言葉は、すべての存在を発する源を表し、劣等なモナド、別名デミウルゲ（エホバ、ヤハウェ、ブラフマー、アッラー）と混同されるものではなく、創造されざる光、不

可なるものと同一視されるべきものである。

パート2

崩壊ユダヤ人拷問殺人

この作品は、対象となる個々の現象について、その隠された側面を提示するものである。世界を奴隷化し、アーリア人種が持っている神聖な輝きを消滅させようとする闇の力を、包み隠さず明らかにしている。

ここでは、陰謀団の地下活動におけるさまざまな動機と手口を論じ、彼らに対抗するための霊的戦いの手段と方法を論じる。

この戦争は、地球上と地球外において何千年にもわたって続いてきたものだ。それは闇とその道具であるユダヤ人の反人種、フリーメーソン、アブラハム宗教の主流派とその野蛮な獣人の大群が、アーリア人の血の中に結晶化した神々の神聖な輝きである聖杯の光の担い手と戦う宇宙規模の戦争である。

戦争はアーリア人の前に立ちはだかり、敵は最初に血を流し、そのエネルギー源として求めているアーリア人の血を執拗に追い求める。

アーリア人の魂を吸血鬼化し、弱さと服従の状態にまで墮落させることで、その卵黄（地球に押し付けようとしているシオンの奴隷制度）の前に引きずり出そうとしているのだ。

著者はこの著作を、敵を効果的に服従させるための、あるいは少なくともこの地上での戦争に敗れた場合にアーリア人の生存可能性を最大化するためのガイダンス・システムとして役立てることを意図している。叡智に導かれたアーリア人の力によって、宇宙の正義が闇の勢力に下されることを意図して、奴隷システムのメカニズムを概説し、それらを真実の光にさらす。

ジオンの吸血鬼たちに対する戦争の武器である。著者は、この武器を手にし、効果的に振るうことに失敗すれば、勝利実現の可能性が低くなるかもしれないことを強調している。なぜなら、知る必要のある多くのことがここに書かれており、著者が知る限り、他の著作では入手できないからである。多くのことが悪意ある陰謀団の闇に包まれ、ほとんど認識できないほど歪められ、墮落し、ほとんど認識できない状態からかろうじて救済されるにすぎない。

その仕事は大変なものだが、そのような仕事があること、そして自分自身とアーリ

ア人の生存のために必要な仕事であることを発見する幸運に恵まれた人にとっては、生きるか死ぬかの仕事なのだ。

この作品をアーリア人読者の武器に組み込み、永遠の戦争に役立てよう。

この作品は3つのセクションに分かれている：

そこで読者は、アーリア人としての真の自己を知り、自らの真の本質（ギリシア人の「グノテ・セウトン」すなわち「汝自身を知れ」）に従って生きる方法を知ることになる；

敵」、そこで彼は不倶戴天の敵対関係、「他者」としての敵を知ることになる；

そして「世界」、戦いが繰り上げられる舞台、敵の地中での動きを戦術的に分析し、自らの賢明な対抗策でそれに対抗する方法である。

セルフ

敵に対抗するためには、『自分自身を知る』必要がある。

自己中心的

この永遠の闘争の世界で生きるためには、人は自分自身に対して敵対的に働く力と闘わなければならない。さらに、有機体は自己を発展させ、他者に対して自己を拡大しようとする。それゆえ、すべての生命は、生きるという限りにおいて、その条件として「他者」の死を伴うのである。

この戦争は、生物（ここでは物理的にも形而上学的にも考えられている）の永続を支え、可能にする因果力の限界によって制限される。これらの限界（それ自体、大部分は知ることができず、認識論的なブロックを構成している）の中で働くことに失敗すると、絶滅につながる。

人は自分の限界を知らなければならないが、逆説的な言い方をすれば、既知の限界の中だけで動くような形に自分を結晶化させることは、エントロピーと自己破壊につながる。従って、人は地に足をつけていなければならない。それと同じように、自己の成長の条件として、頭（コスモス、スピリット）を空に向けていなければならない。

大地に足をつけ、存在の総体との関係において自分の存在に根ざすという概念は、「合理的な限界」、つまり自己の断片化や崩壊を促進することなく、自己をその単一構造の中に維持することのできる範囲内にとどまるという概念に翻訳できる比喩的な言葉である。こうして

人は成長し、その成長には腫瘍性の転移か、健康とパワーをもたらす同化作用がある。

人は、自分の存在の「妥当な限界」や境界線から逃れることを許し、自分自身を破壊したり傷つけたりするか、あるいは「まっすぐで狭い道にこだわる」かのどちらかである。この道は、よくすり減った道からわずかに外れ、最終的な目的地である神性、不滅のダイヤモンドの肉体を失うことなく、その道を広げていく ことしかできない。このように、生き続けるためには、自分の限界と闘わなければならない。

このことが意味するのは、ダイナミックに自己統治する有機体として、彼は自分自身に挑戦しなければならず、常に休むことなく彼を取り囲み、将来の「平和」を約束することなく彼を苦しめる敵対的な力に決して屈しないということである。実際、彼にとって「平和」とは死そのものであり、彼が知っている、あるいは知ることのできる唯一の平和は、地元の墓地の墓石に刻まれた「安らかに眠れ」という言葉である。休息も「平和」も、彼がダイナミックな存在であり、永遠に続く戦争の戦士である限り、望ましいものでも可能なものでもない。

彼が直面する力とは、混沌、断片化、崩壊（求心的なもの、つまり彼の存在の中心から爆発的に、自爆装置のように出ていくもの）を助長するものと、秩序、同化、統合（遠心的なもの、つまり周辺から暗黙的に、力の渦のように中心に持ち込まれるもの）を助長するものである。

そのエネルギーの渦は、無差別にすべてを自分の中に吸収するのではなく、生命を発展させるエネルギーだけをフィルターを通して自分の中に取り込み、真空の量子フィルターを通して、存在の断片、単位有機体、ダイヤモンドの原石へと変化させる性質を持っている。

伝統的なアーリア人のイニシエーションの道である太陽とオリンピアの道（左手の道）は、人を暗闇から導き出す。「神」や「唯一」と呼ばれる抽象的な無の光ではなく、むしろハイパーボリアン北の内なる光を開発し、その輝きを地上に放ち、暗闇を追放する手段として、それを自分の中に集中させるのである。

そのような状態に到達するためには、どのようなセム系の神への祈りでも十分ではない。むしろ、純粋な自己中心性において、自己との絶え間ない戦いと自己の強化を人生に課し、対抗勢力との激しい対立を通じて、霊的に自己（真我）の中心になることである。左手の力の道は、ハイパーボレアの神々の道であり、闇の力のデミウルゴスのマトリックスの牢獄から抜け出す道である。

遠心力とは、自分自身を電池に見立て、自らの努力によって充電し、外からのエネルギー（アストラルの光）を自分に取り込むことである；血のヴァンピリズム、血を飲むこと、カニバリズム）ではなく、純粋にありふれた肉体的有機体の偽りの自己を真我に捧げ、神々の

血を飲むことである。

熱力学に従えば、エネルギーは熱いものから冷たいものへと流れる。したがって、人は、自分の存在を分解する腐食性の水（*zesetzung*）から自らを救い出し、内在的超越を経て永遠の中で生きるために、さまざまな時空間的条件に対する無関心と離脱を身につけなければならない。

アブラハム信条の道德主義は、彼の意識に制限を課し、この状態に到達する能力を弱体化させる。ナースメイドの指振りは発達を阻害し、ベビーベッドと、外見はマッチョな父親像だけで、母親である女神像の乳房に依存することで、人生を囲い込まれた永遠の幼児にしてしまうのだ。

オリンポスの高みへと上る英雄的な道を歩む者は、不死のために依存を捨て、危険を冒す。そのような道こそが唯一可能な方向であり、それ以外は「悲惨な安楽」と確実な緩慢な死であることを理解している。純粋に物質的な懸念の領域に引きずり込まれることを許さず、彼は自分自身を保ち、頂上へと導く苦難に耐えなければならない。

それは意志の力と方向づけられた力の道であり、一時的な時空の世界を超越し、より高次の意識の原理が存在する領域に向かって方向づけられるものである。それはまた、より強固にし、より大きな意志の力を強化し、発展させる道であり、自分自身である本質的な要素のすべてを自分の中に統合し、自分の存在と融合する結合物質として自分の中に取り込み可能なものによって、それを拡大し、力を与える方法で強化する道でもある。

自己中心的な状態は、不死人にとって唯一可能な状態である。しかし、これは通常「利他主義」と呼ばれるものを排除するものではない。「真の自己」は、「友人」、すなわち「自己」と有機的に関係する人々によって支えられており、「敵」、すなわち「自己」と有機的な存在が対立的かつ破壊的に関係する人々に対しては、必要な敵対心を持つ。

人は、ダイヤモンドのボディに結晶化し、戦闘のために自らを硬化させながら、自らの中でひとつのダイナミックな力へと結合する力の渦でなければならない。

ノーブルターゲット血の記憶、血の生贄

この世界の地獄の勢力であるユダヤの世界秩序の主要な標的は誰か？ アーリア人の高貴な血を受け継ぐ者たちである。具体的には、戦士貴族（ヴェーダのカースト制度の第1位と第2位）に由来する者たちである。彼らは神の火花、聖杯の体現者であり、何千年も前に地上に現れ、この世界を創造した神々に由来するアーリア人の血であり、敵である地獄の勢力との宇宙戦争によって滅ぼされた。

これらの貴族や靈的指導者たちは、神々自身（ハイパーボリアン・ディヴィアス）から派生した高次の意識（神意識）を、血の記憶、つまり自分たちが何者なのか、敵（ユダヤ人とそのシャボ・ゴイム、そして彼らを支配する闇の勢力）が何をしているのか、彼らがどのように行動しているのか、彼らが何をすることができるのか、そしてどのように行動しているのかを認識することによって、敵と戦うことができる最も有能な子孫たちに受け継がせたのである。

彼らは高次の超合理的な直感を通して、敵が低次のエゴに限定された意識の中で固定されているのではなく、時空間的なサイオンのマトリックスを凌駕し、その機能を理解できることを理解する能力を持っている。彼らはまた、いかにしてマトリックスをリバース・エンジニアリングし、つなぎ目から引き離すか、サイオンの鎧の隙間を発見し、その最も脆弱な部分を攻撃するかという戦略的観点で考える創造的能力も持っている。

ユダヤ人はこのことをよく理解しており、だからこそ彼は歴史的に、「異端者」や「罪人」とみなされた人々や、自分が発明したユダヤ教・キリスト教のイデオロギーと対立する宗派の人々を魔女焼きや大量殺戮によって、精神的指導者や貴族の階級を衰退させることに最も熱心なのである。

貴族に対する彼の研究は、彼らの子孫に課すギャングストーキングや標的を絞ったテロキャンペーンにおいても続けられている。彼は不吉な技術（無線周波数識別インプラント；ターゲットの周波数を収集する）を使って彼らの意識をマッピングし、人生を底辺、つまり人間離れした存在レベルから見ている自分には決して理解できないものをリバースエンジニアリングすることを望んでいる。

それにもかかわらず、敵を滅ぼそうとし、地球を支配する最大の脅威の意識を操作するために、トラウマに基づくマインド・コントロールを課そうとするのは、敵に対する誇大妄想と狂信的な憎悪に縛られ、それに突き動かされている彼の思い上がりである。こうして彼は、非合理的な憎悪と超合理的な戦略のために、アーリア人種の貴族と精神的指導者たち、そして彼らの子孫を、自分の専制主義に対する防波堤であるとして、何よりもまず排除する。

メディアやその代わりの形態とされるもので、専制政治への抵抗のように描かれているが、支配された反対勢力にすぎないという心理作戦は、最高のアーリア人を標的にするというこの現実を逆転させるように設計されている。このユダヤ人は、非アーリア人、女性（そのほとんどはキリスト教徒）、そしてもちろん自分自身という典型的なラインナップを、不吉な「ネオナチ悪魔的」陰謀団の主な標的として、「被害者意識」の指導者であり主な焦点として描いている。

要するに、自分が憎んでいるものすべてをすべての敵として神話を作り上げ、その本質を歪

曲して、自分の墮落した心の投影にすぎない怪物のようなでっち上げをするのだ。健全な精神と高次の意識を持つ者であれば、キリスト教の労働の果実はシオンの毒樹の果実であり、「迫害された犠牲者」ではなく、むしろ彼らが「悪魔的」あるいは「異端的」であるとみなすもの、言い換えれば善であり、真であり、美であるアーリア人の魔女ハンターであり、焼却者であることを推論できるのに、彼はキリスト教徒を「殉教者」として紹介している。

おそらく、ユダヤ人が非アリヤン・シャボーのゴイムも標的にしているのは事実だろう。ユダヤ人の悪意はとどまるところを知らない。彼は自分の子孫さえも標的にし、生まれながらにしてトラウマに基づくマインド・コントロールの対象とする。

ターゲットやカモのエゴを煽るような現実を作り出し、彼らを犠牲者や殉教者だと思わせることで、「ユダヤ人のイエス」という彼のメシアのエゴに引き込むのだ。彼らは、吸血鬼化され、さらにトラウマを植えつけられることを許すことと引き換えに、幻想の国の宝を約束される。

それにもかかわらず、彼が標的にするのは、特にアーリア人の貴族とその子孫に具現化された司祭カーストである。加害者としての自分自身から注意をそらし、アーリア人を自分の手下（キリスト教徒や非アーリア人）に都合のいいスケープゴートとして差し出すことで、彼は憎むべき上位者であるアーリア人の被害者とされるだけでなく、ユダヤ人が憎むアーリア人を非難することで、『低俗な権力の誇示』として自尊心をさらに膨らませ、特別で重要な存在であると感じることができるのである。

地中に潜む意識を持つユダヤ人は、人生というチェス盤の上で自分の駒をどのように扱うかを理解し、彼らの有限で欠陥のある意識を理解し、彼らがアーリア人に対する武器としてどのように配備されるかを理解している。しかし、アーリア人の意識が彼の限られた体質を超越したものであることを理解することはできない。

捕食者のワシを今日のカボンにしたのは、ユダヤ人によってアーリア人の意識にキリスト教のプログラムが組み込まれたからだ。死の伝道者の「美德」である「死に至る病」である受動性という避けられない結末を避けるためには、ユダヤ人によって古代ローマにウィルスとして蔓延した弱さの信条から心を浄化する必要がある。

このような信条に固執することは必然的な結果であり、それはレバントのシャンダル系未開人がローマ貴族に対するマインドウィルスとして作り上げ、無知と迷信の暗黒時代をもたらしたセム系精神異常への固執である。

この高貴な者たち、つまりアリアンたちは、ダークサイドの十字線を避け、敵の影響と自分自身の誤りやすい性質によって陥った墮落した状態を正す手段として、健全な意識を取り戻さなければならない。そこから思考を正すことで、敵や、世界の光を消すという敵の殺人計画に打ち勝つことができ、その光を地上にもたらし、暗闇を照らすことができる。十字線を自分自身から敵に向けるのだ。

オリジナルの「罪」

ハイパーボレアのアーリア人が犯した原罪は、最初の領地を失った混血、つまり「悪い交配」であり、類人猿の獣人との混血であった。ヨルグ・ランス・フォン・ライベンフェルスは、その著作『動物学』の中で、考古学的な記録（石碑やレリーフなど）や文字資料の両方に照らしてこのことを論じている。そこには、このような行為が非難されていること、このような類人猿の存在、そして彼らがアーリア人と自発的に混血したことが明らかにされている。

当時と同じように、今日も私たちは、先祖の神殿を俗物の汚染で汚し、純潔をシミのように汚すアーリア人の女性たちが、こうした活動に絶えず参加しているのを目撃している。このような罪は、アーリア人の第一の地位を墮落した雑種化の状態まで低下させ、それに伴って、彼の本性に眠っていて、松果体と脳下垂体にその肉体的集合体が今も残っている能力を喪失させている。

スピリットと肉体の闘争は、内なる緊張として繰り広げられ、内なる存在の調和のとれた均衡を崩す混乱を生み出す。

こうして、最初のハイパーボレア神殿の廃墟である現代の男たちは、この「原罪」によって自分たちが分断され、存在論的に分断されていることに気づく。イヴ（女性）やアダム（過剰な衝動、野性的な衝動を抑えられなかった男性）を責めるのは無意味だ。

いや、それは非難の問題ではなく、むしろアーリア人の残党に課せられた問題の解決なのだ。彼らはハイパーボレアに戻る道を見つけ、適切なライフスタイルを通して罪を償い、アーリア人という生殖細胞において自分たちが何者であるかという適切な条件を作り出し、その結果、この言葉の唯一理解できる意味において贖罪を見出さなければならない。

そのためには禁欲的な生活を送り、高次の意識（真の意味での霊性、超理性的な直観と創造的な思考）を養い、不滅の金剛の身体（ダイヤモンド・サンダーボルト・ボディ）を獲得するために煉丹術によってそれを発展させ、行使する必要がある。

具体的には、退廃的な傾向や非人間的な影響に対抗できる戦士の精神を養い、大衆から自らを隔離することを意味する。可能であれば、適切なパートナーを意図的に選ぶこと。

伝統的な、ノーマン・ロックウェルのようなファミリアのドムスは、オリンポスの高みから眺めたときにのみ意味を持つ。

混血の原罪がアーリア人を泥沼に沈めたとはいえ、彼はまだ泥沼に沈んだわけではない。

戦闘は必要、無知は死である

この世の教訓を学ばず、「来世」や「天国」という楽しい空想に逃避しようとする者は、単に自殺の求刑をしているにすぎない。この世の生は、その自然な必然性（その存在の条件の達成や維持）によって自分の生に反対しようとするものとの戦いや対抗を伴うからである。生は死を伴い、競争者は生きている限り、集団の中でも集団の間でも、力を求めて互いに争うことになる。このようなことは、この世で生きるための法則であり、これを無視する者は、地上での短い滞在（ホプズの言葉を借りれば、「厄介で、残忍で、短い」）を保証されるだけである。

この残酷な戦いを無視することは、自分の破滅を促し、死をもたらすことである。自分の存在に敵対する力が、より強い力がより弱い力を打ち負かす対決を必要とするからである。戦争道具を脇に置くことは、自分の存在の弱い部分が標的としてさらされることを許すことである。

この世界観は、"世界"は単に"悪魔の領域"や"涙のベール"に過ぎず、人はただ、擬人化された神への改宗を求める放浪の巡礼者として通過しなければならないというもので、必然的な結末として墓穴を掘ることになる。歴史のこの時点では、選択肢の間に明確な分かれ目がある。それは絶対的な分断であり、人はこの世での生を選ぶか、自分を滅ぼそうとするものに対抗して、戦闘を通じて生を選ぶか、あるいは平和主義を通じて死を選ぶかのどちらかである。

しかしこれは、純粋に物理的な、あるいは物質的な生命を意味しているのではなく、あらゆる次元の存在において、分化した形で顕在化する生命を意味しているのである。つまり、「それ」は、存在（の総体）の中にある確定的な（そして自己決定する）存在、自走する車輪、その存在の核にある原動力が「神の火花」とも呼べるエンテレケイアとして存在しているのである。

吸血鬼のエリートたちが自分たちの中に吸収しようとするのは、彼らの存在の輝きであり、彼らがその吸収を求めるメカニズムは、サイコプスやイデオロギーのマインド・ウィルス

の創造であり、彼らの見込みのある獲物を弱くし、彼らのだまされやすい操作によって簡単に

コントロールできるようにするために、意識を操作し、影響を与えるそれらの思考形態（エゴール）である。

もちろん、彼らの知識は彼ら自身の限られた意識に限られているため、彼らの有限な状態を超越したものを完全に理解することはできない。それゆえ彼らは、アーリア人の超越的な本性という壁に突き当たる、自らの有限性という脆弱性を抱えているのだ。

キリスト教やリベラリズムのような自己破壊的な精神プログラムを作り出したのはこのためであり、それはアーリア人が本来持っている力への生命的な意志をなだめ、潜在的な反対勢力に遭遇する前に服従させるためのものである。

吸血鬼のエリートたちは、地下の闇の領域で彼らが書き記す作偽的なテキストを通して、神の火種を葬り去り、消し去ろうとするだろう。しかし、その神聖な火花を消すことはできず、吸血鬼たちが書き記した偽りのドグマの墓を燃え上がらせるだろう。

ゴースト・イン・ザ・マシンの誤謬

平等カルト（キリスト教、リベラルなど）の平等主義の嘘は、ここでは「機械の中の幽霊の誤謬」と呼ぶことにする擬似精神性にに基づいている（これは、ダーウィニズムや科学主義／科学イデオロギーなど、純粋に唯物論的でない平等主義の種類に関係する。）

この誤謬は、ゴースト（魂）が異なる性質や種類の機械に宿っても「同じもの」であると主張するもので、ゴーストはa)異なる機械に宿っても(どのように?)同じであり、それらの機械(身体)はその本質においてゴーストに影響を与えないので、ゴーストは「同じもの」、すなわち平等であり続けると主張する。

一般的な言い方に訳すと、これは、すべての二足歩行の存在（いわゆる「人間」）の魂は、他の肉体に移植することができ、あるいは（表裏一体あるいは表在的に）結びついている肉体の種類とは必要な関係を持たないということであり、b) ゴーストは機械に関係なく一元的な構造のままであり、機械の影響を受けず、したがってこれらのイデオロギー的定式によれば「本性」であるということである。

幽霊（つまり魂）の存在を「重要な唯一のもの」と仮定するもので、肉体は単なる「殻」であり、この涙のベールに包まれた世俗的な転生の退屈で実用的な仕事に必要なでなくなったら廃棄される機械であり、どんな次元へでも、あるいは「神のもとへ」でも、その行き先が何であろうと言われているものへと転生する。

この誤謬は、この言説の体制に従うことを正当化する「より高い次元」や存在の次元を確立しようとすることで、平等主義の言説を「正当化」という平等カルトの目的に役立つ）、身体／機械の本質性を卑下し、身体／機械が類型論的な根拠、すなわち人種という観点から、二足歩行の存在のさまざまな類型を決定するものであるという価値を否定する。

これは普遍主義者の誤謬である。すべてのものは、存在の俗悪な次元では外見が異なっている、それにもかかわらず、「より高い」次元では同じ（同一なのか？ もしそうならどうなのか？ より高い」次元では、かつての物理的な平面はせいぜい従属的な価値しかなく、現時点では「精神性」、より高い目的や目標、つまり従来「平和」、「愛」、「統一」、「人間性」、「神」と呼ばれているものの名において、自分自身に関係する「罪」と解釈されている。

このような世界観は、精神分裂的な性質を持つ近東洋人の精神に由来し、精神的な次元と物質的な次元（ユリウス・エヴォラがその『人種教育の要素』や『人種教義の統合』で構想した肉体、魂、精神の人種）の間で内的な対立や不調和を抱え、内的分裂状態に陥っている。

近東人、特にユダヤ人は雑種化した反人種であり、統合失調症遺伝子（DNST-3）を持っている。この遺伝子は、自分のアイデンティティのボディ・ソウルとスピリットの側面の不適合の結果である内なる混沌の物理的平面における外側の象徴である。このため、存在（現実／神）に対する適切な態度はなく、むしろ逸脱した誤解と相関的な行動によって、自分自身のイメージで神々を創造し、マニ教のマニが主張するように、単なる「物質」と「悪」として「世界」の現実性を否定する。それゆえ、彼自身の内なる逸脱と、彼自身に内在する不安定さと弱さゆえに世界に直面できないことの結果として、このことは、機械には価値も意味もない（すなわち、人種は存在しないか、劣った価値であるか、さらに言えば、人種は「克服」されるべきものであり、人種や別個のタイプの生物学的集団が存在しないような雑種化を経由するものである）と考えるように非ユダヤ人を欺こうとすることを通して、ユダヤ人が自分自身を安全なものにし、自己保護しようとするにつながる。これが、ユダヤ陰謀団とその汎神論的關係者のテロス、あるいは最終目標であり、彼らは万物を「一つ」／「神」の一部と考え、したがって、特に彼らの「機械」、すなわち遺伝学、肉体によって、潜在的にでも彼らの権力を脅かす者たちのアイデンティティを否定しようとする）。

存在と存在の現実とは、むしろ逆の立場にある。つまり、差異、分離、完全性、そして、その種類（「人間」と呼ばれる二足歩行の存在のライバル集団、病気、飢饉など）を破壊し侵食しようとする対抗勢力に打ち勝ち、自らを永続させようとする問題の存在の進歩である。

機械（身体）は、ある種の遺伝的・物質的構造（アリストテレスでいうところの「ハイドロ・モルフィック」な物質／形態）を持っており、その構造は、後者が転生した後の魂の構造と結びついている。魂は、「石が鉄を引き寄せるように、類は類を引き寄せる」という引力の法則に基づき、2つのタイプのいわゆる人間の組み合わせによって、特定の物質的な形成に引き寄せられる。その特定のタイプの身体は、魂が内在する単なる機械や機構ではなく、むしろ、魂の転生プロセスを経て結晶化する低密度の形態であり、物質的な形態は、単に魂

の生気に満ちた低密度の形態であり、かつ／または、両者が一体であり、異なる周波数で振動する同じものにすぎないように、それと表裏一体となっている。

なぜなら、彼らの物質的祖先は、彼ら自身("ユダヤ人")が転生した断片化され歪んだ魂が、現実を正しく認識できるような調和の取れたアンサンブル(肉体と魂と精神の複合体)を創造することができないほど、大きく乖離した性質を持っているからである。

このように、この存在集団（ユダヤ人）の意識の発露として、歪んだ一連の概念体系やイデオロギーが現れ、それは「物質」と「精神」を拮抗的な関係で分離しようとするもので、彼らの概念体系では「唯一者から唯一者へ」という神秘的な飛翔が可能となり、すべては唯一者（「神」／「存在」）から発しているという概念に由来する倫理的な命令に基づいている。

平和主義的・平等主義的な神学的神官カーストの倫理体系に従うならば、そして従うならばこそ、すべての人は「唯一なるもの」のもとに戻るものであり、平民の信徒は神官カースト（「唯一なるもの」または神官カーストのみが交わる高次の存在に由来すると主張する）の命令に従って行動することを余儀なくされ、後者にとっては、単に排他的で隠蔽された倫理体系である：いわゆる「グノーシス」と呼ばれるイニシエーションは、血の誓いと、人間の問題や「選ばれた」種族である羊飼いの王たちの問題を支配する「唯一神」や神々の指導や承認のもとでの表向きの無法な自己決定に基づいている。

このように、機械の中の幽霊の誤謬は、「選ばれし人種」（ユダヤ人）以外の人々にのみ適用され、彼らの神々との関係を弱め、「人間の堕落」を促進する異民族の神々との混血を奨励することによって、反対派を妨害し、弱体化させるための政治的・内面的権力兵器として設計されている。このように、平等カルトは非ユダヤ人、特により強く、より知的で霊的に発達したアーリア人種を誘惑するイデオロギーを考案し、それを求めているのである。

ユダヤ人の汎神論的自然主義は、本質的に普遍主義的でありながら偽善的である。常にユダヤ人は、そこから派生した機械の中の幽霊の誤謬に基づいて、自分自身を精神的な優越者と見なしているからだ。

彼らの精神分裂病的論理によれば、彼らは「反人種」でありながら、同時に「一つ」と一体であり、他のすべての人々は「神」／「一つ」／「存在」（ユダヤ人のバージョン）に「再形成」され同調するために、自分たちのアイデンティティを破壊することを余儀なくされる。こうして、機械の中の幽霊の誤謬を暴くことは、欺瞞に満ちたユダヤ人を隠すベールを取り除くことなのだ。

ベラシスト対平和主義者

すなわち、ベラシスト、つまり、自分にとって他者であるもの に対抗し、可能であれば征服し、必要であればその試みのために死のうとする自然な傾向の持ち主と、平和主義者、つまり、自分の存在の基本的傾向、*生存様式*として、自分にとって「他者」であるものの前に身を伏せ、屈服し、他者の他者性の押しつけが自分自身の存在を縮小し、あるいは否定するのを許す人である。

最も巧みなベラシストとは、平和主義者の役割を演じる人たちである。つまり、友好的という見せかけの裏に攻撃性を隠し、この狡猾な戦略によって相手を打ち負かそうとする人たちである。

このような好戦的な態度は、コソ泥、ユダヤ人、シャンダルのものであり、必然的に芸術的ではあるが、決して名誉あるものではない。

しかし、平和主義者、つまり「他者」に自然にひれ伏し従属する者は、名誉も悪知恵もない。

ベラシストは、前述したように名誉を重んじる傾向にある場合もあれば、不名誉を重んじる傾向にある場合もある。名誉を重んじる場合、ベラシストは堂々と対戦相手と向き合い、強さと強さを競い合う。争いの両当事者が共通の戦闘基準を守るならば、その結果はそれぞれの当事者の長所を試し、証明することになる。両当事者は、その意思の程度にかかわらず、多くの人が「神」と呼ぶものとの関係において、存在のヒエラルキーにおける適切なランクを示すことになる。

もちろん、これは集団内の対立の場合に限られる。つまり、下位集団の個々人が、自分たちが属するより大きな集団を維持する必要性を認識する場合である。たとえば、中世のイタリアの諸公国間の戦争や、ドイツと30年戦争のようなケースである（その動機が根拠のない人為的なものであったとしても）。

このような場合、アーリア人の両集団は互いに覇権を争い、"*jus bellum*"（正義の戦争）を構成する。それぞれのベラシストは比較的互角であり、彼らの有限な理解の範囲内で "*just*"（正義）とされる目的-富と領土を他から獲得することによって自分の集団を増大させること、あるいは神の目的と心から信じられている目的のために-を果たすことになる。

したがって、このような戦闘は、より大きな全体的な神の意志と、自分が属するタイプの強化と、自分にとって「他者」であるものの服従に資する生き方や行動の様式という意味で、「アーリア的」と見なされるかもしれない。

不名誉な手段に頼り、不名誉な目的を果たす戦闘は、不名誉なものであり、「ユス・ベラム」すなわち正義の戦争ではないと言える。自分にとって何の脅威にもならない平和的な他者に対して、必要な目的もなく、単に他者を支配するための攻撃的なジェスチャーとして行われるもので、その勝利が、*suum quique*（「各人各様」）の原則に基づく全体との調和のとれた関係において、自分の集団の全体的な調和のとれた利益につながらないものは、不名誉なものである。

もちろん、現実主義者からは、「恋も戦争もすべて公平である」と反論されるかもしれないし、実際、戦争は単に「別の手段で行われる政治」であり、普遍主義的な意味での「道徳」とは関係なく、それぞれとすべてのものに対する因果関係の結びつきに従って、自分の旗を広げるという問題にすぎない。

おそらくこれが、*suum quique*の真の意味なのだろう。つまり、欲しいものを手に入れる力があれば、そうするだろうし、それは必然的に自分にとって「他者」であるものに対抗することになる。

このようなヤクロは、凶悪犯や野蛮人の行動である……しかし、今日採用されている意味で人間は、キリスト教的狂気とその亜種（自由主義、ニューエイジ主義など）の甘ったるい毒によって病気になった「病気の動物」にすぎず、さらにすべての生命は「力への意志」であり、生命体は「他者」（実際には、同類を除いたすべての「他者」）に対する自己主張で力を発散するために存在しているにすぎないのではないだろうか？

おそらく、この「力が正義を作る」という鉄則は、自分自身の有機体（人種の魂）の範囲内では正しく、人種の魂（「人種ナショナリズム」という意味でのナショナリズム）の範囲内での集団的アイデンティティに無頓着な、個人主義に基づく「万人の万人に対する戦争」と解釈され、単に誤解されているだけなのだろう。

フリーメーソンの「ヒューマニタス」の集団的普遍主義と、（人種、信条、「肌の色」などに関係なく）個人の普遍主義との間の誤った二分法は、自由主義的な所有的个人主義も集団主義（人工的で無機質なものであれ）も個人主義に基づくものであり、それ自身が事実に基づかない単なる抽象的な「ヒューマニスティック」イデオロギーであるため、ワネネスの全体性へと崩壊する。

すなわち、平和主義とその結末である確実な死か奴隷か、あるいはベラシズムとその結末である勝利かヴァルハラか。彼ら自身の本質的な弱さと、自分自身にとって他者であるものの、すなわちデミウルジの対抗力に抵抗する能力のなさが、彼らの致命的な欠点なのだ。

ベラシストは、「アーリア人」と呼べる唯一の存在である。彼は、「他者」と対立する自分自身を通して、調和的に、あるいは非調和的に（おそらく、正真正銘に、あるいは非正真正銘にと言った方がよいだろう）自分自身を決定する：自分の集団、人種の魂、そしてその具体的な特殊形態（物理的な人種の個々の単位）に反対するものには、自分の命を犠牲にしても反対する。ユダヤ人や黒人やクジラを救うなど）。

近代は、数千年にわたる黒人やモンゴル人との混血によって、健全なアーリア人の血統を劣化させた産物であり、人種に対する観念を持たない退化したタイプを育成するものであり、「人種の人」、調和のとれた魂の形を持つアーリア人（高貴な人）ではない。むしろ彼は、「反人種」（反アーリア人、無気力な逸脱者）の生き方を通して排便する神の意志の表現と

しての、自分自身の大いなる善と真の自己に反して、同族の生存、拡大、進歩に逆らうような、不調和で倒錯した生き方をする、そのような程度まで心が否定され、ユダヤ化された機械の単なる「個人」の歯車なのである：ユリウス・エヴォラがその『人種教義の総合』で概説した用語で言えば、本性は純粋にテルルのディオニュソス的である）。

周辺から中心へ

陰謀団の手口は単純で、アーリア人をターゲットにしている。アーリア人は、自分たちの上位者に対する嫉妬の憎しみから、アーリア人の魂を食物にする吸血鬼のようなアストラルの寄生物である彼らを支配する闇の支配者によって、何千年にもわたって策定されてきたジオン政府の無機質（無名のネオアリストクラシー）として取り壊され、取って代わられることを望んでいる。

それは、ユダヤ人が（主に貿易商を装って）アーリア人の社会にこっそりと侵入した後、弁証法的に互いに対立させることができる人口の特定のセグメントに訴えかけることによって機能する：金持ち対貧乏人、女性対男性など。

このことは、権力や影響力の程度に差のある要素を認める国家の一般的な分化した性質に当てはまる。ユダヤ人は、これらの集団を敵対勢力として利用しようとし、比較的力の弱い者とその絶望を利用し、比較的力の強い者を煽り、後者が力の弱い者を搾取するように仕向けることで、相互の反目と侮蔑を煽り、異なる集団の間にくさびの細い部分を打ち込み、緊張を悪化させることで、社会にますます大きな混乱を生じさせ、この分断によって崩壊に向かうとする。

歴史的に見て、異なるカーストを互いに対立させることは、ユダヤ人にとって火中の栗を拾う猫の足のような役割を果たしてきた。しかし、歴史を通じて、そして特に現代において、よりエリートで強力なカーストが自分たちの人々から疎外されると〔ユダヤ人たちがプロパガンダを通じて革命の火を煽り、現代の（誤った）情報機関を通じて精神的な影響力を行使することによって〕、追放された人々、チャンダラ、周縁の人々が増え続け、十分な数が生まれると、彼らはかつて統合されていた社会／国家（それが正しくそう呼ばれる「有機体」であったとき）を引き裂くための多くのくさびとして利用されるのである。

分裂した宗派の間に分断が生まれることで、国家の中心である規範はますます脆弱になり、それに比例して弱体化する。ユダヤ人たちはそれに応じて、社会の屋台骨である中心部、つまり中産階級に対して、周辺部（犯罪者、のけ者、変わり者、準犯罪者、変質者）を利用し、それを壊し、ひいては国家そのものを壊そうとする。

周辺が大きければ大きいほど、異常が正常になり、革命の混乱の中で国家が妨害されるのが早くなる。この周 辺 空間は、すべてを自らの中に吸収しようとする暗黒エネルギー物質の渦として機能する。

渦の存在がもたらす究極の結末や運命は、国家の破壊である。富裕層であろうと貧困層であろうと、渦の範囲に取り込まれた人々は、黒魔術によって彼らを破壊の手先に変えるユダヤ人に従属させられる。

これらの細胞は増殖し、毒を発散し、やがて国家が癌に侵される終末に至る。この問題を解決するには、ユダヤ人を排除し（原因を排除し、結果を排除する）、*suum quique*（「各人各様」-心・身体・精神の資質に基づいて、国家におけるそれぞれの適切な居場所）の格言に従って、全体の統合をもたらすような、より秩序ある社会の基準を確実に確立することである。

周縁部とは、中心部にとって危険な存在であり、中心部に居場所がないために不協和音を発して不調和を引き起こす存在ではなく、国家の不可欠な一員を構成する存在なのである。

これは歴史的にアーリア民族にとって常に脅威となってきた。中央にとって「他者」である要素は、その逸脱の徳によって混沌の担い手、あるいは体現者であり、引き金が引かれると爆発して中央に害を及ぼす弾薬のように、不合理な傾向の正真正銘の火薬庫なのである。

しかし、この要素、すなわち逸脱した、おそらくは汚れた天才の要素は、逆説的に、結晶化した中心に対して革命の導火線に火をつける火種となる。

周縁（「他者」であるもの）に対して中心を強化することは、上向きの活力化という結果を達成するのに役立つ。アリストテレスの言葉を借りれば、それはエンテレケイア（「物質の潜在的な形態や機能の現実化」）である。

まさにこの理由から、ユダヤ人は国家の中心（心臓）を攻撃し、彼自身が中心となるようにするのだ。彼の狙いを阻止することが目的なのだ。そのような立場にない者にとっては、混沌の渦に巻き込まれないようにすること、そして周辺要素との対決の中で自分自身に挑戦し、内なる強さを身につけることしかできない。

所有しようとすれば所有される

托鉢の信条は、最下層カーストである「商人」（ヴァイシャ）や農奴（スードラ）の信条であり、所有的個人主義の信条である。

第三身分（ブルジョアジー）の場合、信条は、経済性の道具、道具としての理性の能力の使用を中心に方向づけられる。すなわち、所有への意志、（職業を通じて）自分の労働の成果、あるいは（株式ブローカーや不動産投資家のような高利貸しの職業を通じて）他人の労働の成果を、個人として、原子論的な経済単位、生産者兼消費者としての機械として、獲得し、自分にもたすための権力への意志への意志への意志。

意志は、いわば商業的な軌跡に自らを投じる。虹の果ての黄金の壺は、力への意志の導管として機能する原動力である。理性は、「理解される」あるいは「所有される」という構造をもつ対象として自己が自らを適合させる対象（ヘーゲルの『権利の哲学』の場合のように、「概念」あるいは概念（ドイツ語の語源的には「grasping」／「begriff」 - 「把握する」、「構想する」、「概念化する」に関連している）の概念の増幅として、自己と対象との間の媒介者として高められる。

こうして、知識の対象は商品となり、理性はその獲得のための労働様式となる。専門職の理性的な人間は、企業家あるいは資本家であり、彼にとって知識は資本であり、より質が高く、より広範であればあるほど、システムの文脈の中でより裕福になり、その結果、より価値が高く、より強力になる（will zur macht-権力への意志）。

したがって、ある知識セットを授けられるということは、その存在論的構造がどの程度であれ（質の量とは程度である）、「力」であり、「力」の受け皿であるという資格を与えられることなのである（資格を与えられるということは、自らを指定することなのである）。

こうして第三身分は自らを定義し、すべての生物に内在する自然な傾向によって、その構成員は所有的個人主義的志向に基づき、自分たちの権力を独占しようとする手段として、オムニア対オムネスの戦いで互いに争う。

地獄に向かい、精神から遠ざかる物質主義的な軌跡をたどるという点で、第4の地位は救済

可能な資質からさらに遠ざかっている。彼らは、パンのためだけでなく、パンとサーカスのためだけに生きている。理性の能力は彼らの中で弱く、あるいはおそらく全くない。彼らは、情緒と、非合理主義というその一過性の性質と、その管理能力が十分に発達していないことによる人格の分断と統制された意志の欠如という必然的な傾向によって、さらに大きく突き動かされている。

このカーストは、富裕層に対する嫉妬と、「骨の髄まで働く」ことによって自分の中にある高次の状態や存在を知覚したり、それを獲得したりする能力を損なう労働の残忍な影響から、富裕層から略奪しようとする。

どちらのカーストも地獄を志向し、自分の地位（階級）を維持するために競争しなければならない義務や、少なくとも誠実に自分の地位を保証する固定した原則がないために、継続的な所有の保証がない物質的所有に過度に集中している。ブルジョア・カーストは、富と権力が集中し、機会均等を口実に独占（寡占）される、より高いレベルの偽善的な貴族を構成し、その事実上の無価値な貴族や「カコクラシー」（ギリシャ語で「悪い」を意味する「カコス」に由来する）に他者が参加することを許している；アリストス」とは、サンスクリット語で「高貴」を意味するアーリア人の接頭辞「アー」に由来する美德を意味し、より高次の精神的存在であるアーリア人の高貴な人間を意味する）。

ブルジョア・カーストの偽善そのものが、その存在の基本原則である自由、友愛、平等を損ない、その没落を可能にしている。こうしてブルジョア・カーストは、手っ取り早く儲けることだけを考える強欲な建築家たちによって流砂の上に築かれた黄金の城塞となった。）

「所有しようとすれば所有される」。所有欲の強い個人主義者は）自分の意識を物質的なものに過集中させるからである（観念の市場における商品という知識の対象でさえも、それ自体の価値は空虚な普遍的価値形態であり、その価値は市場とそれを支配する者たち、すなわち経済（政治的、金融的、社会的、性欲的）を通じて彼らのゴイム操り人形の金色のワイヤーを引っ張る偽善的ヒエラルキーに基づくものである。

彼らは、豚のように自分の真理を追い求めながら、意識が泥沼に根を下ろした地縛霊となる。自分の意識を、その内的な形から、知識の対象や物質的／美的商品（意識の対象／知覚）に向かって外向きに移すという行為は、そのような行為である。

意識とは、知識を持つ意図的な対象を「概念」-「ベグリフ」-として把握し、自分のものとし、自分の権力／知識セットを増大させるために自分の金庫に入れることである。）

意識を他者に移すという行為を通じて、他者性において他者に打ち勝つ力が不十分であると仮定した場合、自分の存在の完全性に害を及ぼす可能性のある、異質で有害な意識の内容に汚染されることになる。

しかし、これは自己の存在の必要条件であり、したがって、この原則から推測されることは、ヒトラーが言ったように、「すべての人生は闘争である」ということである。現象学的、

存在論的なレベルで、自己に対する「他者」の押しつけを克服し、自己の存在を通してそれを同化させ、変容させなければならない。後者であれば、自己が「他者」（自己が視線を固定する商品；把持する意志-「ベグリフ」、他者を概念化し、支配し、支配し、自己に取り込もうとする意志）に対してずっと方向づけることによって、自己を支配する存在によって所有され、執着されることを説明する外部の力に対して、自己の存在の核において開放されることになる。

このように、飼いならされた動物にとって、第三、第四身分の者たちの人生が吸血鬼の世界であり、オムニアとオムネスの戦いであり、「この永遠の闘争の世界で闘うことを拒む者は、生きるに値しない」（ヒトラー）のである。自然（神の意志）の本性は、このような「ポッサムプレイ」において、弱い方の力が道を譲ることを許さないからである。

したがって、人は自分の存在の継続に価値を見出すだけでなく、キリストからヒントを得て、「自分の持っているものをすべて売り払い、貧しい人々に与えなければならない」-偽善的に、*想像の中*ではあるが-のである。ここでの究極の原則は、意志をどこに集中させるかである-自己か他者か。

ギャングストーカーたちは皆、所有欲の強い個人主義者であり、その低次の自我意識は、ユダヤ人の出す餌へと彼らを導く。彼らのそれは「利潤動機」とでも呼ぶべきもので、黒魔術の一種として自分たちの中に取り込みたい外的価値の調達にまつわる拝金主義的志向である（ジェームズ・ジョージ・フレイザーの『*The Golden Bough*』参照）。

これらの餌はジオンの不換紙幣であり、銀行券だけでなく、むしろ、価値や地位の社会的記号としての価値を構成するものとして、システムの支配者たちによって確立されたあらゆる価値のトークンである。加害者たちが意識的に意図しているのは、主にこうした餌、つまり物質主義的な性質のものである。しかし、前述したような意識的／潜在意識的な意図とは、犯人が望むターゲットへの危害の訪問に伴うサディスティックなスリルであり、その意識的意図は常に「快楽の最大化と苦痛の最小化」に向けられ、これは最も粗野で粗雑な形である。

性欲に支配され、獣に対する意識的な抵抗で自分自身をその上に引き上げることができない者にとって、その乗り物は単に可能な唯一の行為である。

このように、ギャングストーカーの原動力は「力への意志」であり、爬虫類脳（ボン／髄質と脳幹）を鍛え上げ、刺激し、形而上学的にも物理的にも低次のエネルギーセンター（ムラダーラ・チャクラと生成器官と排泄器官）を活性化することとして表現される。

しかし、このような「訓練」は、ユダヤ人とその非物理的な主人たちが達成しようとしてい

る悪魔の憑依と相関しているため、「悪魔払い」として語るのが最善である。このため、ユダヤ人が奨励するすべての行為や規範は、性と死の結びつき（エロスとタナトス）を持つ爬虫類の脳の状態と、「私」の意識の過集中と究極的な結合を、その時空間点（ウロ生殖器領域と、ボン／髄質／脳幹の円弧複合体およびそれに関連する脳の快楽中枢）に向かわせるのである。

高次のエネルギーセンター（ヴィシュッダ、スヴァディスターナ、サハスラーラチャクラ以上）に向かって意志を強化し、向けることで、「崩壊の流れ」に抵抗することができず、低次の存在状態に注意を向けることで力を発揮する闇の力の絶え間ない引き寄せに対抗して、自分の存在の「中心」を保つことができない。

ユダヤ人がアーリア人に見せる（誘惑する）現象は、未発達の人、つまり統合された魂としての存在感が強い人、意志の行使による挑戦の欠如によって制御を欠く「個人」の低次の意識状態を向上させる、意味へと意識を移行させるメカニズムである。

宝石商は、これらの低いタイプの現象と関連するヌーメナとの相関関係を増幅させる。彼がコントロールするメディアは、現象とヌーメナとの相関関係を結びつけ、魂の裂け目や弱点を作り出す方向に導く。

その一例がヌードの使用法である。通常、完全に自然な、あるいは性的でない現象であるヌードが、ユダヤ人による誤った連想によって、意識を低次の意識状態へとシフトさせ、意識の焦点を低次のエネルギーセンターに向けさせ、解剖学の低次の部位を活性化させるようにデザインされた。

その意味は、特定の現象的／能動的な文脈の中で描かれる方法において「体系的」あるいは「文脈的」であり、完全に目に見える、耳に聞こえる、あるいは物理的な一般的なものではなく、関連性のない、あるいは半関連性のある要素だけのアンサンブルあるいは混合物である（広告ディスプレイの文脈の中で、女性の魅惑的な香水と洋服のプレゼンテーション、あるいは商品の消費者を誘惑するために、卑猥な言葉やフレーズを何度も繰り返す副音的なサブリミナル・メッセージ）；新聞に掲載された殺人事件の被害者の画像と、暗黙的で魔術的な意味さえ持つ定型的な単語や構文を、読者全員あるいはほとんどの読者が知らないうちに組み合わせること。E.M.F/E.L.Fトランスミッションのような高度なテクノロジーと連動して、特定のオカルト的祝日に魔術的儀式を行い、エーテル的变化を生じさせ、「現実の劇場」でのこの組織化された行為の体験者の意識を修正する。）

ギャングのストーカー行為に関与している陰謀団の手下やハンドラーたちは、これらの実体（アーコン、泥影、アスラなど、何と呼んでもいい）に憑依され、悪魔の宿主となっている

。彼らの意識、彼らの「心」は、かつてそうであったとしても、もはや彼ら自身のものではない。上層部は、世代を超えて憑依されている彼らの手下の多くと同様に、世代を超えたオカルト主義者なのだ（例えば、世代を超えた警察や軍の幹部、さらには役職者の場合など）。

したがって、彼らは自己所有（自分の存在の統合された側面としての魂の中心性）を、スリルや一時的な一過性の利益、「世俗的な」欲望の所有と交換したのである。これらの欲望は、単に彼らを「地獄」の淵に沈め、「第二の死」で消費されるために、そして生涯を通じて生体で消費されるために、アルコンに引きずり込まれたのである。

彼らは真の自己（魂＝スピリット）を捨て、偽りの自己（低次のエゴ的ペルソナ、「空洞の人」としての彼らの空虚さを隠す仮面）を求め、自らの不義によって自らを呪ったのだ。低次の意識状態を指向する性格の弱さによって、彼らはユダヤ人とその主人たちに魂を売ることとで地獄への切符を買ったのだ。

この運命から逃れることができるのは、四面楚歌の要塞が混沌の力の猛攻に耐えるように、自分自身を完全に中心に置き、揺るぎない自己所有力を身につけた者たちである。

このような敵に対する防御を越えて必要とされるのは、残忍な攻撃ではなく、むしろオリンポスからの攻撃であり、ユダヤ・メーソンの半神となるべき者たちに対する神々の聖戦である。陰謀団の十字線上に存在する標的とされた人物にとっては、応戦することだけが選択肢であり、これは、彼が平凡な平面で何をするにしても、陰謀団とそのクリーチャーによって単に窒息させられることを考えると、可能な唯一の効果的な方法である。

スピリチュアルな力を使うことで、警察国家による物理的な反発を避けることができるのだ。心の要塞から、アダマントのミサイルが目標に向かって疾走しなければならない。

敵

敵とは誰か、どのような行動を取るのか。

原罪-ユダヤの影響

混血の原罪は、（アーリア人の女性である）イヴの欲望によって純粋に生じたわけでも、（アーリア人の男性である）アダムの弱さによって純粋に生じたわけでもない。むしろ楽園に入り込み、イヴを墮落させたのは蛇であり、蛇はおそらく、自分の存在に必然的に反対するアダムを、不潔な金もうけの約束でなだめたのだろう（アダムが喜んで売り渡し、他の道を歩もうとしたのは、おそらくアダムに内在する理想主義の結果であり、プロジェクトを達成したり、必要な資本の所有を必要とする何らかの目的を達成したりしたいという欲望の結果であり、イヴはそのために必要な犠牲だったのだ）、ユダヤ人の斡旋業者が楽園であるエ

デンに連れてきた類人猿が、イヴに肉欲の歓びを与えるために高値で取引されることを許したのは、このことと、イヴの欲望を抑制する力を持たない夫の弱さである）。

こうして、アダムは誘惑者の象徴であるユダヤ人に責任を負わされ、さらにアダムは、フォン・リーベンフェルスが『オスターラ』の中で明らかにしているように、「人間の墮落」につながる純血を汚した蛇、ユダヤ人、そして彼の「商品」である人類型獣人の侵入を許したことで、彼の意志の弱さと倫理や原則のよろさを証明することになる： *金髪と男性主義者の雑誌*である。

ユダヤ人は常に、自然な傾向として悪徳の密売者であり、この悪徳を、利益のためだけでなく、より邪悪な目的のために利用する。肉の誘惑によってアーリア人の血を汚すことは、何千年にもわたってユダヤ人の常套手段であった。これは彼自身の墮落した状態に対する復讐であり、彼の視覚を害するものを引き裂き、より低い存在の状態へと貶める自然な傾向である。彼は自分自身のエゴに目がくらみ、自己中心主義を克服することができないからだ。自分自身をすべてであり、すべてであると見なそうとする彼は、より高みへと舞い上がることができ、そこから派生する意識、聖なるグラールやアーリア人以外の種族には存在しない神聖な輝きを持つ者がいると、嫉妬にうずくまる。アーリア人をその高みから引きずりおろすという本能的な憎悪と悪意が、ユダヤ人を突き動かしているのである。神々とその子孫（アーリア人）に対する存在論的攻撃であり、ユダヤ人はアーリア人の存在を破壊し、アーリア人にとって代わって地上の神となることを望むのである。

彼が天（コスモス、星々）から来たことがないということは、彼がそこに戻ることも、乳と蜜の天国を地上にもたらすこともできないことを意味している。

彼は肉と精神に反する原初の『罪』の体現者であり、それゆえ彼はあらゆる言動で罪を犯すのである。現代世界とその腐敗を観察するだけで、ユダヤ人の性質を推し量ることができる。その腐敗の源泉はユダヤ人の心であり、そこからシオンの地上の地獄である汚水が流れ出ている。

被害者のレトリック

弱くおとなしい者の自己防衛とは、被害者意識という美辞麗句で煙幕を張ることであり、彼らは自分たちより優れた者の権力から身を守る手段として、自分たちより優れた者の顔面に絶えず投げかける。

これは、混乱し、惑わされた超絶的な力を持つアーリア人が、物理的・精神的に弱い力を持つユダヤ人に催眠術と麻酔をかけられている間に支配される力のダイナミズムである。勝利は、知性、直観力、創造性という点では優れているかもしれないが、共感的な「他者」意識からなる「他者」、つまり比較的弱いユダヤ人とその群れである間抜けな野蛮人が、ア

ーリア人の文明に忍び込み、彼が創造しなかったものを奪うことを可能にする、大いなる者
の中途半端さを利用した欺瞞によって達成される。最近、ロシアのボルシェビキ革命で見ら
れたように、エリート支配者カーストが絶滅し、残党は奴隷となり、ユダヤ人がすべてを支
配するようになった。浸透させ、同化させ、扇動し、絶滅させる。

ユダヤ人の靴べらの犠牲者のレトリックは、アーリア人の黄金のスリッパに自分を挿入するために使われた。彼のレトリックは、アーリア人の脳を汚染し、彼の乗っ取りと完全支配のプロトコルから逃れることを可能にする麻酔性の毒と混ぜ合わされた甘い調合物である。このレトリックは、彼の狡猾な意識を言語化したものに過ぎない。この意識は集合意識であり、単なる「個人」に限定できるものではない。

ヒトラーが言ったように、「すべての生命は闘争である」のであり、自分自身と闘う拮抗勢力が存在しないことで闘争に失敗することは、破滅を招くことになる。

物理的な乗り物を破壊することは、高次のものを破壊しないまでも傷つけることであり、少なくとも同様の物理的な乗り物への転生を妨げ、高次の次元での存在を否定することである（言い換えれば、霊的にも物質的にも「大量虐殺」）。

ユダヤ人の敵対戦略は、欺くことによってその姿を現す。それは、自分自身の本質的な弱さを補うメカニズムとしての手口であり、被害者のレトリックは、その手口の特殊なインスタンスにすぎない。

ユダヤ人が自分の中で永続することを許すことは、自分を犠牲にしてユダヤ人の力を増大させることを許すことである。ユダヤ人や、ユダヤ人の模倣者、取り巻き（非リア人、墮落者等）が繰り出す犠牲者のレトリックに耳を傾けることは、自分たちの側で、自分たちより優れた人たちのエネルギー（金、権力、生体エネルギー）を吸血鬼化し、自分たちの権力を増大させる機会を開き、自分たちが無力になることを可能にする。

このためユダヤ人は、アーリア人の間をさまよい、彼らの富を吸収し、こっそりと彼らの国を滅ぼそうとする時代を旅する中で、巧みに修辞の技を磨いてきたのである。彼は「他者」を観察することに多くの技術を身につけ、アーリア人を「手玉に取る」方法、彼を評価する方法、宿敵の内面を操る方法などを試行錯誤してきた。これが彼が用いる地下戦略である。

彼の修辞的武器は、彼が生き残るために戦闘を与える他の形態のそれと、言語的な形で一致、あるいはきちんと対応している。経済的／財政的に、彼は見込み利得という曲者で宿敵を利用するために用いる利殖のシステムを開発する。

アーリア人の指導者あるいは非ユダヤ人の「他者」は、おだてられ、自発的に借金の肩代わりを引き受ける。そして、ユダヤ人が、非ユダヤ人の対立カーストの上位者を排除する手段として、彼自身が最初にもたらした革命的反動を実現させるまで、金の胴の上に座ったまま、同胞に負担を負わせるために徴兵される。

一旦ユダヤ人が高利貸し（貸付／貿易）を通じてアーリア人社会に入り込むと、彼はまたもやその入り口に足を踏み入れる仕組みとして、レトリックを操る芸術的な戦術を用いながら、異類婚姻を通じて国家の支配権を握る。一旦権力を握ると、彼は複雑な法体系の網の目を作り上げ、それを網の目として受け入れ側の住民を陥れ、彼らの血を自分の貪欲な口に流し込むのだ。

組織化された宗教は、彼の平凡な計画と歩調を合わせ、その実現のための主要な道具となる：上と同じように下と同じように」。しかし、彼が「上」として構築したものは、典型的には作り上げられた幻想の世界であり、アーリア人の霊性を純粋に歪曲したものである。彼は宗教を、シュテットルのプレッツェルやダイヤモンド市場のダイヤモンドのように売っている。非ユダヤ人大衆に提供されるもうひとつの商品は、過大に膨れ上がった価値を持つか、無価値な模造品にすぎない。

ダイヤモンドはその完璧な例である。ごくありふれた石でありながら、巧妙な広告によって、ターゲットとする層（すなわち非ユダヤ人）の心の中でその価値が増幅される。今日の宗教は、ユダヤ人が非ユダヤ人の奴隷カーストに売るダイヤモンドに過ぎない。ユダヤ人は非ユダヤ人の奴隷カーストを利用し、彼らの心に乗っ取って、自分の利益に奉仕させようと考えている。こうして、平等主義イデオロギー（すべての主流宗教も同様）にはびこる被害者のレトリックは、ユダヤ人の主な力の源として、また彼が侵略し、打倒しようとしてきたアーリア人の国々の力（生命）を削ぎ、最終的には消滅させる手段として役立ってきたのである。

ジム・キャリー、ユダヤの怖さ

カナダ生まれのユダヤ人、ジム・キャリーは、『エース・ベンチュラ』、『マスク』、『陰

謀の男』、『トゥルーマン・ショー』などの映画で有名になった俳優である：ペット探偵エース・ベンチュラ』、『マスク』、『陰謀の男』、『トゥルーマン・ショー』などの映画で有名になった俳優、ジム・キャリーは、いずれもユダヤ人の不吉な面、つまり真の面を露呈しており、どの映画もユダヤ人の方法論を明らかにする手段となっている。

以下は、これらの映画についての簡単な分析である。筆者はジム・キャリーという人物を、実在の人物、あるいは実在しうる人物と仮定して、あまりよく知らない。したがって、「悪魔的な」（つまりユダヤ的な）ハリウッドの映画カメラを通して濾過されたユダヤの極悪非道を、いわば「暗いガラス越しに」見ることしかできない。

ユダヤ人を見分けることの難しさ、そして、ユダヤ人が被っているペルソナの仮面の奥にいる実在の人物や存在を見分けることの難しさは、映画『仮面』において、悪魔に取り憑かれた仮面を発見した平凡な日常の「個人」の姿を描いている。

緑色のオシリス、そして錬金術のグノーシス（低次の自己から高次の自己、あるいは真の自己への変換）、超能力の獲得、時空を操る能力、かつての「人間の条件」の限界、すなわち「なりゆき」の領域、あるいは現象界における時空間的な限界を超越する能力を指しているのだろう。

おそらく、「仮面の男」が仮面を顔につけると肌になる緑色も、ヴィーナス、ステラ・マトゥティナ（モーニングスター）、そしてブラヴァツキーなどがこの領域に住むと主張する「ルシファーの精霊」を暗示しているのだろうか。ユダヤ人がかぶる仮面は、ユダヤ人がこの物質世界に適応するための手段であり、おそらくその全部または一部は、爬虫類型エイリアンや、彼に力を与え、地球に対する覇権を容易にする他のあらゆる存在と結びついたエイリアン的存在である（ここでも筆者は推定をあえてしている）。

ユダヤ人による「ゴイム」、つまり「異邦人」の権威に対する嘲笑は、キャリアが出演したすべての映画を通して容易に見て取れるが、『エース・ベンチュラ』では最も端的に感じられる：『ペット探偵』では、アメリカ文化（例：フットボールへの執着）や男性的ヒーローに対する嘲笑が描かれている（例：男性的ヒーローとされる人物の描写）。アメフトのスター選手など、男性的な典型とされる人物をアンドロジナスなニューハーフとして描くこと）；道化師のような「洗練された」キャリアの描写、キャリアを道化のような「洗練された」刑事として描くことは、禁酒法時代に「ギャングランド」と闘うという口実でユダヤ人が警察国家を構築していた時代に、ユダヤ系ハリウッドで以前からもはやされていた「ハードボイルド」刑事の典型を揶揄している（ユダヤ人俳優が演じる刑事は、典型的な異性愛者であるアーリア系アングロ人、ドイツ系、アイルランド系、つまりアメリカを生み出したハイパーボリアン系であり、純真な若者の心にマフィアの華やかさをさらに植え付ける手段として、ユダヤ系マフィアとの闘いを続けるための手段であった）、ユダヤ人のヒーローが「絵」の中で描かれるようになるように仕向けたのである）。

こうして現実、敵を中傷し破滅に追い込むユダヤ人の黒魔術の技法として反転し、同時に（フィクションの中ではそうだが、実際にはそうではない）アルファ男性支配者タイプのプレーヤーたちの中で「人生ゲーム」の「勝者」であるおっちょこちょいな「男性」、メトロ

セクシャルの原型を内面化するように後者を条件付ける。このような映画の影響は、アーリア系男子の若者を弱体化させ、それによってアーリア系社会を弱体化させ、「ハードボイルド」な指導者を、プロレスで有名な（悪名高い）マッチョマン、ランディ・サベージのような墮落したユダヤ系「マッチョマン」タイプに置き換えることである。

アーリア系男子の「ゴイム」は、映画『Dumb and Dumber（邦題：マヌケなゴイ）』の中で、ユダヤ人キャリーによってさらに揶揄されている。Qのオタクで下品な生き物であり、愚かな理想主義の世界に生き、女性の原型（青いドレスを着た赤毛の悪魔）を追い求め、宇宙的な愛とは対照的に純粋に俗俗的な欲望のために生命力の総和をこの「探求」に費やす（マトリックスの外で生き、宇宙的な意識を持つとは対照的に、獣の意識を持つ「ゴイ」としてマトリックスの中で生きる；高次の自己の代わりに低次の自己のために生きる）。

エリート・カーストの「エリート社会」に適應できないゴイは、キャリア演じる「ゴイ」の無能さを示すだけでなく、「間抜けなゴイ」を演じることによって、実際にはユダヤ人であるにもかかわらず、潜入したユダヤ人キャリアという人物の「W.A.S.P.エリート主義」をあざけり、否定するという二重の目的がある。こうして、「ゴイム」の「物質世界」を非難する「優れたユダヤ人」の原型が打ち出され、あらゆるカースト（低階級も高階級も）の「異邦人」の必然的敗北も打ち出される。

『ケーブル・ガイ』は、「ゴイム」のメディア化の結果と効果を示すユダヤ人の手法の啓示の手段であり、いかにして彼らが彼らのプログラムになるのか、彼らの意識は、ゆるやかに結びついた一連の映像、音、そして彼らの「心」のタペストリーとして織り成されたその他の現象的錯覚からなるものでしかないことを示す。

こうして、彼らの「心」は実際には、さまざまな形の感覚の単なるプログラムや合成物であり、彼らを幻想のマトリックスに閉じ込め、いかなる高次元の存在にも存在できないようにし、彼らの生体エネルギーを吸血鬼化するのに適した奴隷にするのである。これが、ユダヤの破壊の立役者たちによるバイオコンピューター・マインドのプログラミングである。

『トゥルーマンショー』は、ユダヤ人がその方法を暴露するもう一つの手段であり、『シオンの長老たち』のプロトコルで語られているように、標的を絞った個人／ギャングストーキングのプロトコルの形で、他人の問題に監視と介入を行う彼らのプロトコルに関連している。トゥルーマンショーに登場する絶望的な騙され者は、皮肉にもゴイムをあざ笑うかのように、「真の人間」として描かれている。もちろん、この映画の「異邦人への呪い」の側面は、その見かけの「善良さ」と、実際のギャングストーキングのプロトコルに含まれる悪意あるサディズムの欠如という事実によって明らかにされている。

もちろん、トゥルーマンは映画で描かれているような人物ではない。おそらく、24時間365日、いつでもどこでも、トラウマに基づくマインドコントロールが自分に課せられていることに薄々気づいている絶望的なカモである（映画では、監視とモニタリングは、実際には悪意ある極悪非道なものではなく、「良性」で利他的なものとして描かれている）。

トゥルーマンは、マトリックスとその魂への崩壊的影響を超越できる男であり、対象となる個人プログラムにおいて実行される『ツェルゼツング』である。キャリアはまたもや「アーリア人」を描き、彼にはおぼろげな自覚があり、騙されやすく愚かで、必然的に（ユダヤ人による手法の啓示として）、自分がマトリックスの中で生きていること、そして彼らの「良性」実験のカモであることを、ユダヤ人技術者たちによって明らかにされたように描いている、現実には、悪質な実験がユダヤ人によって実行されているのである。ユダヤ人は、自分たちがやめようとはせず、ターゲットに気づかせる苦痛を強化するために、自分たちが受けている苦痛に気づかせる手段として、この情報を「ゴイ」に明かすことができる程度にしか、自分たちが何をされているかを「ゴイ」に知られたくないのである。

より多くの痛みと苦しみを与えれば与えるほど、より多くのエネルギーが放出され、ユダヤ人とその悪魔的存在に吸血鬼化されるエネルギー源となる。

ユダヤ・ハリウッドは、「ゴイム」からの常習的な窃盗、虐待、拷問、殺人の罪を帳消しにしようとする手段として、「ゴイムが何をしようとしているのか、あるいは何をしようとしているのかを、それをする前にゴイムに知らせよう」とするために、このような手法の暴露を作り出すのだ。ジム・キャリーは、サタンの集合意識に支配され、地球上の手下たちを操って混沌を組織化し、彼らの魂のエネルギーを吸血鬼化するユダヤという巨大なイカの、もうひとつの触手なのだ。

羊の皮を被った狼たち

世界支配を目指すユダヤ人の計画は、欺瞞によって実現されている。もし彼らがあからさまに計画を実行していたら、もちろん失敗していただろう。彼らの数が比較的少なく、創造的な才能も意志の力もないことを考えれば、彼らが成功する唯一の手段は、今もそうであるように、羊の衣装を着て、次のことを試みることにあった：1) 相手をなだめる、和らげる。

羊の皮を被った狼は、そのため弱く見えながら、非ユダヤ人、特に文明の創造者であり維持者であるアーリア人の行動・心理を巧みに利用し、寄生虫としてその背中に乗って宿主から蛭のように吸い取る。彼は、アーリア人の行動に関する詳細な知識、つまり様々な時代や場所におけるアーリア人の反応に関する詳細な知識を得ており、それは、他者に関連する彼の法体系や、彼が用いる実践的な技法、標的とする宿主の高利貸しや転覆の試みにおいて、一見、体系化されているように見えるからである。

1) 現代における平和化は、ユダヤ人以外の他者の心の操作に依存している。N.L.P.や感情化などのテクニックを駆使して、他者の忠誠心を獲得するのである。ユダヤ人とその手先が共通の敵を作り出し、長期的には前者の利益と後者の不利益になるよう、最終的には相互に標的を定めるのである。

非ユダヤ人側の潜在的な攻撃性を、ユダヤ人が共通の敵に向けて操作することによって、非

ユダヤ人側の潜在的な攻撃性（潜在的なものであれ、実際のものであれ、ユダヤ人にとっては避けられないものである）を自分から取り除き、それをスケープゴートや敵である「他者」（今日の世界では、イスラム教徒、リベラル派、アーリア人種差別主義者／反ユダヤ主義者など、あらゆる人種）に対する武器として利用することができるのである。

恩着せがましい態度、謀略的な口調の使い方、ひとつは利益と優位性の約束によって、非ユダヤ人をユダヤ人の側に引き入れ、後者がアーリア人の力という財産を手に入れるだけでなく、自分自身に対して使われる可能性のある剣を、自分自身を守るために使う盾に変えることを可能にする。

それゆえ、ユダヤ人はアーリア社会のさまざまな部門、たとえば富裕層に訴えかけ、同族の貧困層には無関心で目を背けさせる。

貴族にとっては、彼はレピト神父の末裔であるか、少なくとも謙虚な貸主か商人であり、単に相互の利益を求めている。貧しい人々にとっては、彼は「正義」、「平和」、「平等」のために十字軍に入ろうとする革命の旗手であり、これらはすべて彼自身の至上主義的傾向の合言葉であり、彼の憎むべき敵である彼らに対して使用する彼の武器庫のもう一つの武器である：アーリア人とは、カリ・ユガにおける終末戦争「ラグナロク」において、彼（そして彼がその仕掛け人）と交戦してきた宇宙の敵である。

羊の皮を被った狼は、もはや身を隠す必要がないほどの権力を手に入れたと予想した時点で、初めてその衣装を捨てる。ポリシェヴィキ革命のような出来事が起こるのは、そのような時である。そのような時、それは狼の時代の縮図と呼ばれるかもしれず、大宇宙的な狼の時代の頂点にいる現在、ユダヤ人は、彼のマインドコントロールされた手下たち全員を戦線に並べ、互いに、そして彼らは知らないが、単純に「他者」、つまりユダヤ人が彼らの心に「敵」として植え付けたものを、彼らが問答無用で攻撃しなければならない対象として、戦う態勢を整えている。

非ユダヤ人の操り人形は、素朴に彼らのプログラミングとなり、ユダヤ人が彼の黒魔術のテクニックで彼らを催眠術にかけるのを許している。

そのために、彼らは魂の代価を支払う。その代価は、ユダヤ人と彼らが結びついている存在たちが、彼らの食物として吸血鬼化するものである。これはユダヤ人のプロトコルの実現である。地球全体を牢獄のような魂の農場として支配し、そこでゴイムは「実を結び、増えよ」と命じられ、ユダヤ人とその手下たちは彼らの魂を糧として手に入れることができる。

それゆえ、ユダヤ人は最後に真の狼狽ぶりを発揮し、羊のような外見は生来の獰猛さの爪牙によって引き裂かれる。

ユダヤ人のジレンマは、血（魂のエネルギー、血は生命である）に対する過剰な熱望と、羊の皮を早々に捨ててしまうことである。そしてアーリア人は、当初は羊として理解してい

たものが、実際には危険な敵であり、極端な偏見ではなく、バランスの取れた分別を持って
対処しなければならないことを認識するようになる。

バッジをつけた犯罪者

ユダヤ人占領政府のエージェントは、ユダヤ人が支配するメディアや教育システムの中で、より大きな社会に「安全と安心」を与え、社会の秩序、慣例的に法と秩序と呼ばれるものを維持することを目的とする英雄的人物として描かれている。この「秩序」とは、シオンのユダヤ人の世界秩序であり、異なる集団（鉱物、植物、動物、いわゆる「人間」）が有機的な自給自足の秩序を維持するために必要なものを与えられるという宇宙的法則という意味での普遍的、宇宙的なものでは決してなく、むしろ、ユダヤ人の富裕化と権限付与のために、これらの異なる存在（鉱物界から人間界まで）の人口を吸血鬼化することを可能にする秩序であり、これらの召使いがユダヤ人にとって有益である限りにおいてのものである。そうでない限り、彼らはそれほど豊かになることはなく、むしろその逆である。彼らの世俗的な財産のすべて、彼らの文化、そして彼らの肉体と魂さえも奪われ、破壊され、社会における役割が捕食であるユダヤ人の吸血鬼に吸血鬼的に吸収されるのである。

その秩序とは、ユダヤ人の覇権と権力強化（および権力の維持）であり、彼らの代理人、つまり彼らが奴隷階級として搾取したくない人々に対してこうした手段を用いることができるコーシャの資格を持つ人々によって、無数の巧妙で卑怯な手法によって強制される。

戦争の武器は、警棒、スタンガン、銃器といった粗暴で残忍なものから、スカラー兵器や指向性エネルギー兵器といった繊細なものまで、不吉なものの範囲に及ぶ。意識を操作する無数の心理学的戦術（神経言語プログラミング、音声対頭蓋合成テレパシー、ファルマコピア、携帯電波塔からの電磁場、これらのエネルギー兵器を展開する能力を持つドローンなど）の使用。

この戦争は第4世代戦争であり、いわゆる「民間人」に対するものである。彼らは、ユダヤ人警察国家とその代理人たちによって、家畜として、寄生聖職者カーストによって吸血鬼化される生体エネルギーの供給源として純粋に利用される税金奴隷として認定されている。いわゆる第4世代戦争や非従来型戦争とは、彼らが潜在的な敵性戦闘員であることを意味し、いわゆる「善人」はコーシャ認定を受けた（バッジによって）シオンの奴隷、つまりゾグボ

ット・アイアンヒールの執行者であり、「悪人」は無定形の「住民」であり、戦場は自己貪食、自己消費の行為によって自らに反旗を翻す社会そのものである。

社会を支配する寄生的な支配者たちは、巧妙なマインド・コントロールによってゴイムの心を操作し、後者は彼らのプログラミングとなり、主人のプロトコルを実行するように古典的に条件付けされているため、それを超越することができない。彼らは、自分たちの計画や思考が短期的な自己利益と長期的な自己破壊の源であるかのように見えるのだ。彼らの視点はプログラミングによって近視眼的になり、リハルト・クーデンホーフ・フォン・カレルギーが言った「我々は民族の国家を個人の国家に置き換えるだろう」という言葉を響かせながら、自我をすべてでありすべてであるとする所有的な個人主義的ウェルタンシュアンに従って、目先の自己利益だけに制限される。

個々人は、個人主義という誤った概念に素朴に賛同し、個々人の生存のための唯一の事実上の根拠である生物学的現実を無視して、自分たちだけの利益を追求する。

コーシャ・ノストラは、「警察」のバッジと呼ばれるコーシャのバッジをつけたコーシャの執行官を擁している。それは、彼らの行動の特定のコースを指示するユダヤ人の主人の命令で、「民間人」に対して第4世代の戦争プロトコルを実施する権限を与えるものである。彼らは幼稚園から大人になるまで奴隷階級に平等主義の教義を教え込んだだけでなく、E.L.F（超低周波エネルギー場）を通じて、特定の思考形態や特定の行動や素質を「ゴイム」の魂そのものに意識に植え付けた。これによって、個人主義的・集団主義的なクリードへの忠誠が確保され、「ゴイム」を自分たちに対して統一するのに役立ちそうな民族意識は、根こそぎ引きちぎられるのである。

ユダヤ人は、マインド・コントロール・システム（宗教-メディア-アカダンピア）を使って、奴隷たちが誰であれ、また何であれ（イデオロギー；鉱物-野菜-動物-人間-高次元の存在）を、あらゆるもの、「社会」に対する脅威と見なすように奴隷に仕向け、その結果、彼のゴイム奴隷を、非伝統的な戦争戦術によって敵を妨害するために、より簡単に使うことができる。第4世代戦争のフィレ・ミニオンは、ユダヤ人専制主義の「敵の他者」であり、それを餌にしている。ゴイムの肉は、彼のハンターである警察や軍隊、コーシャの執行者たちによって彼に提供される。彼らの唯一の目的は、自分たちの存在の条件として狩った血まみれのクズを引き裂くことである（パワーラッシュ、非人間化された「他者」を殺すスリル）。

戦争プロトコルの範囲は、公式の（官憲的な）憲兵隊だけでなく、ユダヤ人が敵対する「他者」のキツネを自分たちの中から一掃することを期待する「地域警察」とと呼ばれる活動によって徴集される、無定形の大衆にまで及ぶ。

こうして、一人ひとりが、そして全員が、非公式な憲兵隊の隊列に徴兵され、自分たちにとって「他者」として構築されたものに対する軍隊として配備される。こうして、「テロリスト対法と秩序」という分断と征服の戦術が採用され、ユダヤ人が「テロリスト」とみなす者はすべて、これが「正義」、「道徳」、「コーシャ認定」、「神的」などであるとユダヤ人聖職者カーストが決定したという事実によって、テロリストなのである。

聖職者カーストのヘゲモニーのレトリックが使われ、標的とされた個人は、陰謀団とその手下たちによる儀式的殺人のために照準を合わせられる。これは住民に対する戦争であり、反抗的で、卑怯なやり方で自分たちが排除されることを許さず、自由な人間として、そのような専制主義のもとではその自律性がそこに参加する条件として没収される自律的な存在として、彼らの本質を存在させる能力を妨げる、そして／または破壊する集団主義的専制主義に従うことをいとわない、住民の中の要素に対する戦争である。

I.Q.以下のポリシェヴィキ・ウンターメンシェンの集合意識の集団化と標準化：「平和、愛、統一」、そしてそれは実際には、ユダヤの傾斜に従って世界に押し付けられているエントロピーのユダヤのシステムを通じて文明が崩壊し、平和のうちに安住するための条件にすぎない。

警察が身につける正しいバッジ（これはユダヤ人政権下で彼らの本性を明らかにするものである）は、「コーシャ」と書かれた六芒星のバッジであり、必要かつ有用なあらゆる方法で体制に反対するものを殺害し、消滅させる権利がコーシャによって承認されていることを意味する。最も効果的な手段は、「シオンの長老たち」のプロトコルにあるように、市民としての義務感や道徳的美徳（つまり公の承認や支配権力による承認）から、農民がお互いをスパイし合うように仕向けることである。

市民は、幼稚園から大学院まで、ジオンの職人たちによって作り上げられた心の集合体を持っており、その意識の内容として、敵である「他者」の刺激と対になる（そうして呼び起こされる）感情ベースのプログラミングを持っている。ゴイム集団と「他者」の間で対立が起こるたびに、彼らの避けられない敵意という反応は、いわば黒魔術によって呼び起こされる。

愚かな大衆の条件付けは、警察や軍隊の訓練の場合に特に厳しく行われる。そこでは、有用な召使いとしてユダヤ人によって審査された者だけが、鉄のかかとを持つ執行者としてシオンで役割を果たすことを許される。モサドと陰謀団の工作人員によってイスラエルで訓練されたコーシャ公認の殺し屋たちは、「法と秩序」、すなわち「ゴイム」に対するノアヒデ・ローの実施を課すために「住民」に解放される。

汎神論におけるあらゆるものと同様に、戦争は常に蔓延し、永遠に続く。それは、文明の門を打ち破り、デミウルギスの力で文明を引き裂きながら、「永遠の平和」というニンジンを追求めるユダヤ人行商人の荷車を引くロバのようだ。戦争は始まっており、戦っているのはユダヤの警察国家だけである。従って、これまでユダヤ人専制君主の永遠の戦争は、樽の中の魚を撃つようなものだった。

ユダヤ人に耐えられない

ジュウは、その目的を達成するために、権力を行使し、他者を操る主要な手段の一つとして修辭的な手段を用いる：

- 1) 彼らに愛想を尽かし（「他者」に受け入れられ）、そして
- 2) その道具として、自分の目標を達成するために彼らを操る。
- 3) 世界支配を目論む彼の専制的な計画において、その有用性がなくなったと判断したとき、彼はそれらを破壊する。

このように、1) ユダヤ人は、しばしば「カント」と呼ばれる修辭技法、巧みな言葉遊びや構文、その他さまざまな形の言語操作を使って、自分自身を乗っ取りと殺戮を企む脅威的な外国の存在としてではなく、むしろ善意と相互扶助だけを抱く懐の深い仲間として見せることで、非ユダヤ人の「他者」の注意を、自分たちの敵、あるいは作り出された敵、純粹に虚構の構築物（「魔女」；ナチス」など。-このような悪役の創作に関する詳細な分析については、「ナチの物語」の項を参照のこと）。

非ユダヤ人の社会や会社に溶け込むと、彼は弁証法を駆使して非ユダヤ人を動員する（「『神』と『国』のために戦う」、「『神』に捧げる」-什器と税金、納税は市民の義務、戦争に行くこと、8歳でユダヤ人の管理する工場で1日14時間働くことなど）。

そして、似たようなレトリックで住民を分断し、征服し、武器化された言葉の繰り返しで異なるグループを条件づけ、互いに攻撃させた後、互いの剣で倒れた死体にシオンの勝利の旗を立てる。

ユダヤ人のカントは、善良であるかのように見せかけ（セールスマンシップ；魅力のないものを魅力的に見せたり、単に隠したりすること）、催眠術のテクニックと（彼の一般的な目的に対して）慎重な言葉遣いや構文の選択によって、ノー・ユダヤ人の心を惑わし、彼のマークやカモの心に影響を与えることを基本としている。

セム人の残酷さ、その原因

ユダヤ人とは「人類の腐肉」（ナポレオン）、「人間の退廃の悪魔」（ワーグナー）、「東洋からの疫病の瘴気」（ロベルト・レイ）。

彼は、宿主を吸血鬼化し、彼の手によって彼らを荒廃させ、最終的に破滅させることを主張する捕食寄生虫なのだ。異邦人」、非ユダヤ人、とりわけアーリア人に対する強欲な欲望と獣のような反感を駆り立てるものは何なのか？

現実の劇場でこの役割を演じることは、ユダヤ人の血のなかに、いや、むしろ反血のなかにある。彼はシオンのマトリックスのハリウッドではちょっとした役者であり、大悪党であり、極悪非道な存在であり、実際のハリウッドのステレオタイプや、「未来の芸術作品」（ワーグナー、つまりテレビと映画）に先立つ小説のステレオタイプはすべて同じ布から切り出されている。しかし、なぜ、この組織自体の原因は何なのだろうか？ 根本的に相容れない種類の純粋な混合物なのか、それとも他の原因があるのか。この問題は、透視能力を持たない者にとっては解決不可能な問題であり、「獣の性質」という観点からの説明、つまり、この行動を可能にするのは、ジウウの相反する内部構造の本質であるという説明で、我々が持っているものに固執するしかない。

ユダヤ人が悪魔に取り憑かれた存在であるとか、「悪魔的な」存在であるといった観念は、ユダヤ人の行動や存在論（多くの場合、最も文字通りの意味でジュデンハットや黄色い星のバッジを付けている）を個人的に体験することによって検証することができる。

このように、ユダヤ人という存在は、吸血鬼的であるだけでなく、有害で低い振動数を持つという意味で「地獄的」とであると表現することができる。この振動数は、エネルギー的な吸血鬼化だけでなく、異邦人や非ユダヤ人の存在を破壊したり退化させたりする効果がある。

これがおそらく、彼らの残酷さの根底にあるものだ。吸血鬼的な性質は、他者を犠牲にして自らの生命力を増大させる手段なのだ。この事実の先には、グノーシス主義から一部派生した、アルコンと彼らがこの惑星に捕食寄生する影響力を持っているという観念がある。ユダヤ人は、そのハイブリッドな形態（その混沌とした性質）からして、これらの実体の宿主である。彼らは、これらの実体が受けると報告されている行動を外見的に反映するだけでなく、ティトゥス皇帝やキケロ、ルターや様々なローマ教皇などの人物の引用に記録されているように、彼らが発明したアéria社会の最下層と最上層の間で、歴史的にこのような実体と結びついてきた。このような遺産は、ユダヤ人について十分な経験を積んだ人なら誰でも証言できるように、根拠のないものではない。

したがって、仮説として、アストラルの寄生虫、地獄の古代の実体はユダヤ人と結びついており、おそらく何らかの悪魔抜いによってでなければ行動できないような動機づけの影響

をユダヤ人に及ぼしていると考えて差し支えないだろう。これは歴史を通じて何度も試みられたことであるが、これらの実体がユダヤ人と絡み合い、ユダヤ人以外の、さらには二足歩行をしない実体との相互関係において、ユダヤ人を乗り物として利用することを可能にしているのは、ユダヤ人の構造的本質であると結論づけなければならない（それゆえ、すべてのセム人に頻繁に観察される動物に対する残酷さと、動物がアーリア人との対立よりもユダヤ人の方が全体的に攻撃的になっている）。

したがって、ユダヤ人は、これらのエンティティの地球平面上の意志の触媒として見ることで、これらのエンティティは、ユダヤ人の行動が証言しているように、吸血鬼と破壊的である。地球上の存在。戦争、革命、不況、血なまぐさい儀式、犯罪など、そのすべてが究極の原因としてユダヤ人にさかのぼることができる。...そして、おそらくこの「涙のヴェール」、平凡な平面上のカオスのオーケストラのプリムムモバイルであるこれらの古代のエンティティのそれに先行する。

セミテの残酷さは、彼の責任の一部でしかない。彼の遺伝的・精神的本質に基づき、彼と表裏一体となっている実体にも責任があるのだ。しかし、責任の所在を問うのではなく、関係する因果のメカニズムを理解し、それらを排除するために必要な措置を講じることで、地球上に調和が君臨し、これらの実体やその物理的乗り物が活動し、高次の霊的意識を持つ高次のアーリア人を罠にかけの絆の組織として地球上に織り成そうとするマトリックスが最終的に破壊され、これらの野蛮な生き物とそのハイブリッドな混沌とした性質がもはや地球上に残らないようにすることだけが問題なのである。

これらの生き物やセム人自身の残酷さの背後にある理由をさらに説明すると、彼らが古代の主人との緊迫した見返りの関係の中で目指しているのは、他者、特にアーリア人のエネルギーを吸血鬼化することである。

アーリア人に苛立ちや存在を脅かすような状況を押し付けてストレスを生じさせることで、平均的なアーリア人は生理的／エネルギー的にストレスに反応するようになり、それによってエネルギーが放出される。

-ユダヤ人を動かしている実体と、その実体を糧にすることを許しているユダヤ人。もしユダヤ人がストレスを与えなくなり、アーリア人の反応を引き起こすようなことがあれば、ユダヤ人が関与している実体は単に彼自身のエネルギー・フィールドを糧にするだけである。

こうして彼は、自分を乗り物として利用する存在と、高利貸しと寄生虫の生活を永續させるために、より健康で生命力の強いエネルギー・センターを取り込まなければならない自分自身の両方によって、絶え間ない争いを生み出すよう駆り立てられるのである。セム人の残酷さは、ユダヤ人の生物学的組織が、非ユダヤ人、特にアーリア人との関係において、捕食的

なアストラル寄生虫の武器として現れる機能である。

第5のカースト

鉄の時代-カリ・ユガ-では、世界の状況は万人の万人に対する戦争である。この世界情勢は必然的に爆発し、高次のタイプ（質の高い人間、アーリア人）が低次のタイプ（ユダヤ人寡頭政治とその古代の支配者が率いるシャンダル人の大群）に対抗することになる。

ジュリアス・エヴォラがその著作『現代世界に対する反乱』の中で書いているように、このような時間のサイクルによる歴史の下降スパイラルは、有機的な退化として、カーストあるいは「身分」の第1身分から最終身分への退行をもたらす。これらはすべて、純粋に「人間的」な発明としてではなく、パワーバランスを崩し、外来のウィルスの影響（自らの有限な意識を超越するものよりもエゴを優先させる人々の「プライド」）によって、本物のスピリチュアルな伝統の高次の原理を弱体化させることにつながった要素を自らに取り込むことによる本質的な後退として、ヴェーダ・インドのカースト制度をモデルにしている。

カリ・ユガ（エッダで語られる鉄の時代、あるいは狼の時代）においては、すべての者がその存在において混沌の状態に置かれる。存在論的に混沌の渦の中に置かれるのだが、その混沌は先行条件から続くものであり、限界点に達した極度の無秩序状態において頂点に達するだけである。

しかし、この大きな崩壊から、神々（神聖なる火花を持つ者、アーリア人であり、最初の財産を保持するか、少なくともそれを回復しようとする者）だけが勝利して立ち上がることができる手続きがある。これらの手続きは、神々の黄金が墮落したチャンダラ（第4の地所）の卑金属に変わり、第5の地所として鉛の時代に突入するカリ・ユガの状況を超越することができない人々の意識の中に存在する混沌を知覚することができる高次の感受性を持つすべての人々の周りに、目に見える形で存在している。

第五属性の完璧な例は、ユダヤ人占領政府のテロ警察国家が運営する、いわゆる「コミュニティ・ポリス」、別名ギャングストーキング・プログラムに参加する亜人たちである。彼らは、操作すること、嘘をつくこと、自任する権力者が「他者」とみなすものを虐待することに喜びを感じる。

そうすることで、彼らは文明の没落の主な原因である、ユダヤ人の遺伝的悪魔的体質（ユダヤ人はホモ・ネアンデルターレンシスとのハイブリッド生物であるため、憑依を可能にするDNST-3統合失調症遺伝子を持っている）に憑依した古生代の存在に憑依される。

このように、時間のサイクルの底辺にいる者たち、つまり歩く死者、ポストモダンのゾンビたちは、まさに混沌の力の受け皿であり、これらの存在の意志の乗り物であり、彼らの非道

徳性／非道徳性、他者を傷つけることを喜ぶこと、誠実さの欠如によって、これらの存在を自分の存在から排除し、撃退するための十分な自己保持力を持たない、十分に強い力でできていない、これらの存在の乗り物として機能するのである。

それゆえ、悪（「悪」とは他者に危害を加える意思と定義される）に喜びを感じ、それが自己満足や低レベルの神経刺激、ドーパミンスパイクの誘発につながらない限り、善を嫌う。灰は灰に、塵は塵に」。彼らはまさにスリルを求めて生きる「スリル・シーカー」であり、瞬間的な自己探求を目的とする以上のものはない。

高次のものを低次のもの（低次のエゴと、はかなく地上にあるものすべてに執着するスピリット）のために捨て、高次の原理を捨て、ポストモダンの魔女狩りで忌まわしきマラナータ、「フェア・ゲーム」とみなされた「他者」に対する支配のサディスティックな行為で、一瞬の力の奔流のために、高次の原理を捨てたのだ。

自任する権力者にそう判断されることで、誠実さも理念もない騙されやすいゴイムは道徳的制裁の束縛から解放され、そうでなければ強制的な順応主義によって抑制された神経症的な生活の中で解放されたと感じ、「悪魔払い」のチャンスを与えられたのだ。

そうすることで、彼らは『地域社会の取り締まり』に参加することで、これらの実体が彼らに憑依し、彼らの地上の使者であるユダヤ人が、標的とした個人（人）の血の記憶と高次の意識によって標的として選んだ人々を排除することで、世界を奴隷化するという彼らのアジェンダを推進するための機会の窓を、彼らの魂に開いただけなのだ。

これらの "個人" は、ユダヤ人がその "聖典" で自分たちに約束したように、存在そのものが自分たちの寡頭専制主義に脅威を与える人々を攻撃するために利用する武器（土星の槌と鎌）に成形される鉛の塊を構成している。

他の大衆と一緒に泥沼に引きずり込まれ、サイオンのサイバネティック牢獄のドローン・ロボット奴隷として自分の魂をアルコンに奪われないためには、魂を強化し、その分断を引き起こすあらゆる影響をはねのけなければならない、自分の魂を強化し、その分断をもたらすあらゆる影響をはねのけなければならない。つまり、自分の中にある第一位と第二位（司祭カーストと戦士貴族）を融合させる精神的戦士となり、ブルジョア階級や商人階級のように、自分のエゴに過剰に執着することによって、自分をシオンの地獄へと引きずりおろす役割を果たす低次の要素を押しつけなければならない。商人階級の超合理的な自己中心主義（フリーメーソンのルシフェリアニズムに最もよく例えられる）や、プロレタリアの純粋にパンのみに基づく粗野な振る舞いや、真のスピリチュアリティを欠いた動物的生活（食べる-眠る-フォルニケート-伝播する）などである。

獣意識の鉛の棺が、スピリットを失った死体のような人生を作り、魂を失ったジオンの吸血鬼に憑依されるのを避けるためには、あらゆるセンセーションナリズムへの執着から自分

を切り離さなければならない。

自らの内なる弱さによって、ギャングストーキングというシオンのテロリズムの共犯者となり、スピリチュアルな力の広がりの中で一時的なものを追い求めるという不運に見舞われた者たちは、自らをアルコンとその奴隷制度に縛り付けている。

集団主義的専制主義：小宇宙と大宇宙

西洋文明」と呼ばれるもののうち、ユダヤ人に占領された政府は、*事実上*、東洋のサトラプスであり、ユダヤ人とその配下の寡頭政治家（現時点では、フリーメーソンのロッジに所属する建国民族、ヨーロッパ人／アリアン人）によって運営される東洋の専制政治である。

シャボ・ゴイム（イディッシュ語で「愚かな動物」、ユダヤ人が自国民に危害を加えるために利用する便利なバカのこと）は、主人が専制政治を強要できるようにするユダヤ人の擁護者である。

ユダヤ人が支配者として傀儡化された支配者の背後で支配してきた歴史上の専制君主制のすべてにおいて（隠微なものであれ、あからさまなものであれ）、彼らは、はびこるようになった社会を、自分たちが支配者の寡頭制を集約した閉鎖的な支配体制に変えてきた。

これは、第一次世界大戦の戦費調達という口実で制定され、それ以来議論されることなく放置されてきた所得税の賦課がそうである。

什分の一が中世の課税形態であったように、これは現代の什分の一の形態である（これに加えて、奴隷カーストに対して課されたすべての関連費用-レビ人の祭司カーストにおける「レビテ」と同義語である「レビテ」という用語に注意）。

この搾取システムは、ユダヤ人オリガルヒによって、警察国家を通じて強制される。警察国家は、ユダヤ人が十分な権力を手に入れたら、シャボ・ゴイ・エリートたちに、自分たちの個人的なボディーガードとして、また寄生虫オリガルヒの優位性を維持するために、農民の農奴カーストが固定資産税と「関連手数料」を支払うようにすることが自分たちの利益になると説得することによって、一般的に設置される。

しかし、これを超えて適用されるのは、純粋に金銭（これは人間のエネルギーを抽象的に表現したものであり、「労働に対する請求」であり、ユダヤ人エリートに支払われるもの、すなわち労働を何も無いものと引き換えに受け取るものである。）また、オカルト的な側面もある。生命エネルギーの受け皿としての民衆を強制し、そのエネルギーをルーチェという形で放出させることで、ユダヤ人と結びついている大公たち、そしてユダヤ人と石工自身が、苦難と労苦（「労苦」はフランス語で「仕事」）を通じて放出されるこのエネルギーを糧とするのである。

こうして全員が、闇の力に吸血鬼化されるための人間電池となる。さらに、奴隷カースト、つまりエネルギーの受け皿が、ジオンの吸血鬼を増強するために生命力を放出するように仕

向けるために、ストレスと恐怖、不安と懸念が奴隷カーストに課される。これは、現代の婉曲的な言葉で「地域社会の取り締まり」として知られる魔女狩りの特別なプロトコルや、寡頭政治が危害を加えようとする地域社会のメンバー（特に、彼らの専制政治を脅かす可能性のある人々、つまりアーリア人の高貴な血統）を標的にすることを通して行われる。

暴徒ストーキングやギャングストーキング（「コミュニティ・ポリュシング」のより適切な表現）のプロトコルで他人に嫌がらせをし、虐待することは、ターゲットにエネルギーを放出させ、それによって吸血鬼寡頭政治に力を与えることになる。

このことは、古典的な条件づけ、いわゆる「科学的観察」を通して、奴隷階級、とりわけ、より高い意識を持ち、網の穴を発見することによってジオンマトリックスの網から逃れることのできるメンバーが、すべての出口を閉ざし、奴隷システムを支配する獣とその支配者であるアーコンを養い続けるための魂の糧（生体エネルギー）の受け皿として、すべてを「一体感」に縛り付ける網を強化する手段として、どのように考え、行動するかを理解する手段である。

オーガニックの嘘

闇の使者であるユダヤ人は、歴史的に『有機的な嘘』として知られてきた。内なるものは外なるものであり、外なるものは内なるものである。ユダヤ人の振る舞いは常に調和に反し、調和しているように見せている。

ユダヤ人の行動は、彼らの内なる存在の外挿である。彼らの内なる存在は、異質で相反する遺伝子の雑種化した融合体であり、おそらく地獄の力によって「衝動の混沌とした束」として結びつけられている。

真理、すなわち存在するもの（BeingまたはReality）は、有機的に発展した物質であり、それ自体を通してそれ自身を発展させ、したがってそれ自体には本質的でないものは何もなく、すべてが全体の不可欠な部分である。したがって、「自己発展」という意味でも、また、問題の有機体はその弱いリンクや設計上の欠陥を考慮してそれ自体を維持することができる程度はともかく、有機体を維持するために互いに調和して働く要素の複合体という意味でも、「有機的」である。

つまり、雑種化という"原罪"を体現したものであり、それ自体は自立していないが、質的に異なる構造や本質によって対立する要素の組み合わせや混合物である。

つまり、彼らは「存在／現実」と調和しておらず、「真実の環」の担い手ではなく、その芳醇な響きを聴くことができず、むしろ国家に不協和音を生み出しているのだ。

真理とは調和であり、たとえ対立するものであっても（例えば捕食者と被食者の場合、捕食

者が被食者を消費することで被食者の数が減り、逆説的に被食者が存在できるようになる。
。)

嘘（存在論的嘘）とは、存在していながら、他者だけでなく自分自身にも混沌を生み出し、その本質を存在させることによって自らの破滅をもたらすものである。カオスの化身であるそのような存在の存在には、一致（有機的な嘘と存在と他の有機体との対応）がなく、したがって真理もない。

したがって、いかなる種類のユダヤ人も、他の存在の中で調和して存在することはできないということが、前提から導かれる。ユダヤ人の行動は吸血鬼的で寄生的であり、捕食的であり、すべての存在（生物）は彼らの獲物である。彼らは調和のとれた生物を構成しており（混沌の体現者であるユダヤ人のように彼ら自身がそうでない限り）、彼らはユダヤ人が利用しようとする生体エネルギーの源であり、彼らの標的のエネルギーを吸血鬼化して自分たちのものにしようとするのである。

真理に生きるためには、有機的に存在する（自己発展的で、他の存在と調和的に共鳴する）形の中で生きなければならない。真理に逆らって生きるためには、ユダヤ人のように、自分の影響力の範囲内でより大きな混沌を支えるような関係に身を投じなければならない。

真理は明らかになる」と言われるように、有機的な嘘はやがて、この地上の混沌の前触れとして暴かれることになる。有機的な嘘は、多くの人が「神」と呼ぶ存在／現実の顕現である真理によって打ち破られる：「光あれ」、有機的な嘘の闇を追放するために。

おそらくこれが、ユダヤ人が地上に無機的な存在や構造物を永遠に生み出そうとする理由なのだろう。それは、ユダヤ人が自分の本質を地上に存在させることによって、テクノクラシー———とか、テクノクレイジー———とか、トランスヒューマニズムのアジェンダという形で、地上にさらなる嘘と混沌を生み出すからである；存在に自分の存在を押し付ける手段として、純粋なものを変質させ、汚染する。ユダヤ人は事実上、人生の"膏藥の中のハエ"として、自分自身を助けることができない。

有機的な嘘に対する解決策は真理であり、これは闇とその忍び寄る影響力、偽りと闇によって真理と光を篡奪しようとする悪意ある広がり暴露する光である。

ユダヤ人標的なし

陰謀団がそのテロキャンペーンに対する統制された反対勢力として組織する集団ストーカー心理作戦では、そのほとんどすべてが、ユダヤ人または非アーリア人の指導者、および／またはキリスト教徒、特に女性がいると表現される。これは現実を逆転させる。つまり、アーリア人に特化した、高貴なアーリア人の血を引く人々に対するユダヤ人のテロ・キャンペーン

ンであり、特に彼らはより高い意識を持ち、ユダヤ人寡頭政治の因果メカニズムと動機を理解することができるため、ユダヤ人の暴政にとって最大の脅威となる。

現実には、そのような人々を意図的に標的にしている：

- 1) ユダヤ人ではない；
- 2) アーリア人の血統、特に金髪碧眼の人々である；
- 3) 非-aryanであり
- 4) 反体制派や内部告発者（おそらくその90%以上はアーリア人であり、正義と真実、つまり存在の調和を守るという生来の感覚を持っている）。

ユダヤ人ギャングストーキング・メディアのサイコパス（ウェブサイト、組織、人物など）では、非アーリア人とアーリア系キリスト教徒だけが表現される。これによって彼らは、悪者をアーリア人として描き、自分たち（真の悪者であり加害者）を被害者として描き、自分たちの罪をアーリア人のスケープゴートに転嫁しようとするのです。

おそらく、ユダヤ人誹謗中傷のプロトコルは、意図された大量虐殺アジェンダのための条件を確立するために機能する：アーリア人を「悪魔的な」犯罪者として描く；ネオナチ」として、アーリア人を「悪魔的」「犯罪的」「ネオナチ」として描写することで、被害者意識、「迫害された」無実の人々、実際には歴史の大悪党であり、嘘の体現者である（彼らが目的を達成するための剣と盾として使う偽りの「歴史」を構築した）非アーリア人の大群の背後に隠れて、彼らが破壊したいと望む相手を悪魔化／悪者化し、殺戮のために仕向けるのである。

また、ユダヤ人自身がギャングストーキングのプロトコルの背後にいるため、彼らが自分たちの陰謀団から標的にされることはほとんどないが、いつものように、自分たちのエゴをあり、騙されやすい『ゴイム』から彼らへの同情を引き出す被害者としての仮面の後ろに隠れていることは、公正な推定である。

ザ・パープ・コンプレックス

ギャングストーカーの加害者（または「犯人」）の心理的プロファイルは、「非人間的」なものである。彼らの意識は、性欲や欲望の根源的な衝動に根ざしており、低次の自我を肯定

し、権力の感覚を得るための倒錯的な形態や手段で現れ、自分自身に活力を与え、意識の最下層を刺激する。

サド・マゾヒズム、悪性ナルシシズム、そして一般化したサイコパスである。

このプロフィールは、テロキャンペーンへの参加度合いや程度に関係なく（その最終目標や作戦をどの程度知っているかに関係なく）、あらゆるレベルのギャングストーキング加害者全員に当てはまる。

サドマゾに関しては、「他者」（ターゲット）に故意に危害を加える行為は、サドマゾ的性質の準セクシュアルなスリルを引き出す-犯罪者はターゲットに苦痛の条件を課すことに喜びを感じ、「他者」を傷つけることに喜びを感じる。報復の危険は性的なスリル（ターゲットに「捕まる」スリル、セックスと死の相関を伴う自己保護と安全への暗黙のリスク）をもたらし、他者への権力の押しつけ（支配行為）と同じ性的興奮の相関は、加害者とターゲットの間の一連の関係に具現化される、自分の欲望を満たすことによって官能的な満足を得る手段として、あるいは単に「他者」を支配する行為を通して自分の欲望を満たす手段として、「他者」を支配する行為とその結果である。

中毒（性依存症）を追いつめ続ける多くのケースと同様に、犯罪者が求めるこの倒錯的な意識の衝動状態は、生命力を発揮する行為（支配行為）における自我の主張を通じて、感覚と満足を欲望するという、自我中心的な欲求に根ざしている。

これは、自我の自己反省的措定として現れる様式におけるナルシズムである、ナルシストであり、ナルシスト的なスリル追求と自我満足の現れ方は、「他者」に危害を加えたり、故意に危害を加えたりするという点で悪質である-「他者」が事実上危害を加えられているかどうかは関係なく、「重要なのはその思い」であり、悪質なナルシストの意図である。）

サイコパシーは、この「犯罪者コンプレックス」のサブカテゴリーと密接に関連している。それは、「他者」の中に自分を特定し、「他者」の存在を認識することに失敗することによる、「他者」への共感／同情の欠如である；言い換えれば、「他者」に対する無慈悲な無視、「他者」を意識的な生命や存在を与えられた存在と見なすことの失敗や拒否、そしてそれに基づいて、「他者」を単なる「物体」、つまり「檻の中のネズミ」として扱い、その苦しみを完全に無視して残酷で異常な刑罰を科すことで、「他者」の存在を消滅させることである。

このように、犯罪者コンプレックスは3重構造になっており、ハラスメントキャンペーンに参加する野蛮な生き物の特徴である、低次の自我意識（獣意識）の凶暴性に基づいている。

意図的かつ故意に、密かに、隠密に、他者に嫌がらせをし、罵倒するという概念そのものが

、欺瞞的であり、その本質において女性的である（暗黒の女性性、最も地下に潜り墮落した形の女性的意識）。

それは、犯罪者の行動が平常の外見に隠れて実行され、犯罪者に知られ、ターゲットに知られる秘密の方法で現れるので、狡猾である。この意識の暗い女性的な側面は、犯人の常習的な行動が「見る目のある者のために」姿を現す形であり、彼らの悪意、自己愛、他者を傷つけることへのサイコパス的な喜び（シャウデンフロイデ）、サドマゾヒズムはすべて、彼らの権力への倒錯した欲望を証言している。この欲望は、彼ら自身の精神的な修養の欠如（修養を積んだ人間は決してこのような行為に参加しないつまりアーリア人である人々）に突き動かされているだけでなく、おそらく純粋な者の苦痛と死のエネルギーを糧とする闇の力に突き動かされているのだろう。

犯罪者たちは、ダークサイドへのイニシエーションが徐々に進むにつれて、自分が何者かになり、物質面の黒魔術の熟達者たち（陰謀団の吸血鬼）の微妙な操作によって、トールキンの『指輪物語』に登場する指輪の亡霊のように、「ふさわしい」と判断されれば、彼らに改造される。

彼らは、その外見から観察できるように、邪悪なゾンビのようであり、憑依されているように、すべての能力を完全にコントロールすることはできず、従って、人間以下の単なる抜け殻であり、これは程度の差こそあれ、陰謀団のヒエラルキーの上位にいるほど（彼らの墮落しやすさ、誤りを犯しやすい性質に基づく）、彼らはより空っぽで、人格がない。彼らの敵対的な悪意はさらに、彼らの病んだ心、あるいはむしろ彼らには心がないが、単に憑依され、平凡な平面の道具として彼らを利用する別の者（「他者」）の心やマインドに置き換えられているという事実を強調している。

血の署名

ユダヤ人占領政府のクズどもは、自分たちの一時的な利益を得るために悪魔と契約したのだ。シオンの奴隷人口を支配し、世界とそこに住むすべての人々に対する暴利を貪る殺人者であり奴隷商人である自分自身にすべてを鎖でつなぐ悪魔、ユダヤ人と契約を結ぶことで、「地域警察」と呼ばれるメンバーは悪への忠誠を示したのだ。

宝石が世界を支配していることを知らない者は、少なくとも自分たちの奴隷としての責めを免れる口実はあるが、それにもかかわらず、個人に対する嫌がらせや虐待に加担し、その結果、彼らのカルマと正当な運命を背負うことになる。

悪魔との取引は、ゴイムとユダヤ人の間で、長期的な利益（ほとんどの場合、短期的な利益）のために行われる。ユダヤ人は最終的に、彼らが陰謀の道具として徴発した人々から富を奪う。

ユダヤ人の悪魔と泥棒協定を結ぶということは、自分の命、あるいは、自分たちの未来を破壊される子供たちの命を手放すということだ。彼らは、自分たちの欲に目がくらみ、愚かにも自分たちに仕えるすべての人々にナイフを向けるユダヤ人の唾棄すべき本性によ

って。

ユダヤ人と契約を結ぶことは、自分の完全性を妥協することであり、ユダヤ人の契約は常に自分の純粋さの妥協、自分の本質の偽りを伴うからである。自分をユダヤ人に縛り付けるような過酷な条件を伴う契約に自分を縛り付けることである（しかし、これらの契約条件は小さな字で書かれているため、ほとんどの人は貪欲さと一時の自己利益に目がくらんでいる）。

彼らは、この契約には、ユダヤ人の利益を図り、「アーリア人種」を汚し、何らかの形でそれを失い、最終的には彼ら自身の行動の主体を害することにつながる悪質な行為や不作為を行う必要性はないと考えている。

このような運命は、集団としての自国民やその罪のない人々の死を求める人種反逆者にふさわしいものであり、それは些細な利己心や満足感のためであり、ユダヤ人の主人の命令に従って、サディスティックに対象となる人々に自分の意志を押し付けることによって、権力欲を満たすためなのである。社会経済階級が何であれ、裏切り者である彼らは、盗人協定の中でユダヤ人に仕え、自分たちの同胞を襲い、間接的に自分たちに危害を加えているのだ（「人は誰であれ、自分だけの島ではない」として、自分たちの同族に危害を加えることは、最終的には自分たち自身に危害を加えることになる）。

ソビエト・ロシアでフリーメイソン全員が処刑された例は、「人類」の敵であり世界の破壊者であるユダヤ人に奉仕することの避けられない結末を証明している。ユダヤとのディアボルス契約（*contractus diabolus*）に関与することは、絶滅という避けられない運命をもたらすことである。彼らの極悪非道な計画のためにユダヤに仕えたと記録されている民族の裏切り者たちは、自分たちの民族に忠誠を誓い、あらゆる困難に打ち勝って自分たちの種族を永続させるために神の意志に従って行動する忠誠者たちによって処刑されるために、公の場に引き出されるべきであるし、そうなることを筆者は望んでいる。

害虫の大群

ユダヤ人世界秩序のギャングストーキング・プロトコルは、ユダヤ人特有のやり方で行われる。ユダヤ人がソビエトのスパイやサディスティックな虐待者として汚い仕事を遂行するために徴集する無数の手下たちは、別の動物に群がる動物の集団に例えることができる。例えば、ネズミの集団が、自分たちの縄張りを侵す者、あるいは排除しようとする者として認識した小さな犬や猫に飛びかかり、その縄張りを占領したり、その資源を奪ったりする。

このような「人々」の凶暴性は、彼らから人間性を剥奪し、ユダヤ人の定義によれば「ゴイム」、つまり「家畜」あるいは「動物」としての資格を与える。このような行動は、ユダヤ人が泥棒協定に関与しているあらゆる存在に憑依されている可能性をさらに唆し、少なくとも、どのような形のマインド・コントロール（サイコトロニクス、化学的・電氣的ラボトミー、一般的な住民の口減らし）であれ、精神がゾンビ化されている可能性があ

る。

粗野な大衆は、ユダヤ人の手中にある柔和なパテのようなものであり、ユダヤ人が世界支配のプロトコルの中で潜在的なトラブル源として許容できない、ルールの例外となる人々を苦しめ、嫌がらせをする奴隷の軍団の役割を果たすのである。

ゾンビの大群は、メディアやアカダミア、非課税のコーシャ公認教会などのマインドコントロールによって、特定のもの（人、場所、思想など）を愛したり憎んだり、それに対して受動的／受容的、あるいは攻撃的／敵対的に振る舞うようにプログラムされ、その過程で最大限の影響を受ける。後者はおそらく、遺伝的・精神的体質の全体的な弱体化と連動して、ゾンビ大衆の憑依を可能にする。

このような機関では、古典的条件付けによって、人々のバイオコンピューターの脳髄が日常的にプログラムされ、このような情報機関を通じて、完全に反応的な心を持ったゴイに広まり、ユダヤ人が目の前に置く標的は何でも攻撃するように簡単に条件付けられる。必要なのは、ユダヤ人が自分自身に対するカルマの反動をかわす手段として、自分たちがやったことを他人のせいにして、混乱を作り出し、それを他人に押し付けることだけである。

ゾンビ・ヘルド心理学は、大衆心理を操作するものであり、その大衆心理は、情報の器官を通してユダヤ人によって個人としてではなく集団として操作され、「スピリチュアル・イスレアル」の集団化されたハイブ・マインドを作り出し、ユダヤの電磁的な糸に操られた多くの操り人形として大衆を動員するのに役立っている。おそらく、彼らは個人的にも集団的にも、実体および／またはおそらく土星からの特異な実体によってコントロールされており、したがって地球上ではこれらの実体の単なる道具かロボットにすぎない。

その実体は、この惑星問題の真の支配者であり独裁者であり、彼らの原理的道具であるユダヤ人たちを通して、この蜂の巣マインドを設計し、内部の者たちが「内部」も「外部」も何も知らず、ただ意識に植えつけられたあらゆる情報の流れの受動的な暗号として存在するマトリックス化された監獄を作るために働いている、と推測できる。ゾンビ化したロボットの大量や群れは、蜂の巣の中のドローンでない者を攻撃するために動員される。社会や「大衆」にとって「その他」の性質を持つ者は、国家の「敵」として標的にされ、迫害される。ゾンビ化した大衆は、現実にはユダヤとその上層部に支配された魂の囚われの肉体にすぎない。このルールの例外となる人々は、敵から投げつけられる多くの幻影のミサイルとして投影されるテクノロジーやエングラムや思考形態によって、心のプログラミングを超越することができる。ほとんどの者は嫌がらせを回避することができず、その結果、情報の流れ、デミウルジの邪悪な波の単なる「暗号」となり、動物化されたゴイムとなる。

ノータッチ拷問

暴力団によるストーカー行為で用いられる「ノータッチ拷問」という戦術は、ジオンマトリックスを設計する不啓蒙の黒魔術師たちの偽りの光を浴びる陰謀団とその手下たちの暗い女

性的意識の徴候である。

その動機は、椅子の上に画鋏を置くなどしてライバルに罾を仕掛けたり、同好の士と一緒にターゲットに襲いかかったりする校庭の少女の行動（まさにいじめの本質であり、加害者がその行動から得るサディスティックな喜びである）を彷彿とさせる。

ギャングストーカーは、容姿端麗で頭脳明晰な金髪碧眼の少女（アーリア人）を苛めようとする女子学生であり、その優れた資質への嫉妬から、自らの欠点を過剰に補う手段として汚そうとする。

ギャングストーキングの加害者たちの行動は、破滅させようとする金髪の美女を見て嫉妬にかられる女学生（典型的なのはユダヤ人女学生）のそれであり、典型的なのは、操りやすいカモを自分の操るゲームに徴発することである（下級ギャングストーカーは大人のアナログである、ユダヤ人の黒幕は、その上に立ち、「他者」に危害と虐待を加えることで、危害の主体としての力感を引き出す手段である自分のプロトコルを実行するよう手下たちを扇動する者である）。性-死の相関関係は、ここでもノータッチ拷問という行為に現れる。

拷問が、隠された方法で、「もっともらしく否定できる」方法で実行されるという事実は、不名誉な共同体主義社会の文脈の中でいかにうまく実行されるかということだけでなく、テロ的暴力行為を喜ぶメカニズムとしていかに実行されるかということである。加害者たちは、非存在のヴェールや自分自身の閉塞感の陰で標的を攻撃することができ、現実をゆがめ、変化させる力を持ち、何が行われているかをただ一人知らされる標的以外のすべてを欺きながら、自分自身のシミュラクラルな現実を押し付けることができる。

このことはさらに、ユダヤの黒魔術の二重拘束に関連している。つまり、対象者はユダヤ人とその配下の権力関係に服従させられ、自分に行われていることに反対しながらも、現実にはユダヤ人によって確立されたシステムによって、実行可能で現実的な選択肢を奪われているという選択の錯覚を与えられるのである。このことは、「やらねばやらねば」のシナリオを作り出し、ターゲットが何か行動を起こせば、彼らは自らを守る能力を制限するシステムの法律の枠外で行動した犯罪者として描かれ、意志のない惰性の状態、つまりすべての主体性の否定となる。自分の防衛のために法律を行使しようとするれば、彼らは懲罰的な精神医学を課され、自分たちがされていることを明らかにしたことで「精神病」であると解釈され、「妄想的な妄想」やそれを連想させる何かを持っているという誤った診断を下されることになる。

ノータッチ拷問は、ライバルに嫌がらせをする女子高生のサディスティックな行動であり、自分より優れた者が占める王座や台座に自分を位置づけるための手段である。犯人たちが拷問という行為で得る喜びは、低次の自我意識、つまりすべての人の前で「私」を粗雑に構えることを超越できないことに基づいている。

拷問という行為は、「私」を原因作用者として自己反省的に提起し、それに付随する自己評価と相関する生理学的状態（例えば、ドーパミンの分泌、脳の快楽中枢の活性化など）を誘発する刺激である。このようなサイコパスの行動は、意識がもっぱら自己中心的であり、低次の自己の制限的な領域を超えて、より高いレベルや次元の存在に昇ることができない。

この粗雑な状態（利口な猿のような知性と、野性的な衝動に支配された感情）を超越できない者は、ギャングストーキング・プログラムの格好の候補者であり、その数が日に日に膨れ上がっていく関係者は、必ずこのタイプ、つまり「スピリチュアルなユダヤ人」（定義上、スピリチュアルなユダヤ人は存在しないので、矛盾した表現である）と特徴づけられるような者である。彼らはよくても（あるいは悪くても）知的な猿であり、低次の自我に根ざした根源的な衝動に突き動かされている。

このような作戦が痕跡を残さないために秘密裏に行われるのは、純粹に責任を放棄するためではなく、臆病さ、自分に報復されたくないという願望、秘密の障壁の後ろに身を隠し、毒入りの短剣を持って物陰から飛び出さなければならない弱さ、あるいはもっといいのは、マイクロ波兵器で住居の壁を撃ち抜いたり、食料、衣服、水道に毒を盛ったりすることだ。

この先には、臆病さと、その発露としてのサディズムへの倒錯した喜びがある（「臆病者は常に残酷である」という格言がある）。死（暴力、その「他者性」における「他者」の侵害）とセックス（この行為に抱く悦び）の相関関係がここでも見える。すべては低次の自我に、そしておそらくは、人間の意識よりもその最低の側面においてさへ下にある、「獣の意識」とでも呼ぶべき、心理学と精神分析の学問の発明者であるユダヤ人フロイトのいわゆる「イド」に根ざしている。ギャングストーカーたちは、彼らのアイデンティティがイダ的、あるいはイド中心적であるという意味で、「イド-イド」であり、野生の衝動に由来し、それに根ざしている。

情熱、感情、刺激、センセーションナリズム、つまり「地獄」、存在の最も低い状態、あるいはアストラル面の下層を超えないようなヌーメナにつながる世俗的な感覚や現象の刺激に心をときめかせ、それに依存するすべてのものである。

このようなレシピは自己破壊のひとつであり、それゆえにパラドックスが存在する。エゴ、低次の自己に没頭し、（自己刺激の）ドーパミン・ジェットコースター（ジェットコースター）に乗ることは、意識に登録させるために増え続ける刺激を必要とし、それが意識を低下させ、分解（*zersetzung*）へと導く。

パラドックスは、エゴが自分自身を抛り所とし、より高次のものを抛り所としないときの、

エゴの誤りやすさにある。それは、手榴弾の破片のように、魂を焼き尽くす低次のアストラル的存在とユダヤ人が結ばれている低次のアストラル的存在をほぼ確実に伴っている地獄の業火によって破裂し、破滅に至る。

ギャングストーカーは、他者を破滅させようとすることで自らを破滅させる。ギャングストーキングに参加するという行為そのものが、自己破壊（「分解」-zersetzung）の道へと人を導くのに対して、ターゲットは高次の自己を育み、サディスティックに地獄へのジェットコースターに乗る練習の必然的な結果である自己の自発的破壊の落とし穴を避けるという選択を持っているため、魂の救済はターゲットにある。

「ノータッチ拷問」は、人間の「法」の範囲内で、嘘と中途半端な真実のマトリックス・システムで世界を奴隷にしているユダヤ人の脱メンバーのオリガルヒ・ヴァンパイアの「法」の範囲内で、サブローザで、コーシャの承認を得て活動することによって「神を欺く」悪の試みの加害者である。しかし、彼らは、上（宇宙）からの権威を持たず、ただ下（混沌、地獄、彼らを支配する低次のアストラル的存在）からの権威を持つとして自己正当化するだけの似非権威の単なる一時的な力で、神聖な権威をごまかすことはできない。

ユダヤ人コメディアン ジェイソン・アレクサンダーが『となりのサインフェルド』で演じた "ジョージ" のように：あなたがそれを信じれば、それは嘘ではない」 -しかし、それはユダヤ人の反人種という「有機的な嘘」にとってさへ嘘なのだ。

それにもかかわらず、彼らは自分が嘘をついていることを理解しており、いくら真実を隠しても、故意に悪意を持って行った行為に対するカルマを自分自身に負わせる隠蔽行為から免れることはできない。暗闇の中で悪を行なっても、十分に発達した意識を持ち、真理に従順で、宝石商の悪を暴くことができる者として、宝石商の十字架の主な標的を構成する人々によって理解される真理の光によって裸にされる行為を覆い隠すことはできない。

肉体的な接触なしに、しかも長期間（多くの場合、生まれたときから）にわたって、ターゲットに虐待と苦痛を与えるように設計されたターゲットに与えられる危害は、肉体的な暴行よりもトラウマ的で有害であり、したがって、一瞬で終わる単なる肉体的暴行行為よりも大きな「罪」、「カルマ」、「犯罪」である（ただし、例えば、騒音キャンペーンは振動という意味で「肉体的」であり、したがって、音による暴行はより微妙な性質の肉体的暴行に過ぎないことは認めなければならない）。騒音キャンペーンは振動という意味で「物理的」なものであり、したがって音による攻撃は、より微妙な性質の物理的な攻撃にすぎないことは認めなければならない）。

その危害はターゲットの魂そのものを襲い、その魂をゆっくりと破壊するように設計されていることは、加害者たちの臆病さ、残酷さ、野蛮さの象徴であり、その暴力行為は、ユダヤ教マトリックスの刑務所に収監されているどんな殺人者や犯罪者よりもたちが悪い。従って、ギャングストーカーに付随するものは、極端なカルマであり、魂の完全性を低下させ、侵

食する魂のレベルでの彼らの危害の応酬であり、彼らを奪い、吸血鬼的に彼らを消費する間の力による所有と支配の拡大に彼らを開放する。

加害者のほとんどはすでに死んでいる。彼らの認識論的状态は非存在の状态であり、現実を無視することを意味する無知ではなく、ジオンの吸血鬼（アルコン、アスラ、レプティリアンなど、好きなように呼べばいい）による魂の吸血鬼化に身をさらすことによる、知る能力の完全な剥奪としての知識の完全な剥奪である。『ノータッチ拷問』は、現象の隠蔽と、魂をその基本的構造から否定する 悪魔の弾丸の破片のような有害なヌメナの存在に依存している。

ユダヤ人のゲーム、あなたのゲーム

バラ十字会の著者によれば、ユダヤ人はアトランティスの奴隷であった。薔薇十字会の著者によれば、ユダヤ人はアトランティスで奴隷だったのだという。彼らは獣人の意識を持っており、それは何千年も前にアーリア人が程度の差こそあれ混血した非アーリア人である人類から受け継いだものである。

ユダヤ人はこの狡猾さを受け継いでおり、すべての非アリアン人と同じように、彼の意識はこの狡猾さに基づいて構成されている。

こうして彼は、一般的な犯罪者やストリート・ポン引きのように、自分の目的のために彼らを利用する手段として、自分のマークやカモを常に評価しようとしている（ユダヤ人の犯罪の具体例については、カール・ケルナーとハンス・アンダーソンの著書『犯罪者としてのユダヤ人』を読んでほしい）。

犯罪者は、ほとんどのアーリア人の社会で、そしてほとんどの非アーリア人の社会でさえ、法律を作る社会とその支配者を犠牲にして、より低いエゴの自己追求を体現するものである。つまり、彼の心は低次のエゴであり、闘争-逃走-繁殖という基本的な衝動に根ざしているのである。

ギャングストーキングの文脈におけるマークとカモのターゲットに関連するように、宝石商の狡猾さは、マークに関するデータを収集し、そのデータセットに基づいてマークに関連する後続の決定を行うことを可能にする低レベルの意識的直感を介して、周到で本能的な把握を通じて、「他者」の評価に使用される。

ユダヤ人は、自分のマークと関係を持つことによって、自分のマークを「ゲーム」するのである。ジュウにとって、それは行動と反応の「ゲーム」であり、フェイントとパワープレイの「ゲーム」である。

ユダヤ人は、より大きな目標がこのような回りくどい方法で達成されるなら、一步下がって権力を譲歩することも厭わない。

高度な技術（遠隔神経モニタリングと操作）を使ってターゲットの意識をマッピングするギ

ヤングストーキングのプロトコルは、このゲーム理論に基づいたユダヤ人の操作に依存している；動きのパターン、特定の文化的形態の追求や回避、特定の思考パターン、そして一般的な存在の様式などである。

合成テレパシーや電子／エネルギー兵器という先端技術を駆使して、「他者」に対して特定の感覚や攻撃を課すことは、「他者」に対する虐待と危害の数千年にわたるこの「支配のアーキテクチャ」の頂点に立つ成果である。

ユダヤ人のゲームは光対闇のチェスゲームであり、その結果は物理的・精神的な面での死か生存かである。古代世界では、より粗雑な物理的技術が利用されていたが、魔術という形でも、より洗練されていた。魔術とは、意識を操作する力を実際に使うことで、恐怖、苦痛、欲望、そして七つの大罪のすべてと、ターゲットがそれらに参加することで魂に与える汚点を誘発するものである。

ターゲットが反応するかわからないかは、まさにユダヤ人とその関係者が見極めようとしていることであり、ターゲットが自らの破滅を参加によって促進し、ゲームがユダヤ人に有利に継続できるように、誘惑や刺激をさらに、典型的には比例して微妙で強烈な形で開始する手段なのである。

しかし、ゲームに参加しなければならない。なぜなら、ゲームに参加しないことは、敗北し、ユダヤ人に勝利を与えることであり、ユダヤ人の動きに対抗することができず、自らの破滅を招くからである。アーリア人に危害を加えようとするユダヤ人に対し、宇宙法則の範囲内で対抗するのがアーリア人の義務である、この範囲から外れることは、どの程度であろうと、どのような特別な場合であろうと、ユダヤ人にとって勝利を隠すことに等しく、彼の大公や手下はすべてダークサイドにあり、彼らの目標に最も効果的な方法で敵に害を与えようとする。

いわゆる精神衛生疑似科学のソフト・テクノロジーであれ、指向性エネルギー装置（脳波計、音声対頭骨E.L.F装置、無線周波数発生装置など）のハード・テクノロジーであれ、よりありふれた粗野なさまざまな技術（NLP催眠による感作、ハニートラップによる誘惑など）であれ、ジュウは自らの支配技術を通じて、アーリア人の意識の内容を知り、押し量ろうとしている。

アーリア人の義務として、これらの技術に対抗するだけでなく、それらを服従させることである。そうすることで、彼や他の人々は、ユダヤ人によるマインド・コントロールから解放

され、ユダヤ人がこれらの技術を黒魔術の道具として、アーリア人種、さらには鉱物、植物、動物、類人猿、高次元の存在など、地球上のあらゆる知覚生命に害を及ぼすことから解放されるのである。

ユダヤ人のゲームは避けられないものであり、人は最後までそれを演じなければならない。ユダヤの神に救いを祈っても無駄である。

それを怠れば、ダークサイドに勝利を譲り、一時の感情や情緒のためにアーリア人の光を犠牲にすることになる。従って、人は適切な瞑想（第三の目の力の瞑想など）を通じてより高い意識を養うだけでなく、エゴイスティックな自己刺激や非アーリア人に対する偽善的な利他主義よりも、より高い目的のために生きなければならない。自分の魂を守るか、ダークサイドに没収されるかが勝負なのだ。

ユダヤ人のギャングストーキング、ユダヤ人のパラノイア

彼らの邪悪な計画が露見したときのユダヤ人の手口は、先手を打って他者を攻撃し（「告発者を告発する」）、自分たちの敵と見なした者を冷酷に追いかけようとする。

ユダヤ人の深遠な狂気と誇大妄想的なエゴイズムとが相まって、地球上の覇権を脅かす脅威となりうると計算した者たちに対して向けられるのである。こうして彼は、自分の権力に対する潜在的な脅威が、想像しうる限り最も取るに足らないものからもたらされたものであっても、それを抑制しようとする手段として、先制攻撃に乗り出すのである。たとえ最も卑しい浮浪者であっても、ユダヤ人とその活動について知ることがあれば、ユダヤ人の権力に対する脅威となる。

このような偏執狂的な疑心暗鬼と神経症的なマイクロマネジメントの風土は、ユダヤ人の偏執狂的な精神から生まれ、モザイク法とタルムード・ラビの落書きに符号化され、彼の意識を彼の文化の牢獄の枠内に縛り付けている。もちろん、彼の「文化」は主に彼の心の表象であり、外在化したものであり、それ以外のものにはなり得ない。したがって、ユダヤ人は変化することができず、硬直した、融通の利かないユニットであり、地球を専制的に支配するための法則を遂行しなければならないのである。

こうしてユダヤ人は、自分の生存を脅かす唯一の脅威はアーリア人種であり、自分の計画が結実し、シオンの毒の実を地上に実らせるためには、彼らだけを絶滅させなければならないことを理解する。アーリア人種がいつか自分のしていることを知り、それに反対しようとするかもしれないというユダヤ人の偏執的な恐怖が、ユダヤ人をすべてのアーリア人種をスパイし、監視し続けるように仕向けている。

漫画「ヘマン」のように、青い目の金髪のアーリア人アーリア人ヴィリヤ、等腕十字に象徴されるチャクラを正しく整えたヒーローはエターニアに存在し、不死であることだけが、ユダヤ人（スケルター）とその獣人奴隷が住む幻の領域から逃れることができる。

偏執狂的なユダヤ人は、自分の奴隷を監視下に置くというテクニックを用いる。アーリア人の奴隷となるべき者たちは、ユダヤ人のパノプティコン式野外監獄で最も厳しい監視の

下に置かれる。トールキンの『指輪物語』に描かれているサウロンの目は、ユダヤ人の「神」である暗黒卿の目であり、暗黒の力、暗黒のエネルギー物質の集合体である暗黒卿は、惑星地球（ガイア、ゲルダ）の人々を奴隷化するために働いている。

最近の5Gコントロールグリッドの設置は、そのようなコントロールの仕組みのひとつであり、人々の一挙手一投足を追跡・監視する手段としてのスマートフォンや腕時計の普及である。これにより、ユダヤ人は偏執狂的な恐怖の中で「安全で安心」だと感じることができ、イスラエル（モルドール）の状態のように、彼らが「ゴイム」（動物、家畜）と指定する非ユダヤ人の一挙手一投足を観察することができる。

そうすることで、彼らはゴイムを犠牲にして悠々自適の生活を送り、労働奴隷やアルコール依存症や薬物使用といった自己破壊的な生活習慣に服従させることで、彼らの生体電力を吸血鬼化する。

『スター・ウォーズ』のデス・スターのように、ユダヤ人監督ジョージ・ルーカスがカイクにこの方法を暴露したわけではない。非ユダヤ人、特にアーリア人に対する実際の物理的な監視は、現在進行形で一般的に広まっている現象である。

あらゆる地域のユダヤ人は、地球の果てまで広がり、アーリア人や非アーリア人の宿主の中に入り込み、ネットワークとして働き、宿主の敵である『他者』に対する偵察や妨害工作を行う侵略軍となっている。彼らは、宿主に戦争を仕掛けているのと同時に、宿主を翻弄し、利益のために搾取しているのだから、気づかない宿主の中で戦争状態にあるかのように振る舞う。

彼らは、常に他人の問題に立ち入り、自分たちが搾取し、自分たちの問題に忙殺されている人々に危害を加え、助けを装っているが、実際には邪魔であり、自分たちがなんとか逃げおおせる範囲で危害を加えている。

モーリス・サミュエルズが言ったように：われわれは破壊者である」とモーリス・サメルズが言ったように、彼らが潜在的脅威とみなす人々の監視とつきまといは、単に彼ら自身への直接的な危害の可能性を排除するためだけでなく、地球やおそらくそれ以前の惑星（例えば、核戦争で大気が破壊された火星は、ジョセフ・ファレルの『宇宙戦争』やリチャード・ホーグランドの『火星の顔』で詳しく説明されている。ジョセフ・ファレル著『宇宙戦争』やリチャード・ホーグランド著『火星の顔』が詳しく説明しているように、火星は核戦争で大気を破壊された経験がある。）

こうしてユダヤ人は、諺にもあるように、"Hell bent for leather"（革命を求めてやまない）のであり、潜在的であれ現実的であれ、反対勢力を無力化するメカニズムとしてギャング・ストーキングのテクニックを用いるのである、弱い体質の者は圧力に屈し、自殺するか、機能不全に陥った骸となる。それはユダヤ人の意図するところである。

いい男」を「もっといい男」にする

「その果实によって彼らを裁きなさい。これは特に、自らを "偉大で善良な者" と称する者たち、言い換えればフリーメーソンのロッジの自称 "神々" である者たちに当てはまる。

彼らの行動によって、人は帰納的推論によって彼らを理解することができる（記号からの論証、つまり彼らが「見え隠れする」ために用いる記号-象徴的な身振り、彼らが存在させる行動や出来事-から）。

彼らが創造するものはカオスであり、このカオスは創造主の性質が創造物から推測できるという事実に基づいて推測できるように、彼らの心の現れである。サイオンと名乗るものの創造は、宇宙法則の違反、すべての有機的生命の侵害（汚染、遺伝子操作、ケムトレイル、ビッグアルガ、ガソリンを利用した燃焼エンジン、発電所など）を通じて、本質的に自己破壊的なカオスの状態である。

ロッジの神々は『神聖なるもの』（ビーイング）の侵害者であり、投げられた神を篡奪する行為として自分たちの現実を創造しようと望んでいる。彼らのプロジェクトで行われることはすべて人為的なものであり、「存在」（総体）における存在者（有機体）の「存在」を害するものである。したがって、彼らは存在／『神』を侵害する者であり、自己中心的な思い上がりから暴力を振るっているのだ。それゆえ、フリーメーソンの言説によれば、彼らは「より良くされる」「善い」人間ではなく、むしろ、彼らを完全なトネリコ（別名、ユダヤ人のイメージで成形された石の塊）にする自己破壊的な儀式や行動、感情や思考によって、より悪くされる悪い人間（ルシフェルのアンドロジニーを目指すという意味での「人間」）なのである。

ユダヤ人に従属し、自分たちの部下である不敬な "ゴイム" の上位にいる加害者たちであり、部下は常に、自分たちの仕事を遂行するために上司が知る必要のあることしか知らないというやり方で、自分たちが出したどんな命令でも遂行する。

ヒエラルキーに基づく秘密結社では、下層部は上層部の行動を知らされず、上層部はトップダウンで暗示や提案という形で命令を出すという性質そのものが、組織そのものに隠し事が

あり、上層部は自分たちの動機や、嘘に基づいて活動していない正直なエリートなら意図の面で明らかにするような大きな目的さえも伏せるので、忠誠心が真理（メンバー間で共有されている目的に対する名誉／忠誠）に基づいている忠実なメンバーの力を自分たちの周りに固めるという嘘を意味している。それゆえ、コーシャ公認の秘密結社は、その本質において虚偽であり、秘密であることによって繕いを受け入れることができるため、腐敗（真理の腐敗）に陥りやすいのである。

それゆえ、「善人」をより良くするのではなく、半神になるはずの者たちのロジックは、実際には、そもそも敷居をまたいで入ってくるほど悪人だった者たちを悪魔化する坩堝なのだ.....そして、火の池へと続く控え室へと。

パープ・アーミー

闇の勢力は、精巧な古典的条件付けの技術によって彼らの心を条件付けることによって、奴隷的な大群を使い、破滅の軍団（その軍団を構成する運命にある者たち）を「霊的イスラエル」としてシオンの集合精神に同化させる。

これはユダヤ人が「神のもとへ行く」と呼ぶもので、自分たちが創り出したエグゴールの中で分解され、エネルギーの糧として吸収されることである。最終的にユダヤ人のオーバーソウルそのものは、吸血鬼的な必要性を満たすためにアーコンたちが糧とする魂の糧の精製されたアマルガムであり、彼らの存在の必須条件である。

これらの軍団は、アーリア人の宿主に対して、彼らは単なる糸で操られたマリオネットであり、トランスヒューマニズムのテクノ・クレイジー（RFIDチップの埋め込みとゾンビ化した奴隷と送電網の接続）による魂の吸血鬼化とそのロボット化によって徹底的にゾンビ化された、よく言えば（あるいは悪く言えば）半自律的な生き物に過ぎない、憑依された同人に過ぎない。

この軍隊は、単なる数の力と、彼らを破滅に導くサディスティックな黒魔術師たちの卓越した知性以上のものを持っている-それはアーコンに憑依されているため、牢獄から脱獄する恐れのある人々を奴隷にするという陰謀団の利益に奉仕する集団として、可能な限り機能している。

ハイブマインドの標準化は、魂を製造するための閉鎖システム監獄惑星ソウルファーム（「実を結び、増えよ」ゴイム）を創造するための最終目標である。従って、ユダヤ人吸血鬼は「異邦人の乳を吸う」ことができる。

その意図は、虐待された農奴のエネルギーをこれらの実体（ユダヤ人は彼らの宗教で『天使

』と呼ぶ) に供給することを可能にする、自己永続的な拷問マシーンである。人は戦争の武器で身を固め、敵に戦闘を挑むしかないのだ。

羊飼いを叩けば羊は散る」と、ユダヤ人口バート・グリーンがその著作『権力の48法則』の中で述べているように、犯罪者軍団は独立した意志を持たない暴徒である。犯罪者たちは皆、自分たちの中では英雄なのだ。彼らの「自己ではない」所有する集合意識は、シャンドル・ユダヤ人のそれをモデルにしており、彼らの主人である闇の勢力に支配された単なる衛星なのだ。

登場人物のカースト

古代ヴェーダのカースト制度では、全人口がカーストと呼ばれる4つのグループに分けられ、社会の構造として機能していた。

約5,500年以上前に北方からこの地域に移住してきた征服者アーリア人は、南方から来た黒人たちに農奴制の鎖を課し、彼らをカースト制度の最下層に追いやった。

アーリア人は、商人カーストと呼ばれる、下層と上層の間に位置する仲介者、あるいは中間的な存在で、後者に追加的に豪華な欲望を提供し、報酬を得る。

支配者カーストは、最上層を占め、神と人間の領域の仲介役を果たしたバラモン（司祭）カーストであった。クシャトリヤ・カーストは、秩序を管理し、領土征服に関与する貴族の戦士カーストである。この4つのカーストは、「偏愛者」またはカーストを持たない人々として指定され、シュードラ・カーストよりも下層に位置し、社会に参加することができないと敬遠された人々を自分たちから排除した。

アーリア人の支配下にあった当時の司祭カーストは、クシャトリヤと結びついた支配者として、かなり寛容であったかもしれない。司祭カーストは、煙と鏡の仲介を通じて大衆を操ることにおいて、常に偽善的で欺瞞的であり、そのために、将来いかなる時代においても、そして今日においては特に、その戦士の要素から切り離されたとき、余分なものであるだけでなく、国家の人々の発展にとって呪いのようなものである。

当時も今も、司祭カーストはかつてないほど腐敗しており、それは生まれながらの偽善者である司祭カーストと、逆説的に生まれながらのシュードラであるユダヤ人の存在に起因している。

司祭カーストは、その絶対的な権威と、その権威に対する挑戦の欠如に加え、その巧みな策略によって容易に調査される広範な大衆を個人的な利益のために欺く機会を持っていることから、常に退廃に向かう傾向がある。現在のユダヤ人やフリーメイソンの隠蔽された司祭カーストは、彼らの退廃性をさらに際立たせている。

クシャトリヤ・カーストは伝統的に、ヴェーダ時代のインドからプロイセン、国家社会主義

時代のドイツ、そしてその前後に存在した民族主義政党や国家（ポルトガル、スペイン、イタリア、ギリシャ、ブルガリア、フィンランド、アメリカ、日本、ルーマニア、ベルギーなど）に至るまで、歴史を通じてアーリア人が採用してきた、より男性的な態度や生活様式を社会（ユリウス・エヴォラの言葉を借りれば「有機国家」）に取り入れるよう条件付ける、より男性的な要素と結びついている。

このカーストの役割は、神の意志の仲介者として最終的な決定権を持ち、その腐敗がハイパーボレア時代とアトランティス時代から続く世界史を通じてカーストの退行を促進した司祭カーストと連動して、秩序正しく統制された社会を維持することである。

クシャトリヤ・カーストの欠点は、その個々の構成員（貴族）が、ヘーゲ尔的に言えば、普遍的なものよりも自らの特殊性を重視することである（「*権利の哲学*」参照）。このことが、神聖な権利を持つ強固な司祭カーストに自らを従属させることに失敗したことの本質的な軌跡として、現在の地位を超えて権力を争うライバルたちの間に分裂を生み出し、その結果、自分たちのために権力を篡奪し、司祭カーストの腐敗によって生じた権力の空白を埋めるための機会の窓を感知した。

現代では、もはやクシャトリヤ・カーストは存在せず、むしろユダヤ・メーソンの支配下にある傭兵部隊が、彼らの言いなりになっている。しかし、そのようなカーストの要素は、条件が整えば、クーデターや反革命によって、最後のカーストであるシュードラに対する権力を篡奪することになるだろう。

クシャトリヤ・カーストの危険性は、より崇高なアイデアを中心とする団結の欠如と、その権力に対する外部からの挑戦の欠如によって退廃に陥り、その結果、1789年からのブルジョワ・カーストによる権力の篡奪を可能にする退廃によって穴が開くことであった、第一次世界大戦が始まり、おそらく第二次世界大戦の頃には、その残党がまだ存在しているが、その権力は、どの政府機関や公的な君主権力よりも、より地下的な形態にある。

ヴェーダでは「ヴァイシャ」と呼ばれ、商人や貿易商のカーストを意味する第三の地位やカーストが、今やユダヤ人の手に権力を握られ、金と証券取引所の力によって、全人民を恣意的に支配している。

この時期、ユダヤ人たちは、アーリア人が自らの創意工夫と創造的意志によって作り上げたアーリア人の故郷の土地に、地球上の野蛮な地域から溢れかえる野蛮人の大群を輸入してきた。ボルシェビキ・ウンターメンシェンの私兵は、ブルジョア文化の残骸を破壊するために連れてこられ、その危機と演出された出来事を通じて、ブルジョア文化を破壊する。この危機と演出は、巣の中でうごめくユダヤのクモによって引き起こされ、ブルジョア

ジーを破壊するために彼の奴隷制度の紐を操る。

彼が発明した「アーリア人の特権」神話は、利殖と搾取によって富のすべてを得ているアーリア人の犠牲の上に、怠惰な寄生生活を送ってきた彼自身のカルマを転移させるメカニズムとして機能している。

彼はこの神話を利用して、I.Q.の低い非アーリア人（アーリア人と非アーリア人）をマインドコントロールし、アーリア人の大群や生物兵器（予防接種など）を使ってアーリア人大量虐殺計画を実行する準備のためにアーリア人に濡れ衣を着せ、あらゆる人々を支配するサイオン政府を実現するために、現実の劇場を舞台とした偽旗作戦を絶え間なく仕組んでいる。

カースト制度は彼ら（ユダヤ教の司祭カースト）とともに終わりを告げ、文明の完全な破壊とそれに伴う社会の崩壊へと回帰する。しかし、新しい日の夜明けの約束は、ソビエトの奴隷制の赤い夜明けの形ではなく、アーリア人種の太陽のロゴスの黄金の夜明けの形でもたらされる。このロゴスは、誇大妄想的なユダヤ人から権力を篡奪し、地上を完全に掌握し、地上に新しい天の王国、墮落した世界の混沌に秩序を課すインペリウム・アルバス（アーリア帝国）を保証する。

三脚の二足歩行スキーマ

今日、「人間」と偽って呼ばれている人々は、実際には多様な異種族であり、どのような存在でもある。

1) 物理的なスペースの近さと

2) 2つ以上の混合（混血）は、極端なカオスの状態へと導く。

それは、二足歩行の直立歩行または半直立歩行であること、具体的で明白な類似点があること、しかしそれらは決して同一ではなく、その代わりに生理学的、解剖学的に、また霊的にも根本的に異なっていることである。

最初に論じるのは、現代用語で「アーリア人」と呼ばれるヨーロッパ人／白人／アーリア人ではない二足歩行の存在である非アーリア人と、ユダヤ人である。

最初の存在は、それらが絡み合っているか、解剖学的／生理学的特性を共有している限りにおいて、関連していると考えることができる。一つ目の非白人は、ある程度混血しているとはいえ、今では絶滅した二足歩行の類人猿（ホモ・ネアンデルターレンシスなど）に由来す

る原始的な形質を最も多く持つ存在である。非白人とは、現在ネグロと呼ばれているもの、モンゴル人、アウストラロイド、そしてこれらの類人猿の血（遺伝）を割合に多く持つ人々のことである（ここでの「類人猿」という用語は、単に現在「人間」とされているものと解剖学的／生理学的構造において類似しているものを指す慣用的な用語として使われている）。

しかし、ブラヴァツキーが『秘密の教義』の中で述べているように、非白人、特に極東アジア人の起源は、第4のアトランティス根源民族の7番目の亜人種であるという、他の起源を持っているかもしれない。もしかしたら、彼らの起源は部分的に地球外生命体かもしれない。

第二のタイプはユダヤ人である。このユダヤ人は、第一と第三のタイプがさまざまな割合で混在しており、「脱人間」と呼ばれる。この憑依の側面は、おそらく非白人の場合にも当てはまるが、彼らが結び付いている特定の存在（黒人の場合の「オリシャ」のようなもの）は、地上に混沌をもたらす影響力が比較的弱いのにに対し、ユダヤ人の場合は、時代を超えて血なまぐさい旅を続けるユダヤ人の行動から推測できるように、最上級の悪意を持っている。

このように、ユダヤ人は脱人間であり、ここで考察される第三のタイプ、すなわちアーリア人または「人間」（「ヒューマン」、「ヒュー」または光を持つ「人間」）と結合することによって、ある種のハイブリッドな遺伝的・精神的（あるいはむしろ遺伝的・内面的）体質を持つことに基づいて、特定の実体を摂取する。

このタイプは、肉体と魂と精神からなる遺伝的・精神的体質を持つ者であり、その存在の後者の側面は、前の2つのタイプのそれを微妙に凌駕し、洗練された実質的なものである。アーリア人の創造的な原動力はこの原初的な能力から生まれ、それは神の意志の再現として語ることができる。

にもかかわらず、「主」からのこの「祝福」（カントが「超越論的知覚」と呼んだこの能力、松果体と脳下垂体という物質的形態に結晶化した高次の意識に基づく超理性的直観）にもかかわらず、彼らは類人猿との混血によって「恩寵から墮落」し、その結果、かなりの程度まで地上に縛られるようになった。

彼はアーリア人が誤りを犯しやすいことを理解しており、アーリア人を彼の視点（底辺から、下の「地獄」から、黄泉の国から）から見て自分の本性を完全に理解しているわけではないが、それでもなお、「誘惑」とでも言うべきもの、つまり、アーリア人の目に触れるように禁断の果実とでも言うべき様々な現象を提示することによって、アーリア人をさらに墮落させ、墮落させようとする。

セックス、ドラッグ、クラックロック、銀行強盗など、現代社会に存在するさまざまな形態の腐敗がその例だ。

物質主義的・感覚主義的な状態は、純粹に低次のエゴ的な俗物志向を超えて、制限された意識を高め、増幅させる能力の行使を通じて、より高次の、いや、より高次の存在の状態の「救済」の育成を妨げ、妨害する。非白人の存在もまた、アーリア人を無気力なまでに屈服させ、最終的には、アーリア人が畏に気づかないことによって、鉛の棺が集団墓地に転落させようとするユダヤ人の動機付けの重要な要因である。

歴史的に証明されているように、獣人は誘惑のメカニズムとして機能してきた：非白人や奴隷労働への依存によるアーリア人の退廃という形で、多くの場合、ユダヤ人の扇動によってと思われる奴隷の反乱によって非白人が破壊的影響力として利用されたり、古代エジプトで起こったように、自分の地位を高めようとするアーリア人を犠牲にして自分自身を有利にする手段として非白人が提供する肉欲的快楽にアーリア人が誘惑されたりすることにつながった、ヴェーダ・インド、そして近東と地中海の周辺地域で起こったように、自らの地位を高めようとするアーリア人を犠牲にして、非白人が提供する肉欲的快楽に誘惑されたのである。

このように、アーリア人の文明の没落を招いたのは、誘惑と墮落である。これがユダヤ人の悪意、つまりシャンダラーの恨みの道徳と結びついて、彼の最初の地位、つまり神々に由来する神聖な神人としての地位をさらに低下させたのである。

アーリア人の救済には、根源的な衝動を超越すること、獣の意識に鎖をかけ支配すること、その引力の上に自らを高めることが必要である。そのためには霊的な強さを身につけねばならず、それは解剖学上、松果体や脳下垂体といった神聖な意志の導管として機能する部位を鍛えることを意味する。時空間の腐食がうずまく世俗的な混沌から切り離し、高次の能力を発達させ、意志のコントロールを通じてそれらが与えるより大きな力を自分の中に統合するような挑戦を受けることを通じて、自己の周囲を上向きに志向するのである。

アーリア人はエネルギーの渦であり、自分を取り囲む崩壊の流れに抵抗することが、彼の存在の条件である。闇の力との戦いは精神的なものであり、地獄の力に対して自己を展開するための訓練と発達が必要である。

反人種の傭兵

現代世界で「成功したメンバー」として描かれる人々は、「彼らが到達したものを得る」ための必要条件として、必ず反人種主義、平等主義という普遍主義の信条の支持者であり、その体現者である。このシステムは、反人種主義信条の創始者たち、そしてその最大の模範であるユダヤ人たちによって支配されているからだ。ユダヤ人たちは、この信条を「有機的な

嘘」（原罪は、「主を喜ばせる」ために、すべての人がその周囲を巡礼し、頭を下げることを強制される、セム人至上主義の神聖な偶像として修飾されている）として、自分たちから有機的に発展させてきたのである。

ユダヤ人反人種の便利なバカであるシャボ・ゴイムは皆、シオン帝国でユダヤ人皇帝の絹の衣をまとい、ユダヤ人の排泄物（彼の *entartete kultur*）がシノーラであり錬金術の黄金であるかのように装って、彼の犯した混乱を片付けなければならない。体制は、反人種、フリーメーソンの「ユマニタス」の神聖な偶像を、ユダヤ的な「唯一なるもの」、英語で「神」と呼ばれるようになったものの前に、「すべてはひとつ」というアイデンティティのない普遍主義を称揚しなければならない。

彼らは真の哲学的な金を、神よりも金貨を崇拜する世俗的な富の愚かな金と交換し、二人の主人さえ持たず、むしろ金貨と宝石の主人に金の鎖を首に巻 き つ け ら れ て い る。

これこそ、彼らが生贄として捧げる偶像である。平等の金の子牛、アイデンティティのない反人種、「混成多数」の量的抽象であり、その混成は、「人的資源」と呼ばれる普遍的な商品において、違いの倒錯したアマルガムを達成するメカニズムとして、違いを暗示しながらも意図的に無視されている。

これは、寄生虫である富豪の司祭カーストによって搾取され、売買され、交換され、快楽的に（社会資本の蓄積と、自分の「人道主義的美徳」の誇示に伴う重要感という意味で）自分たちを富ませ、ブルジョワのアイデンティティの特徴的な定義として金銭的に自分たちを富ませるように設計されている（それ自体が普遍主義によって否定され、せいぜい金の壺に偽善的にしがみつきながら、せいぜい余暇階級の排泄物で満たされた小便壺を持つ人々とのアイデンティティを肯定している）。

反人種の傭兵たち、特にアーリア人ブルジョワジーは、シオンの領域のコインを売買し、金貨を蓄えながら、謙虚で名誉ある仕事をする人生を送っているふりをし、特徴的な偽善的なやり方で、「人類」の祭壇の上で自らを犠牲にするふりをしながら、実際には自分たちのエゴと自己肥大の祭壇の上で奴隷階級を犠牲にしている。

しかし、今日のブルジョア世界では、彼らは社会の下層を征服し、その犠牲を命じる「神の光」を授ける「王家の特権」を持っているわけではない。

少なくともかつての貴族は、現代のように民衆を落とし穴に突き落とすのではなく、泥沼から自分たちの民衆を救い上げていた。かつての貴族たちは、退廃的なハイパー・セクシュアリズムによって墮落し、自分たちの事実上の「子供」である下層階級の農民に対する配慮義務を怠った。今、ブルジョア階級は自らのハイパー・セクシュアリズム（リビドー・ドミナント）を謳歌し、内なる退廃と、その憎悪をなだめ、なだめるために使われる偽善の微笑みの仮面を見抜いた農民階級から向けられる軽蔑と憎悪によって、自らの破滅を招いている。

。

農民カーストもまた、時間のサイクルのこの段階において、かつての恩寵から墮落している。(現実を認識する限りにおいて、必然的に) 自らを維持するために必要なもの、すなわち、自分だけの土地とアイデンティティの条件、すなわち、「*suum quique*」の原則に基づき、自らの本性に従って慣れた仕事を遂行する栄誉を否定する社会経済的優位者を尊重することができないのである。

農民は今、反人種主義の教義に感染し、ユダヤと裏切り者のブルジョア国際主義者が仕掛けた罠に陥っている。そして、神の火花を持つ最も純粋な要素だけが、そこから抜け出すことができる。

アーリア人の血の記憶を持ち、マット・ヘイルがサイオンのマルチカルチャーのるつぽと呼んだ「クソシチュー」から自分自身と潜在的に他の人々を救い出し、鍋全体をその下で猛り狂う火の中にひっくり返し、反人種の排泄物を地獄に追放することができる者たちである。このような大胆なジェスチャー、つまりボン・ジェスチャーによって、錬金術的な魔法によって「善」、「真」、「美」を沈殿させれば、悪の大群である下痢の奔流を克服し、土地を浄化して永遠の形の世界（「ヌン・スタン」、永遠の今）、最初のハイパーボレアとアーリア人種への回帰、大地の浄化の後の大地の再生（カバラ主義的な律法学者やファリサイ派の捏造版ではなく、本物の「ディックン・オラム」）である。

反人種は、自らの極悪非道な錬金術的変換のニグレド段階に入り、グラールをその台座から奪い取ることも、神々の冠からエメラルド（黒い太陽を經由した緑の光線）を取り戻すこともできず、欠けていることに気づく。

超越的な直観と存在への同調による知性の克服（自己克服）を通して、普遍主義のエゴリククな触手から自らを切り離すことによって、このようなものを得ることができるのは、王家の血統を持つ者たちだけである、腐食性の水の奔流の中で、生命維持者として自分自身（自分自身）を維持するために、模造的な知識対象にしがみつ手段として、「なりゆき」の氾濫の中で意識の自己反省の様式を通して「存在」を否定してきたセム主義の合理主義を克服する。

セム人は、自分の存在（反人種として墮落し、墮落した）を救おうとして（「begriff」）なりゆきをつかむが、ただ幻想をつかむだけで、存在（神）との対決で身を守るための幻想的な自己防衛である概念的抽象化という牢獄に安住しながら、激流に流されていく。これとは対照的に（正反対に）アーリア人は存在に宿り、ヘリコプターにしがみつアクションヒーローのように激流から逃れ、下界の大渦、崩壊の流れから逃れ、オリンピアの高みに昇り、種族の人としてエメラルドの冠を戴く。これは階級を超えたものであり、掴みかからんばかりのウンターメンシュの爪の手に対抗する魂の貴族の自決である。）

ダーク・カースト制度

カースト制度は存在／「神」の機能であり、スピリットが結晶化した物質に分化した秩序であるため、決して消滅することはないし、消滅する可能性もない。すべての有機生命体は、それ自体を階層的に配置するものであり、これは、それに反する人工的なエンジニアリングに関係なく、またそれにもかかわらず、である。

世界を支配する陰謀団は、人種とは無関係の「普遍的な兄弟愛」の状態を幻想として作り出そうとしている。

この幻想はもちろん、ユダヤ人が敵（ユダヤ人でない人々）の階層を低くし、権力争いの競争相手に対して優位に立つ可能性を高めるという（表現されていない）目的のためだけに採用されている。

ジュリアス・エヴォラの『現代世界に対する反乱』で語られているように、アーリア人カーストが有機的に変容していく過程と、ユダヤ人とフリーメーソンによる革命の火種によって、アーリア人カーストは最低レベルまで落とされた、その高みから引きずり下ろされ、「闇のカースト制度」と呼ぶにふさわしいシャンダルの逆カーストに取って代わられた；非アーリア人、人間化されたアーリア人、シオニスト・クリスチャンなど）である。).

この暗黒のカースト制度は次のような構造を持っている：

1) その下の層とは、偽りの光とそれを自分たちの中に封じ込めるという意味での「下」であると同時に、相対的な社会的・経済的地位や政治的・時間的権力という意味での「下」でもある。

2) アルコンたちの下にいるのはユダヤ人たちであり、彼らの主人たちとともに働き、血統や特別な血の調合（DNA）という点で彼らと結びついている、地球上の目に見える混沌の代理人たちである；DNST-3統合失調症遺伝子）、そしてヘブライ語のカバラ（バブロン・タルムードのゾハールのセファール・イエツィラー）に基づくオカルト的儀式を経ている。

当時も今日も、その方式は同じである。すなわち、メルキゼデク位の羊飼いの王である祭司たちが、「神」／「存在」と、適切な血統と儀式を通じて照らされていない有機的形態（ゴイム）との仲介者として、奴隷たちを支配しようとしているのである。

アーコンとユダヤ人の関係は、エネルギーとエネルギーの*見返り*交換である。ユダヤ人はカオスを作り出し、それが非ユダヤ人の争いを誘発して彼らのエネルギーを解放し、それをアーコンが吸血鬼化する。この交換は、ユダヤ人の拷問殺人の儀式を通して行われ、シナゴーグやメーソンロッジ（より私的なもの）、あるいは偽旗テロ作戦のような公共空間といった、大小のトポスの文脈の中で行われる。

ダーク・カースト制度におけるユダヤ人の下にいるのは、ユダヤ人の影に付き従い、偽りの光を浴びる、人間性を失ったゴイム（シャボス・ゴイム＝イディッシュ語で「愚かな動物」）である。彼らは自分たちの同胞を背後からナイフで切りつけ、反人種的な「ヒューマニズム」やアブラハム的一神教の中で、傲慢な見栄のもとに「人種を超えた存在」である自分を思い描き、低次の自我の中に閉じこもっている 売国奴たちである。彼らはユダヤ人に魂を売り渡し、同化されたエゴール（思考形態）の影響によってユダヤ人と結ばれ、まるで悪魔の鎖につながれたかのように、ユダヤ人の手先として利用されるようになる。ゴイム」は、オカルト的な「権力と支配者たち」によって吸血鬼化された、単なるアンソウル化された殻（クリポット）、あるいは生体エネルギーの容器である有機的な形態を表している。

このシステムを強制するために、オカルティストたちは、台形構造の可動部分（物質的な形ではオカルティストたちから下；非物理的なピラミッド型構造のキャップストーンを構成するアーコン）を接着し、彼らの命令を実行するために下層の手下たちを動員する絆として、彼らの黒魔術を利用する。

このシステムは、シオンの吸血鬼たちの黒魔術の影響によって、強制されるように「条件付け」されている。シオンのコーシャのバッジと記章を身につけたシステムの執行者たち（警察と軍隊）は、オカルトの神権者たちの命令を何の考えも疑問も持たずに熱心に行い、ゴイムの農奴階級、つまりプロレタリアの「労働者」たちに、彼らを人間の電池として陰謀団に縛り付け、行為と不作為によって彼らの大量虐殺を容易にする経済的な鎖を押し付ける（外国人の大軍に自分たちが取って代わられることを受け入れなければ、彼らをテロリストとして認定する）。

ジオンの殺人マシンのレバーを引き、ノブをひねる役所の「神の人たち」は、下層部の偽善者たちに支えられているが、その程度は低いことが多く、また多くの場合、彼らの専制政治に内心反対している。

農奴のスードラ・カーストは、創造的で生産的な行動という点で、アーリア人のカーストとなっている。しかし、アーリア人はその居場所を追われ、追放された人々（ホームレス、失業者）のカーストへと追いやられている。特に退廃したアーリア人ブルジョワジーによっ

て、本来の居場所をユダヤ人とその大群に篡奪されたアーリア人によって、生活困窮者や疎外された人々の数は増え続けている。

不満を抱くアーリア人がもはや高次の生活様式を実行する手段を持たず、それ以上に基本的な必需品である「低俗な生活」の必要条件を満たす手段さえ持たなくなったからである。

実際、すべてのアーリア民族のワイマライゼーションは進行中であり、それを前提にすれば、農奴カーストとその上位階級の健康な人々の多くが、自分たちの生存の危機に気づいている今、現代世界に対する反乱の根拠となる。

闇のカースト制度は、新しい光のカースト、つまり「血と魂」の新しい貴族制度に取って代わられなければならない。

光のカースト

闇の勢力のカーストに取って代わるべきカーストとは、闇のカーストの逆転、すなわちハイパーボレアへの回帰、アーリア人の純粋性の黄金時代への回帰、シオンの地獄世界の靈性化である。アーリア人種のオカルトの裏切り者たちと、その墮落しきった配下たちすべてを打倒することが、その黄金時代を実現させるのであり、それは何よりもまず、アーリア人の靈的覚醒、墮落した状態の神の火花を再燃させることによってもたらされる。

マインドの太陽の光のカーストの最上位層は、戦士の司祭カーストが占めることになる。クシャトリヤ貴族は、「神／存在」の法則に基づいた秩序ある社会／国家を保証し、地球上の調和の均衡を維持し、アーリア人種の集合意識を神格化された状態へと発展させ、実力主義に基づく普遍的秩序の階層内の最初の地位へと戻す。

普遍的秩序とは、絶対的なものの特殊化、具体化に過ぎず、シャンダル篡奪者の暗黒カーストに蔓延する平等主義的な意味での「普遍主義」ではない。

光のカーストの中では、すべての者が秩序の維持と保全に力を注ぎ、すべての者が神の意志に従って（調和的に、秩序正しく）生きようになる。このシステムは、アーコンの闇に対抗するために整列し、北の光の聖なる炎の保存に向けて働く善の力と結びついて、自らを強化するだろう。

イル・ウーマン・アット・アイ

自らを「照らされた者」と称する者は、実際には偽りの光を植え付けられているだけであり、それ自体は従来「悪魔の憑依」と呼ばれてきたものにすぎない。彼らは「マナス」（サンスクリット語で「心」）において、またエゴ／私／自己に関連して「病んでいる」人たちである。彼らは真の自己を失い、小さなボペップのように、それをどこに見いだせばい

いのかわからなくなっているのだ。彼らに取り憑いている実体や実体が、彼らの意識を独占し、おそらくは自分自身を意識の代わりにさえしているため、「私」(icheit; 「私らしさ」)を消滅させてしまっているのだ。

イルミナティは、目に見えない糸で操られる操り人形となり、イルミナティ自身はアーコンの糸で操られるマリオネットに過ぎないユダヤの人形師ストロンボリに操られるピノチオとなるように、彼らの行動を操りコントロールするために、彼らのカバラ的ゲマトリアとヘブライ語の公式を用いる。

このように、ユダヤ人の主なテクニックの一つは、社会のトップ、エリートの意識をオカルト的に篡奪することである。ポリシェヴィキ革命の際、暗殺されたニコライ皇帝の壁にヘブライ文字でこう書かれていた：「王を殺せ、王国を殺せ」。ユダヤ人の盗作者で歴史を改ざんしたロバート・グリーンンの著書『権力の48の法則』には、「羊飼いを叩けば羊は散る」と題された章の中で、ユダヤ人の黒魔術の呪文がはっきりと綴られている。これがユダヤ人による専制政治の手順である。

『シオン長老の議定書』にフリーメーソンについて書かれているように、ユダヤ人はロッジでフリーメーソンを惑わし、彼らの好奇心に訴えかけ、オカルトの奴隷化という彼らの馬具にゴイム家畜を誘い込む手段として、不思議と煙と鏡を出す。

ロッジの虜になり、ヘブライ語の呪いを自らに課しているアーリア人の上層カーストは、ユダのカモであり、ユダが国家を妨害する仕組みとして利用する猫の足である。ひとたびユダの集合心理に取り込まれると、シャボ・ゴイムは彼らの操り人形となり、オカルト階層に行けば行くほど、メーソンリーで高階層に行けば行くほど、より束縛され、その機能において自律的でなくなり、腐敗の度合いを増していく。

だからこそ、「イル・ウーマン・アット・アイ」は、自分自身の特定の知識セットとコンテキスト（時空間条件）に関連して、俗世界で自分の仕事を遂行することが依然として求められるのである。憑依のプロセスは、実体（ロッジの「邪悪な天才」）との完全な融合、あるいはエレガントな対応（「エレガント」とは、ここでは美的な意味ではなく、数学的・幾何学的な意味である）。

イルミネーションは「イル-U-マン-アット-アイ-オン」と訳されるが、これは自分の（「U」）マインド（「マナス」-「マン」）を「病氣」（アリストテレスのギリシャ語では「カコス」）にすることを意味し、これは実体やロッジのメンバーによって「個人」、つまり対象の「私」に行われ、彼らを「イル-U-マン-アット-アイ」にする。これが偽りの光を灯すプロセスであり、大公とその物質的道具であるユダヤ人が、エリートであるゴイムを完全に支配し、国家を彼らの「世界連邦」に同化させ、人種もアイデンティティーもない「個人」の「統一国家」とする手段である。R.R. トールケインの神話では「サウロン」と呼ばれている

。

すべてを見通す目は、リングの亡者のように、あるいは白い手（メーソンの白い手）のサルマンのように、彼の奴隷の配下として、照らされたゴイムの目を通して見ている。サルマン、"III-U-Man-At-I"フリーメーソンは、オルサンクの塔で奴隷たちの上に座り、手下たちを眺め、ブランデーを一口飲んで嘲笑う。その時、ドアをノックする音が聞こえ、苛立ったサルマンは「何だ! 」と吠えた：「サルマン...都が攻撃されている! 」。

サルマンは顔をしかめると、ブランデーのグラスを暖炉に投げ捨て、マホガニーの机の上に置いた駕籠に駆け寄ると、城壁の外にある攻城エンジンが、中つ国の戦士たちによって武装され、戦いに備えているのを観察した。

サルマンは魔法使いの杖をしまってある戸棚に向かい、城壁に面した塔の窓に向かう。両手を広げ、呪文を呼び出そうとしたとき、杖につけていた駕籠の中に、錬金術のニグレドの段階でモリアでバルログと戦い、今や不滅の金剛のダイヤモンド雷光体を得た善良な魔法使い、アーリア人ガンダルフの姿があった。

その時、上空の暗雲からアーリア人の熱いエネルギーの稲妻が放たれ、彼の黒い心臓を打ち抜き、彼をこの孤高の岬から、下界の技術的な怪物の中にいるオークや雑種の方へ投げ飛ばした。彼の無残な死体は虚ろな目で天を仰ぎ、死に際の祈りには何の反応もない。サルマンは、中つ国の罪なき子供たちに対する自らの卑劣な儀式の応酬を、ついに体験することになる。ユダヤ人とは、火の池を運命の場とする呪われた子供たちなのだ。

世界アリーナ

そこで勝利を得るためには、世俗的な世界を知らなければならない。

マンハント

70年代後半から90年代前半にかけてのアクション映画には、エリート集団がスポーツとパワーラッシュのために孤立した個人、特に非白人やユダヤ人を標的にする人間狩りという行為を描いたジャンルがある。実際の人間狩り（ベルタン狩りなど）という現象は、「光の子」であるアーリア人種と呼ぶにふさわしい人々に対する破壊の先兵として、ユダヤに率いられた地球の闇の勢力によって常に行われてきたのだから。

現代の（そしてかつての魔女狩りが物語るように千年前の）ベルタン狩りのバージョンであるギャングストーキング現象では、特に金髪碧眼のアーリア系の女性やその他の北欧系の血統が、生け贄として儀式的な拷問殺人の形で、闇の陰謀団に狙われ、十字線上に置かれる。

特に北欧の高貴な血統の人々こそ、ユダヤ人たちが標的とし、抹殺しようとしているのだ。彼らはアーリア人の高次の意識である血の記憶を体現しているため、アーリア人の高次の直感（超越性）、その決定的な属性であるルシファーの王冠の聖なるグラール（エメラルド）を通して、陰謀団の意図と手口を覆い隠す最大の脅威となる。

ユダヤ人たちはこの事実を知っているからこそ、マインド・コントロール（黒魔術の催眠術のような影響力を彼らの手先やカモの心に及ぼすこと）を通じて、罠にはめた半端者の捕らわれの奴隷たちを総動員しようとするのだ。これらの操り人形は、自分たちの権力と利益を得る手段として、ユダヤ人寡頭政治に仕えるように世代を超えて飼育されている。

今日、これらの手先は、世代交代した軍隊や警察、そしてユダヤ人の気まぐれに応える世代交代した水汲み人や木こり人であり、彼らの行動や言葉から推測するに、ユダヤ人自身が、グノーシス主義では「アルコン」、ヴェディズムでは「アスラ」として知られるアストラルの寄生生物である存在に取り憑かれているようだ。

これらの実体は、（T.S.エリオットの言葉を借りれば）これらの「空洞のある人間」の身体に化身し、彼らをフランケンシュタインの怪物のように鞭打ち、彼らの支配母体に対する脅威となるもの、特に彼らの人間狩りのターゲットであるアーリア人（「人間」はサンスクリット語の「マナス」に由来し、「心」や高次の意識原理を意味する。）

アーリア人はマトリックス・キューブの鎧の隙間に気づき、それをこじ開け、あるいは最も脆弱な部分に焼夷弾を取り付け、爆発させることができる。

このような理由から、ユダヤ人はアーリア人に偏見と悪意をもって狙いを定め、その悪意を奴隷カーストに押し付けるのである。

ギャングストーキングはポストモダンのベルトハントであり、標的にされた個人は、自称司祭カーストが自分自身とI.Q.の低い非国民の手に握られたマイクロ波武器で火あぶりにしようとする魔女である。

近代以降のマンハント（「マナス」ハント）魔女狩りは、ユダヤ人司祭カーストが魂を破壊する無数の微細な技術を通じて破壊しようとする犠牲者の魂の苦痛と死のエネルギーをアー

ロン人に与えるオカルト儀式である。アーリア人は戦争用の武器で身を固め、戦闘を通じてダルマの報酬を得るために全力を尽くさなければならない。

光と闇の間の闘争は続いており、アーリア人は、ユダヤ人の悪とその地獄の主人たちとの永遠の闘い、永遠の戦いに身を投じる義務がある。目標とする者は、自分自身が狩人であり、敵の裏をかき、捕食者の大群の少なくとも一部を餌食にしなければならないが、より高次の存在である彼は、敵に狙いを定めて死ぬかもしれないが、少なくともアーリア人にふさわしい形でこの世を去るだろう。

「マナス」は、アーリア人の魂を求め、シオンの母体に対する脅威を破壊するために、ユダヤ人のキケオデーモンとその獣のような軍団は、敵の犠牲の上に 血の渇きを満たそうと 狂信的な熱意をもって追い求める。無意識の大量意識を操り、敵に対して破壊の道具を使う操り人形のように操り、敵のエネルギーを貪ることを目的とする古代のアストラル寄生虫の影響によって、駆り立てられる。

アーリア人は、敵に執拗に追い回され、苦しめられるが、霊的な世界ではすでに勝利しているのだから、必要であれば、この世で死ぬまで戦わなければならない。こうして敵と戦うことで、彼は「勝利とヴァルハラ！」とすることができ、そうすることで天界に自分の居場所を確保し、弱った瞬間を除いて一度も離れたことがないまま、来たところから戻るのである。

サイバネティック・ベアリング

ユダヤ人占領政府は、サイバネティック・コントロール・システム（人工衛星やRFIDインプラントと連動した携帯電話塔のアレイ）を利用し、ユダヤ人が非ユダヤ人である「ゴイム」に押し付けようとするノアヒデ・ローの細部に至るまで遵守するよう、住民をマインドコントロールしている。

その先にあるのは、（マトリックスに囚われた）彼らの限られた意識と知識の状態では、ほとんどの人が知らず、信じられないような、さらに邪悪な意図である：それは、スーパーコンピューターを通じて、ユダヤ人の隠された手によってプログラムされたさまざまなプログラミング・アルゴリズムに従って行動するように、彼らに電磁気的な鎖を課していることである、自律的に作動し、アルコンティックな存在による魂のエネルギー採取のための

サイバネティックな監獄惑星を作り出し、かつての人間（今やロボット化された奴隷）の魂を、吸血鬼的にその生体エネルギー源を糧とする これらの存在によって血抜きされるパワー・エネルギーの単なる受け皿とする。

これこそがトランスヒューマニズムの下心なのだ。かつては自律的だった存在を、囚われの魂に変えるのだ。このプロトコルを実現するための手段（上記のテクノロジーを押し付ける以上のもの）には、盲目の大衆の同意が必要である。これがユダヤ人による非ユダヤ人の奴隷化の鍵である。ユダヤ人は、自分たちがしようとしていること、あるいはしようとしていることを、それを実行する前に非ユダヤ人に明らかにし、その責任を非ユダヤ人に転嫁することによって、（彼らのカルマの理解に従って）カルマを解消するのである。

ユダヤ人によれば、これは1月1日（新年）または毎年行われるコル・ニドレの祈りと同様に、彼らの罪を赦すものだという：「その年のすべての誓い、約束、合意を事前に終わらせることを誓う」。ゴイムをサイバネティック・コントロール・グリッドに閉じ込めることは、ゴイムを奴隷にする手段であり、それが達成されるのは、彼らが自ら閉じ込められることを許した場合のみである。

したがって、非ユダヤ人に対して行われていることを伝える、非常に控えめで、しばしば象徴化されたコミュニケーション方法、つまりユダヤ人が予期しているようなサインやシンボルによるコミュニケーションは、理解を得るのが非常に困難である。

サイバネティック・ペアリングは、ゴイムの意識を操作するテクニックの一つである。刺激と反応を対にするのだ。携帯電話塔から放送される電磁場という刺激と、メディアのプロパガンダという追加的な刺激、そして現実の劇場で劇俳優として演じるユダヤ人の行動モデリングである。このことは、ユダヤ人が作り出した特定の出来事に関連して彼らの行動を模倣するように、あるいは、できるだけ公然と行われるユダヤ人側の純粋な反応を単に利用し、利用するように、住民を条件づけるものである。例えば、道徳的な憤りや人道的な愛と平和の誇示は、非ユダヤ人が彼らの行動を模倣し、それがユダヤ人の意図にできるだけ沿うように複製されることを期待して行われる。

非ユダヤ人の五感に突き刺さるRF（無線周波数）とメディアのプロパガンダという刺激の組み合わせは、非ユダヤ人の側にある一連の行動反応／反応をもたらす。このような因果過程は、ユダヤ人が実行し、非ユダヤ人のほとんどすべてに作用する、自分自身の思考や意志の力によって到達した、あるいは単に意識の「自然な」事実として持っている、自分自身の考えや意見、信念、アイデアであると信じているものは、実際には単なるプログラミングにすぎないのである。

実際、彼らが受けているプログラミングによって意識が自動化されることによって、そのようなメタレベルの思考プロセスに到達することはめったになく、その結果、彼らの「心」を構成する意識のレベル、つまり、彼らの自我／私／自己と呼ばれる全体的で可塑的な存在を構成するすべての反射／反応と感覚のアンサンブルまたは総体で、単に「存在」すること

になる。

彼らはゴイムであり、プログラミングの構築物であり、決して自律的ではなく、せいぜい半自律的な存在である。彼らは、マトリックスの奴隷にされ続け、自分の心や他人の心を取り囲み融合させるマトリックスの絆を断ち切ることができないように、彼らのために電磁的な鎖を作り上げているのだ。

こうしてジオンマトリックス・サイバネティック牢獄惑星では、すべてが汎神論的ワンネスに融合され、エントロピーによってそれ自体が崩壊し、すべてが「神のもとへ」行き、個性というか人格が消滅する。サイバネティックな「モノのインターネット」の中では、すべてが「個」であり、モノでありながら全体の機能にすぎず、無限に複雑なノード・システムのノードなのだ。

しかし、これらの様式は、自分たちにとって『他者』であるもの、すなわちアーリア人の条件である自動車輪の状態に到達することを可能にする持続可能なシステムを持たないことで、単に自分たちの力の崩壊をもたらすアーロンの存在とそのユダヤ人口ロボット奴隷に吸血鬼化されることによって、自ら崩壊していく。

アーリア人とは、ジオンの奴隷マトリックスから自らを解き放った意識の持ち主であり、牢獄から自らを解き放つことのできる唯一の存在である。

しかし、それは時空間的なモノのインターネットを"超越"しようとするのではなく、むしろ天の王国を地上にもたらし、ジオン支配のマトリックスの蜘蛛の巣を取り除くことなのだ。

その解決策は、偽りの「現実」と現実そのものとの違いを理解すること、そして、意識と直観を高めることにある。物事を偽りの現実（偽りの連想）へと欺くペアリングを覆い隠し、ユダヤ人の構築物と、彼らがそのシミュラクルとペアリングしようとしているものとの間のつながりを断ち切ること、つまりマヤのベールを引き裂くことである。

身体、ひいては心にまで侵襲的なテクノロジーが押し付けられている今、唯一の選択肢は、意識を高め、ジオンの専制政治が何であるかを暴露し、最も効率的かつ効果的な方法で幻想のマシンを停止させることだ。サイバネティック・グリッドから自分のプラグを抜くことは、健全な精神を持つ者の最優先課題であり、自由や調和の世界が存在しないことを理解できる健全な精神である。そのような明白なこと（健全な心を持つ者にとっては明白なこと）を知覚できない者は、マトリックスに取り込まれすぎていて、自らの努力や意志の力では抜け出せないため、さらに幻滅させようと試みるに値しない。健全な精神の持ち主は、剣を鞘から抜き取り、アーリア人の義務を果たしている彼らや他の人々を奴隷にしている絆を断ち

切らなければならない。

平和」か「欠片」か？

平等カルトの信奉者たちが「平和」をめぐる絶え間なく叫ぶのは、彼らの専制政治に対する反対意見を封じ込めるための鎮静剤の役割を果たしている。平等カルトとその信条、すなわち「すべての男性（女性や他の二足歩行の感覚を持った生命体）は平等である」「平等化されなければならない」という信条に疑問を持ったり、少しでも反対したりすると、その反体制者を検閲するこの消極的攻撃的な手段に会うことになる。

陰謀団の言説とその意味論に従って「平和」と言うことは、平等カルトの要求に従わない者、つまり「平和」の旗の下に飛ぶ者は、テロリストとして描かれ、そのような反対から「締め出される」ことを意味する。さらに、彼らの内面に関わるすべてのもの（家族、人種、文化など）を抹殺し、平和のアンチテーゼ、すなわち「暴力」と結びつけるのだ。

このように「平和」は、最大限の力、つまり銃の「破片」による殺傷力によって達成される。合理的な力」として解釈されるのは、「平和」を侵害する「違反者」に対して、その侵害をやめる機会を与えると称する力の行使にすぎない。合理的な力」という概念の不合理さは、標的を「平和」の「違反者」と解釈するという事実にある。この解釈は、平等カルトの言説によれば、標的を捕らえ、照準を合わせ、標的に対して致命的な力を行使する「正当化」を構成することができれば、直ちに最大限の力を行使することを正当化する。

それ以上に、ギャングストーキングは（国家が支援するテロリズムとターゲットに対する永続的な低級な嫌がらせという『コミュニティ・ポリシング』戦術）、ターゲットに対して『合理的な力』とみなされるものを押し付けるために利用される。

このように、陰謀団が『平和』と呼ぶものに従わない者は、即座に暴力的であると描かれ、陰謀団が『平和』と呼ぶものは、住民の持つ権力を無効にするものであることがわかる。

独立した農地の所有や自給自足のプレッパースタイルでの生活から、陰謀団とその運営に疑問を投げかけたり、絶対的な権威（「地上の天の王国」）としてその前にひれ伏さないようなあらゆるコミュニケーション手段の使用に至るまで、ザイオンの汎神論的なパノプティコンから独立するいかなる形態も「有害」または「暴力的」として描かれる。

それが「市民」の手にある「一片」（銃や護身用の武器、伝統的な自由人の印）であれ、暖をとるための薪ストーブであれ、そしてこれらの所有物の意味（体制からの離脱、つまり大衆から独立して生き、大衆とともに共産主義の穴に引き込まれるのを避けるための手段）や、伝統に基づく本物の精神性から派生する知識の形態であれ、特にユダヤ人は、自分たちの権力のための競争相手として、これを排除したいと考えている。知識（グノーシスの意味での）とは力であり、欺瞞と真実の隠蔽に基づく権力、そして結果として自分たちのために、

他のすべてを排除して権力を独占する権力において、陰謀団を最も脅かすものである。

そのような「平和」は、実際にはすべての活力と闘争の停止である。それが達成されること（創造主の創造性の単なる否定であり、創造主の創造性の破壊による創造主の破壊として、反達成）は、心の不毛をもたらすことであり、民衆の完全なゾンビ化を達成することである。これはソビエト化の必然的な結果であり、両者は同じコインの裏表に過ぎないため、キリスト教化と等価である（キリスト教はオズワルド・シュペングレーが言ったように「ポリシェヴィズムの祖母」である）。

表現の自由を破壊することによって意識の自由を破壊することは、社会を破壊する条件を整えることである。社会は、自由奔放な創造的衝動を原動力として必要としており、それがなければ存在なくなってしまうからだ。このように、検閲によって意志を密かに抑圧するという意味で「平和」と呼ばれるものを達成することは、持続可能な社会を可能にする天才的な原動力を完全に欠いているため、もはや国家ではない、創造性のない「国家」という墓標を達成することなのである。

陰謀団は、アーリア人は生まれながらにして創造的であり、自分の心に制限を加えられることに反抗しようとする、そして自分自身を黄ばませることは、創造主としての自分の存在そのものを否定することであることを理解している、いわば「芽のうちに摘み取る」ことで、アーリア人の反抗的な傾向を服従させようとしているのである。

懲罰的精神医学や「救済の学問」が登場し、国家に批判的で、反抗的な行動や暴言などによって「平和を侵害」していると見なされる人物に対して課されるのは、このような場合である。そのような行動をとる者は、『地域社会』にいるさまざまなスパイやネズミに警察に密告され、そこからその人物に対する捜査が始まる。ユダヤ人とその手先によって組織された噂のキャンペーンと、「危険で不安定」であるというターゲットのアイデンティティの確立や構築が行われ、最終的な目的はその人物を強制的に施設に収容することである。

そこから、強制的な薬物投与か、マイクロ波や粒子ビームなどの高度な兵器、あるいは（黒カビやグリホサートなどの）単純な食物、水、空気への中毒によって、彼らの終末を迎えることになる。

少なくとも、もし彼らが命からがら逃げ出しても、強制的に施設に収容されたことで、あらゆる人々の目から信用を失い、その結果、彼らのメッセージは、精神疾患や、あるいはそのような診断や施設収容行為に潜在する「暴力」、すなわち「平和」の乱れという暗黙の可能性と誤って結び付けられることになる。

結局のところ、ユダヤ人占領政府自身が証明しているように、達成できる唯一の平和は、「駒」、すなわち銃、殺傷力の信頼できる脅しによって得られるものである。陰謀団は、その暴力に対抗するあらゆる形の暴力、つまり、権利の名の下に「市民」に対して殺傷力を行

使することを、暴力そのものと見なすプロパガンダ装置を使いたかったのだ。

単に『市民』が、防護服やブレキシガラスの盾など、護身に必要な（そして純粋に防御に必要な）最も乏しい道具を所持しているだけで、『暴力的』で『違法』、つまり『平和の妨害』と解釈される。これこそが陰謀団の最終的な目的なのだ。

この記事を書いている時点では、まだ世界的な現象にはなっていないが、最終的な目標は、あらゆる種類の剣を賃金奴隷の鋤に変え、旧約聖書にあるように、ユダヤ人が「異邦人の乳」を血を流すほど吸い続けることである。

『平和』とは、ユダヤ人たちによる『異邦人』の完全な去勢を意味する。彼らは同時に、誰も『陰謀』と呼ぶことができないように、また、自らを『神的』と装う権力や支配者たちが、実際には極悪非道なものであり、地上の悪であることを疑うことさえできないように、武力を独占しようとする。シオンの『平和』は、流血と極悪非道の不吉な儀式の『断片』である。そのタナトスのプラクシスによって人が受ける唯一の『平和』は、墓の中で安らかに眠ることである。

平和 "そのものをスタイルとする特定の事例は、この点に集約される：

1) アーリア人の権利剥奪と大量虐殺と

2) ユダヤ人の相対的かつ同時的なエンパワーメントと、それを正当化するために必要な範囲において：

1) 非アーリア人、特に教会でユダヤ人の下僕となっている人々に力を与えること。しかし、代替左翼の非白人は、ユダヤ人によるアーリア人社会の意図的な破壊において、ある意味でより有用であり、したがって大砲の餌として役立つ。

非白人移民の "平和" とは、ユダヤ人がアーリア人の創り出した社会への継続的な流入を正当化するために、非白人移民の存在に対するいかなる批判も法律で禁止すること、および／または非白人移民に特別な特権（減刑、雇用における優遇、無料の経済的配給など）を与えることを意味する。

これらの政策を妨害しようとする者は、超暴力の体現者として描かれ、『著しく不快』であり、厳罰に値する行為を行い、それに従わない場合は、アーリア人であれば誰でも自分たちの存在を肯定し、自分たちの移住や大量虐殺に反対するという究極の罪である『人種差別』の『罪滅ぼし』に失敗し、死刑に値するということになる。

平和」とは、理性的な脳を切り離す感情的な言葉であり、感情的な脳を活性化させ、意識の中心を高次の精神形態から遠ざけ、固定性がないために必然的に疲弊してしまう不安定な感情へとシフトさせることで、（大量虐殺アジェンダへの慎重な反対に基づいて）それに基づく思考と行動を封じる手段として、権力の言説に利用されている。

平和」とは自己消滅のことであり、デス・カルトの病的な道德は、この感情的な言説を通じて、大勢の「ゴイム」たちに、かつてのアーリア人の調和のとれた世界のエリュシオンから、「平和のうちに安らかに眠れ」という非存在の墓場へと、自分たちが移されることを承諾させるのである。ユダヤ人はワニの涙を流しながら、アーリア人種に対する死者の説教を宣言し、悪魔の神にこう叫ぶ！平和を！」。

もちろん、ユダヤ人が巧みな策略と狡猾な操作によって、その地点に到達することができればの話だが。アーリア人がユダヤ人に対抗し、超理性的な直観（intellection）と理性という高次の精神に意識を集中させ、涙にまみれた平和主義という空虚な感情的レトリックに影響されることなく、「行動することなく行動する」ことができるかどうかは、アーリア人にかかっている。平和」のレトリックは、ユダヤ人のマインドコントロールと世界支配の基礎となる権力の言説である。

サイコポリティクス？

現体制のもとでは、政治の様式は誤った二分法に基づいており、それは国民の間に分断をまき散らし、生み出すメカニズムとして機能している。分極化とは、大衆を体制の支配下に置き、その鬱積した攻撃性を、体制がその権力に対する脅威として排除しようとしているもの、つまり敵である「他者」に向けることで、大衆を団結させる手法である。

システムのもう一つのノードとして集合体に同化されない者は、同化できない場合に破壊の対象となる。彼らの同化可能性の条件は、彼ら自身の自己中心的な自己尊重から発せられる意志の弱さであり、低次の自己、マヤヴィックな自己の尊重であり、偽りの自己を超越し、国家という無機能的／人工的な集合体に対抗して、必要であれば彼ら自身の有機的な集合体に奉仕するための不十分な精神的発達と力による失敗である。

ジュウ・ワールド・オーダーの集団主義的専制主義のもとでは、専制主義の仕組みは必然的に有機的集団と拮抗している。したがって、病弱な体質でない者、健康な精神（精神的な意味で、自分たちがその一部である集団的な人種の魂の保存に配慮する）を持つ者は誰でも、システムとその代理人によって標的にされる、システムを支配する古代の羊飼いの王の命令で、公式・非公式を問わず、抹殺の対象とされる；は、システムとその本質的に明確な集団に対する大量虐殺的な政策に反抗しようとする抵抗者である。

この分断と征服のテクニックは、全体主義体制に必要な要素であり、すべてはひとつでなければならない、全体（「人類」、「神」、「愛」、「平和」、「平等」、「一体性」）の外には存在し得ない。

それが汎神論的自然主義であれ、一神教の一種であれ、一般的な形式は普遍主義的な「一体性」であり、そこではすべてのもの、すべての人が「反映された反映物」にすぎない。

このようなシステムは、もちろん必然的に持続不可能性によって自己破壊に陥り、エントロピーの中で自らの上に崩壊する。したがって、ハイデガーの言葉を借りれば「死に至る存在」という言葉で特徴づけられるシステムである。したがって、平和の必然的な結末は死であり、すべての生命力の停止である。

活力はダイナミズムに基づくものであり、各生物は、その存在の条件として、自らを豊かにしようとするものである。

例えば、持続可能な限界（成長の限界）を超えて莫大な数の子孫を残せるようにするための食糧供給の遺伝子組み換えのように、これらの資源を増幅させれば、その結果、生物は死に至るまで劣化する（時間の経過とともに、徐々に健康が損なわれ、大気が汚染され、土壌の栄養分が枯渇する、など）。

キリスト教であれリベラルであれ）平等主義・平和主義の世界観の不条理は、それにもかかわらず、精神と物質両方の法則に逆らって働くことによる自殺と大虐殺のためのレシピなのだ。

多様な種類の倒錯した融合は、より強いものではなく、より弱い有機体を作り出し、血液を汚染し、有機体（精神的にも物質的にも）に徐々に機能不全を引き起こし、多様で拮抗する要素の互換性の欠如によってエントロピー的な崩壊に至るからである、その多様な力の抗争は、不調和（不協和音）を通じて生体の破壊をもたらす。

犯罪」-「不協和音」的な行動、すなわち、総体との調和を欠き、ダイナミズムをもたらす差異を維持しないことで、システムの永続とその重要な努力を可能にする。

このような文明はこれまで存在したこともないし、今後も存在する見込みもない。根本的に異なる、相容れないタイプの生物と並べられたときに、その生命力を維持することができないのだから。

それにもかかわらず、不可能を試みる専制的なユダヤ人とその支配者たち（アルコンとでも呼ぼうか）は、太陽の熱で翼が溶けてしまうイカロスのように、自分たちの破滅を招くだけだ。アーリア人の太陽・天王星的意識だけが、そのような高みに到達することができ、イカロスが下の岩に向かって降下し始めたら、そうするだろう。

アーリア人の「人類」（サンスクリット語で「心」を意味する「マナス」に由来する唯一の人類）の集合意識は、高次の意識の唯一の所有者である、ブッディ＝マナス.....神々の心とでも呼ぶべきもので、そのレベルや次元に到達し、真理と虚偽の区別を理解することがで

きる。

彼らは、自分たち自身の種族の生存、拡大、進歩のため、そして地上と天上におけるより大きな全体的調和の創造のために、真理に従って行動する。正義とは、秩序の創造を志向すると称しながら、システムの精神政治学と普遍的秩序に対するその拮抗による未分化の混沌に対抗して、分化した秩序を維持することである。) ユダヤ人が思い描くこのような世界は終焉を迎えなければならない。そうでなければ、重要なものすべてが終焉を迎えることになる。

ザイオン・アサイラム

今日の世界は、精神病院を彷彿とさせる。この世界を支配する者たちは精神異常者 (*non compus mentus*) であり、自分たちが支配者となれる世界的な奴隷人口を生み出すことに狂信的に取り憑かれ、それ以外の者はすべて、いわゆる「ユマニタス」の雑種化したアマルガムの奴隷状態に貶められている。しかし、「ユマニタス」は「ヴェリタス」ではないし(「すべてはひとつ」、つまり平等であるという主張とは正反対である)、異質なものの区別を崩壊させようとする試みは最初から失敗である。

ゴイム大衆は、トラウマに基づくマインド・コントロールによって狂気の状態へと落とし込まれ、こうして正常性の代表として、つまりあらゆる人に重ね合わされる「新しい正常」として確立される(すべての人は平等であり、それゆえ、社会工学によって作り出され、受け入れられる標準となった標準に従うことになる)。

羊飼いの王である司祭カーストの心は、司祭カースト(メディアや学問システムの中のファリサイ派や律法学者)の手にある情報機関を通じて、大衆に外挿され、押し付けられる。このように、支配階級の精神的な病気や狂気は、ゴイムが転生する間中、あらゆる時点でゴイムの心に浸透し、おそらく胎内で胎児の発育を妨げ、変化させる電波の伝達や、脳の発達を遅らせる恒常性と健全な発育を乱すその他の手段(予防接種、栄養失調など)を通じて、胎内でさえもトリクルダウン効果をもたらす。

ほとんど必然的な帰結として、「ジオン」の人々はゾンビ化したロボット奴隷に改造される。彼らはプログラミングから独立して考えることができず、代わりに反応的な脳のプロセス

と反射的な意識行動をとることしかできない。

サイオン精神病院は、自らを真実と正義の裁定者として表現しているが、現実には真実と正義のアンチテーゼであり、自らに課した「支配の使命」に従ってユダヤ人至上主義を再定義するための支配機構にすぎない。

それによって彼らは、自分たちが真実と正義の裁定者であることを神のごとく証明する。彼らの誤った表現から逸脱するものはすべて、彼らの雑種化グローバリズムのアジェンダに反するものとして、忌まわしきマラナータ、「不真実／虚偽」、「不正義」、少なくとも「不道德」とされるのだ。

実際、ユダヤ・グローバリズムの埒外にいとみなされた人物は、「精神病」とであると認定され、国家の敵として仕立て上げられ、破壊の対象となる。彼らが住むことを余儀なくされている精神病院は、管理者自身が精神的に不健全（*non compos mentus*）であり、したがって精神的健全性（健康）という概念は彼らや彼らのシャボ・ゴイムには当てはまらないが、おそらく彼ら自身には当てはまると認識する入所者を敵視する。

もしそうなら、彼らの自由を制限し、薬物や治療法を装ったより邪悪な武器（粒子線兵器やマイクロ波兵器、電気ショック療法、ワクチンなど）によって彼らの魂さえも破壊する力を持つ管理者や仲間の影響を受ける前に、精神病院を出る方法を見つけるのが最善だ。

サイオン精神病院は、消耗品である「人材」を拷問と緩慢な殺人にさらし、苦痛と恐怖のエネルギーをエーテルに放出して、彼ら自身と、彼らが「エローヒム」／「セファルディム」などと呼ぶと思われる、彼らと結ばれた吸血鬼的存在に糧とさせるために、ユダヤ・メーソンが使用する拷問施設である。

シオンの精神病院には、収容者のほとんどが理解できない裏の目的がある。それは、「エローヒム」による吸血鬼化を可能にする魂の処理施設であり、地上の肉的工具であるユダヤ人による吸血鬼化を可能にする魂の処理施設にすぎないのだ。

それを支配する支配者たちは、自分たちが人々を奴隷にしていることを理解し、エントロピーの下向きの螺旋状の死の衝動の中で自らを永續させる支配機構を助長することによって、御霊に対する罪を犯していることを理解している。

マトリックスから抜け出し、最終的には精神病院そのものを取り壊し、自爆装置を見つけてスイッチを入れる手段を見つける責任が、自律した人間にある。

ナチスの物語

ユダヤ人は歴史を通じて、「敵」である「他者」であるこのブギーマンに対抗できるよう、彼らを統一された集団に徴集する手段として、他者に押し付けるブギーマンを作り出してきた。現代の「罪人」、「異端者」、「魔女」（好ましくないもの、悪いものすべてを扱っている、あるいは体現している者）は、いわゆる「人種差別主義者」である。

アーリア人とは、自分たちが別個の民族集団として存在することを肯定し、集団としての自分たちを破滅させる意志がない（たとえあったとしても）人のことである。

こうして、自国民の生命（大量虐殺）、ひいては自分自身の生命（自殺）を破壊することを望まないアーリア人は誰でも、地球上の悪の体現者として標的にされ、破壊の対象とされる。したがって、自分の領土を守り、非アーリア人の「他者」による外国からの侵略に反対しようとすることは、ユダヤ人の嘘の体系においては「罪」であり、「道徳的違反」である。

ユダヤ人が彼らのメディアで作り上げた「ナチ」の物語は、単に中世の魔女の物語を再提示したものである。

これは、アーリア人を滅ぼすというユダヤ人の雑種化政策に役立つ：

- 1) 自らを主張し、ユダヤ人の悪に立ち向かうアーリア人を中傷し（悪とは、慣例的に「他者」にとって有害なもの--少なくとも「他者」の視点から見た場合--と定義されている。
- 2) その上で、国民に「他者」を非難し、最終的には殺すという「道徳的義務」を課するのである。「ナチス」という性格を持つ彼は、望ましくないものの体現者であり、農家の主婦が有害な昆虫や有害な捕食動物を、自分の子どもを毒や狂犬病で污染ないように殺すように、「殺すべき」という道徳的／公理学的命令を伴う。

それは、客観的な現実（白人男性や白人一般）と、その対象（憎しみや暴力など）に似せた架空のシミュラクル（模造品）との間に、誤った連想を作り出すことである。このように、ユダヤ人はこの戦術を用い、白人殺戮のアジェンダを促進するためにそれを続けているのである。白人を殺戮の対象として設定し、「白人の悪魔」としてのアイデンティティを構築することによって、大量殺戮の状況を作り出すのである。

これは、単に現代の学問体系やメディアにおけるユダヤ人の似非学問の物語を通してではなく、前述のように、アーリア人を「ネフィリム／サタン」の役割に担わせたキリスト教とアブラハム教の物語の表現を通して、非アーリア人やアーリア人のキリスト教徒たちの意識に、アーリア人は悪の体現者であり、「人間」ではなく、むしろ以下のような生き物であると

いう概念を植え付けるのである：1) アーリア人でない人々にとって脅威であり、それゆえ2) あらゆる手段を使って絶滅させなければならない。

ニューエイジのプロパガンダもまた、アーリア人を爬虫類の悪魔（別名ネフィリム）として描く、世俗的な側のこの中傷物語と類似している。これは、アーリア人の意思を弱め、自己意識を低下させ、非アーリア人の大群や反アーリア人（キリスト教徒、リベラル派など）の異常な少数派により効果的に退治されるようにする手段として、アーリア人の士気を低下させるものである。

ユダヤ人の手口は、縁辺を削ぎ落とし、中心へと向かうことで機能する。木こりが木を両側から挽くように、最終的に中心は切り裂かれ、あるいは切り裂かれそうになり、民族の倒木の重みで中心は引き裂かれ、全体が切り刻まれてユダヤ人に提供され、単なる商品として搾取される（遺伝子の吸血鬼化）。

ナチス」の語りは、シンクタンクのユダヤ人たちや、資金を提供された作員（スクリプター）たちによって、敵に対する戦争の武器として架空の語りを書き記すために製造された、あらゆる種類のイデオロギーにわたる「ネフィリム」や「レプティリアン」の語りと連動している。

これらの物語やエグゴールは、アーリア人のプログラミングとなり、彼ら自身の自律的な意識を失い、単にそれ自体を複製し、彼らの思考パターンという点でも、それに関連する行動という点でも、ある特定の組み込まれた方法で彼らを条件付ける。

1922年に共産主義者のユダヤ人セレンコフが語ったように、ユダヤ人の陰謀は機能している：「人種主義を汚れた言葉にする」-アーリア人に、自分たちのアイデンティティを、社会にとって全く容認できないもの、耐え難いものと結びつけるように仕向けるのだ。したがって、社会の一員でありたいと望むなら、「人種主義」、すなわち究極の罪としての「人種差別」を肯定したり、支持したり、それに関連するものをすべて非難しなければならないという論理が成り立つ。

これにより、アーリア人は恥をかかされ、罪の意識を植え付けられ、士気を削がれることで、アーリア人の防衛の足かせとなるのだ。アーリア人は、ユダヤ人の神に飼いならされた寝取られ者の幸せな子羊となり、「人類」、つまりユダヤ人と彼らがアーリア人にとって代わるために連れてくる野蛮な大群に奉仕する以外、人生の目的を持たない愚かな奴隷となるのだ。

ナチスの物語』は、ユダヤ人がアーリア人種の滅亡を意図する際に用いる社会工学的な戦争兵器を構成する中傷のプロパガンダキャンペーンである。

このため、これに対抗するためだけでなく、より肯定的な代替案を提示するために、新たな

物語を構築する必要がある。この物語とは、ユダヤ人至上主義の物語であり、その肯定的な側面において、アーリア人の道徳、アーリア人の善人、神々の体现の物語であり、歴史の腐った卵であるユダヤ人のそれとは対照的なものである。

この語り口は真理と一致しており、理想を言えば、それが十分に巧みに進めば、ユダヤ人が何千年にもわたって地球を覆い尽くしてきた無知の間を消し去ることができるだろう。もちろん、その難しさは、ユダヤ人がプロパガンダ工場で作り上げ、奴隷階級の意識の中で延々と繰り返している騒音の中で、その声を聞き取ることにある。いったんアーリア人が沈黙させられたら、代替のコミュニケーション手段に頼るしかない。

人間性：架空の概念

人間性という概念は、ユダヤ人占領政府の聖職者カーストの言説の中に、他のすべての根拠となる神聖な基本原理として祀り上げられてきた。しかしユダヤ人たちは、この前提に基づきシステムが崩壊することで、自分たちが地球上で唯一の「人間」として、地球上の無制限の支配者となり、世界的な専制政治を確立するつもりなのだ。

彼らのプロトコルを実行する現在の段階は、アーリア人に、ユダヤ人の人間主義的平等主義のドグマは神聖な牛であり、疑う余地のない道徳的要請があり、崇拜され、その周りを周遊しなければならないものであり、人間（現代用語で「人間」という呼称を持つすべての「二足歩行の存在」）と呼ばれるすべての人々の人生の最も重要で本質的な目的であるとして、疑われたり、無視されたり、賞賛されなかったりすることは決してありえないものであると納得させることである。この用語は、ユダヤ人によって、彼らが雑種化したいと望むバラバラの二足歩行の生物学的存在を、コントロールしやすい「ゴイム」というひとつの塊に統一するための意味論的メカニズムとして考案されたものである）。

この「人間」という概念が抽象的なアイデアに過ぎず、（比喩的にも物理的にも）具体的な生物学的実体を持たないことは、以下の議論で大まかに説明する。アーリア人のディヴヤ（神々）がこの地上に最初に存在した時代である古代のポーラリアン・エポックは、現在北極と呼ばれている場所に位置していた。

その結果、これらの存在はインボリューション（「人間の墮落」）を経て、ギリシア人にとって「ハイパーボレア」（「国境を越えて」、惑星ガイア／地球の極北、北極圏を意味する）として知られるようになった物理的現実の同じ地理的領域とその周辺に存在する純粋なアーリア人へと変容した。

これらのアーリア人はその後、中国西部のゴビ砂漠とその周辺地域（トチャリア人、スキタイ人、さらにスメリア、エジプト（ベルベル人）、インド（バフスタン）、アメリカ大陸のテオチュアク、マチュピチュ、イースター島とその周辺地域）にある「ゴブランド」またはゴビ砂漠文明と呼ばれる地域の東方に向かって移動した。

その結果、ヨルグ・ランス・フォン・ライベンフェルスが言うように、アーリア人と近東やその他の地域に住む人類との間に混血が起こり、現在「インド」「アフリカ」「中東」などと呼ばれている地域に住む黒人や褐色人種が生まれたのである。これらの文化的飛び地は、現在では、もはや以前の起源を認識できないほど文化が歪められ、変質した、退化した集団の遺物に過ぎず、したがって、アーリア人の存在の正真正銘でない形態に過ぎず、したがって、今日のアーリア人の集団の純粋な残党とは、賢明にも互換性がない。

せいぜい、歴史の瓦礫の中に埋もれている、本物のアーリア文化の救済可能な芽を含んでいるに過ぎない。

アーリア人の文書（古代の写本や、わずかな程度しか保存されていないシンボルや儀式）の管理者である非白人は、先祖伝来の遺物を保存するという善に対する義務を果たしているに過ぎず、神々に対する義務を守っている分だけダルマの報いを受けているのである。

そのとき彼らは義務を果たし、悟りの状態（心の質と器量）に応じて、どのような形であれ転生することができる。そこから、世界的に残党は、祖先の純粋な蒸留液へと自らを発展させ、完全な境地に到達し、無化した姿の穢れを浄化し、不滅の金剛のダイヤモンドの雷光体を得ることができる。

この霊性化プロセスを支持し、それを促進し、その実現に調和する他の非白人は、正当な報いを受け、彼らが適した地球の領域で調和した人生を送ることになる。この義務に違反した者は脇に置かれ、正当な報酬、すなわち罪にふさわしい罰を受け、すべての肉体の道を歩むことになる。

黒人と褐色人は、何千年もかけて人類とハイブリッド化した生物であり、彼らと交配したアーリア人（神の子が人の娘たち-イブ、イヴ、非白人の女性たち-に入ってきた）である。

このように、"人類"という用語は不合理である。世界の古歴史とアーリア人種は、共通の祖先や起源を否定しており、異なるタイプの婚外子や、そのような混血によって高次の能力を失った比較的劣化した生命体の混血を除いては、共通の祖先や起源を持たないからである。

この混血は原罪であり、何千年にもわたって起こった種族間の交配であり、特に高次のタイプの劣化と、松果体と脳下垂体を肉体とする高次の能力の低下、場合によっては絶滅をもたらした原初の混血である。

これはスピリットの物質化、人間の悪魔的な秋であり、すべての人の義務は、時間のサイクルのエントロピーを克服する手段として、物質的な平面をスピリチュアライズすることであり、転生魂のこれまで以上に劣化した形態にスピリットの混合物を通して継続的な劣化、彼らの乗り物は、もはや物質的な平面上の魂の表現を可能にするために純度の彼らの適切な状態で物理的な構造を所有していないとして、より高い魂のホストを果たしていない。

したがって、「人間」（「霊人」の意）として認められるためには、これらの腺の活性化を

通して、またその運動を通して、霊的な訓練を通して、「真の自己」を培わなければならない。純粋な者だけが「光を見る」ことができ、高次の存在状態にアクセスすることができるため、これらの構造を利用することができるのである。

今日の「人間性」とは、アーリア人を操り、自分たちが共通の起源を持たない獣人たちの上に立つ特別な民族ではないことを納得させる手段として、ユダヤ人が用いる政治的武器である概念である。

物理学的な用語でも神智学的な用語でも「進化」と呼ばれるものは、アーリア人を欺き、自分たちの保存と発展には何の意味もないと思わせる手段として、ユダヤ人が作り出した言説である、この「善」はユダヤ人にとってのみ善であり、ユダヤ人はその本質的に支配欲が強く利己的な性質によって文明を必然的に破壊してしまうので、一時的なものにすぎない。

このように、今日「人類」と偽って呼ばれているもののいわゆる「進化」は、実際にはアーリア人の退化にすぎない（「人間」は、「心」を意味するサンスクリット語の「マナス」に由来する）。

ユダヤ人はアーリア人種の大量虐殺を意図している。アーリア人種はユダヤ人専制君主の暴政を脅かす唯一の脅威だからだ。後者は、今は沈んでしまった古代レムリア大陸を支配していたネアンデルタール人と爬虫類のエイリアンの合成生物である。

これらの存在、ユダヤ人は、グノーシス的な言い方をすれば「アーコン」、デヴィッド・アイクのような人たちには「レプティリアン」と呼ばれる、3次元と4次元の間の内部空間に住む地獄の存在に憑依され、コントロールされている混血である。

彼らの遺伝的悪魔的ストックはDNST-3遺伝子（精神分裂病遺伝子）を内包しており、この遺伝的悪魔的テンプレートが保存されることで、これらの古代の存在の肉体的道具としてユダヤ人を存続させることができるのである。

彼らは人間ではなく、むしろ「亜人」、そして実際に「地獄のような」という言葉が、この生き物を論じる上で最も適切である。彼らは自らを増殖させることしかできず、同化の可能性はない。同化するということは、彼らの中に内在する遺伝子と伝染病を拡散させるだけだからだ。彼らを他の地域に追放することは、彼らが去ろうとする意思があれば可能かもしれない（おそらく彼らはそうしないだろうが）、強制的に去らせることも可能だろう（彼らはすべての白人「多文化主義」社会における混血集団の中に隠されている）。

なぜなら、彼らを支配しているアルコンティックな存在が彼らの行動の主な原因であり、したがって彼らはユダヤ人の比較的弱々しい意志を無効にしてしまうからである。従って、同化や移転は不可能であり、正しい意味での「フエ・マン・イ・ティ」が地球上で存続し、その本来の運命、すなわち物質面の精神化と、光を消し去ろうとする闇の勢力の消滅を果たすために、残された選択肢はただ一つである。

もっともらしい否認

現代／ポストモダン社会では、利害が対立し、目的が分かれ、自己追求を生活の中心とする低次のエゴ的存在が多数存在するため、ライバルや関係者であるすべての当事者にとって、もっともらしい否認が必要である。その理由は、敵（自分の利益と不倶戴天に対立する者）の目には既知であることが、自分の利益を敵の及ぼす悪影響に対して脆弱にし、自分のプロジェクトや目的の実現を危うくするからである。

いわば敵の前に手の内を明かし、自滅をもたらすことになるからだ。従って、敵や合理的な第三者によって、自分の行動が複数の意味に解釈されうるように、あるいは、自分自身やその同類にとっての「他者」にとって、現実ではない、あるいは解釈されにくいように、戦略的に行動しなければならない。

窮地に追い込まれたとき』、『熱い席に座らされたとき』、敵に言動で暴露されたり尋問されたりしたとき、彼は敵に特定されることを避けることができ、勝利を得る確率を高めることができる。

司法に絡む場合、彼は、不可解な、最も疑わしくない、最も平凡な、そして最も平凡な立場を確立する必要がある。グレーマン戦略」とは、J.O.G.の俯瞰的な視野のもとで行動するための手段である。

もちろん、街で見かける"大衆的な男"や平服の刑事、常に彼を囲い込み、体制への脅威がないかを調べようとするJ.O.G.の秘密工作員やスパイに消費されるために、意図的に作られたペルソナを開発することもできる。そのようなペルソナは、服装や行動のマナー、専門用語（構文、口語表現、言葉の形など）を採用することで、平常のファサードや仮面を身にまとい、それによって広範な大衆に恩を売ることができる。

このように、彼の本当の人格は、群衆の顔の後ろに覆い隠されている。群衆とは、「時間の中」を生き、虚栄の中で、人生の行程の虚しい時間のために虚栄の鏡を見つめている、区別されない大勢の人々のことである。今日の退廃的な時代において、群衆の中に溶け込もうとすることの危険性は、もちろん、「未分化」／「分化」された群衆の万華鏡のような形、大

きさ、色の中でさえ、重要な存在である異常な規範を考えると、やはり異常な存在として目立ってしまうという事実にある。

とはいえ、グレイマン戦略が採用される可能性があるほど、社会の断面は広い。外見的な面では、偽のタトゥー、偽のピアス、顔の毛、一時的な毛染め、かつら、スプレーによる日焼けなどを使用することができる。行動や物腰の面では、すでに熟練した嘘つきでなければ、演技のクラスを受講することが、「もっともらしい否認可能性」という煙幕を確立するために必要な手段だろう。

もちろん、意図的にありのままの自分を表現しないことは嘘であるが、異なる相手に対しては、慎重さの名の下に、自分の人格の異なる側面を明らかにしたり隠したりするかもしれない。したがって、彼は嘘をついているのではなく、より大きな利益のために、自分自身のさまざまな側面を提示しているにすぎない。嘘をついているかどうかは、それ自体、もっともらしい否認可能性の問題であり、その答えを得るためには、自分の「良心」に相談する必要がある。他者」については、たとえ見せかけだけでも、現実の劇場におけるもうひとつの行為として「他者」を支持することが善に資するかどうか、このこと自体を考慮に入れなければならない。

隠蔽と見かけの演出の必要性という概念に加えて、敵に明かしてはならない現実を隠すマヤヴィックなヴェールは、数え切れないほどの形で現れる。例えば、敵に自分の住所を隠し、別の場所に住んでいるように見せかけること、金銭的な手段に内在する自分の力を隠したい場合に最小限の富しか持っていないように見せかけること、あるいは敵に自分の地位や人脈を暗示して脅すために、そのような手段を持っているように見せかけること、場合によっては肉体的あるいは認識論的に弱者あるいは強者であるように見せかけることなどが挙げられる；強い敵に対して、敵が防御を緩めたり、攻撃の勢いを弱めたりする気になれば、その敵を説得する道具的手段として「ポッサム・ポーズ」に頼ること。あるいは、自分の力を（増幅されたものであれ、そうでないものであれ）誇示することによって、信頼できる脅威として自分を表現し、そうでなければ自分の大きな力を利用して敵を粉碎しようとする敵を抑止すること。

秘密兵器は、もっともらしい否認の信条に合致するものである。ベルトに緩く取り付けられた鍵に鎖を付けて鎖鞭として使う、杖やペンナイフやペンガンを隠す、つま先が鋼鉄の靴を履く、衣服の下にナイフや銃器を隠す、このような物理的装置はすべて、心の中に最も重要な対応物を持ち、そこから他のすべてのものが発展する究極の武器である。

オストラシズム

古代ギリシャでは、都市国家は、都市の構成員が社会で生活するのに適していないと判断し

た者に「オストラカ」を与え、この「トークン」または「オストラカ」（社会が追放を望んだ者の名前が書かれたギリシャ語の「牡蠣の殻」に由来する）は山に置かれ、最も多くの票を得た者が社会から追放された。

ベン・フランクリンが言ったように、民主主義の本質とは「最も卑劣な政治形態」であり、アリストテレスが言ったように「最も悪質な政治形態」なのだ：「最も下劣な政治形態」であり、アリストテレスが言ったように「とアリストテレスは言った。当時もそうであったが、今日でも、政治プロセスへの直接的な影響力という見せかけで、さらに陰湿なものとなっている。人口が多い社会はすべて、古典的な意味での非民主的なものであり、民意の表現とはなりえないからだ。というのも、「民衆」の意識の中身は、ユダヤ人の支配するメディア、教育・教化システム、さらにはあらゆる情報機関によって、単に心に植えつけられたものであり、現代の民主主義の「集合知」は、ユダヤ人によるプログラミングの構築物であるシミュラクルにすぎないからである。

古典的な民主主義の時代には、自由人だけが投票権を持っており、その数はせいぜい一握りの千人にすぎなかった。民主主義は、すべての意思決定権が複数の政党の間で分断され、そこから（今日の政党に似た）合従連衡や派閥が形成され、自分たちの社会を引き裂き、外国の利益に味方し、崩壊に至ったため、やはり失敗した。このように、民主主義はどのような形であれ、裏切りや欺瞞に支配された専制主義に過ぎず、大衆の意識は（ユリウス・エヴォラの有機国家思想のように）より高次の思想の下で、より高次の人間（ドゥーチェ、総統）の意志の下で統一されることはない。

それは、自分たちの権力にとって脅威であると認識し、そのため自分たちの敵に先制攻撃を加える手段として大衆の心の中で誹謗中傷しているすべての人々を弱体化させ、妨害するためにデザインされている。

自分ではない者、平等主義的平和主義的グローバリズムの加入者でない者、シオンのグロバ・ホモ・モノカルトの左翼的な共同体主義、右翼的なシオニズムの加入者でない者である。

カーボンコピーのホモや、完全に女体化した性格のフリークでない者は、怪物的な『他者』として社会から遠ざけられ、非難され、締め出される。

オストラシズムは、ソフト・パワー・キャンセル文化（刑務所や失業という脅威を伴う検閲）、職業や何らかの非雇用集団の集団行動を通じて、社会の落伍者にされ、社会の文脈の中でいかなる役割も果たせなくなるような敬遠行動という形で現れる。

鉄の踵という形で法の矢面に立たされるだけで、法や、法の保護を受けている人々（非リア人、ユダヤ人、女性、ホモ、人種反逆者など）から身を守る手段はなく、その特徴的な卑怯なやり方で、学校のお母さんのベチコートの陰に隠れる小学生のように、法の陰に身を隠すことができる。このような民主主義こそ、その真の姿であり、その最たるものののだ。「自由」や「愛」などという見せかけの、微笑みを浮かべた仮面でありながら、その実態はクラブであり、監獄であり、さらに悪いものののだ。

うそつきタンゴ

ユダヤ人占領政府は欺瞞に基づいて運営され、その手下たちの教育と訓練において、ユダヤ弁証法の文化的形態（「ピルプル」-嘘を隠すための嘘）を体系化している。そのため、政府のすべての諜報員は、プロレタリアの大衆である「労働者」、つまり多くの諜報員が傲慢かつ恩着せがましく呼ぶ「市民」との相互関係において、事実上のユダヤ人またはユダヤ化した異邦人となるのである。

国家と国民の間の弁証法的関係は、ユダヤ人の「ビルブル」的行動によって支配され、その影響は支配者であるオリガルヒからシステム内の部下へと波及し、全員がユダヤ人の影響によって汚染されている。政府諜報員の嘘は、国民を攻撃する関係で相手にしているとき、質問と答えという尋問的な言説の形で出てくる。

それは、政府のエージェントが「会話をリード」し、「市民に話をさせる」という弁証法的なプロセスである。これは、宣伝・情報局（akadumbia）を通じてシステムによって確立された、会話や人間関係の行動規範の従来の形式に従っている。政府工作人員との「日常的な普通の会話」という「ゲームに参加することを拒否する」人々は、社会通念の偽善的な規範に違反することで、政府工作人員によって彼らのアイデンティティの中に構築された潜在的な「精神障害者」として認定される。

従って、一般市民は、社会通念に従ってできるだけ控えめにしない限り、話す義務がある。それでもなお、「一般市民」の側は、政府エージェントが出す質問やコミュニケーション行為（顔のジェスチャー、口調など）に対して適切な返答をする必要がある。

一般市民」が官僚的な手続きを踏まなければならない場合、それは即座に彼らを相対的な劣位、力不足の立場に追いやり、政府職員は彼らを適切に支援しないか、あるいはまったく支援しない力を持つ。

例えば、「一般人」が政府エージェントの義務を理解していない場合、政府エージェントは、要求が適切な方法でなされなかったとして、要求を理解していないふりをするかもしれないし、エージェントがその職務を遂行するために中途半端な仕事しかせず、「一般人」または「一般人」の書類やファイルを次の政府エージェントに送り、そのエージェントは単に顔の见えない官僚機構の中に消えてしまうかもしれない。

このような無責任な民主主義の本質とは、すべての政府エージェントが非公式に互いに協力し合い、システムの奴隷として役に立たない「一般市民」、とりわけシステムにとって脅威となる「一般市民」を弱体化させることである。こうして政治的な芋づる式ゲームは、物理的に存在するか、匿名の仮想現実を通してかを問わず、「市民」のすぐ近くにいる政府エージェントから責任を移すために使われる。

この弁証法的なゲームは、「市民」の主張する権利を難解にし、官僚的なお役所仕事の蜘蛛の巣に絡め取られるように設計されたシステムの中で、市民が存在し、自らの運命を促進する手段を否定する手段として使われる。

正当化できる言い訳はすべて、その手段として提出される：

- 1) 政府機関の責任と非難を免除し
- 2) 市民」や「システム」そのものに責任を転嫁したり、あるいは
- 3) 市民」が主張する「公正な」（例えば「証跡」、あるいは彼らが主張するその他の「権利」）権利を否定する。

政府の代理人たちは、彼ら自身の腐敗しやすさ、腐敗に対する感受性に基づいて官僚の蜘蛛の巣に徴集され、そこからさらに洗脳される。事態は、先祖代々の文化や人種的魂との健全な結びつきから完全に切り離された、ただ自己を追求する「所有欲の強い個人主義者」である真理を理解する能力のない劇場の役者であることが、システムから派生した文化的規範となるまでに至っている。

忠誠とは、まず自己への忠誠であり、自己奉仕の必要条件としてのシステムへの忠誠である。システムの手先である役人たちは、「システム」内に参加するための必要条件である偽善的な偽りの行動を取らなければならないことを認識している。

桶から餌を得るためには、他の「ゴイム」と同じように鳴き声をあげ、ユダヤ人納税農家に体から血を抜かれ、「システム」にとって役に立たなくなったら、屠殺場に放り込まれ、次の豚に取って代わらなければならない。

システムから何らかの利点を得るためには、その行動や義務を採用し、『システム』のレトリックを内面化しなければならない。そうでなければ、最も基本的な官僚的プロセスを遂行する能力さえも閉め出され、否定される。最終的には、自分たちを滅ぼそうとする大量虐殺的システムの保護を受けることはおろか、自分たちを守り、基本的なニーズを確保する能力さえも否定されることになる。

キリスト教徒やリベラル派のような臆病な嘘つきや裏切り者ではなく、正直でまっとうな人々は、すぐに体制に嗅ぎつけられ、官僚的なダンスフロアを混乱したカオスのようなステップを踏まされることで、更なる排斥、虐待、操作の標的にされる。

究極の結論は、マズローの「欲求の階層」のすべてが「システム」によって束縛され、人々

（ゴイム「一般市民」）をフリーメーソンの市松模様の舞踏会のフロアでデタラメなタンゴを踊る操り人形と見なし、奈落の底を越え、火の池へと誘うジューデオ・メーソンの隠された手のワイヤー引きに導かれながら、デタラメなタンゴを踊ることを余儀なくされ、「普通」の生活との結びつきをすべて絶たれることによる死である。

抵抗者」である人々は、自分たちの破滅を支持したくない、この「ピルプル」プロセスの最終目的地は、「ゴイム」の生ける屍の官僚的な赤紙によるミイラ化であると認識している人々たちである。欲望と自己刺激への欲求によってのみ動かされる人々は、システムに反対し、それが「正しい方向」への唯一のステップであることを理解しようとする。

人はまず、プロセスを理解する手段として、真実と嘘を見分ける能力を持たなければならない。そのためには、システムエンジニアのドローンでない人々には「普通」が存在しないという現実と直面する勇気が必要だ。システムは、システムにとって有用な道具ではない者、死の舞踏に参加する能力も意思もない者、身を挺して敵に立ち向かい、幻影の向こうにあるものとそうでないものの現実を認識する勇気のある者、蜘蛛の巣のガーゼを突き破って蜘蛛の背後を観察する勇気のある者のすべてを否定する。

スパイ・ソサエティ（情報収集）

今日の社会は、昨日と同じように、そしてこれからもずっと、セム人の奴隷制度の下にある。中世の時代には、それは最も文字通りの意味での魔女狩りであり、今日の社会では、それはより洗練された、しかしそれに劣らず野蛮な形で存在している。

このような性質のスパイ社会はソビエト連邦にも存在したし、おそらくビザンチン帝国や他のあらゆるセム系社会など、それ以前の時代にも存在した。偏執的なスパイ社会のメンタリティはユダヤ人に固有のものであり、彼らの神経症から生まれたものである。

可能性としては、彼らが共に働く存在もまた、彼らの意識の再構築に一役買い、その神経症を作り出し、おそらくは肉体をアバター化し、自分自身を彼らに縛り付け、彼らが魂を吸血鬼化した人々をスパイする機械として利用するのだろうか？ 最終的な原因が何であれ、アジア系近東民族の一般的な意味での「セム人」はすべて生まれながらのスパイであり、彼らのはびこる社会はすべて、彼らの神経症的緊張によって悪影響を受けることになる。と結論づけるのは妥当であり、実際に必要なことである。これらの社会が不幸にもセム人（ユダヤ人、アラブ人など）に支配されることになれば、セム人の意識とその偏執的な神経症が「ゴイム」化したセム人社会全体の意識に拡大した反映として、スパイ社会へと変貌を遂げるだ

ろう。

このような社会では、民衆はいつまでも不安で、肩越しに見守り、互いにスパイし合い、社会が着飾る平等主義的な虚偽の「不道德」や「変質」を認識したわずかな口実のために、互いに密告し合う。

スパイネットワークとして非公式に確立されたものが、正式な政府が民主的プロセスを通じてそれを正当化できるようになると、公式の政策となり、スパイ精神が合法化され、スパイネットワークのバリエーションが生まれる。

G.R.U.とK.G.B.は、奴隷階級に「安全と安心」を与えるという名目で、奴隷階級に押し付ける。

偽旗事件の発生は、大衆にトラウマを植え付け、スパイ社会の『新常識』が押しつけられた今となっては記憶にもないような、以前持っていた自由の隙限のない制限を受け入れるように仕向ける。

彼らの幻想の生活は、マトリックスの中での生活であり、スパイ社会パノプティコンのメタトロニック・ハイパーキューブであり、彼らの意識を、奴隷として互いにスパイし続け、「小さな民衆の一人」にすぎない彼らの「道徳的な優越者」である善良な指導者のように見えるが、彼らの奴隷階級を滅亡に導く闇の勢力の道具であるユダヤ人に仕え続ける制限の中でだけ存在するように結晶化させる。

マトリックスから抜け出そうとする者、あるいはマトリックスを完全に破壊してすべてを解放しようとする者は誰でも標的にされ、嫌がらせの対象となる。

対象個人 (T.Is)

J.O.G (ユダヤ人占領政府) は、体制に羊のようにひれ伏すことを拒否する者たちに照準を合わせようとしている。彼らこそが体制にとって唯一の脅威であるため、体制が破壊の対象とする「反体制派」なのだ。獣人はもちろん生活保護と政府の仕事で買うことができるので、潜在的な反対勢力として簡単に無力化することができる。神々の霊を内に持っていないことを考えると、彼らの野蛮な心を理解し、そこから「より高い」レベルで取り除かれているユダヤ人寡頭政治にとって、彼らは必然的に脅威ではなくなる。

アーリア人をJ.O.G.の集団心理を構成する「力こそ正義」の凶暴性から遠ざけ、同時に高めているのは、その野蛮な心の欠如である。

このナイーブさが、彼らが慎重さを欠き、慎重さを欠いている原因なのだ。

J.O.G.に登録され、標的にされた個人としてシステムの十字線上に置かれる。この個人は、警察や軍によるスパイ活動の対象となり、名ばかりの私的な通信とされるものすべてに侵入される。

こうしてT.I.（標的にされた個人）の心理は、パラノイアのそれである-彼らの周りには常にスパイが存在し、それによってプライバシーは存在しない。それによってT.I.は、その人の安心感を失い、自分の命を恐れ、肩越しに見守りながら、常に戦うか逃げるかの状態にある、エクスタシス（ギリシャ語で「出て行く、離れて行く」）の精神状態を作り出すのである。

したがって、このような精神状態においては、個人の自由意志や良心の自由を持つことは決してできない。精神的自由がない状態は、合成テレパシーや他の形のサイクロニック・マインド・コントロール操作の使用によってさらに悪化し、思考や感情をターゲットの心に植え付ける。このような状態では、T.I.I.は自分の思考や行動などが実際に検出されるかどうかに関係なく、生存の可能性を最大化するように、自分の行動や思考パターンを自己検閲し、規制する。こうして、もし屈服すれば、この絶え間ない圧力によって、ロボット化されたソビエトの奴隷となり、それが目的である寡頭制の主人の期待や命令に従って動くようになる。

ソロモンの神殿の壁にさらなるレンガを積むことを意図したユダヤ教フリーメーソンのブループリントに従った上からの社会工学に従って、互いの行動を規制するソビエトのウンターメンシェンの創造である。潜在的な反体制派を社会的に標的にすることは、社会的コンプライアンスを通じてソビエト大衆をソーシャル・エンジニアリングするJ.O.G.の方法であり、共産党の綱領と「仲良く」することを拒否したり、できなかったりする者はすべて十字線に置かれ、社会的な罪や違反において「救いようがない」とみなされると、どんな手段（薬物、アロパシー医学、精神病患者としての汚名を着せられたり、偽の自殺未遂で暗殺されたりなど）を使っても処分される。したがって、もし標的にされた個人で、以前は偏執的でなかったのなら、生存の可能性を最大化するために偏執的な意識を養うことをお勧めする。

東洋の専制主義

ユダヤ人の世界秩序というポストモダン社会は、東洋の専制君主制の社会である。ユダヤ人は、旧約聖書がよく示しているように、彼らが望むものは何でも、それが可能性の範囲内に存在し、彼らの虚しい想像の範囲内に存在する限り、彼らが得るものは何でも、というように、彼らの行動の自由に対して何のチェック・アンド・バランスもなく、独断専行ですべてを支配している（物質主義の退廃と豊かさの世界）。絶対的支配」は専制政治の決定的特徴であり、東洋人であるユダヤ人、ロバート・レイが「東洋からの疫病の瘴気」と呼んだものが、その毛むくじゃらの拳で権力の座を握っている。

ユダヤ人が東洋人であることは、この専制政治を古典的な意味での「東洋的専制政治」と

呼ぶにふさわしい。このような社会には二重基準がある。大衆、ゴイム（家畜）のための法律（この場合はノアヒデ法）と、自分たち自身と自分たちの同族のための法律（バビロンのタルムードに基づく法律）である。

法律の文字に関係なく、ユダヤ人は、ラビたちの間で聖堂で作られる絶え間なく変化する法律で、広範な大衆に自分たちを押し付けようとする。大衆は、法律が何であるかほとんど理解できず、同じ行為をしても許されたり禁止されたりして、法律はますます特殊で制限的になり、彼らの農奴カーストの生活の隅々まで規制する。

法の文字の向こうには、ユダヤ人とその地獄の主人（アーコン？と呼ばれる）により強制され、その神経症的な大衆の心は、法律や社会の反発というテロリズムを通して、ユダヤ人が望むどんな形にも形作られる-したがって、奴隷階級は古典的条件づけ（刺激-一連の行動、反応-自分たちの奴隷化を強制する条件づけられた大衆による反動）によって調教され、専制主義は、サンヘドリンの集合的意志によって決定される恣意的な揺れでそれ自体を永続させる。

専制君主制は必然的に断片化し、結晶化することで破滅する。さもないければ、扱いにくい規模にまで拡大し、帝国を外国の反発にさらし、権力中枢の崩壊につながる。それは、全体と結びついて個人の運命を維持し、発展させるための十分な自由を持つことができる部分の全体間の調和のとれた関係に基づいて運営される、有機的な国家や一体的な社会を作り上げることができなかったからである。

有機的な国家だけが、外部からの脅威に直面しても自らを維持することができるのである。なぜなら、その国家を構成するすべての要素が結束して行動し、より大きな集合体を維持しようとするからであり、ひいてはそれが、集合意識の外在化として自らを維持するからである。

これとは対照的に、専制主義は、力によってのみ維持されるエントロピーの状態である。すべての異質な派閥は、他者に対する力を求めて互いに争うが、より強い力はより弱い力に打ち勝ち、単にその力を他者に相殺させるか、農奴制に落とすことでその存在の活力を否定する。

専制君主に対する革命と反乱の混沌とした力を抑える鉄のバンドは、それが摩耗し、全体が暴力的な動乱の中に飛び去るか、あるいは単にそのばらばらの派閥の耳障りな不協和音によって自らを疲弊させるまで、そう長くは続かない。専制君主制から有機的な国家を発展させるためには、権力を構成する専制君主を追いつくか、破壊しなければならない。そうするか、国家が自らを破滅に導くかのどちらかである。

ポスト・モダンのクロアカ・ゲンチウム、民主主義の下水道は、混合された多数の悪臭で泡立ち、煮込む。ユダヤ人シェフたちは、シチュー鍋、溶けた汚物鍋にさらに材料を加え、鍋をかき混ぜ、黄金のスプーンで泡を立て、沸騰させ続ける。

太ったゴイムたちは、プラスチック化されたテーブルを囲み、ヘッドセットやRFIDチップ、ナノテックインプラント、スマートダストから、電磁チェーンによってプラスチックの座席に鎖でつながれている。

ユダヤ人シェフがボタンを押すと獣人奴隷が動き出し、その獣人奴隷がドロドロになったものを間抜けなゴイムに提供する。

このような民主主義は、ユダヤの黄衣の下にある。善なるものすべてに恵まれた素晴らしい世界という見せかけ（その約束；決して実現されることのない約束）と、どんな信用できる機関でも換金できない約束手形を受け取ることである。

民主主義の下水道は、下水道のような社会であり、すべてが深みに引きずり込まれなければならない、そこから上がることはできない。

民主主義とは、奴隷階級の死の衝動であり、彼らの運命を現すものである。自分たちを超えて上昇したいという欲望ではなく、エゴを満足させる手段として、自分たちの卑しい地位を超えるものを引き裂くのだ。

平等」、「人間性」、「愛」、「平和」などという誤った前提によって正当化され、そのプロセスを通じて優越者が還元される。これは、創造的で生産的な人々、つまり能力のある人々から、無益で無価値な人々、つまり創造的でない人々、能力のない人々への富の再分配を正当化するメカニズムである。

それが民主主義の本質であり、「悪魔の狂気」として語られる方が適切である。大衆は、ボードリヤールの言う「終末の狂気」、すなわちキルケゴールの言う「死に至る病」を抱えている。崩壊の流れ、有機体のますます高まる高密度化（精神の物質への結晶化）、そして魂の消滅とその吸血鬼化が、エネルギー的な食物としてこれらの実体の口の中に入り込む。私たちの」民主主義の原則は、ユダヤ人の有機的な嘘を拡大解釈した嘘であり、「善良さ」のシミュラクルである。

このように、幻想のシステムは、『広範な大衆』の意識的な要素から湧き上がるかもしれない、あるいは、彼らや、上からの光を見ることのできるすべての人々に届くかもしれない、あらゆる反対勢力をなだめ、無力化する手段として設計されている。幻想のシステムは、心の太陽を深みに引きずり下ろし、奴隷と吸血鬼化のシステムの間に沈めるように設計されている。

民主主義とは、この世の光であるアーリア人種の生存、拡大、進歩、そして地球上のあらゆる秩序の維持にとって有害な結果をもたらす現実の劇場であり、気持ちのいい幻想である。

民主主義とは、アリストテレスの言葉を借りれば「群衆支配」であり、自分たちがどこへ行くこうとしているのか、どうやってそこへたどり着こうとしているのか、方向性も感覚もなく、ただ利己的なエゴイズムと必要な多様な動機の対立（野蛮の下水道へ向かう純粋にクトニッくなテルルの志向に基づく最低の動機）の名の下に、互いに倒れ合うだけの混乱した不協和音のような存在の集団による機能不全の支配、あるいはその欠如である。一時的にせよ、彼らを支えているのは、最初は金、次には電磁気のガイワイヤーの糸を持つ隠された手であり、その指はこれらの目に見えない糸を奴隷の魂に絡ませ、こうして彼らの意識を彼らの集合意識にハイジャックした。

民主主義とは、レバーを操作し、ボタンを押すシオンの魔術師たち（ユダヤ・メーソン）が、電氣的インパルスと微妙なオカルト的力を伝達し、「投票する家畜」であるゴイムの心を操作する幕である。彼らは、マルチカルティズムの糞尿の蒸し焼きグーラッシュを飲み込むことを余儀なくされる。トレッドミル（踏み車）の上を走る姿は、長生きすればするほど金が儲かり、止まれば存在しなくなる。

自立心のない者たちは、どこにも向かわない踏み絵の上を走り続ける。それが生存し続けるための必要条件であることは理解しているが、それが単に魂の奴隷化と墮落につながり続けることを考えると、生存の目的は何なのかは疑問である。彼らは肉のため、純粋に物質主義的な目的のために生きている。彼らの人生の輪は、下降スパイラルのようなエントロピーの中でそれ自体に閉じていく。

しかし、そのような道を歩む意志のない人々もいる。この崩壊の流れに反対する抵抗者たちこそ、隠された手が消し去りたいと望む者たちなのだ、ピロードの手袋から鉄拳を抜き取り、彼らの専制的な本性を明らかにするのではなく、彼らは単にいくつかのレバーを引き、彼らのイリュージョン・マシンのいくつかのノブをひねるだけで、大衆は彼らの敵のカリカチュアを目の前に置くことになる。そして、その「敵」は、愚かなゴイムが「敵」を引き裂くことができるように、現実には、隠された手による貪欲な搾取から救われる唯一の希望であり、彼ら自身がデミウルゲの口の中へ崩壊することは避けられないのである。

イデオロギー的P.I.S.S

ブルジョワのイデオロギーとは、「P.I.S.S.」すなわち「平和主義、国際主義、感傷主義、愚かさ」あるいは「平和主義、国際主義、セム的感傷主義」とでもいうべきものである。このイデオロギーは近東、つまりレバントの下水道とカルデーン／サバインの汎神論的自然主義に由来する。

羊飼いの王による寡頭政治は、牧歌的な権力を、彼らが恣意的な支配権を握る "群れ"であるI.Q.の低い野蛮人の上に振るうものであり、それは東洋の専制君主制の模範であった。

このイデオロギーは、「アーリア人」、つまり「高貴な人」として適切に語られるものを廃棄し、シュードラ／チャンダルカーストの卑しさに取って代わった。P.I.S.S.』は、真のアーリア人である貴族を破壊する手段として、ヴァイシャとスードラの両カーストによって受け入れられている信条であり、ブルジョア（ヴィシャ＝商人カースト）は偽善的に、スードラ（農奴カースト）は熱心に、前者による権力の政治的維持のメカニズムとして、後者による権力の包囲機関として受け入れられている。

P.I.S.S.』は、特にブルジョワの信条をアクロニゼーションしている。大衆、つまり暴徒にとっては、腹と生殖器官という最下部の肉の努力以外には、いかなる信条を打ち立てる心もない。それゆえ、「P.I.S.S.」の信条は必然的に偽善の信条となる-その中で求められているすべての行動は、単なる形骸主義と演劇として見せかけだけ行われ、その実現の確認として感情的な感情を与えられるだけである-存在論的に妥当であると主張されているもの（平等など）は、リップサービスにすぎず、「P.I.S.S.」の信条は、必然的に偽善の信条となる。しかし、この幻想は、ブルジョア・カーストを権力の座にとどめ、感情的なカタルシスによって広範な大衆をなだめ、その時々「敵の他者」として機能するスケープゴートに彼らの血の渴きを満たし、ブルジョアジーを失脚させるかもしれない潜在的な革命的抗争を無力化するのに役立つ。

しかしブルジョワは、おそらく本能的な不誠実さと確証バイアスから、自らのプロパガンダに引っかかってしまう。ブルジョワは本能的に、自分たちの快適で楽しい生活が平等主義的な嘘への悪信心に依存していることを理解しており、それに従って、現実への故意の無知を通じて自分たちの地位を永続させる手段として、センチメンタリズムを通じて理性的な心を切り離す。

このセンチメンタリズムは、セムの観念論哲学のペーソスと、そのハウス・オブ・トランプのような概念的抽象概念に由来する：存在」と「ひとつ」-「ひとつからひとつへの逃走」、「ひとつのものの完成」のために-脆弱な体質から生まれる人生の苦難からの安心と「

救い」への憧れと切望であり、それ自体がタイプの婚外化（mongrelization）の結果である。

このパトスは、乳房を求める子馬の悲痛な叫びであり、先天的に欠陥のある弱者の、鳴き声のような不合理な発露である。この地所（スードラ）からは、平等主義の信条、狡猾な策略と欺瞞によってより強い相手を引き裂こうとする懇願的な願望、不愉快なハンセン病患者から自分を追い出すために、ただ施しを手渡し、嫌悪と軽蔑の念を抱いて背を向ける上司の心の糸を引っ張るような行為が発せられる。この感情に訴える仕草は、ジブシーのスリの巧みな指先のように、おそらくは古代インドやヴァイシュナヴィズム、そしてそれ以前のアトランティスや数千年前にそこで起こった奴隷の反乱に至るまで、歴史全体にわたって機能してきた。

奴隷カーストから派生した平等主義という、セム族のパトスのような鳴き声の信条は、彼らの狡猾な心理から生まれたものであり、オリンポスの高みにいる、別の場所にいる高貴なタイプの心理を利用して、どのように引き裂き、破壊するかを理解していた。

国際主義は、このセム的なガターの信条のもう一つの特徴であり、潜在的なウイルスとして、アリア帝国の周辺に横たわり、狡猾なユダヤ人によって動員され、白人社会を攻撃し、内側から（奴隷や商人として）、あるいは傭兵の大群として外側から取り壊すために動員された非人間的な人々の間で、必然的に増殖した。

最下層の共通分母は、平等という信条によって自分を高めることができる。この甘ったるい信条の虚偽は、卑しい者のエゴに訴えかけるように働く。卑しい者は、高貴な者と一緒にいると嫉妬にかられ、多様な性質を持つ社会の中で、またそうでない社会の中でさえ、高貴な者に対する殺人的な憎悪を抱くことが多い。

その例外が、血と土と *suum quique*（「人それぞれ」-有機的な存在論的差異）の原則に基づいて設立された有機国家である。神の前での「平等」と「神」と「人間」の間を偽りの謙虚さで仲介する必然的なユダヤ人聖職者カーストは、社会の残滓の間で、追放されたチャンダラをウイルス的に増殖させる役割を果たす。彼らは、「もうひとつの世界」という幻想的な夢物語に勇気づけられ、権力への駆け引きのために自らを犠牲にすることを厭わなくなる。それゆえ、近東の汎神論的イデオロギーの平等主義的な側面が、「あらゆる人々」をその仲間に徴兵するのに有効なのである。

今日のブルジョワジーは、かつてのユダヤ人と何ら変わらない。偽善的な寡頭制は、「P.I.S.S.」という司祭カーストのヘゲモニー的言説を利用して、奴隷カーストを惑わし、なだめすかし、自分たちの「正当な」権威を正当化する。平和主義が特に強調されるのは、奴隷カーストが、平和主義の代表者であり「平和」の体現者である司祭カーストを引き裂かないようにするためであり、それゆえ神聖であり、平和主義信条の感情的な言説によってその限られた理解が容易に曇らされる哀れな信者の目には触れることのできないカーストである（永遠の苦しみなど）。

P.I.S.S.」の信条は、奴隷階級が鉄のしがらみの中にとどまることを確実にするために使われる、メシア的な偽りの約束、聖職者カーストの聖域、イデオロギーのアヘンという毒の温かいドラフトである。

もちろん、これらの束縛は、永遠の命や至福の約束の原則に基づいて意識が構成されてい

る奴隷にとっては、なおさら目立たない。

社会的非難や排斥の脅威、失業や路上での飢餓の脅威、必要とされなくなるまで働かなければ投獄や犯罪者によるテロの脅威にさらされる。

P. S) イデオロギーは、平等主義、「弱さを美德とする」、「汝の隣人（二本足で歩くすべての二足歩行生物）を汝自身のように愛せよ」という魂を破壊する信条を守りさえすれば、快適な余暇と娯楽を約束する、汎神論という死のカルトを受け入れることで、すべての人が引きずり込まれ、滅びの淵に落とされる。ポスト・モダニティの奴隷カーストにとっての結末は、感覚的な喜びという偽りの約束であり、ドーパミン・スパイクのジェットコースターのような一瞬の儚さであり、灰は灰に、塵は塵にと、忘却への墜落へと必然的につながっていく。

この幻想を直視し、そのように認識することは、幻想を克服することであり、ベールを脱ぎ、舞台裏にいる司祭カーストの真の姿を観察することなのだ。もはや彼らの作り出した一神教の「神」のアーリア人のローブを着ているのではなく、むしろ黒魔術師の欺く者の黒いローブを着ているのだ。

一旦認識されれば、必要な行動をとり、魔女を火あぶりにして、『P.I.S.S.』イデオロギーの手枷足枷を永久に外すことができる。

反人種」の排泄：近代

現代-その文化と住人は反人種の排泄物である。この文化は、反人種的なユダヤ人の産物であり、彼はその特徴的な地下に潜むマフィア的な乗っ取り戦術によって、権力の首を絞めることに成功した：縁故主義的な部族主義、高利貸しと辣腕、密かな暗殺と暴徒化、レバントの宗教や秘密結社（古代のアッカド教やフェニキア教から新プラトン主義、キリスト教、啓蒙主義的な神仙自然主義や一神教まで）を通じて彼ら自身が墮落させた墮落した貴族との婚姻。

これらの多様な戦術はすべて、アーリア人打倒という目的を達成するために協働し、社会の健全な要素、つまり肉体、魂、スピリットが互いに調和し、不協和音を奏でることなく統合された『人種の男』たちに対して、どのようなウンターメンシエンの手段を用いてもよい。

近代の文化は、国家社会主義者たちによって "entartete kultur" と正しく呼ばれた。それは、

下へ下へと導き、引きずり降ろし、墮落させ、汚し、すべてを汎神論的な原始的な "一体性 " の状態へと還元する文化であり、ユダヤ人はその創造者であり、広告主であり、その布教者である頂点に立つものである。

調和はリズムに、形は無定形に、補色は衝突する色に、秩序は混沌に取って代わられる。歴史的な記録を観察するだけで、アーリア文化（唯一の真の文化）が、歴史上のこの時期に「文化」と名乗る非アーリア的な汚物の泥沼に落ち込んでいることを理解することができる。

反人種の意識：ユダヤ人はその頭を表し、身体は非アリア人の集団である。この意識は、「文化」と呼ばれる市場で売買される排泄物の形で現れる：

- 1) 非アリア人がアリア人に対して使用する文化的武器であり、彼らの文化と自己理解を破壊し、生物学的人種集団としてのアリア人を滅亡させるメカニズムである；
- 2) 両者とも、それぞれの意識が文化的形成の中で具体化し、結晶化する方法において、アリア人意識に対抗する力としての非アリア人意識の表現である。

非アリア人（その「文化」は、強奪と殺人-非アリア流の文化的収奪によって継承された、地球の特定地域における古代アリア人の歪んだ類型にすぎない）の間で「真正性」がどのような条件を満たすかを理解するためには、地球上の非アリア人の文化を観察するだけでよい。

近代の文化は、思想や神秘的なプロセスの自由主義的／魔術的な漠然とした塊ではなく、むしろ根本的なものであり、有機的に相容れない混血と相容れない要素の結果である。

マヤ

それは、光の子と闇の子の剣闘士の戦いが行われる闘技場である。

人は闘技場、つまり肉体を持たない存在で魂を失うかもしれないが、世界で勝つこともできる。肉体の世界では負けるかもしれない。だが、それ以上に、不運な道や、奈落の底（クトニクな下水道）へと続く道へと落ちることがあれば、それは、霊的な世界での戦いを拒否し、戦いの中で自らを強化することを拒否し、幻影の現象界（ユダヤ人が運営する劇場）で感覚の虜になる者たちの運命である：ユダヤ人が、ユダヤ人でないカモやカモになりそうな者、つまり現世と来世で魂を盗もうとしている者、つまり「ゴイ」に来世がないようにしようとする者に差し向ける誘惑に負けてしまうのだ。

薬物、アルコール、肉欲的歓楽の誘惑は、非ユダヤ人、特にクロウリーによれば最も純粋で大きなエネルギーを持つアリア人を陥れるための多くの餌として、彼はゴイの前に並べている。

これこそ、アーリア人の魂を共食いさせるという、ユダヤ人どもの甘えなのだ。感覚の悪習にとらわれ、マヤの泥沼に引きずり込まれた者は、存在の高次の原理（魂と精神）が物質面の感覚に絡め取られ、魂を失う危険にさらされる。

これが、ユダヤ人とその取り巻きのゴーレムたちが、マーヤに根ざし、高次の原理から切り離された地上の魂を創造する手段として、特に騒音（振動）をアーリア人の感覚に永遠に浴びせ続けようとする理由である。

おそらく、慢性的なストレスを作り出すことで、これらの実体がターゲットにされた個人に執着し、執着することで、憑依された者が経験することを身をもって経験すると同時に、自分の魂が憑依した実体によって吸血鬼化されるようにするためであろう。

他の人の意識に際限のないストレスを与え、特定の反応（闘争や逃走反応）を引き起こすことは、その人の潜在的な意識の高み、より高い原理から注意をそらさせ、その人の心に突き刺さる刺激（音、光景、振動など）に意識のエネルギーを集中させる。

このように、闇の勢力の陰謀団の活動には、単なる平凡な復讐やサディスティックな他者支配、単なる力の行使よりも、もっと不吉な目的がある。むしろ彼らは、自分たちが結びついている実体の反映として、最も偉大で純粋なアーリア人の魂を吸血鬼化することに関心を持っているのだ。

白人（潜在的アーリア人）がこの運命から逃れるためには、霊的な性質の戦闘が必要である。マーヤからの離脱、より高い霊的意識レベルでの生活。そのためには、センセーションナリズム（ドラッグ、アルコール、性的嗜好、粗い神経刺激）を避け、高次の意識の発達につながる修行（熟考／瞑想、適切な運動や訓練を怠ると萎縮してしまう筋肉のように、意志の制御や魂のエンパワーメントと因果関係のある試練に耐えて自己を強化する）をすることである。

マーヤでは、すべてはショーであり、劇場である。しかし、その結果は常に永続的なものであり、魂を印象づけ、修正するものである。

ユダヤ・キリスト教とその現代の変種である自由主義は、弱さを悪ではなく美德とし、強さを美德ではなく悪と説くため、人を破滅へと導く。それは、自分たちを搾取する者たちに仕えるよう説得しながら、標的を軟化させる手段として、ユダヤ人が白人の意識に植え付けた心のウイルスである。自分自身と同族の破滅を求める者たちの前で奴隷になることが美德の

極みであり、まさに「高みから」発せられた倫理的命令なのだ。

敵に従うことは、死神に従うことと同じである。もう一方の頬を差し出し、自分への暴力を許し、自分の生存を確保する手段として意識の高次原理（理性と直感）を用いることも行使することも拒否し、永久に無知の状態にとどまり、精神的自殺の信条に固執して自らの死を許容する。

そのようなものはアーリア人の道ではなく、弱さの道であり、セム人の農奴制の道であり、運命を全うする手段として従属を要求するチャンダラの精神性である。自分の魂と、自分がその一部である人種的オーバーソウルを救うためには、戦闘を放棄し、処女的な精神性に従わなければならない。戦士の精神性とは、この世での生活が戦闘であり、「永遠に続く戦争」であり、敵に対抗する限られた力によって、一時的にはともかく、来世での存続を保証するものである。

ハニートラップ

ハニートラップという現象は、世界を支配する母系制の特徴である。それは、意識の低次の状態、本能的な衝動、人の中の最低で最も卑しい要素へのアピールに依存しているからであり、また本質的に、意識（高次の意識）を存在の高次から低次の平面にシフトさせ、その手段によって防御力を低下させることによって標的を操ることに依存しているからである。

ターゲットは中心から外され、自律した人間としての基盤から外され、誘惑や誘惑の力としての性の磁力によって心の均衡を崩される。肉欲（ハチミツ）の「甘い喜び」の約束は、ターゲットを陥れる衝動の力である。

闇の寡頭政治が持つ本能的な心の理解は、彼ら自身の低い意識状態から発せられ、漁師が魚を求めて水中に網を投げるように、ターゲットに投影される。

しかし、寡頭政治とその手下たちが比較的低い意識レベルでは疑っていても知らないのは、アーリア人は必ずしも彼らの網に簡単にかかるような底辺の人間ではないということであり、単なる魚であると誤解されるかもしれないが、多くの場合、水中のサメであるということである。

このハニートラップは、陰謀団が男女の両方を誘惑するために、特徴的な地下の方法で仕掛けられている（「男」はここでは集合的代名詞として使われ、アーリア人種、つまりサンスクリット語の「マナス」に由来する高次の意識「心」を持つ彼らだけを指している）。

それは、彼らが「善」、「利益」、「隠蔽された善」として描くものの場合、不吉な現実を

隠す偽りの外観、つまり、非ユダヤ人奴隷カーストの目から遮断され、奴隷階級がそれを利用できないように、本当の善や利益を隠すのに役立つ様々な呪いの印や言葉によって不明瞭にされる、裏工作に関する彼らの他のすべてのプロトコルと同様に作動する。

ハニートラップの場合、餌（「ハチミツ」）は、肉欲的な耽溺、あるいは精神的に高められた関係といった見かけ上の利益である。

ハニートラップの目的は多岐にわたる：ハニートラップ（標的を誘惑するために陰謀団に徴用される個人）を持つこと：

- 1) 対象者の意識をマッピングしたり、より高度に、より効果的に操作したりする目的で、対象者のバイオメトリクスやその他の情報を収集する（例えば、現実の劇場で演じられる寸劇や、対象者を古典的に条件付けし、データベースに入力可能な反応を引き出すための神経回路プログラミングやその感作要素を取り入れるなど）；
- 2) 「ハチミツ」が暗殺を可能にし、彼らを何らかの罠にはめる（例えば、彼らの住居に入り、そこで陰謀団に儀式的に殺されるか、生け贄として拉致され、どんなロジックやシナゴークで始末されるか）。

ハニートラップはその名の通り、誘惑（ハチミツ）と罠捜査である。ハニートラップに対処するのは簡単だ。相手の心理の専門家になり、鋭い質問をして、相手が工作員であることを示唆するような反応を引き出す。特定のキーワードを使って同様の反応を引き出し、相手にショックを与えたり、「ギャングストーキング」や「コミュニティ・ポリシング」、「ユダヤ人」、「フリーメイソン」など、微妙に異なる異常な参照方法で行動させたりする。

微妙な痙攣や行動の手がかりがあれば、工作員がいることを示唆するだろう。しかし、これらの人々は、おそらくトラウマに基づくマインド・コントロールの多重人格障害の犠牲者であり、その分身は（例えば無線周波数などを通じて）ハンドラー側のわずかな挑発で引き起こされる可能性があることを考えると、それは実りのない努力かもしれない。

それゆえ、人は相手が誰であるかを知ることはなく、せいぜい慎重なターゲットが、周囲の状況や、その人の生活や他人との関係を調査することに基づいて、その人（ハニートラップ）の信頼性について推論することができる程度なのである。

ほとんどの人が何らかの催眠状態に置かれ、マトリックス（セルタワーなど）の電磁場を通して、彼らの行動をコントロールしたり影響を与えたりする存在に憑依される可能性があるからだ。

したがって、歴史のこの時期におけるすべての関係者の合言葉は、「誰も信用するな」（

D.T.A)である...少なくとも完全に、遠慮なく。物事に対するより高い理解（神聖なる意志、存在への同調）を培うことで、誰が味方で誰が敵かをより認識できるようになる。

"その実によって、あなたがたは彼らを知るであろう"というのは、推論が理性を介した外見と感覚的経験の連結の範囲にしか及ばないので、知識の条件としては適切ではない：むしろ、「単に平凡なレベルで証拠の断片をつなげるよりも、より高いレベルで感じ取ることができるその実によって」である。ハニートラップにはまってしまわないよう、臆することなく軽やかに、しかし巧みに足を踏み入れていかなければならない。

陰謀団の暗い女性的性質（理性の狡猾さへの依存と、*潜在的な*ものであれ、より高い次元に存在する人々への極悪非道の投影）は、その専制主義の様式である。狡猾に、欺瞞を通して、誘惑を通して、毒入りの果実を提供することで、ターゲットに毒を盛る（ターゲットは、拷問殺人のために選出された、陰謀団の気まぐれな傾向／欲望のすべてである-これもまた、その暗い女性的意識の特徴のひとつである）。

陰謀団の投影は、自分自身の欲望が自分自身にとって他者であるものに投影されることで成り立っている。もちろんこれは真実で、ターゲットには選択肢があったのだが、だからといって陰謀団がカルマの反動から免除されるわけでも、「罪」が自分自身に降りかかってこないわけでもない。

陰謀団のメンバーにとって、これは単にもう一つの「洞察の役割」に過ぎず、劇場の俳優としてターゲットの行動を体験し、操作し、影響を与え、意図した目標を達成する優越感を得ることを可能にする。

母系制の下での覗き趣味

ジオンのテロリズム政権の暴徒ストーキング・プロトコルの基本的な特徴は、その参加者がコーシャ公認の「敵の他者」を虐待することから得られる倒錯的なスリルである：彼らは「他者」を観察することで性的スリルを得（覗き見）、さらに敵の「他者」に対するあからさまな嫌がらせや拷問でサドマゾ的スリルを得る（このサディズムは、関与の度合いによっては、肉体の切断や破壊から、より高次の「アダプト」のカニバリズム的儀式によって魂と実体を結びつけることによる魂の窃盗や切断にまで及ぶ）。

陰謀団はヒエラルキーであり、マフィアのストーキング・プロトコルは、黒魔術師たちによる神秘の冒険へのイニシエーションにすぎない。

「サドマゾヒズム」とは、「他者」に危害を加えることで得られる性的興奮のことである。

セックスと死のつながりは、母系制の子宮とその妃たち、つまり母なる女神の妃たちから生まれたものであり、母なる女神の母系制のペチコートに隠れ、ジオンのマトリックス・

マシンの歯車とレバーを操作するシオンのバアル司祭たちである。

彼らの欺瞞と、現実の劇場で劇俳優の役割を演じることへの喜びは、（本能的な意識の底から出てくる）彼らの倒錯した地獄の心の最も基本的な様式である覗き見という形で現れる。

このプロセスは、すべてを見通す母なる女神の目によって開始される。母なる女神の目は、その全視野ですべてを見渡し、すべてをその知識の対象とし、それによってその視覚の対象との間に権力と知識の関係を確立する（知識を持つことは、知識を持つ対象に対して権力を持つことであり、それは既知の対象に権力を課するための基礎となる）。

全員が参加者として徴集されたり、敵として標的にされたりするイニシエーション的なスパイ社会を作ることは、この知識＝権力のダイナミズムの全体化機能であり、破壊の建築家である陰謀団の司祭たちによって設計されたソロモンの神殿建築に大衆を規制し、規則化する手段である。闘争、逃走、姦淫、摂食・権力関係の既知の対象としての「他者」との関係で行われる行動のモダリティは、低次の本能的な心を支配し、「他者」のサドマゾヒスティックなノータッチ拷問におけるセックスと死への傾倒を結びつける低次の衝動を通して知られている。

ロボット・オブ・サイオン

E.L.F.およびE.M.F.ステーションから送信される無線周波数によって、奴隷階級が彼らのバイオリズムにおんぶにだっこで、あらかじめ決められたアルゴリズムに従って考え、行動するように条件付けられる。かつては半自律的だった自由人の周波数と共振を、ユダヤ人とその共犯者がボタンを押すだけで彼らのプロトコルを実行するオートマトンへと変えるのだ。

ゴイムのロボット化と自動化はすでに進行中であり、私たちは今、彼らの計画が実行に移されるのを待っている。彼らが奴隷階級に埋め込むことを望んでいるRFIDチップは、身体の機能を電子的にコントロールし、衛星を通じて同じRFIDチップに送信されるどのような周波数にも共鳴するように意識を変えるものである！メシアの"吉報"を信じ、ユダヤ人の"選ばれし民"を聖なる種族として、また触れることのできない支配者として受け入れるように。

歯科医、外科医、医師たちは、おそらくこの数十年間、人々の体にRFIDチップを注入してきた。そして、闇の勢力のすべてのプログラムと同様に、このプログラムもジオンの舞台監督たちによって、現実の劇場の影で密かに運営されてきた。

ほとんどの医師はフリーメーソンかユダヤ・キリスト教徒、あるいはその両方であり、闇の勢力の隠れた代理人としてアーリア人の手袋と手を取り合っている。したがって、ユダヤ人の「主」の前で「恐れおののく」必要はない。唯一の救いは、ユダヤ人を救うことでなく、ユダヤ人から救われることであり、それは魔法のようなユダヤ人の「主」への祈りではなく、自分自身の意志の力によるものだからだ。

RFIDチップは、ユダヤ人テロリスト集団が自分たちの下っ端をコントロールするための制御メカニズムである。このテクノロジーは、生命を支配する力を与え、衛星からチップを経由して体内に直流電流を送信し、そのような電子インパルスを通じて身体の運動機能を操作することで、自分たちの容疑者に即死をもたらす能力を与える。

バブロフの犬のように、非ユダヤ人ターゲット（ユダヤ人ターゲットは存在しない）は活性化されるか、受動的にされる。おそらく電気ショック療法のように、神経やニューロンはヒューズボックスのヒューズのように短絡されるか、焼き切れ、昏睡状態になるか、ゾンビ化するのだろう。

しかしこの力は、システム、つまり電磁シオン・マトリックスの生存能力によってのみ制限される。このシステムの永続は苦しみの永続であり、苦しみを緩和する唯一の方法は、システムを作動不能にするほど高いレベルで衛星と制御網を知ること、つまり消滅という形でもたらされる。

マトリックスを崩壊させるために必要な措置を講じるには、意識的な意図によって、遠隔からの影響力によって、十分に高い権力の座にある人々に影響を与えることだけが可能である。つまり、ストリートレベルのギャングスターから、そのハンドラーや、メーソンリーや国際ユダヤのケヒラで高官や上層部の地位にいる者たちまで、全員である。

既知の人物に対して黒魔術の念力攻撃を行うことが鍵であり、彼らに十分な反感を抱かせ、

彼らの失脚をもたらすのだ。その時点で、悪の組織の一員ではない有能な外科医の巧みな手によって、RFIDチップを切除することができるかもしれない。そうでなければ、ジオンの暗黒時代の肉体のメメント・モリとして、機能しない人工歯として残るだけかもしれない。

この時点でチップを取り出そうとしても無駄である。テロリストの陰謀団は、彼らが採用する秘密の手段、例えば、留守中に誰かの家の壁に穴を開け、彼らが戻ってきたときにノックアウトガスを注入し、彼らの家に入った後にチップを埋め込むことができるからだ。

このような処置は、複数の人間を交代で寝かせることを除いては、現実的に対抗できるものではない。したがって、唯一の手段は、善良な人々に行動を起こさせ、悪者であるシオンのテロリストを破壊するよう動機付けるために、遠隔影響を与えるテレパシーを用いることであり、自分自身でできる直接的または間接的な行動（例えば、脳卒中や心臓発作を誘発する念力による精神攻撃）を取ることである。

そのような行為（というよりむしろ行動を抑えること）は自殺行為であり、人は戦闘を行うか、その試みで死ぬかのどちらかであり、ブラック・マジカン・ヴァンパイアとその実体であるアーリア人側に対するチェス・ゲームの駒として彼らを利用するアーコンの崩壊から魂を守るのである。サイボーグ奴隷としてのアイデンティティを消し去るか、肉体的な死においてさえ自律性を守るか。

インファナル・マシーンズ

ザイオンのテクノクラシーは、マトリックス・システムを構成する奴隷化の機械を利用している。

これらのマシンは多機能情報処理システムであり、マトリックスのスレーブに無線周波数と電子信号を送信し、サイバネティック・コントロール・グリッド内のスレーブの監視から得られた情報を検出、解釈、中継する。

彼らが検知した情報は、数学の定量的還元主義的言語である「0」と「1」に翻訳される。すべての存在は、それらの機械との相互関係（インターフェイス）を通じて操作可能な単なる「情報」に還元され、4次元超空間のジオン・メタロニック・ハイパーキューブと呼ばれるより大きな機械の単なるノードとなる。

しかし、これらの機械は、物理化学的な構造体として、より大きなシステム内のマヤのマトリックスとして、マトリックス内に存在する有機体に関係することができるだけであり、これらの有機体の一部が持っている／持っている高次の意識を理解したり、影響を与えたりすることはできない。

ジオンマトリックスは、その理解力を超えるもの、つまり定量的に0と1に還元できるもの

、そしてそれがスピリットであり、この三次元時空複合システムにおいてアーリア人が唯一所有する聖杯であることを理解できない。

スピリットを持つ者だけが、電磁気学に基づくシステム内の単なるユニットやノードとして、自らをサイバネティック化することを克服できる。そのような存在が構成する物質は、ジオンマシーンの「世俗的な」策略の有限性を超えている。それゆえ、彼らだけがマトリックスから抜け出すことができる。しかしこれは、彼らが神秘的な「世界からの逃走」を求めるとか、求めるべきだということではなく、むしろ彼らは、内在的な超越を通じて、単に世俗的な束縛を脇に追いやることができるということである。

サイオンの機械は、民衆を奴隷化する粗雑な仕組みとして設計されており、"ゴイム"たちは吸血鬼のようなエリート・オリガルヒと、これらのオリガルヒが支配し、彼らが束縛されるようになったアーコンティックな存在によってエネルギーを消耗させられる。

スティーブン・キングの映画『マキシマム・オーバードライブ』のように、これらの機械自体が、おそらくは電気に基づいて作動し、あるいは作動させたり改造したりすることができる何らかの微妙な力によって、人々の魂を盗むという邪悪な目的を実現するために使用する、これらの存在によって支配され、憑依されるようになるかもしれない。

こうして、機械をコントロールし設計する者たち（おそらく最終的には、そもそも吸血鬼的な存在に突き動かされているのだろう）は、自分自身が機械に変身するだけでなく、これらの存在の悪意ある意志の乗り物である兵器に変身することになる。映画『ターミネーター』のように、機械は人間を乗っ取って破壊し、すべての人間を、吸血鬼化しようとする特定の物理的なエネルギー形態ではなく、単にエネルギーそのものを吸血鬼化するオプションを持っている実体（魂を盗み、魂を食べる者）のためのエネルギーの受け皿として奉仕する人間のバッテリーとして奴隷にする。

かつて慣例的に「人間」と呼ばれていたものの大半は、今日では機械となり、その多くはこれらの存在（「アーコン」、「アスラ」、「レプティリアン」-何と呼んでもいい）に魂を奪われている。このように、機械によって作られた機械には地獄のような目的がある-それは、魂レベルで人の破滅をもたらすことである。

機械は有機的な生命を引き継ぎ、そのほとんどは有機的であることをやめ、その代わりに、機械化された人工的なもの、つまり、ボードリヤールが語ったような現実のシミュラクル、超現実となり、エネルギー電池のゴイムの意識は、母系制グローバルシステムのサイバネティックな腔に吸収される、すべての者はその差異において虚無化され、宇宙の腔液の腐食水の中に沈められ、単なるエネルギー0と1に分解される。

機械の作用機構は、有機的な機能を人工的な自動化された機能で置き換えることであり、究極の結論や結果として、すべての合理的な選択やシステムからの独立が、段階的な（対数的に段階的な）置換プロセスによって破壊される。

高次のマインドや高次の意識とのつながりを萎縮させ、テキストや記号、数字といった抽象化されたメディアを通して、コミュニケーションは劣化してきた。彼らの第一の財産は、人工的な反復可能な文字やグラフィによって上書きされ、それがフォナイに翻訳されたり、逆に翻訳されたりして、与えられたものが媒介されて失われている。

存在（有機体）は、0と1の通信システムのノードにすぎない。これが、遠隔神経モニタリングと遠隔操作の意味と意図である。つまり、ゴイムをサイバネティック化し、その姿をサイオンの蜘蛛の巣に絡ませることで、その起源において現在のシステムの原動力となった古代の存在に魂を吸血鬼化させるのだ。複式簿記の「0」と「1」から、司祭カーストのレトリックの哲学的・神学的抽象化、そして現実の言語（電磁インパルス）に至るまで、「ゴイム」のサイバネティック化は何千年もの間、進行してきた。

血を撒き散らす

ジオンの吸血鬼たちの論理、つまり不条理な論理によれば、他者、つまり自分たちにとって「他者」であるものを傷つけることは、以下の理由から完全に正当化される：

1) この「他者」がその原因となったとされる過去の「罪」に対して「他者」を非難するために使う被害者意識の神話として、彼らが作り出し、信じるようになった偽りの物語である。

2) 他者に危害を加える仕事を、無数の「他者」（彼らの論理によれば、自分たちの手は汚されず、他者の手は危害を加えようとする者たちの血で汚されるように、自分たちと緩やかに結びついている）に委ねること。これはユダヤ人とその仲間たちの黒魔術であり、「他者」をスケープゴートにすること、自分たちにとって最も都合のよい代理人にカルマを移すこと、そして理想的には、彼らの論理によれば、敵意を抱いている代理人であり、ユダヤ人が自分たちのカルマ（自分たちが最終的な原因である不調和の連鎖）をハメたり、仕掛けたり、重荷を負わせたりすることを望む代理人にカルマを移すことに基づいている。

陰謀団全体が、このようなスケープゴートと転嫁を前提に動いている。彼らが罪と責任を転嫁する「他者」だけでなく、標的にされた個人にも、陰謀団が解釈する（ほとんどの場合、思わせぶりに動いているか、嘘の根拠となっている）、陰謀団が彼らを導く行動指針を追求するか、控えるかの「選択」を与えている。

これは、ユダヤ人でない者が、陰謀団の二丁拳銃の照準の中に置かれ、一方の銃身か他方の銃身かを「選択」させられるという「設定」である。これは、彼らの邪悪な論理の転移／ス

ケーブゴート化様式が適用される限りにおいてである（本当の意味では決してそうではない）。

複数の当事者に適用される転移という点では、カルマの重荷は彼らによって分担され、また彼らの思わせぶりの非論理によれば、彼らのカルマを放電することになる。

しかし、現実はそのようではない。行為者がその行為を認識している限りにおいて、その行為者の代理権がなければその結果は生じなかったのだから、その行為者には全責任がある。

このように、「血をまき散らす」という概念は、シオンの黒魔術師たちが自分たちの罪を免れようとする、いわば「神」を欺くための手段なのである。彼らの行いを考えれば、彼らが引き起こす不和によって、その罪が露呈するのは必然である。その波紋は外へと広がり、加害者に報復し、「来世」（より高い次元）の物理的次元の現世のどちらかで彼らを裁く、増加する数の意識の対象となるだろう。

陰謀団の論理は本質的に欠陥があり、本質的に自滅的であるため、自滅する。人は「存在」（多くの人が「神」と呼ぶもの）の総体における代理人であり、ある因果状態（「存在」の海における波紋）を引き起こし、その因果状態は、それらの行為や不作為の質／量／相対性／態様に応じて、善かれ悪しかれ、自分に対して反作用をもたらす。

この陰謀団の言い分は、「血を撒き散らす」ことは効果的であり、自分自身の「罪」や「カルマ」は特定の行為の量／質／相対性／様式によって相殺されるだけで、非論理的でも効果的でも自滅的でもないというものだ。具体的な行為はすべて、他のあらゆるものと因果関係があり、対象を害する目的で意図的に行われる。これらの行為は、害を与える行為を実現するための補助的な手段であり、それがなければ害はわずかな程度であっても実現されない。例えば、対象者が旅の途中で道を塞がれ、方向転換を余儀なくされ、特定の害をもたらす罠にはまるというようなことである。

したがって、他者に危害を及ぼすことを認識しながら行った行為は、その者が知るべきであった程度まで関与することになる（ここでいう「知るべきであった」とは、知恵遅れや天才がその能力、メンズリア、つまり意図を形成する能力に基づいて非難されるべきであるといったように、その者の性質や認識状態、能力に基づいている）。

シオンの奴隷マトリックスにいる『ゴイム』は、ロボット化の状態、あるいはそれに近い自動性にまで落ち込んでおり、もはや以前の彼らではなく、『彼らの思考（とそれに伴う行動）は、ある程度は彼ら自身のものではない』のだ。しかし彼らは、どの程度であれ、そのような状態に導かれることを自ら許し、その程度まで非難されるべきであり、『自分の選択』

をしたのである。

とはいえ、彼らは自責の念を形成する能力がなかった分だけ、カルマや非難から免れる。このことはもちろん、ギャング・トークのテロリズムにおいてより高いレベルにいる者たちを非難から免除するものではない。むしろその逆で、彼らがその事実をどのような意識レベルで認識していたとしても、また認識していた場合に限り、彼らの代理人や猫の手やパシリほど非難されるべき存在ではないのである。

例えば、薬物中毒の犯罪者を雇い、その行為を実行しなければ減刑されないと知りながら、ターゲットの所有物を破壊する。そのような行為は、ハンドラーに大きな責任を負わせることになるが、自分の保身という利己的な動機のために物理的に行為を遂行する下級の手先にも同様に責任がある。

このようなシナリオは、映画『ランニングマン』にも見られる。そこでは、被害者はそれぞれ加害者でもあり、戦うか死ぬかの選択を迫られる。それにもかかわらず、それは選択であるが、不連続の極限下でなされた選択であり、それゆえ、この選択を彼らに課した者は、そもそもこのような状況を画策した原因者であるため、より罪が重いのである。

従って、標的に対して残虐行為を行う仲介者にカルマを下方に移すどころか、カルマは上方に流れ、その波及効果は、下位の原因の究極的な原因である者、つまり下級の手下の糸を引き、危害につながる出来事の連鎖を引き起こす操り人形師に最も感じられるのである。

アブラハム神学で言うところの「神の裁き」から免れる者はいない。彼らは皆、他者に危害を加える行為に意識的な意図を持って参加した自らの行為によって、その思わせぶりの理由や正当化にかかわらず、自ら断罪されるのである。二つの過ちは正しいことを生まない」という格言があるように、対象者が本当に過ちを犯したかどうかは、（自覚があり、正すべき正義を持つ者にとっては）「神」が決める問題である。

バブルの塔からのサイコバブル

ユダヤ人支配の主なメカニズムのひとつは、司祭カーストのレトリックを用いることである。これは、自らを正当化し、正当化する自己閉鎖的な言説体系であり、その正当性を暗示する論理を伴うという意味で「相同」である（語源はギリシャ語で「同じ」を意味する「ホモ

」と言葉や言説を意味する「ロゴス」）。

それはまた、「公理性」と呼ばれるもの、つまり、言語がそれ自体によって意味を持ち、その正当性が言語や談話のシステムに組み込まれているため、疑問の余地のない、反論の余地のない「公理」によって成り立っている公理的な形式にも基づいている。

これは、公理そのものが、単に措定された語句や単語（言語をまとった概念構成体、素晴らしい衣装をまとった風の袋）であり、増幅されとしても、「再帰的証明」に基づいてさらなる意味を与えられる--「証明」という概念そのものは純粋に言説の機能であり、言説の意味は、それらの概念構成体からそれ自体導き出されるものであり、したがって、空虚で空虚な風の袋のようなものである--からその意味を導き出すのである。

破壊の立役者（闇の勢力）が用いる聖職者カーストの覇権主義的言説は、彼らの自己正当化のメカニズムとして機能するものであり、他者の自律性に反する行動を正当化し、他者の「他者性」を侵害し、自分たちに有益なものは何でも他者に押し付けるものである。

このことは、政治から経済、法律、さらには医療制度や「社会サービス」制度に至るまで、シオンのユダヤ人マトリックスのあらゆる領域で当てはまる。これらの領域はすべて、ユダヤ人が絶対的な存在から「選ばれた民」であり、それによって「高み」から、つまり「神」から正当性を得て、「選ばれた」仲介司祭カースト集団の救世主として自分たちのものだと言主張し、独占しようとする「神」から、自分たちの独裁をすべての人に押し付ける権利があるという仮定された真実に基づいている。

マトリックス・システムの運用は、ユダヤ人が自分たちを唯一の人間として見ているときに、それがすべての二足歩行の生物に適用されるという意味で「人類」のために役立っているという嘘に基づいており、そのため事実上、彼らの支配下に入らず、「照明」の儀式を経た者はすべて、人間としてではなく、単なる「ゴイム」すなわち獣として排除されている。実際、「光明化」（「悪魔憑き」と読む）された人々でさえも、ユダヤ人にとっては獣である。

このように、嘘はシオンの歯車の潤滑油であり、その覇権的な言説のアルゴリズム（偽善的な普遍主義・二重基準の偽善が、一方のユダヤ人と他方のゴイムとの間に不均等に適用され、シオンの不正の天秤のもう一方の皿にあるユダヤ人の利殖によって浮き上がる）に従って機能する。

アロパシー医学の場合、その言説は、普遍主義的な意味での「人間性」という誤った「公理」と、「健康と助け」に対する「権利」というレトリックに基づいている。アロパシー医学、特に精神医学の実践は、中世の拷問者に相当する現代的なものである異端審問（精神医学的／心理学的評価）、施設収容（地下牢への監禁）、拷問（「患者」を「助ける」と称しながら、実際には「患者」の肉体と精神を破壊する有害で、実際に致死的な様々な治療に強制的に服従させること）を通じて、「助ける」という建前は、結果的に害をもたらす。

精神医学の言葉そのものが、この「助け」の本質を明らかにしている。「患者」は、フー

コー（彼の「診療所の誕生」と「規律と罰」で論じられている）の言うところの「従順な身体」に過ぎず、主人-奴隷の弁証法における主人である精神科医の権力の押しつけに耐えなければならないのである。精神医学／心理学的プロセスの弁証法は、「患者」を「主人」によって課される実験やサディスティックな危害の源にするという、表には出ない下心を持っている。

患者」としての地位によって、彼らは精神科医の押しつけの対象となるのである。

それが精神医学の言葉のパラメータと意味に合致している限り、精神科医は自分たちが選んだ方法で患者に自分たちを押し付けることが、等しく正当化されるのです。現在の新自由主義民主主義マルクス主義体制（ユダヤの権力マトリックスの数ある装いの中の一つ）の下では、公衆の一人（市民）が誤った精神医学的診断によって「精神病」であると認定され（「市民」に投影されたレッテルがその人の内面や行動と一致しないことを意味する）、その手段によって人の自由が制限され、自己正当化する言説によって自分自身を獲得した人々によって傷つけられる可能性がある限り、精神科医は自分自身を患者に押し付けることができるのです。そのような言説を正当化することによって、純粋に自分たち自身の発明や、自分たちが結ばれている存在の発明に基づいて、「権威」の権利を自分たちに獲得した人々によって、人物の自由が制限され、その人たちが傷つけられる可能性がある。人々を「助けている」ように見せかけることは、危害の押し付けを正当化する手段なのだ。アロパシー医学全体（切る、焼く、毒を盛る）や精神医学がそうである。

人（市民）が「精神的に病んでいる」という概念は、司祭カーストのヘゲモニー的レトリックによる架空の構成に過ぎず、思考、感情、行動における「善」の羅針盤として、また「人道主義」や平等主義の一神教（「神」の前では皆平等）の普遍主義的言説の上に、「精神的健全さ」を暗示している。

世俗的人文主義体制のもとでは、「精神的健全さ」とは、集団的大衆の心の集団思考の表現にすぎない。つまり、情報機関（メディア、学界、制度化された宗教など）や、独立した理性的思考や超理性的直観を難読化する集団化された集合意識に閉じ込める電磁波グリッドを支配し、実行することによって大衆の心を支配するユダヤ人オリガルヒによって、大衆が考えるように仕向けられたものである。

ここでいう「健全な精神」とは、単なる社会的構築物であり、純粋に偶発的なものであり、風にそよぐ風見鶏のように、政治的風潮の心の移り変わりに左右されるものである。アブラハム神学の一神教的普遍主義のもとでは、健全な精神は少なくともある程度の安定性や一貫性を持っているが、それにもかかわらず、それは普遍的な構築物であり、この地上のアーリア人と非アーリア人の意識の極端なばらつきを全く考慮していない。

有機的差別化

すべての形は「存在」の発露であり、「一なるもの」の発露である（プラトンや創世記を参照）。それらは真の姿において有機的に発展した存在であり、その存在論的地位は「真」または「善」として語られるものである。混合された形はすべて、その混合の度合いによって、その逆となる（スライド式に比例して、善、真、美、または悪、偽、醜となる）。というのも、それらは本来の要素を調和した状態で保存しているのではなく、むしろ派生した形で保存しているからであり、真理（「存在」、「唯一」、「神」-何と呼んでもよい-）と調和せず、神の意志と拮抗した形で存在しているからである。

たいていの場合、物質界に存在する形（3次元の物理的現実存在する形）は破損した形であり、その存在は断片化され、結合安定性の程度の差こそあれ、バラバラの要素が融合したものである；極端な混合の例（虎とライオンの混合の「ライガー」や「タイゴン」、馬とロバの混合の「ラバ」など）のように、「病んでいる」（diseased）（dis-eased、調和していない）、あるいは機能不全（dysfunctional）-したがって「良くない」（no-good）、あるいは比較的悪い、調和的で相互に支え合う性質の、自分自身や他者との関係を維持することができないと適切に語られるような形で、自分自身を現しているのである。

それゆえ、「悪い」、「醜い」、「偽り」という呼称は、それらが構成する要素の神聖な起源に十分に近いものとして、それ自身の中に真実の環を含んでいないことに値する。

これらの墮落した存在、聖書用語で言うところの「壊れた貯水槽」は、ユダヤ人のカバラで語られる「皮」または「クリット（魂の殻）」である。彼らは、この呼称が自分たちに最も都合が良いときに、おそらく故意にこのレッテルをユダヤ人でない人々に誤って貼るのである。欠片は落ちるところに落ちればいい。それがデミウルゲの性質であり、物質への墮落と「恩寵からの墮落」において、光の密度がますます濃くなることなのだ。さまざまな聖典で「終わりの時」、「カリ・ユガ」、「狼の時代」、「鉄の時代」と呼ばれてきた今日の世界の状況は、これで説明できる。

それにもかかわらず、神聖な火花（聖なるグラール、アーリア人の聖なる血）は、肉体を靈的に変化させることができる。これが聖書で「復活の身体」と呼ばれているプロセスである。これは、神聖なスパークを持つ人のための唯一の選択肢であり、この状態に到達することができるよう十分にアーリア人の血を持っている人のために、靈的な性質の生活を送っている人は、アーリア人の核を通して鉛の棺に霊を引き下げようとする物質の鉛の鎖に打ち勝つ - グラール - 魂は鉛の棺に地縛られるようになる - 物質的な平面で自分の意識に過度に住むことを通して。

これはおそらく、墮落し墮落した者たち、つまり神の輝きを持たない、あるいは物質的密度の泥の中でその輝きを消されてしまった者たちという意味での「不潔な者たち」の本能的な行動そのものであり、彼らはアーリア人を墜落させ、嫉妬に狂った憎しみからその光を消し

去りたいと願っている。

それゆえ彼らは、アーリア人をセンセーションナリズムや、彼の第一の財産であり、大宇宙の小宇宙的存在である彼の内なる存在の炎（「存在」、「神」、何と呼んでもよい）を墮落させ、汚し、破壊するあらゆる現象に曝す、あるいは曝すよう誘う、混沌と苦難の状況を作り出そうとするのだ。彼らは、光をマヤの「腐食性の水」に沈め、泥の洪水の中に沈めたいと願っている。そうすれば、自分自身の劣等感を超える、自分自身を比較する基準がなくなるので、自分自身の内なる悪魔と向き合う必要がなくなるからだ。

こうして、"神とともに支配する" (gott mit uns) 神々によって築かれた "神の都" を、無間者が壊していくのである。それゆえ、アーリア人の文化を再び墮落させ、汚し、破壊しようとする獣人の狂信的な願望が生まれる。

アーリア人アーリア人（「人」はサンスクリット語で「心」を意味する「マナス」に由来する）の文化に現れる分化した秩序は、混沌の体現者であり、「壊れた貯水槽」であり、「最初の所領を失った」ため、破壊しようとする。自分たちの手から生まれたものではなく、創造主の創造物であり、今も内なる神聖な輝きを持つ創造主の子供たちであるものを、創造することも保存することもできないのだから。

最も単純な言い方をすれば、神に似せて造られた文化と文明を守るか、破壊するかという、光の子と闇の子との聖戦であり、「彫像」ではないのだ。地上の天の王国は四面楚歌の状態にあり、その城壁と、まだ救済される可能性のある城壁内の人々、つまり神の火花を持つ人々を守るためには、アーリア人が築き上げたものを維持する手段として、また、雑種化の原罪という「人間の墮落」の間に最初の地位を失った（あるいは、ほぼそうであった）墮落したアーリア人を変容させ、スピリチュアライズされた世界を創造する手段として、シャンドル・ウンターメンシェンの邪悪な潮流に対して断固とした防衛を行い、地上に「神の要塞」を築かなければならない。

それは、有機的に発展した世界ではなく、偽りの存在（神の輝きの片鱗を失った者たち）の意識から発せられる偽りのアイデアに基づく（亜）人間の発明による世界だからだ。

ユダヤ人の意図する『シオン』、つまり爆発的に生成されるパワーを利用したテクノロジーに基づくフリーメーソンのユートピアの創造は、本質的に持続不可能であり、それ自身のエントロピーによって必然的に廃墟と化す。

神の意志の発露である差別化された秩序を、ジュード・メーソンのテクノ・クレイジーの針金や紐で曲解して作り変えることはできない。それゆえ、真理を内に秘め、「有機的な嘘」でない者、ユダヤの反人種とその野蛮な大群だけが、新しい黄金時代、地上の天の王国において、同時に新しくはないが、アーリア人の起源を受け継ぐだけの「時代の新しい秩序」を確立することができるのである。

ベラ・ベラム

戦争には「良い」戦争と「悪い」戦争がある。宇宙秩序の維持と確立のために戦うもの、
「神／存在」の正義のために戦うものは善であり、それに反して戦うもの、全体的な不調和や存在のバランスを崩すことにつながるものは悪である。

しかし、戦争が本質的に破壊的であることを考えると、大義を達成するためには混沌を生み出さなければならない。従って、戦争は錬金術におけるニグレドの段階に例えることができ、調和の取れていない要素を一掃し、それらの要素を取り除いた調和の取れた合成物に置き換えるのである。

人生の現実には戦争であり、他者（現実には捕食者と被食者が存在するため、必然的にそうなる）の目的に反してでも自らの目的を達成しようとする、さまざまな勢力間の絶え間ない争いである。したがって必然的に戦争が起こり、すべての人生が戦争である以上、人は戦わなければならない。そうしないこと、つまり戦闘を放棄することは死であり、勝利者は死者から戦争用の武器や財産、必要であれば親類縁者を奪い取り、勝利を得る。

殉教して死ぬことを認めることは、単に人生のゲームから身を引くことであり、ゲームに終止符を打つことにはならない。

人は自分の味方として戦わなければならない。それが「神が自分を作った」方法（つまり、転生によって彼がどのように俗世の平面に現れたか）であり、自分の味方をしないことは、自分の同族に害を及ぼすことだからである。これは、自分の目的のために自分の種族を犠牲にする種族反逆者のケースであり、具体的にどの程度であれ、どのような方法であれ、彼はカルマ／宇宙法則（『神』の法則）に従って責任を問われることになる。良い戦争とは、「神／存在の側」で、宇宙法の側で行われるものである。

この時、地球上のアーリア人は、大部分において自分たちの生存と戦い、単に自分たちにより大きな害をもたらすだけである。ほとんどの場合、意図的な盲目によって、自分たちはあらゆるものに借りを作る罪人ではなく、プロパガンダによって対等であると信じ込まされた人々とは対等ではなく、むしろ無限に優れており、それゆえに自分たちの味方をするかもしれないということを認めないのだ。

物事の壮大な計画」における自分たちの特別な位置づけを理解し、精神的な性質の世界を創造し、現代世界の粗雑な物質主義に打ち勝つために、自分たちの利益のために行動する必要性を理解するようにならなければならない。それゆえ彼らは、自分たちの種族や集団としての自分たちの存続に対して敵意や無関心を心に植え付けた、すべての同族の一員とさえ戦わ

なければならない。

この反アリヤンの憎悪の加害者は責任を取らされなければならないし、その支持者も同様に責任を取らされなければならない。

このような戦争は、われわれアーリア人種が今まさに直面している善き戦争であり、すべての者は自国民を守るために戦わなければならない。この戦いは同時に、その一員である自分自身を守ることであり、『神』、宇宙の秩序を守ることであり、自分たちが住む墮落した世界を精神的に純粋な状態に戻すことでもある。

もし人が善の側で戦わなければ、善に対して戦うことになる。

メンタルマップ

ターゲティング・プログラムでは、加害者の目標は、ターゲットに適切な質／量／相対性、危害の様式を課すことであり、その結果、ターゲットは加害者の目標を達成することができる：

- 1) 古典的な条件づけとリバース・エンジニアリングによって、アーリア人の高次の意識をマッピングし、彼らのトランスヒューマニズムのアジェンダが完成に向かうようにする（ジオンマトリックス閉鎖系監獄惑星ソウルファームのメタトロニック・ハイパーキューブまたは四次元立方体の完成）。
- 2) サディズムの因果メカニズムを通じてターゲットが放出する苦痛エネルギーを、加害者たち（彼ら自身は存在の次元が異なる加害者である）が糧とすることができるように。
- 3) そうすれば、アーリア人の雪の物語のように、神の像を破壊することができる（「鏡よ、壁の鏡よ……」-自分たちの劣等感を思い起こさせる鏡を打ち砕くことができる）。

この古典的なコンディショニング／リバース・エンジニアリングの手順では、まずターゲットに関する情報を収集する手段として高度なテクノロジーを使用し、言い換えればターゲットのテンプレートや青写真となるメンタル・マップを作成する。

ターゲットのエネルギー体を記録する携帯電話の特殊なソフトウェアやハードウェアを通して、ターゲットのエネルギー周波数を通して観察する。

この挑発は、イワン・パブロフや、拷問の歴史が証言しているように、アーリア人の血に染まった歴史を持つユダヤ人の先祖のサイコパスのそれを反映している。彼ら加害者は、異端者、魔女、人種差別主義者、「犯罪者」など、被害者を標的にする口実が必要なだけなのだ。

彼らの心の中では、弁解など必要ないのである。

彼らが作ろうとするメンタル・マップは、パブロフの古典的条件づけの刺激と反応の関係に基づいており、刺激（反応を引き起こす行為や不作為）によって反応を引き出そうとする試みと、ターゲットの反応との因果関係にある。

この現象を観察することで、外側（行動反応）の観察から内側（意識状態）を推測する という 推論によって、ターゲットの心を理解することができる。

加害者の目標は、この交換ベースのプロセス、つまり、この弁証法を通じてターゲットから情報を引き出すことである。

- 1) 苦痛を与えること（一般人に苦痛や迷惑を与え、その反応につながること）と
- 2) 目に見える、観察可能な反応の兆候を引き出し、それを記録してデータベースに入力することで、犯人たちはターゲットの心にさらに深く入り込み、ターゲットにさらに大きな苦痛を与え、ターゲットの反応や意識プロセスをさらに微妙な程度まで理解し、ターゲットが死に至るか、もはや使い物にならなくなるまでにプログラミングを加速させることができる。

この「ステージ6」、死のステージ、ギャングストーキング／ターゲティング・プロトコルのステージは、犯罪者たちがサディスティックな楽しみを十分に味わい、ターゲットの命を資源として完全に使い果たしたときに起こる：自分たちの利得を最大化するために〔（リビドナル経済における快楽、および／または、自分たちの虐待を映画にして販売することによる金銭的利得、あるいは、ターゲットに危害を加える権利を有償で他人に与えること、ターゲットを犠牲にして自分たちにより大きな利得を得る手段（「血税」）として自分たちの虐待を生放送または視聴覚記録で放送すること〕。

古典的な条件付けや、高度で多くの場合一般には入手不可能な秘密技術を使って、最も有益な方法でできるだけ多くのデータを収集しながら、ターゲットに最大限の危害を加えるために意識のマッピングが行われる。

ターゲットの意識のマッピングは、前述のような推論と、ターゲットのバイオフィードバックを収集し、脳波の活動をコードに変換し、それをターゲットの意識のメンタルマップにデコードすることによって、ターゲットの目を通して最も文字通りの意味で世界を見る技術の使用によって、外部と内部の両方で行われる。

そして、陰謀団メンバーのサディスティックな歓びを満たすためにトラウマを植え付ける手段として、ターゲットにくさびを打ち込み、ターゲットにされた人物の核心に可能な限り深く入り込み、その魂の性質や本質を見極めることで、陰謀団は魂を盗むか、少なくとも魂を

断片化して破壊することができる。

この結果に対抗するために、ターゲットは加害者から自分の思考、感情、行動を隠すブラインドを構築し、加害者がターゲットの誠実な本質について混乱するようにしなければならない。

これは心の要塞の構築と連動しており、可能な限り外部からはアクセスできないようにすることで、表面的な観察と情報収集に対抗し、また採用された高度な技術によってその要塞を占拠しようとする試みに対抗している。

その要塞は、すべての部屋が鉄のバンドで密閉され、超硬質鉄筋コンクリートの壁に最も複雑な錠が埋め込まれていなければならない。精神は、侵入した加害者が脱出することも、S.H.U（特別処理ユニット）で独房に閉じ込められ、身元を確認され、最終的に電気椅子に運ばれ、神経細胞に電気インパルスを与えて吹き飛ばされることもできない、スーパーマックスの刑務所でなければならない。彼らの影響力は、以下のような方法で無効化される：

1) 孤立と

2) その存在に無知であること、その存在を心の自己存在、自分自身への意識（意識の意識）、そして

3) 通常の機能を維持することによって、そこに侵入してきた犯罪者の瘴気のような異質な存在に横取りされることはない。

心のトレーニングはここにある：

4) 真我を固め、自分を自分の中心に置き、あらゆる他者性、外在性、自己でないものの有害な伝染を「遮断」するのである。東洋の「無心」の概念は、禅の「悟り」の概念や道教の「無為」の概念と同様に、「神の武具」を構築する手段として、時空間のコンテキストを内在的に超越する貴重な防護壁である；

5) 困難に直面しても対処できるような試練に心をさらけ出すことによって、敵の襲撃に耐える心を鍛え、敵に対抗するための剣としての心の力を養うのだ。こうして人は、生き残るための条件として、また心に乗っ取ろうとする企てを撃退するために、思考プロセスを強化する思考形態で自らを訓練しなければならない。

言語と論理、そして哲学（その両方を含む）を学び、自分の思考を調整することで、思考を明晰にし、心の要塞の壁に石を積むような役割を果たす。それゆえ、石というよりも、自分の思考の構造は、より全体的な性質を持ち、さまざまな形を想定しながらも外部の力によって動かされることのないコンクリートに似ているのである。

ギリシャ語の "gnothē seuton" という言葉が当てはまる。人は自分自身を知らなければならぬ、自分の思考の構造を知らなければならない。

危険なのは、現代世界は大部分がユダヤ人の作り出したものであり、したがって、探究心を持ち、現実や自分自身、そして必然的にそうなるであろう生き方を理解したいと願う人々に対する罠として機能するように、本質的にユダヤ人によって設計されているという事実にある。真理を求める者にとって、それは地雷原を歩いているようなものであり、地雷は求道者に危害を加える手段としてユダヤ人によって仕掛けられたものである。

それゆえ、シオンのマトリックスである現代世界に内在する腐敗は、シオンが真理の源として機能することを排除している。

アーリア人の伝統を再発見することだけが、真理の源として役立つだろう。なぜなら、言語と象徴の劣化した形において、伝統だけが真理に最も近いからである。それゆえ、ユリウス・エヴォラのような意味での伝統主義を志向することが不可欠なのである。伝統主義だけが、心の要塞を築き、敵と戦うために必要な戦争兵器を鍛錬するための外的材料を提供できるからである。そのような材料の基本的な出典は、参考文献のセクションに含まれている。

陥穽の弁証法

世界を奴隷化するユダヤ人占領政府の手口は、「善」が普遍的（万人のため）であるかのように錯覚させることであるが、実際はユダヤ人だけのためである。国民を欺き、自分たちにとって良いことをしているように思わせるが、実際はユダヤ人にとってのみ良いことなのである。

後者は、大衆を混乱させ、惑わすような「言説のジャンル」全体を発明し、「聖典」と呼ばれるテキストや憲法、権利章典に暗号化されたサイコパスとでも言うべきものである。

これらの言説は、それ自身が「真実」であり疑う余地のない神聖なものであるというホモ論理性（同じ論理）を除いては、何の根拠もなく肯定される。

こうして、風俗道徳や「道徳規範」が確立され、いわゆる市民や「俗人」と呼ばれる人々、つまりこの規範の押しつけに「服従」し、その枠内に閉じ込められる狭い溝の中を走らなければならない人々の行動が規制されるのである。

このような規範を確立することで、「市民」を「善良」（非「犯罪者」、非「異端者」、「真の信者」、「忠実な」羊の群れの一人）または「悪者」（犯罪者、異端者、破門者）として認定する行動と行為の分離集合を確立することができる。

これに基づいて、行動（言葉、行動、感情や感情の表現）を通じて道徳規範に違反したり、

守らなかったりする者は、遵守しないことで「自由意志」を行使したと主張され、（言説としての道德規範の論理に従って）適切な具体的処罰を受けることになる。

そのような資格のある者は、歴史的に「罪を償う」機会があり、ポストモダンの言説的用語で言うところの「更生」してきた。

犯罪の存在（あるいは道德規範の成文化）とそれに付随する刑罰という概念は、必ずしも間違っているわけでも、悪いわけでもない。これは物事を評価する人次第であり、「犯罪」とその「刑罰」が全体として、誰にとって（そして「害」とは何を意味するのか）、より大きいのか、より小さいのかによる。

このように、道德規範とは、特定の司祭カースト・エリート集団と、彼らが「正義」「真実」「合法」として確立したものを単に構築したものなのである。著者によれば、全体的な調和（何が『神的』であるか）に合致しない道德規範は『悪』または『不正』であり、合致するものは『善』または『正義』であるという。このことは、シオンの魚座体制下（古代近東における「すべての人間」または「人類」という概念の創造から、キリスト教ローマからフリーメーソンまで）に存在した現在の道德規範が「正義」であることを意味しない。あたかも、著者が正しく理解しているのであれば、それらは「人間」という概念の下にすべての二足歩行の存在を包含し、ユダヤ人を「人類」の非ユダヤ人の大部分を超えて昇華させる偽善的平等主義の具現であるかのように。

それゆえ、ポストモダンの道德規範は事実誤認であり、宇宙法則（分化した顕現の神の秩序）に合致していないとして支持するのは不当である。このような平等主義的な道德規範を支持したくない者は、司祭カーストによって「アナテマ・マラナータ」、異端者、犯罪者等とみなされ、おそらく最初はその実行を脅かすものとして、しかし最終的には適用された形で、適切な刑罰を受ける。

魔女バーニング

現代の『ジオン』社会における吸血鬼の精神異常者たちは、その歴史を通じてこれまでと何ら変わりはなく、また、気の利かない手下として彼らに仕えるために野蛮な生活を費やす農民奴隷たちも同様である。

中世の時代、司祭カーストが「魔女」や「異端者」と見なした者は火あぶりにされたが、いわゆる「魔女」に対して火あぶりや密告を行ったのは、生まれながらにして司祭カーストの主人が「法」（「神」、身代わりの「*gliae dei*」、司祭カーストの「法の解釈者」など

）と呼ぶものに、考えも疑問も持たずに隷属的にひれ伏すようにプログラムされていた農民たちだった。

これらの農民の手下たちは、主人によってその汚名を着せられた者を焼き尽くし、破壊するために徴集され、主人の真似をして（「権力への意志」）、少しでも異質な振る舞いや姿をした者に同じように烙印を押そうとし、裁判官、陪審員、死刑執行人の役割を引き受けたり、少なくとも「法」（「神」など）の見かけ上の後援の下で最初の石を投げることでそのプロセスを促進しようとすることで、権力と重要性の感覚を得た。

当時と同じように、今日もまた、頭脳を持たない暴徒たちは、心のプログラミングによって、自分たちと同じように見えない、あるいは同じように行動しない「市民」を迫害し、スパイし、自分たちの同類に対して情報を提供するよう徴集されている。現代の魔女狩りや火あぶりにつながっているのは、獣の意識を持つ者たち、つまり自分自身を獣のレベルより高くすることができない者たちの権力への意志なのだ。

今日の魔女はいわゆる「人種差別主義者」であり、異性愛者であるアーリア人男性（女性であることも多いが、身体的な弱さを考慮すると、ユダヤ教世界秩序はまだアーリア人女性を暴行することを一般化していない）。

現代の魔女とは人種差別主義者のことであり、魔女狩りの暴徒は、司祭カーストによって「人種差別主義者」とみなされた人々を告発し、攻撃し、遠ざけ、非難し、侮辱し、最終的には殺し、拷問して殺すために、司祭カーストによって解き放たれる。魔女狩りは、冷酷なサディズムをもって相手を攻撃し、破壊するために動員され、訓練され、その努力に対して超絶サディスティックな司祭カーストから報酬を与えられる。

このようなメンタリティは、サディズムの「社会」、つまり純粋に群衆的な存在であり、司祭カーストが機が熟したと判断したときに、ユダヤ人新自由主義マルクス主義者の言葉を借りれば「形づくられる」暴力の怪物である暴徒の意識の規則化と規制（タルムード式の法律を通じて）を神経症的に抑制する「社会」をつくり出す。

魔女狩りは、比喩的にも文字通りの意味でも、無数の形で行われる魔女の火あぶりを受け入れることにつながる。比喩的には、魔女の火あぶりは、「人種差別主義者」が持つ社会との架け橋を焼くことによって行われ、雇用や、有意義な生活を送るための条件だけでなく、生きるための条件へのアクセスを妨げ、火あぶりという行為、すなわち標的である「人種差別主義者」を拷問し、最終的には殺すための指向性エネルギー兵器の使用を要因とする残酷で異常な方法で殺す！

ギャングストーキング現象で用いられる図捜査は、同じ「司祭カーストの自己正当化的な言説／レトリック」に基づいている。対象者が受けることができ（許可）、受けてはならない（禁止）行為（言論行為、身体的行為）は、平等主義的世俗的ヒューマニズム、あるいはアブラハム主義的、あるいは主流宗教の一神教（ヒンドゥー教、仏教、キリスト教、イスラム教）の言説や教義に組み込まれた公理に由来するものであり、要するに平等主義的平和主義である。

平等主義的な平和主義に従わない者は、標的や嫌がらせの対象としてマークされる。しかし、アジェンダに従う者でさえも標的にされ、陰謀団がサディスティックな行動のために彼ら

を標的にすることを望むなら、彼らの行動を制限する限定的なパラメーター（何が許され、何が義務付けられ、何が禁止されているか-標的にされた人物に適用される 陰謀団のモード論理）に従うことになる。

何が許され、何が禁止され、何が義務付けられているかは、陰謀団が仕組んだターゲットの周囲の状況を通じて、推論によってターゲットに知らされる。つまり、ターゲットの人生の選択肢をコントロールし、特定の結果を得る手段として特定の行動を必要とする条件を課すのだ。

ターゲットには常に「選択」が存在する。誘惑や選択肢を提示され、行動指針を追求することも、控えることもできる。その両方が報酬や罰につながり、さらに報酬や罰のある状況は、チェス盤上の絶え間ない動きに関連付けられ、自己防衛手段としてターゲット側のカウンタームーブを必要とする。

ジオンの首謀者たちは、ソビエト連邦のチェカ（「コミュニティ・ポリス」と「インフラガード」）のポスト現代版として、彼らが徴集した無数の手先を使って演じられるシナリオのスキーマ全体を指揮している。これは、（おそらく）自分たちほど知的でない者、少なくとも自分たちほど時間的・精神的に強力でない者を虐待することで倒錯的な喜びを得るという目的を達成するために、民衆に対して第4世代の戦争を行うための手段である。

最終的な目標は、人間／アリアンの意識をマッピングし、彼らの奴隷の生活を規制するアルゴリズムを作成することで、『自然法則との永久的なバランス』を保ちながら魂の農場である監獄惑星を維持することである。

彼らが理解できないのは、彼らの有限な意識は、存在や「神」を囲い込むには不十分であり、したがって彼らの「閉じたシステム」は、実際には開いていて、彼らの必然的に限られた理解では識別できない無数の漏れがあり、そのために、特に嘘、すなわち真理と一致しないもの、必然的に一致し得ないもの（すなわち存在）に基づいて作動しているため、それ自体を維持することに成功し得ないということである。

にもかかわらず、ターゲットは物理的現実の中で一時的に生き延びながらも、継続する手段としてゲームをすることを余儀なくされる。逆説的だが、物理的現実を継続するためには、超合理的な直感を通してゲームの熟達したプレーヤーになる手段として、ターゲットは雲（コスモス）の中に頭を入れておかなければならない。陰謀団は彼らをマトリックスに陥れようとするが、彼らはマトリックスに住んでいるわけではないので、陥れることはできない。もし彼らがアーリア人なら。

一神教の狂気

一神教はレバントで生まれた信条であり、「レバント病」と呼んだ方が適切かもしれない。

それは、小アジア全域に存在した古代の母なる女神の宗教、すなわちカルダエン人、カナン人、サバエン人などの宿命論的な自己否定的信条に由来する。セム系カーストの社会は、必然的にこの一神教信条の坩堝となる社会であった。

その理由は、一神教とは、決定的な資質や属性を持たず、それでいてあらゆるものを俯瞰し、まさにあらゆるものそのものである優れた価値を措定しているに過ぎず、全体の一部に過ぎないもの（「存在」の存在、「創造主」の創造物）は、その総和（すなわち。その上で、部分の総和よりも大きい全体との関係においてのみ、その存在に何の価値も持たず、その価値は（必然的に従属的な）、単なる有限で誤りを犯しやすい被造物として（創造主に）仕えるために、「一つ」の前にひれ伏さなければならないことにある。

この信条が特にセム人の信条である理由は、それが宿命論的な側面を内在する信条であり、そのような宿命論はセム人に固有の行動特性だからである。セム人がこの宿命論の性質を持つ理由は、彼らが弱い体質であり、人種混合（あるいは「人間の墮落」、数千年前の人類とアーリア人の交配）と、その結果生じた遺伝的劣化のせいで、地上では遺伝的カオス、天上では高次元の精神的カオスに陥っているからである。

ワンネス」、つまり一神教の信条は、遺伝的・悪魔的カオスを体現する雑種的な体質によって地上の苦しみや惨めさを理解しているセム人の病から生まれた信条である。それは、ベン・クラッセンが『白人の聖書』の中で書いているように、「現実からの臆病な逃避」であり、この世界における生命をめぐる闘争であるオムニアとオムネスの戦いに他者を巻き込む意志のない弱い体質の人々にアピールする逃避的ファンタジーなのである。

しかし、一神教には、理論的な構成物や世界観として、それが「創造」あるいは「唯一からの発露」として仮定している分化した存在の秩序を受け入れることができるという点で、救いがあるかもしれない。

一神教の信条が、有機的生命（総体との関係においてそれ自体から発展する生命）とその分化した存在という形で、俗世間の現実を認め、支持することができる限りにおいて、それは真理と一致する。この種の信条は、「宇宙の法則」または「神の秩序」を維持するものと呼ぶことができる。異なる存在の乱雑な混合と結合を提唱し、半神論に特有の一神教の形ですべてを一つに崩壊させるもの、つまり、単に言ってみれば「タオルを投げ入れて」、より強く健康な有機体に勝利を譲り渡すか、あるいは「罪深い」あるいは「邪悪な」性質のために意図的により強いものに従うことを望むものであり、価値観を逆転させ、「柔和な者が地を受け継ぐ」「最後の者が最初になり、最初の者が最後になる」というように、弱さを美德とし、強さを悪徳とするものである。

このような価値観の逆転は、非合理的な怒りにまかせて、より強く健康的な「他者」を引き裂こうとするチャンダルの雑種という体質（遺伝的・民主的）から生まれる。

しかし、ニーチェが正しかったのは部分的に過ぎず、彼は「存在するもの」（イス＝ラ＝エ

ル「神を持つ人間」)の精神的次元、すなわちアーリア人を完全に無視していたからである。おそらくニーチェは、そのことを理解していたが、ただ闇雲にガラス越しにそれを明らかにしただけだったのだろう。あるいは、彼の信条は、アーリア人を高次の精神的 세계 観や存在状態から、墮落した自然主義的存在へと導く、また別の理論的／哲学的な赤い糸として打ち出されただけだったのだろうか。

彼は、アーリア人を星から汎神論的自然主義のスライムピットへと引きずり込み、原初の淵へと引きずり込むという役割を十分に果たした。しかし彼は、チャンダラや彼らの「ワンネス」という「ガター信条」、そしてそのような信条に内在する宿命論、つまり「虹の果ての金の壺」、「天国の宝物」という幻想を得るための手段として、身を伏せ、頭を下げ、自ら絶滅するという信条については正しかった。

放浪するユダヤ人の復讐とは、たとえ一瞬のピュロスの勝利であっても、自分たちを高揚させる手段として、超絶的に恵まれたアーリア人を妨害し、破壊しようとするものである。この一神教は、アーリア人のものと半神のものという2つの形態に分けることができる。

アーリア人は、分化した存在における宇宙秩序の維持を意味し、セム人は、すべての存在を「存在」の煮えたぎる大釜、混沌へと破壊することを意味する；汎神論的自然主義の聖なる母である「聖なる母」の子宮-墓の中で一体へと溶かされ、そこではすべてがひとつであり、その存在は問題ではなく、単に「母」の所有物である（キュベレ、クンババ、ティフォン、ティアマト、ヨルムンガンド）。

アーリア人の一神教は異神教であり、すべての神々は存在の仮象であり、どのような表現形式であれ絶対者の仮象であり、「上にあるように下にあるように」星々（そしてその向こう側）とその地上への影響の単なる寓意である。また、それは神話詩的な形式に包まれた存在論であり形而上学である。現在存在する一神教は、アーリア人のそれにセム人が重ねたものである。

真理の放射が、マヤヴィックのカーテンの闇を追放し、母なる女神のセム族の司祭たちがマトリックス・マシンのレバーとギアを引き、すべてをワンネスの奴隷へと引きずり下ろすのを観察することを可能にする。アーリア人が星から泥沼へと引きずり込まれるのだ。彼らの正しい伝統の表現を通して、人々の中にいるアーリア人を目覚めさせることは、魔法使いたちの目をくらませ、闇を追放することなのだ。

トゥルーマンショー...それともジュウマンショー？

現実の劇場。ユダヤ人劇場の演出家たちは、無自覚な役者たちに押し付ける混沌を演出するための舞台を用意する。偽旗作戦から、彼らが弁証法的な操作ゲームの役割を演じさせる人々の儀式的殺人まで、劇場の寸劇は、ある「ゴイ」が別の「ゴイ」に対して演じられるという形で続く。彼らの意識の背景を構成している劇場の小道具の作用の源泉を理解することなく、家畜として烙印を押されている記章や象徴を理解することなく。

現実の劇場は、ポストモダンの「トゥルーマンショー」である。プレイヤーたちは、サイコ

パスの支配者たちを喜ばせるために操作され、互いに対戦させられる実験用のモルモットである。彼らは、支配者たちのチェス盤上の真のチェス・マンであるという意味では「真の人間」だが、不真面目な人間、つまり、外的組織（顔、外見）が合成組織で編まれ、人工的な構築物としてのリアリティを持たない、ジュード・メーソンの隠された手のゴーレムのひとつである肉人形に、人格の仮面を重ねただけのロボット化された肉人形であるという意味では「偽りの人間」なのだ。

電磁気の糸で操られたマリオネット・プレイヤーたちは、隠された支配者たちによって、プログラミングされた通りに役割を演じる操り人形として操られているのだ。このショーは、特定の状態やエーテルの変化を作り出し、新たなイオンを生み出すためにデザインされた一連の台本であるため、偽り以外の何ものでもない。

今日ヒーローの地位に昇格した者は、明日には敗北した元勝者として貶められる。すべては、真の意味でヒーローである「真の男」たちを引き裂き、破壊し、より明るく輝く星を見えなくしようとする事で自らの地位を高めようとする手段として、彼らを悪役として描くことを望むユダヤ人のゲーム理論に従っている。

ジュウマンショーは、善良なもの、真実なもの、美しいものを、これらの資質に欠ける者たちが引き裂き、破壊する手段として、また、彼らの敵であるアーリア人種に、リアルタイムで観察されるアーリア人種のかつての栄光の没落を提示する手段として、すべての者の目の前に再び提示される。これは彼らの「方法の啓示」であり、手札を出す前にゴイムに手札を明らかにすることで、自分たちのカルマ、自分たちの悪行に対する責任を、自分たちが傷つけている者たちに転嫁する手段なのだ。それによって彼らは、自分たちが敵にしたこと、している 最中のことを被害者になすりつけるのである。

リアル劇場のユダヤ人ディレクターは、ゴイム奴隷の血から資金を得ている仲間の蛇の種とともに、リアル劇場のホーリージュー（聖なるユダヤ人）スタジオで、寸劇や台本の下書き、小道具や背景のデザインに時間を費やしている。彼らはチェス盤の駒として進んで現実の劇場に参加し、自分たちの処刑人や「主人種族」を崇拜し、ゴイム家畜として餌を与え、姦淫し、繁殖する権利のために馬具につなされるために首を伸ばす。

正真正銘の本物の「真の人間」とは、高次のグノーシスによって「人生は舞台であり、われわれはみな哀れな役者にすぎない」ことを理解し、シオンの魔術師たちの幕を取り払うために働き、現実の劇場の内幕と、人工的な現実の舞台裏にいる「ユダヤ人」の姿を他の人々の目に明らかにする、現実の劇場のヒーローたちである。ユダヤ人の蛇の道の道化師ジム・キャリーが主演する映画のように、「ゴイム」が経験する世界は単なる幻想であり、「自分が何をしているのか知らない」その中に住む人々は、あらゆる主体性を欠き、自分たちが

人生という舞台の「哀れな役者」に過ぎないことを認めようとしない、いや、認める能力もない、不運な駒なのだ。

共通の目的：コミュニタリアンによるいじめ

「われわれはみな一つである」--これが世界秩序の基本的な教訓である。この戒律はまた、「私たち」とは誰なのか、そしてこの逆説的な複数性の一体性とは何なのか、つまり多数を「ひとつ」にするものとは何なのか、という主張であり、疑問であり、前提でもある。このような仮定された真実（韻律も理由もない）は、世界秩序を動かす前提である。

この原則から逸脱し、この戒律を前提とすると、人は「共同体」によって標的にされることになる。彼らは皆、世界秩序の設計者や大衆に押し付ける彼らの青写真やテンプレートに従った行動を互いに合わせるように教育されている。

共同体主義的な集団主義社会の「共通の目的」とは、この基本原則であり、団結の主張である。この原則に反対する者、特に積極的に反対する者（単に反対するだけでも十分である）は、ユダヤ人の主人である「共同体」の命令を受けた「共同体」によって、拷問殺人の対象となるほど暴力的に抑圧される。

これはもちろん、ソフトな全体主義、標準化プロトコルに相当し、そこでは一人ひとりが、そして全員が、陰謀団に奉仕するのに十分な知性を持ち、それ以上ではない、最小公倍数に還元される。共同体の「共通の目的」は、権力のためのすべての競争相手と、このユダヤ人寡頭支配者の「共同体」の下にいる騙されやすいユダのカモを排除する作戦における「共同体」の大量虐殺目的である。大衆は、極度の無知と自己中心主義の中で、自分たち自身がこの目的を持っていると信じ、それが自分たち自身の発明であるかのように、また、ジュデオ・メーソンのアーリア人の手袋をはめた手に握られた黄金と電磁気の糸に操られた単なる操り人形ではなく、この「一体性」のある種の「チャンピオン」であるかのように信じている。

陰謀団の目的は、その全体主義的な性質によって達成される。このコーシャの命令は、自分自身に対するすべての「他者性」を否定するものであり、それ自体が混血の理想化された構成物であり、世界秩序の雑種である「世界市民」であるため、義務付けられた「統一」にはいかなる違いも入り込む余地はない。

この生き物、フランケンシュタインの怪物は、ユダヤ人が未来の「人間」として思い描いたものであるが、実際には人間をグロテスクに嘲笑しているにすぎず、これまで「人間の種族」として認定されてきたものの歪曲と倒錯にすぎない、現在、歴史的に認められているすべての「人種」は、アーリア人種の一部であるプロト・モンゴル人やプロト・ネグロ人との混血を経て、その子孫である。

陰謀団の「共通の目的」とは、この目的を達成するための手段として、最小公倍数を台座に

据え、このフランケンシュタインの怪物を「未来」の進歩の結果、「進歩」という虹の道の先にある金の壺を作るためにパネライ化することである。というのも、この溶けた鍋から漂っているように見える妖精の粉は、実際にはマルチカルトの下水鍋で煮えたぎっている糞便の有害な蒸気であり、「虹の現実」というマヤヴィックなベールに隠されているにすぎないからだ。このように、イリュージョンメーカーたちは「共通の目的」を作り上げ、それを「ゴイム」たちの夕食に提供しているのだ。マルチカルティズムのシリアルボウルから「ネズミのにおい」を嗅ぎつけ、そのゴミを飲み込もうとしない者は、陰謀団に狙われ、抹殺のために十字架にかけられる。

クレプスキュラム

カリ・ユガの真ただ中にある今、神々の黄昏は明らかに私たちに迫っている。この黄昏の生き物は、人間の墮落の残骸であり、最も低俗な姿をしている（獣人、ユダヤ人、退化したアーリア人であり、その肉体と魂と精神の複合体は内部分裂し、自分自身の間で、また自分自身に対して分裂している）。

愛』、『平和』、『人間性』、『民主主義』、『神』などといった抽象的な感情的用語の名の下に、平等を平定するというものだ。

このような黄昏の輩は、アーリア人である北の光を消そうとしている。万人対万人の戦争（*bellum omnia contra omnes*）が私たちの前に立ちはだかり、夜はアーリア人のかつての偉大な精神的高みに鉄のカーテンとして降り注ぐ恐れがある。

ギャングストーキング・プロトコルは、ラグナロクの崩壊・爆発で頂点に達する、このエオンの退廃のプロセスのもう一つの兆候であり症状である。不純な要素は捨て去られ、純粋な要素が新たに形成されるために残る。エッダの物語の中で生命とライフスラシルが新たに形成されるように。

著者が古代ローマ・ラテン語で「クレプスキュラム」と呼ぶのは、このニグレド段階である。アーリア人の夜間視力、北極星だけが、松果体と脳下垂体に集中している、聖なるグラールに内在する神の火花の光である、この十全な状態を通して彼を導くことができる。

ギャングストーカーとは、黄昏のクレマーであり、歩く死者であり、ゾンビ化したゴイムである。彼らはジオンの吸血鬼の古代の姿に憑依され、大混乱を引き起こし、避けられない運命を自ら招来するために召喚されている。

彼らは呪われた存在だ。アーリア人には、同じような運命をたどらないようにする責任がある。死よりも悪い運命」、すなわちカルマと罪の人生を通じて魂が意識的にゆっくりと崩壊していくことを克服するために、アーリア人は内なる神聖な輝きを最大限に発展させ、再び燃え上がらせるよう努めなければならない。これは、闇との闘いと対抗を通じて意志を発展させることによってのみ達成できる。

自分の思考、感情、行動を神の意志に同調させること。カリ・ユガのクレプスキュラムを超越することができる限りにおいてのみ、自らを「腐食性の水」の淵に引きずり込むことを許さない限りにおいてのみ、時空間領域（マーヤ）の中で偽りの自己にどのようなダメージが与えられようとも、魂を保つことができる。

彼の唯一の選択肢は、適切な精神修行によって肉体を精神化し、それによってダイヤモンドのような雷鳴の身体を作り上げることである。ダイヤモンドのような雷鳴の身体を作り上げることで、難攻不落のダイヤモンドのような硬さに自らを鍛え上げ、肉体の物質的な要素を精神化し、雷鳴のように精神的な力で敵と戦うことができるようになるのだ。そうして初めて、彼は天に昇り、神々の黄昏を払拭し、最初のハイパーボレアに戻るための便宜を図るのだ。

認知浸透

人を標的にすることは、その人の魂を分解し、吸血鬼化することを最終目標としている。ここで「人」という用語は、ユリウス・エボラの意味で使われている。その統合された存在は、肉体、魂、精神が調和して統合されており、少なくとも低次元では、カバルの目的である、低次の自己（肉体／行動と魂／感情）の崩壊と「分解」、高次の自己または真の自己からの切り離しによって、絶対的な人格またはダイヤモンド・ボディの形成に到達することができないような、崩壊した自己を生み出すような構造的な関係は一切ない。

これはさらに、アーリア人だけが「人」であることを意味する。アーリア人」は冗長な用語であるが、アーリア人だけが「人」であり得ることを考えると、アーリア人だけが「高次の自己」／「真の自己」を持っており、それはアーリア人が構成している要素の相対的な純粋さによるものである。

こうして、墮落しているが救済可能な人だけが、アーリア人（ダイヤモンドの肉体）の状態に到達することができる。

したがって、「個人」という言葉を脇に置いて、対象となる人物（神聖なスパークがまだぼんやりと光っている、ポテンシャルの中の絶対的な人格、胚芽の中の絶対的な人格）を指し、その結果、すべてのアーリア人とアーリア人の存在の状態とのつながりを断ち切ろうとする、魂の吸血鬼であり魂の破壊者である闇の勢力との闘いの、上向きの道に沿って自分自身を適切に方向づけることができる：

1) 彼らの魂のエネルギーを奪い

2) 地上における彼らの絶対的な時間的、反霊的権力に対抗するあらゆるものを消滅させる。

その手段は「認知浸透」と呼ばれるもので、人物の精神的強姦と拷問である。これは、高度な監視技術を用いた陰謀団とその手先による人物の監視とモニタリングから始まり、その段階から、人物に関する予備的なデータ収集が行われた後、人物との2回目の対話と、人物にトラウマを植え付け、操作する手段として使用される方法の暴露という段階を経て行われる。

ここでいう権力と知識の関係とは、シオンの「ユダヤのユートピア」の形成に関連しており、その人に対する優位性を示すことによって、陰謀団のオカルト的な権力を獲得するものである。

このコントロールは、第二段階では、むしろ動物を鞭打つようなフィード・フォワード・ループでターゲットに知らされ、動物が運動のペースを上げ、刺激に対するストレス反応を通じて、陰謀団とそのアストラルの寄生虫が餌食にする可能性のあるより多くの生体エネルギーを供給するようになる（グノーシス主義のいわゆる「アーコン」やバガヴァッド・ギーターの「アスラ」、シルのカルロス・カステネダの「泥の影」、デビッド・アイクの「爬虫類人」など）。

ターゲットが反応すればするほど、ターゲティングは加速され、最初のターゲティングから、虐待とフィードバックが増え続け、最終的な最終目標であるターゲットの暗殺へと、あらかじめ決められたコースに沿って誘導される。

対象者の心への侵入は、刺激と反応の古典的条件付けの手順によって行われ、これにより、その人物の精神的なマッピングをより微妙なものにすることができる。このメンタルマップは、すべての人に逆説的でない方法で外挿される。

アーリア人である者は（潜在的なものであるにせよ）、非アーリア人である者と同じ種族ではないため、アーリア人から得たデータを（仮に得られたとしても）、別の種族を構成するほど根本的に異なる者に適用するのは誤りである、その意識は、チャンダラーの五感に利用可能な、歪んだ存在の墮落した形態に限定されている。

古典的な条件付けの操作（サディスティックな儀式的虐待）を通じてアーリア人の意識に浸透しようとする獣人やユダヤ人は、主従弁証法の中でアーリア人に対する権力・知識関係を主張する手段として、アーリア人女性をレイプしようとする路地裏のゲッター犯罪者と何ら変わらない。

このような陰謀団側の行為の不条理は、ゲッターの野蛮人、コンクリート・ジャングルの猿の不条理を反映している。彼らは、粗野で侵入的な種類の支配を通じて、彼らが「獲物」と

みなすものの存在を消滅させようとするが、（存在論的には）状況の現実は、下等な獣が粗野で物質主義的な手段を用いて、下等なものによって高次の存在を攻撃されることのない高次の存在の下等な乗り物を攻撃しているにすぎない。

最終的な結果は、カルマの鉛の鎖が彼らの首に溶接され、彼ら自身が存在の力を乱すことによって、さらに奈落の底に引きずり込まれ、彼らに対して波紋を投げかける生命のプールに波紋を作り出すだけである。アーリア人の精神的強姦は、神の要塞と、神のエッセンスの要素として神のマインドの中でその発露として参加している神の子供たちに対する襲撃の試みにすぎない。

このような精神的な強奪から下位の乗り物を守るには、神／「存在」という大きな要塞に向けて心の要塞を守る必要がある、高次の能力が低次の能力を支配するエネルギーの渦となり、周辺から中心へと遠心的な方法でそれらを組織化することで、心の要塞の散らばった材料を統合的な全体へと固めるのである。

最初のステップは戦力の集中であり、そこから戦力を強化し、互いに融合させ、敵に対して自らを展開できるようにすることである。自分の力を強化することは、自分自身への絶え間ない挑戦、自分の能力の行使を意味し、それは神経科学の粗雑な用語（軸索のつながり）においても、より高次の用語においても、弱いつながりを排除し、あるいは新たに構築するような方法である。

安定を発展させることが重要であり、安定した思考形態は、思考の軍隊によって征服され、心の帝国に編入される新しい領土のその後の拡大と発展の基礎となる。しかし、新しい領土は、現在帝国の境界線の中に確立されている領土の所有権を脅かすような、あまりにも異質で危険なものであってはならない。

従って、人はより多くの征服のために軍団を送り出さなければならず、その結果、より多くの領域（異なる言語、異なる思考様式、大脳だけでなく意識の様式）を動き回ることができるのだ。

邪悪な潮流に対して十分に強固な城壁を築くには、彼らの絶え間ない攻撃から身を守る武器を持たなければならない。心こそが目標であり、アーリア人が所有し、より優れた発展を遂げるか、ダークサイドの大群によって瓦礫と化し、その価値のすべてを略奪されるかの戦いの舞台となる領土なのだ。

親切な殺人

シオンの吸血鬼たちの偽善は、「他者」、つまり陰謀団とその目的の敵や搾取可能な道具に対して示す行動に現れる。搾取されやすい人々は、陰謀団に操られ、「人間（ゴイ）」という資源が陰謀団の関連会社や仲間であると思込まれるが、実際は単なる道具やダシに過ぎない。

搾取不可能な者、あるいは搾取可能であることと、その存在や目的が彼らの世界支配のプロジェクトと敵対すると陰謀団に見なされる敵であることの組み合わせである者たちは、搾取不可能になった時点で排除につながる行動や振る舞いで扱われる。

このように、陰謀団はその本質において、吸血鬼のような殺人機械、あるいはコンパインである。コンパインは「他者」を転がし、その魂を吸血鬼化して、「他者」とみなされることによって、搾取可能な資源、あるいは敵対者、敵対者以上の価値を剥奪された「他者」の命に関係なく、その力を増大させる。

このように、陰謀団は万人の敵であり、自分自身を除いては誰の友でもない（そしてその場合でも、「他者」に対するより大きな拮抗関係を通じてのみ和解する、内なる拮抗関係の結びつきで構成されている）。

奴隷化、搾取、殺人のメカニズムは、常にイメージの中で最もよく思い浮かべられるものである。ピロードの手袋の中に隠された手と鉄拳、つまり、見かけの善意と利他的でさえある「他者」への配慮と、実際の事実上の「他者」無視、他者は陰謀団の照準を合わせる標的としてのみ見なされる。

笑顔のマスクは、他者、つまり標的をなだめる手段として着用される。それは、巧妙に隠された罠に差し込まれたチーズのかげらであり、図捜査のメカニズムなのだ。

経済、法律、医療、教育……ブラックダイヤモンドと呼ばれる彼らのシステムのあらゆる面において、親身な殺人事業が組織化される手段は多岐にわたる。

経済学的に言えば、奴隷階級は「市民の義務」の名の下に、生活条件を得ることを許される必要条件として労働を強要され、基本的な生活必需品の代金を支払わなければならない。

ゴイムは、農奴制という「崇高な努力」が、「人生の運命」として自分たちが生き残るために必要なだけでなく、擬人化された神によって命じられた「道徳的美徳」であるかのように騙されている。

経済的な終わりのない鎖は、ゴイムを繋ぎとめ、ジオンの奴隷の主人たちに農作業という余暇を提供し、いわゆる「労働者」の血を吸血鬼のように啜り上げ、無言の雑役の状態に追いやる。

法制度もまた、親切で慈悲深い裁判官という美德の微笑みの仮面をかぶっている、弁護士や警察は、奴隷制と搾取のシステム全体を、「正義」と「善」を連想するようになった大衆

の目には「正義」と「善」のように映る泥棒の契りを結んで、互いに支え合っている。主権者によって制定され、「治安部隊」の鉄の踵と鉄の拳によって強制される一連の規則とそれに付随する罰則である、誰が安全で安心なのか、それが一般的に何を意味するのか。

もちろん、「人類」と「人々」の安全と安心の手段は、彼らの理解では彼らだけが「人間」として適格であるため、陰謀団にのみ関係する。したがって、支持されるのは彼らの利益だけであり、奴隷階級は、奴隷税、法外な家賃、その他さまざまな手数料や罰金の支払いを拒否したり滞納したりすると、警察国家の踵で踏まれ、そのすべてがシオンの財源に吸収される。払えない者は締め出され、路頭に迷うか、警察によって監獄や精神病院に収容される。

アロパシーによる大量虐殺システムの一分野であるメンタルヘルス専門職は、単に、有用な「人間」（ゴイ）資源ではないという理由で、陰謀団が脅威または「消耗品」とみなす人々を処分する手段である。この押しつけは、ユダヤ人とその工作人員たちによって、あらゆる手段を使って正当化される。彼らは、カウンセリングや「メンタルヘルス」治療を受け入れるようゴイを説得する手段としてコンセンサスを築こうとし、最終的には精神科医や心理学者による「評価」へと発展し、最終的な結果は施設収容（つまり、不健康な状況下での強制収容）となる。これは、「ゴイ」に対する医薬品の毒物による強制的な薬漬けにつながり、奴隷階級のロボット化というトランスヒューマニストのアジェンダを促進するために、粒子ビームやマイクロ波兵器などの高度な指向性エネルギー技術で「ゴイ」を実験する可能性が高い。

介護者の微笑みの仮面は、実際には下心を隠すための一形態である。つまり、「ゴイ」に危害を加える見込みがあることにサディスティックな笑みを浮かべるハイド氏の怪物のような仮面である。

政治体制は、同じような「親切的な殺し合い」の繰り返しであり、プロパガンダによる大衆心理操作の力に基づいて、振り子のように行ったり来たりする議会弁証法である。ある期にはある政党に投票し、次の期にはその反対の政党に投票することで、国民を分裂させ、それ自身に対して征服する手段として、「エジプト人はエジプト人に対して」、特徴的なセム人の悪知恵で分裂させるのである。

支配権力が行動するときは、「*in nomine populi*」つまりゴイムの名においてそうし、自らの目的のために最も効率的で効果的な方法で、民衆に害を与え、奴隷化し、破壊することを進める。外国戦争から、合法的または非合法的に（後者は受動的な許容によって、彼らの侵入

を抑制するために行動することを避けることによって）、民衆の文化を破壊し、彼らに対する暴力行為を生み出し、経済的に彼らの生命を奪い、あらゆる意味で彼らの生活の質を破壊する以外に何も達成しない暴力的な野蛮人の大量輸入まで。にこやかな政治家、現実の劇場の単なる役者、陰謀団に操られた操り人形は、ゴイムに月を約束し、月、すなわち彼の後姿を与える。

教育・洗脳システムは、シオンの偽善のもう一つの例である。いわゆる「教師」たちは、真理を教わったことがないため、教えるべきことは何もなく、それゆえ、録音されたプロパガンダ・メッセージを生徒たちの心に放送する、単なるロボットの操り人形の役割を果たしている。騙されやすい若者たちは、教師たちが生まれながらに植え付けたドグマの単なる暗号となり、24時間365日の番組から批判的な距離を置くこともなく、批判的思考や理性の能力もない。

彼らの教育の基礎は、唯物論的汎神論という誤った前提であり、そうでなければ空虚な神話の一神教であり、この誤った前提から、同様に誤った結論が導かれる：

1) すべては『ひとつ』であり

2) 画一的な振る舞いをしないものは、ユダヤ・メーソンの羊飼い王司祭カーストによって高みから規定された画一的な基準に強制的に従わせられ、銃口によってバックアップされた国家機構によって強制されるに値する。

児童・家庭サービス部門や組織の準警察（私立か公立かを問わない-「共同体主義社会」では結局のところすべてが「一つ」なのだ）は、シオンの東洋の専制君主の意思に従うことを強制するメカニズムであり、教育・教化カリキュラムは「クレブスキュラム」-アーリア人種の神々の黄昏-シオンの黒魔術師による「北の光」の黒塗り-である。

その結果、情緒不安定で無口な奴隷は、よくても（最悪でも？）産業の道具であり、奴隷の頭上に置かれたダモクレスの剣である陰謀団の恣意的な意志によって、その価値が失われるまで搾取される「人間／ゴイム資源」であり、「アナテマ・マラナタ」とみなされた者に降りかかる用意がある。

集団ストーカーとターゲティングは、ユダヤ人が「クリポット（不完全な魂）」とみなすものを、ターゲットへの嫌がらせや虐待を通して地上から追い出すために特別にデザインされている：強制的な警察の介入や、より巧妙な強要手段によって、刑務所の独房や精神病棟や路上へ、そしてそこから、実験された後の儀式的な拷問殺人へと誘導する。これがジオンの殺人ピエロたちの「親切的殺人」である。

レグレサス・アド・インフェルス

個人的にも集団的にも、現代世界とその住人は、ハイパーボレアの黄金時代から、時間のサイクルの底にあるカリ・ユガの鉄の時代や鉛の時代への、エオンの回帰の産物である。存在」の上に重なる「なりゆき」のデミウルギー的な時間の流れは、アーリア人の意識を引きずり下ろし、低密度の存在状態の腐敗に巻き込み、第二の死の鉛の棺に葬り去ろうとしている

。

彼の意識は、時間の流れという大河の中に石として存在し、彼の純粋な祖先が数千年前、あるいはもっと前に、人類型の獣人と混ざり合うことによって、下へ下へと引きずり込まれ、精神化された高次の人間（アーリア人）を、今日の墮落した亜人へと変えていく。

つまり、非存在の地獄への逆行であり、腐食する「時の流れ」の川の中で自分の存在を溶解させるのである。この混沌の渦の中で永遠を求めることは、それを達成することであり、少なくともその試みに最善を尽くすことである。

こうして彼は自らを鉛から金、少なくとも腐食性の水に溺れないための愚者の道における愚者の金に変える。

アーリア人としての彼のプロジェクトと使命は、ミゲル・セラーノによって「デミウルゲのロボット」と呼ばれたユダヤ人のそれと拮抗している。アーリア人のプロジェクトは光を求めることであり、ユダヤ人のプロジェクトは光を隠すことである。そして、もし不可能を可能にすることができたとしても、嘘とシミュクラとシミュレーションの間の中で光を消し去ることである。

ハイパーボレア以来、スピリットの物質への濃縮が進むにつれて、脳と松果体が固まるインボリューションの過程を経て、神の火花が再燃するのだ。

Progressus ad Aeternus（地獄への進歩）』とは、その本質的欠陥が地獄へ地獄へと向かわせる退行的な力に対する反撃である。アーリア人に対してシャウデンフロイデで殴りかかることは、他者を傷つける快感を得ることであり、彼と彼を通しての主人たちが切望し経験するドーパミンスパイクとそれに伴う低次の感覚の興奮を得ることなのだ。

それゆえ、ユダヤ人は、アーリア人に害を及ぼすことを意図した状況や出来事を、常に仕組んでいるのである（「悪」の定義とは、「他者」に故意に害を及ぼすことであり、その「他者」は自分自身に害を及ぼすものではなく、存在の調和を乱すものではなく、むしろ維持するものである）。

ここで言う「ベースボーン」とは、ホモ・ネアンデルタールensisから派生し、他の非アリアン類人猿と組み合わせられ、カバラ的黒魔術で「天使」と呼ぶ悪魔的存在に憑依された、ユダヤ人が持つ人間以下の状態を指す。*Regressus ad Infernus*は、自らの破滅の芽を内包するユダヤ人の運命である。

デス・セテンス

ギャングストーキングのプロトコル、「標的とされた個人」の現象、ある個人／個人に照準を合わせる行為は、陰謀団がその個人／個人に死の宣告を下すことを意図している。これは

、陰謀団が憎む人物／個人を呪う儀式として意図的に行われる黒魔術の行為であり、かつてのベルタン狩りと同じように、スポーツのために悪用されることを望んでいる。

しかし、少なくとも存在の高い次元で陰謀団にとって成功の確実性はなく、せいぜい地球の平面上だけで、陰謀団は物理的に人/個人を破壊することができ、彼らはターゲットに対して実行する卑劣で卑怯な技術を通じて彼らの魂を破壊したり、衰弱させようとする。

その責任は、自分の魂を救い、この運命から逃れることにある。この挑戦は、生きるか死ぬかの問題であり、闘い、闇の力への対抗、そして武器を捨てることによって必然的にもたらされる死に由来する。

このためユダヤ人は、さまざまな手段を使って（銃規制法を通してアーリア人を奪い、力を奪うために）、ユダヤ人の宣伝機関（メディアやアカドゥンピア）で真実を歪曲し隠蔽することによって、またあらゆる手段を使ってアーリア人の力の源を攻撃しようとするのである、そして最も重要なことは、アーリア人の魂を吸血鬼化し、自分自身と、魂を食べる者として泥棒の契りを結んでいるアーコンたちの魂に取り込もうとすることである。

死の宣告は、その宣告を受けた者に下される。そうでなければ、アーコンとユダヤ人が魂を吸血鬼化する間、煉獄での一時的な滞在となるであろう生ける死の状態から、真の自己を誕生させるのだ。こうして彼は、"mehr als Leben"、つまり、"人生以上"の境地に到達するのである。闘技場にとどまるための必要条件として、闘争と対立のために世界にいる。彼は別の日に戦うための切符を購入し、死刑宣告という形で陰謀団によって出されたファトワーに立ち向かい、そのファトワーにはあらゆる段階、あらゆる時に立ち向かっている。

それにもかかわらず、アーリア人は内在的な超越性においてそれを超越し、自分の意志を展開するための適切な軌道を認識することによって、それに対抗する。

メトロポリタン刑務所

ジオンのマトリックスは、量を中心に自らを方向づけている。その建築家たちは、合理主義的な閉じたシステム、つまり、その「エレガントな」（その不適切な美的感覚において、この言葉を愚弄する）「必然性」によって、システムの外側に存在するいかなる存在も排除する、量的な牢獄の設計図を起草する。

閉じたシステムは、存在の存在を認識することなく、静的な存在へと導く-それは静的なもので、閉じたものでもなく、永遠になることを認める開かれたシステムなのだ：「光あれ！生命あれ！」。ジオンの牢獄は、スピリットを物質の中に閉じ込め、超硬質コンクリートの結晶化した棺の中に、有限性の中に閉じ込めようとする。

管理者である刑務所長や看守たちは、生命というダイナミズムを封じ込める方向に働き、エネルギーの不活性な受け皿とされた存在、つまりシステムに接続され、内なる光を大都市の刑務所の街灯に照らされる人工的な輝きに変える人間の電池の活力を否定しようとする。

つまり、有機的なものを無機的なもの、人工的なものにとって代わろうとするのである。シオンの長老の議定書』にあるように、「農民を土から引き離す」という意図は、血と土（blut und boden）という有機的複合体を否定し、それを人工的なテクノクラシーに奉仕せよとするものである。

ギャングストーキング・プロトコルは、人間の意識をマッピングし、管理者（メルキゼデク秩序の司祭）が彼らのテクノロジック奴隷農園、魂の農民、魂の収穫者のための魂の農園を強化するために使用できる必要な情報（バイオフィードバック）を提供する手段として、この目的に役立っている。

映画『マトリックス』のように、いわゆる"人間"（アーリア人、つまり神聖な"グラール"である"ディバイン・スパーク"を持つ者たち）は、技術的な細胞の中に閉じ込められ、その生体エネルギーは、古代の存在によって採取される。

今や「人間」は、その程度を増すごとに絶滅のマトリックスに取り込まれ、ロボット化されている。すべてが機能化され、単なるデータ処理となり、政治経済と「社会」の経済学者に従属させられる合理化された計算、つまり支配者やアルコン（ギリシャ語で「支配者」）に従属させられる。）

この牢獄を破ること、つまりこの牢獄から抜け出すことは、アーリア人の義務であり、そうすることによって、この地上の平面にいるアーコンとその軍団を破ることになる。青写真としてのマトリックスを正しく評価することは、マトリックスを解体する方法を理解するために必要であり、さらに、エネルギーの純粋性を引き裂き、そのエネルギーを低下させ、すべてを自分たちだけのために吸収するための単なる食物やスリルとしてしか見ない強欲な吸血鬼たちによって利用される可能性があるように、地球に課せられた技術的な縛りの冒涇から地球を救済する方法を理解するためにも必要である。マトリックスを知るた

めには、マトリックスが自分自身にどのような影響を与えるかを知らなければならないが、それには十分に高いレベルの自己知識（グノテ・セウトン）が必要である。

ニグレド

アーリア人種が現在耐えているカリ・ユガの段階は、ニグレド段階である。この段階においては、アーリア人の大量虐殺を正当化し、それをもたらすために、ありとあらゆる手段が持ち出される：

- 1) アーリア人を萎縮させ、無関心にさせ、最終的には自分たちの生存に敵対させる。
- 2) メディアを利用したマインドコントロールによって、白人に対する獣人奴隷の心に独善的な被害者コンプレックスを植え付け、自分たちの絶滅を受動的に許す以外には正しいことができない悪役として白人を標的にするのだ。

ニグレド段階とは、ユダヤ人によって扇動され、アーリア人を奴隷化し、最終的に絶滅させるメカニズムとして、黒人やその他の非アーリア人を使ったラホワ（人種の聖戦）のことである。ニグレド・ネグロとは、混血（いわゆる「人種混合」）による白人の黒化であり、公然・非公然の虐殺・剥奪、失業、「文化の黒化」による文化的大虐殺などである。

黒化の段階とは、北方の光、つまりアーリア人種が、アーリア人を時間のサイクルの底に沈める退化したテルリズムの黄昏に沈むことである。この段階の道具は「人間の墮落」であり、ハイパーボレアのアーリア人と類人猿の獣人との混血である。この混血は、デミウルゲの被造物を転生のサイクルから解放する目的で意図的に行われたものであり、その後、囚われの身となった被造物の魂を自ら進んで吸収する手段として、すべてを永久的な農奴制の状態に持ち込もうとするアーコンのアストラル・パラサイトによって、精力的な食物として消費される。

上と同じように、下と同じように-これらの大群の道具は、ユダヤ人とその系列の「イルミナティ」の「イル・ウ・マン=私でない者」-彼らの「マナス／心」が病んでいて、彼らのエゴを所有し、吸血鬼化する実体に魂を売ったために、もはや「私」やエゴを持たない者たちである。）

アーリア人である非アーリア人とデミウルゲに墮落させられた者の原動力は「力への意志

」である。ニグレド相の不調和は、墮落した形態（獣人）を通して作用する力への意志の直接的な伝達であり、彼らは嘘に基づいて作用する搾取的拮抗の関係として彼らの運命を現す／彼らの本質を存在させるが、それ自体は「有機的な嘘」を構成する者たち（混血された不届き者である）の自然な傾向であり、自然の産物であるマヤ（幻想）の自然な嘘をつく。

彼らがグラール（アーリア人の神聖な火種）の血の中に閉じ込めようとする吸血鬼的な実践の中で紡ぎ出す嘘の網に巻き込まれ、彼らの托鉢の真実がやがて露呈する。

それゆえニグレド段階は、ジオンの吸血鬼たちによって、天使や神々の「羽を切り」、闇の勢力の魂の糧として縛り付ける手段としてもたらされる。しかし、これ自体が成功することはないだろう。アーリア人に自分たちを取り巻く危険性を警告し、その上で彼らは自由になり、アルベド（アーリア人）とルベド（赤）の段階で闇を追放する。

偽りの贈り物に気をつけろ

このシステムは、嘘偽善に基づいて運営されている。つまり、害を隠す助けの見せかけと、自称「地球上で唯一の人間」であるユダヤ人とフリーメーソンの自任するマスター・カーストによって不条理に支配されているすべての二足歩行の存在の見せかけである。

それゆえ、「人間性」が語られるとき、それはユダヤ人自身と、ユダヤ人がザイオン「霊的イスラエル」の集合意識で結びつけられている存在と結びつける通過儀礼を受けたユダヤ人に従属する人々だけであり、その下に、混成された（アップ）多数のアイデンティティのない無人偵察機-ゾンビ化したゴイム-という奴隷カーストが存在するのである。

他者」の代表であると主張しながら、その「他者性」（彼らの本質的な資質は、彼らの配下とは有機的に何の関係もない）に何ら関与していない人々は、奴隷階級を目に見えない手枷で縛るための餌として機能する、物質性と擬似的な霊的（「悪魔的」とも読める）力という「偽りの贈り物」を差し出す偽善的な専制君主である。

これらの同じ者が、彼らの恣意的な気まぐれ（*liberum arbitrium*-オカルト的サイコパスの自由主義）に従って報酬と罰を分配するシステムを運営している。彼らは「役に立つバカ」（サヤニム、シャボス・ゴイム＝イディッシュ語で「愚かな動物」）である人々に、その利用価値の範囲内で報酬を与える。

シオンの詐欺師たち（バアル司祭、「ルシファー」、偽りの光の担い手）は、労働者階級のアーリア人を搾取し、「ゆすり倒す」ために、その高利貸し制度を利用している、非アーリア人の奴隷たちは、単に物質的な利益を得るための受け皿となり、アーリア人の血を流出させ、ひとたび革命的暴力行為に扇動され、アーリア人の血を流すように仕向けられると、自分たちがしたことをアーリア人のせいにする。

ギャングストーキングのプロトコルに徴兵された人々は、金銭的なメリット（単なる通貨や、価値のない空っぽの普遍的な価値形態そのものであり、経済危機を引き起こし、彼らが消耗品とみなし、もはや腐敗の「物語」を語ることを望まない人々の銀行口座を一掃することによって、瞬間的に純粋に奪うことができるもの）という偽りの贈り物と、さらに偽りの贈り物（奪い続ける贈り物）を約束される。また、「オカルト的な力」と見せかけながら、実際には高次元での究極のワイヤー引きや操り人形の主である存在による魂の所有であるという、さらに偽りの贈り物（奪い続ける贈り物）もある。

拷問と殺人のライセンスという贈り物は、入信儀式（ソドミー、拷問殺人の通過儀礼など）の妥協を通じて陰謀団に縛られるようになり、平凡な平面上だけでなく、より高い平面上でも自律性（autonomos; 「自己法」、「自己統治」）を失ったサイコパス犯罪者に与えられ、シオンの武器庫で敵に対して使われる槍の先や矢の先にすぎない「非人間的」道具となる。後者は、その存在そのものがユダヤの専制主義に対する防波堤となるため、敵であると宣言されている（彼らは「アーリア人」であり、その光によって真理を見ることができ、ユダヤの嘘から真理／存在を隠すことができない（ギリシャ語で「aletheia」、「隠し立てのなさ」））。

ユダヤ人の至上主義的価値観は、言葉の混乱（バベル・バブル）を通じて達成される。この混乱は、知性によって直観を阻害される人々や、高次の能力を持たない人々（獣人や、かつてはアーリア人であったが、墮落した人間未満の抜け殻）を欺くものである。

ジオンの偽りの贈り物とは、奴隷の生命力をシステムの高位にいる者たちが下から上へと吸血鬼のように吸収するカニバル・バンビリズムの世界で、奴隷たちを自分たちに縛り付けるのに役立つ餌のことである。

それは、より強い力（捕食者）がより弱い力（獲物）を打ち負かすサディスティックな捕食のシステムであり、捕食を正当化する根拠は、ニーチェが語った「徳の授与」という形でもたらされる。捕食者の支配者にとって、エネルギー（労働力、金、魂、血）の受け皿に過ぎない人々に、見かけ上は利益をもたらす。

偽の贈り物とは、システムに従ってその受け取りを正当化し、交換に基づく関係の解釈によってカルマから免除され、（システムの非論理に従って）被害者にそれを移すものである。しかし、そのようなものはアカシック・レコードにはなく、単にシオンの事務局のコンピュータ・データベースにあるだけである。

贈り物の本当の性質は、0と1で明確に表現され、知られるものではなく、むしろ、贈り物の受け手と交換の証人となる人々の意識を除いては、何も媒介することなく、それ自体とそれ自体を通して明確に表現される。

神の側でもなく、神々の子でもない者たち（Gotmenschen、エターニア、ギリシャ語で「nunc stans」（永遠の今）、不滅の領域に由来する神の火花を持つ者たち）は、「真理／存在」と「偽り（幻影）」を見分けることができず、それに従って、彼らの計算高い主人たちが彼らの食卓からたくさんの切れ端として彼らの前に投げる偽りの贈り物を熱心に受け取る。罪のない人々（そして罪ある人々）の血がシオンの吸血鬼たちの喉に流され、排出される中、食人の宴は続く。

時間のサイクルからの解放という贈り物は、アーリア人との混血によって非アーリア人に授けられ、彼らを無限の転生の連鎖から解放する。そして、アーリア人を搾取し、虐待し、嫉妬と虚栄心から彼の地位を篡奪しようとした者たちは、宇宙の正義である 比例に従うことになる。「異教徒がいかに荒れ狂い、むなしいことを想像しているかを見よ」（彼らの平等）。正義のバランスを崩すことは、鍋の中で煮えたぎる肉に貪欲な子供が、鍋を自分の上に引き下ろし、その貪欲な口をやけどさせるようなカルマを自分にもたらすことである。シオンのチルン」とイディッシュ・マメ（ユダヤ人の母なる女神とメルキゼデク勲章のバアル祭司）は、その罪のためにアーリア人のベルトから正当なしごきを受けるだろう-「ドミニ・パトレス!」、「ゴット・ミット・ウンズ!」。

ケヒラの共同体主義

「ユダヤ人が語るとき、彼は嘘を語り、彼自身がその父であり、嘘の王子であり、嘘つきの公である」（反ユダヤ主義者）。ユダヤ人は「共同体」を代弁し、自分たちの共同体を代弁し、自分たちの意志を他者（非ユダヤ人、彼らが感染させる宿主体）の意志として転嫁し、自分たちが占めるトポスの神人半神（バール）として普遍的なものを特殊化し、特殊なものを普遍化しようとする。

共同体主義はケヒリズムであり、ケヒリズムはポストモダンの衣をまとって具体化されたものである。

それは「ユダヤ人社会」の策略であり、「他者」の「共同体」の「代表者」として自分たちを見せ、巧みな狡猾さと感情化技術によって、自分たちの共同体がユダヤ人を包摂していると先住民に信じ込ませることである。彼がチェスゲームでこの手を打つことができるのは、ホストである先住民のコミュニティに恩を売る十分な権力と力を手に入れ、彼らの血の相対的純度を自らの蛇の種で墮落させる混血プロセスを開始したときである。現代の世界では、彼は貿易や「人道的」配慮などを口実に、善良とされる先住民以外の侵略者に門戸を開いている。もしそれがユダヤ人共同体の利益となるのであれば、混血による密かな大量虐殺を開始し、十分な黙認が得られなかった場合には、あからさまな虐殺を開始することになる。

ユダヤ人共同体」は、その有機体（たとえ「有機的な嘘」であっても）を「他者」の有機体に外挿し、宿主の体内で腫瘍が転移してエントロピーを拡大し、宿主にこれまで以上に大きな害をもたらすようにする。

共同体主義とは、ユダヤ人の魂の政治化であり、反人種的普遍主義（未分化の混沌という偽りの普遍主義）である。この普遍主義は、すべてを自分たちの中に同化させる全体化機能を持ち、ケヒラが全権を握っていないときの暗黙の差異、つまりユダヤ人と「異邦人」の間の差異を除いては、いかなる差異も認めないものであり、ユダヤ人が征服された領土として、また征服者として占領している原住民に農奴制を押し付ける十分な力を持つ限りにおいて、主人と奴隷の関係を持つものである。

ユダヤの全体主義的な性質は、自らの誇大妄想と「他者」に対する偏執的な反感から、自ら
が作り出したゲットー（シテトル）に閉じこもるという傾向の中に現れている。クローズド
・システムは、それ自体が自律的な敵対者として機能し、腫瘍やガンのように宿主体を糧と
する。

近視眼的で誇大妄想的で、宿主を蝕む自己破壊的な代謝を理解できないがゆえに、宿主と
絡み合い、相互に自己破壊的な関係に陥ることで、すべてのエネルギーは自らに向けられ
なければならない。

ケヒラの代理人とはケヒラのメンバーの総体であり、不注意に、あるいは意図的に離脱し
ようとする者は、ケヒラが脅威とみなす者に課そうとするのと同じギャングストーキングの儀
式や秘密暗殺によって、ケヒラによって消費される、それはケヒラにとって同じことであり
、その吸血鬼の膨張に抵抗しようとするものはすべて「敵」とみなされ、破壊の対象となる
。ケヒラを生かすことは、自らの死を招くことなのだ。

ユダヤ人の共同体は土着の共同体を墮落させ、非ユダヤ人を霊的な（つまり「悪魔的な」）
ユダヤ人に変えてしまう。ギャングストーキングという現象は、ユダヤ人の精神政治の教科
書的な事例であり、自分たちにとって「他者」であるものとの関係である：非ユダヤ人を偏
執狂的なサディストに変貌させ、覗き見から倒錯的な快楽を得るのである。また、ケヒラや
その広報担当者が「カインの印」の烙印を押し、便利な馬鹿者である「シャボス・ゴイム
」を使ったオカルト的拷問殺人キャンペーンによって破壊したいと望むものを虐待するの
である、知能の低い、そして／または道徳的に破綻した土着共同体の利己的なメンバーは、自
分たちの共同体のために（「安全と治安」／共同体監視）、実際はケヒラというユダヤ人の
「共同体」のために。

ケヒラは自分たちのために社会を独占し、それによって土着の共同体の真の利益に反して、
特徴的な地下のやり方で働き、マフィア風の新封建主義的「共同体主義」社会で自分たちを
「頂点」にするために、すべてを下水道に引きずり込みながら、底辺から這い上がろうとす
る：私たち人民」、「人類」は、ユダヤ人の「聖なる」生活書（狡猾な政治的実践の書）、
すなわち「私たちケヒラであり、それ以外のものではない」と単純に訳されている。

共同体主義は、有機的な国家によってのみ廃絶することができる。それは、物質主義的なテルリズムの世界に、精神的な生命の高次の力を押しつけることによってのみ可能である。アーリア人の気高さをもって、ストイックな平静さをもって)『真剣な祈り』によって彼らに呼びかけ、彼らを地獄の力との戦いに徴兵しなければならない。

エクス・カテドラ・ディアボルス

ジュウ・ワールド・オーダーは、そのコーシャ・ブル、その政策、規範、概念モデルなどを、「高み」から来た、疑問の余地のない公理的な宣言として打ち出す。

ユダヤの神の俗世界は、マルクス主義的なマルチカルティストたちの局にある。彼らは、イルミニズムと彼ら特有の反人種的な雑種の血統を通じて神の靈感を受けた「一なるもの」の使者であるという誤った前提に立っている。さらに彼らは、その仮定された真理によって、「一なるもの」から「幾何学的秩序」を得たものとして、それ自体が仮定された真理である他者に指示を押し付ける権利があるのだ。

こうしてユダヤ人は、自らを *身代わりの gliae dei* に任命し、「唯一なるもの」の謙虚なしもべになりすまし、（この論理によれば「神の前では平等」である）すべての者は謙虚に「汝の前に」頭を下げなければならないのだ、ユダヤ人のマスター・レースよ。

ユダヤの寡頭政治は地球の自称支配者であり、すべては彼らの恣意的な気まぐれに支配されるゴイムの奴隷である（*liberum arbitrium*-ユダヤ人専制君主には支配する自由があり、ユダヤ人でない者には屈服する *自由がある*-"yours is to command o' jew, mine is to obey"）。

Ex Cathedra Diabolus-会堂から発せられるサンヘドリンの極悪非道な説教は、疑う余地のない、ゴイムを囲む鉄の絆のような命令を発する。

彼らは、ユダヤ教のケヒラによって概説されたパラメーターに従わなければ、反応することを禁じられている。彼らによって決定されたもの以外には、いかなる形の行動も許されない。したがって、完全な支配こそが、「神の権利」を自らに獲得した者たちの *手口*なのである。

しかし、そのような獲得は、実際には、自分たちのものではないものの単なる窃盗であり、単なる嘘であり、しかし、ユダヤ人が信じ、他の人々に真実-「真実と光」-であると信じ込ませているものである。そのような偽りの光は、悪魔的な幻影の標識にすぎず、崖っぷちへと導く遺言であり、盲目のゴイムを破滅へと導く笛吹きジュウにほかならない。

さらに抽象的な命題（「唯一」、「神」、「平等」、「平和」、「愛」、「人間性」、「民

主義」など）に基づいた抽象的な命題）が、カテドラ・ユダエンス（ユダヤ教の会堂）の基礎となっている。ユダヤの専制主義は、司祭カーストの寄生者たちの偽りの謙虚さによって最高の高みまで引き上げられた空虚な抽象概念の上に成立しており、彼らは生活の構造そのものに口を出し、天国（永遠の領域である「存在」）から彼らを引き離し、地獄（有限の一過性の世界である「なりゆき」）に投げ込む。）

神父カーストは本質的に偽善的で欠陥があり、ユダヤ人は神父が常にそうであったように、人を欺く嘘つきの新たな例証にすぎないからだ。

司祭たちは、特にセム主義という形で、退廃の中で結晶化し、（その特徴的な月並みなセム主義劇場で）巧みな感情的訴えかけによって、自分たちが絶対的存在である至高者と地上の被造物との仲介者であるかのように操った社会のその後の衰退を引き起こす。

そうすることで、彼らは自分たちのために社会を独占し、社会を破滅へと導く。アーリア人の戦士精神によって社会を正すことができるのは、その要素による社会の活性化だけである。それこそが唯一の道であり、完全な戦争と完全な勝利、あるいは完全な敗北であり、それは現代の地所（商人や学者など）の魂の貴族たちによって導かれるものなのだ。

司祭カーストの偽善者たちを排除するためには、彼らのパル神殿を粉々に打ち碎かなければならない。これは何よりもまず精神的なレベルにおいてのことで、心の反革命が闇の勢力に対する行動の反革命を生むのだ。女々しい司祭たちが身にまとっているマヤヴィックなヴェールを引き裂き、アーリア人の力という鋼鉄のガントレットを身にまとったのだ。

集団犯罪、集団処罰

ユダヤ人がその嘘つきの偽善で用いる論理的誤謬とは、アーリア人の反感の永遠の犠牲者であるというものである。ユダヤ人は常に「罪のないダーリン、罪のない者」であり、悪いことはできないが、アーリア人は常に、そして永遠に「間違っている！」のであり、正しいことはできないのである。このような状況では、常にユダヤ人の勝利であり、アーリア人の敗北である。

ユダヤ人は討論の条件を作り出し、それを彼が強制的に対談相手とさせた人々、つまり彼が不道徳／異端／思想犯などと非難し、お抱えのチンピラを呼び出して「自分を正当化しろ！」と脅し、正当化を強要した人々に強要する。

ユダヤ人が「敵」だと認識する者は誰でも、ユダヤ人は破壊しようとする。それは、ユダヤ人が他者に押し付ける覇権主義的言説や正当化レトリックを通してである。その結果、敗北しかありえない不可能なゲームで「遊ぶ」ことを拒否する他者は、「ルールに従って遊んでいない」（「私たち」の価値観に反する、「犯罪者」、「精神病患者」、「社会の敵」など

）と設定され、システムがその論理に従って「正義」とみなすもの（合理的な力、「神」の意志など）を押し付けられる対象となる。

つまり、ユダヤ人が自分たちの法律（表向きは「神」や「社会」-自分たちの社会、自分たちの発明した「神」-) に違反したとみなす者は、ユダヤ人がそのとき存在を脅かす存在（これは、ユダヤ人の至上主義を積極的に助長しないあらゆる者である）とみなせば、ペナルティを支払うために特別に選ばれるのである。

刑罰の対象を、行為を直ちに実行したわけではない人々や、違反行為の潜在的または実際の実行者であるとユダヤ人が具体的かつ単独に認識しているのではなく、むしろ彼らがその一部である集団が危害や完全な破壊の対象とされている人々にまで拡大することで、ユダヤ人の道德規範に対する潜在的または実際の違反行為に対する処罰の範囲を拡大することで、集団犯罪と集団処罰の論理が発動されるのである。

これは、ユダヤ人のパラノイアと、潜在的な敵を「嗅ぎ分け」、その破壊を求めることに基づいている。イスラエルのI.D.FのTシャツには、ブルカをかぶった妊娠中のイスラム女性が描かれており、子宮の上に照準スコープがある。

ユダヤ人が利己的な目的のために意図的に誤解している集団処罰の教義（ドグマ）の不条理は、次のような試みにある。

- 1) 必ずしも自分のものではない特定の属性を「他者」に投影し（パラノイアの定義とは、現実ではないが妄信的にそう信じられている何かを現実であると信じることである）、そして
- 2) そのような属性を、自分たちがその一員であると断言された集団にまで拡大するのである。ユダヤ人が集団処罰の誤謬を政治的武器として利用し、競争相手を悪者扱いし、最終的に破滅させようとするのは、一人の人間から別の人間（集団）へと必ずしも拡張できないものを拡張し、部分に基づいて全体を暗示することである（構図の誤謬）。また、必要な属性ではなく、ユダヤ人の中傷者による単なる泥仕合である属性を、彼ら自身の誇大妄想、誇大妄想の産物である告発者に帰属させることである。真実は「有機的な嘘」の意識には存在しないからである。

ユダヤ人が手下を通じて「他者」に集団罰を与えるのは、彼の言葉が絶対的なものの単なる反響であり、それゆえにその宣言の一つひとつに神性の重みがあるという妄想の下で労働する他者を、彼がマインドコントロールするための機能である。

集団的懲罰が正当なのは、その部分が違反し、その部分の違反が全体の本質的な属性であり、脅威である場合に限られる。部分の総和で構成される全体は、それ自体の中にその属性を生殖細胞として持っており、したがって継続的な違反の可能性を持っている。これは、どのような特定の道德規範であれ、その行動や行為（行為または不作為）を「違反」として定め、システムの支配者に従った反応を必要とする。

ユダヤ人社会／システム（マルチカルチャー社会におけるユダヤ人占領政府）の場合、反逆者とは、ユダヤ人の超人間主義的アジェンダに対してユダヤ人が「反逆的」とみなす特徴や属性を自分の中に持っている者である。

アーリア社会の文脈では、「違反」とみなされるのは、宇宙の法則や神の意志に違反し、存在の調和を乱すものすべてである。したがって、ユダヤ人社会の文脈では、その道徳的規範に違反する者は、その種のものすべてに及ぶ冷酷な処罰の対象となる（パレスチナやソビエト連邦の例）。アーリア人社会で調和を乱す者は、アーリア人の人口とそれを支配するアーリア人のエリートが、今日の社会のような「ユダヤ化した異邦人」ではなく、本当にアーリア人である場合に限り、適切な処罰の対象となる。

混沌対秩序

アーリア人に対する陰謀団の作戦の意図は、敵を破壊して権力を篡奪し、自分たちが『秩序』と考えるものを設置する手段として、綿密に練られた戦略と戦術によって、システム内にできるだけ多くの混乱を意図的に作り出すことにある。

これは物理科学（抽象的な概念の体系）において、「エントロピー」と「閉じた系と開かれた系」という点で類似している。非ユダヤ人の社会（主にアーリア人の社会であり、すべての社会と有意義な文化の創造者であり創始者である）は閉鎖系であり、ユダヤ人はカオス（エントロピー）の創造によって「開放」しようとし、それによって破壊のプロセスを開始しようとする。

開放の段階は、ユダヤ人でない「他者」に何らかの便益を与えることで、アクセスを得るという動機付けによって達成される。この種の寓話として、ストーカーの『ドラキュラ』の物語がある。そこでは、吸血鬼（ユダヤ人＝エントロピーの前触れ）が、狡猾な戦略によって女性（受容的な非ユダヤ人）の住居への侵入を試みる。

ユダヤ人の場合、彼らは歴史を通じてアクセス権を得た：

- 1) 貿易のコネクションや商品の提供は、ホスト国にアピールする主要な貿易業者である。
- 2) セネカが言ったように、「見下すことができるのは目上の者だけである」という権力と相対的な優越感をユダヤ人に与えることによって、ユダヤ人は非ユダヤ人の中に入り込むことができるのである。

一旦入り込むと、ユダヤ人はすぐに彼の特徴である地下的なやり方で仕事に取りかかり、社会の秩序（かつて閉ざされていたシステムの秩序が、適切なメカニズムによって「他者」であるユダヤ人に開放されたのである）を弱体化させようとする。派閥抗争（分派集団を作り出し、それに基づいて社会／国家／体制を分断することによって）には、分断と征服の戦術が用いられる。

楔の細い端は、典型的には「聖杯」と「刃」という形で挿入され、性的な部材は、誘惑の墮落として、特に社会の中で最も退廃的な人々に訴えかける「肉の誘惑」として、より大きな

退廃の形へと導く。

これはもちろんどの階級でもあり得るが、特に管理者階級、つまり社会を管理し、その行く末を決定する者たちに、ユダヤ人は照準を合わせ、彼らに不義のリンゴ（社会／国家／システムの秩序に弛緩をもたらす肉欲という禁断の果実を口にする）を咬ませることで魂の崩壊を狙う。これは、例えばセックス依存症を作り出し、ユダヤ人がハニートラップのスパイを上流階級の中に仕込み、国家を危うくするような情報を集めさせたり、貴族やエリートを暗殺したりすることを可能にすることによって行われるが、典型的には、彼らを放蕩のライフスタイルに導き、彼らを墮落させ、それによって国家全体を墮落させるのである。

退廃的なエリートを人民の敵に変え、比較的貧しい人たちをより大きな貧困に追い込み、限界まで追い詰めることで、貧しい人たちは支配者たちに対して革命を起こし、単に国家を完全に破壊するか、ユダヤ人革命指導者たちが新体制で権力を完全に篡奪できるようにする）。

毒入りリンゴを使うことで、侵入者であるジューはシステムを破壊し、自分自身のために全権力を篡奪しようとして、可能な限りの混乱を作り出すことができるのだ。利用されるセックス、ドラッグ、その他無数のクトニクな仕組みは、アーリア人の意識を墮落させ、汚し、破壊するのに役立つ。

これは、センセーショナリズムと快楽主義に基づく低次の意識状態に心を引きずり込み、集中させようとするユダヤ人の低俗な打撃の軌跡である（力と創造的な行動、強化し高貴にする秩序の顕現という精神的な高みから、快楽の最大化と苦痛の最小化というリビドー経済による地底への重心の移動）。

ユダヤ人が売る商品は、肉体の快楽を売買するポン引きの商品であり、最も文字通りの意味である。これは、彼らをマトリックスの中に閉じ込め、ストレスやその他の感情状態（苦痛、恐怖、欲望など、人を「爬虫類の脳」の低次の脳の状態であるボン／メドウラや脳幹、低次のチャクラであるムラダーラやマニプーラなどに引きずり込み、意識を高次の状態から遠ざけ、スピリットを幽閉の泥沼に引きずり込む意識の状態）を作り出す方法である。最終的な目標は、革命的カオスという彼らの特徴的な地下の実践を通じて権力を独占することに加え、解放されたエネルギーを実体やユダヤ人自身が糧とできるようにすることである。

混沌を作り出すプロトコルとしてのギャングストーキングの使用は、標的とされた人々が、ほとんどの人が多かれ少なかれそうであるように、彼らに課せられた虐待に対する反応としてエネルギーを発散するときに、彼らから発散される生物霊的エネルギーを宝石に与えるだけでなく、非ユダヤ人の意識をさらに操作し、標的とされた宿主集団からさらに大きな力（俗世間とオカルトの両方）を引き出す方法の理解を彼らに与える。

ユダヤ人の意図は、自分たちを支配者として地球を支配することかもしれないが、彼らがおそらく気づいていないオカルトの質（*qualitas occulta*）は、彼ら自身が完全に支配している

わけではないということだ、アーキオンは、富める者も貧しい者も同じように、特定の人間だけでなく、システムそのものを完全に崩壊させ、すべての生命を否定することにつながる苦痛／死／性のエネルギーを糧としているのだ。それゆえ、混沌の前触れとしてのユダヤ人の危険性と、ユダヤ人以外の人々によるユダヤ人への寛容さがある。

ユダヤ人を容認することは、自らの破滅を容認することである。なぜなら、ユダヤ人が社会に存在することを容認することは、継続的な収奪と破壊的行動を容認することだからである。病体が代謝の副産物として老廃物やウイルスを排出するように、混沌の排出は秩序をもたらす。

それは単に、システムを秩序に戻すための大掃除の問題なのだ。「最初はわずかな逸脱でも、後に大きな逸脱につながる」（孫子）というのは、主流派の「科学主義」の原則であり、システムにおけるより大きなエントロピー／カオスはシステムの崩壊につながり、管理可能なエントロピー／カオスを許容することはシステムの破壊をもたらすということである。ユダヤ人はアーリア社会において管理可能な存在なのだろうか？時代を通してのユダヤ人の歩みが、その答えを示している。

権利：存在論的不条理

権利」という概念は、特定の偶発的な社会・政治・経済システムの恩恵を法的に保証したものである。これだけである。権利」という概念は観念的なものであり、「権利」という概念に神秘主義や魔術的な性質は内在していない。これだけである。権利」とは、おおよそ次のような言葉や表現にすぎないのである：人』／『市民』／『法人』XYZは、QRS（社会-経済-政治-法制度の特定の偶発的条件）のもとで、ABC（QRSの立法者／行政官／執行者（警察と軍隊））によってLMNOP（『権利』）を許されている」。

これはすべて「権利」の意味であり、人間以外の「存在」を伴わない純粋に人工的な構築物であり、QRS（制度）のABC（立法者／行政官／執行者）の頭脳による純粋な発明である。

現代世界には、この架空の存在を、あらゆる人々（「人類」-これもまた抽象的な概念である）がひれ伏すべき神聖な牛の偶像として、高い岬に持ち上げている人々がいる。このような抽象的な概念に基づく新しい宗教の建立である：人間性」、「権利」。世俗的ヒューマニストであるリベラル共産主義者（左翼）の論理によれば、「人間」としての資格を与えられた者は、「権利」（法的に保証された利益）を得る権利がある。

ヒューマニズムという宗教は、本質的に偶発的なものであり、存在論的妥当性を持たない。

「人間」とは抽象的で観念的な存在であり、今日「人間」と呼ばれているものは、その存在の有限性において、有限の属性群を共通に共有する二足歩行の存在のばらばらの混合物に過ぎず、彼ら自身の誤りやすく偶発的な存在を超えた何ものとも関係を持たず、安定した秩序ある社会や国家の基盤となる適切な「共通の基盤」として語られることはない。

そのような結びつきは存在論的に存在せず、むしろ不一致（ダイバーシティ）の混合物であるからだ。したがって、このゴロゴロした要素の袋に共通の印象を押しつけることは、人為的に区切られたトポスの中に並置されているにすぎない、いわば「粘土と鉄」の鉄格子でできた動物園の動物のように「囲い込まれた」存在の存在を否定することにほかない。

権利」は今日、せいぜい有機国家の組織と規制のための、偶発的で実用的な道具に過ぎないからである（そこでは、民族というエスノスは、法律とその権利と義務、義務と禁止という会議によって、その存続と強化の対象となる）。

権利」を論じることは、精神的自慰の燃料とする「知的詭弁家」の風来坊であり、不可能なことを試みる偽善者の道具に過ぎない。それは、「粘土と鉄」からソロモンの神殿のような社会を作り上げることであり、それ自体の重さで失敗する運命にある。

知的主義や「科学哲学」の中で、「権利」という概念を生物学（主流の科学的な意味での）と結びつけようとする人々がいる。この概念の不条理は、存在の事実にある（存在論的不条理）：権利」は、「万人」の意識に固有の性質でもなければ、（「普遍主義者」、「ヒューマニスト」の意味で）特定の個人に魔術的・神秘的に付随する性質でもない概念であり、「個人」がそれ、さらに別の抽象的なもの（「権利」）に述懐した概念的抽象物（「人間性」）にすぎず、一方も他方も存在論的実在性を持たず、純粋に観念的なものである。権利」という「概念」が普遍化可能な思考形態ではなく、「すべて」がすべて（「人間性」：抽象的なもの）ではなく、むしろ思考、感情、行動が根本的な存在論的レベルで（本質的に）根本的に異なる、無限に特定可能な多様な存在であるように。もし彼らが「同じ」思考をし、「同じ」行動をし、「同じ」感情を抱くようなことがあれば、彼らは必然的に破壊され、多様な存在として消滅してしまうだろう。

このような普遍主義の全体主義は、*抽象的には*「すべて」を平等化し、*具体的には*存在のあらゆる次元で虚無化する。普遍主義は、虚無とニヒリズムの大量殺戮兵器であり、近東の汎神論的な母なる女神のカルトの産物であり、それがキリスト教に変容し、そこからフリーメイソンやイルミニズムに変容した。

ツェツィング

東ドイツ（D.D.R.）のシュタージは秘密警察であり、その任務は、ピロードの手袋をはめた住民に鉄の掌握を加えることであった。これによって恐怖とパラノイアの風土が国民に植え付けられ、やがて国民は互いにスパイし合い、仲間の「市民の奴隷」だけでなく、自分自身の心（ドグマの強制の究極の結論）についても自己警察するように仕向けられた。

心の自己規制と自己検閲は、第二次世界大戦のトラウマに基づくマインド・コントロールの結果であり、許可された会話や談話を効果的にシャットダウンし、あたかもその壁が磁性板

であるかのように、受け入れられたドグマの箱の中に永遠に閉じ込められ、対談者が閉じ込められているキューブ・マトリックスの壁に向かって飛び出さないようにするものだった。

ベルリンの壁は崩壊したかもしれないが、自由な人々の心の壁は常に低く、プログラミングに打ち勝つ能力のない人々の心の壁は常に高かった。

国家」と呼ばれる乳母の管理下に置かれる母系制の統制網が存在するためには、無数のスパイや情報提供者が国民の間に配置され、潜在的な反体制派、要するに政権がイデオロギー的な敵、あるいは潜在的・潜在的な「破壊者」とであると判断し、システムの論理に従って尋問や集団ストーキングを受けなければならない人々の情報を収集する、シュタージのような国家の形態をとる必要がある。もし体制が「破壊者」とであると判断すれば、反体制派を服従させる懲罰的措置がとられる。

このようなスパイ（犯罪者かもしれないし、道徳的多数派かもしれない）は、「権威」（システム）と呼ばれるものから仕事を割り当てられ、重要視されたり、減刑されたり、自分が犯した犯罪の刑事罰がなくなったり、薬物、金銭、性的な好意などの形で、このような能力でシステムに奉仕するインセンティブを与えられる。

雇われたスパイは「反体制派」や「破壊活動家」を発見する役割を果たし、ギャングストーカーは「反体制派」に対する嫌がらせや苛めの役割を果たす。反体制派が文句を言えば、それは体制が彼らに望んでいることなのだが、どのような仮定の権威に対しても、後者は彼らが「精神病」とであると主張したり、精神科医を訪ねるべきだと主張したりすることができる。反体制派と疑われる者がそれを義務付けられたり、自発的に受けたりすれば、精神科医は施設に収容することを義務付け、「反体制派」を植物人間、ロボットミー化されたゾンビにすることができる。

これが、この"プロセス"の最終的な結末である：

1) ていち

2) 暴力団によるストーカー行為と「地域警察」による嫌がらせ；

3) 標的を指向性エネルギー兵器や毒物で殺すか、嫌がらせについて自称『当局』（警察）に文句を言わないなら偽旗テロ行為に仕立て上げるか、あるいは『反体制派』が警察に訴えるか、そこからさらに

4) 精神医学的評価と制度化、そして蜘蛛の巣の中のハエのように「反体制派」を黙らせ、おそらく排除する。

この網から抜け出し、自分自身の安全を確保する唯一の方法は、ステッカーやリーフレットを印刷し、自分の住んでいる地域にビラを撒き、何がどのように行われているかをできるだけ公にすることである。そして、特に自分の状況に関連する確かな証拠を提示することで、精神科医の非公式な仕事を演じようとする地域のスパイや中傷者の側からは、そのようなプロセスが実際に行われていることを、住民や十分な数の人々に納得させるために、反対の主張を合理的に支持することができないようにする。ナニー・ステートという沈黙の武器を使った、意識に対する沈黙の戦争では、沈黙は死である。啞然とした大衆は、この現象を冷笑的に無視し、彼らの現実がポストモダンソープオペラの超現実的なマトリックスであるように、単にメロドラマだと決めつけるほど十分に愚かである。

彼らにとっての現実とは単なるファンタジーであり、ユダヤ人がでっち上げたファンタジーこそが彼らの現実なのだ（ボードリヤールの言えば、現実のハリウッド化-「超現実」）。ガスライティングを行うユダヤ人は破壊の立役者であり、彼らが大衆心理に押し付けたマトリックスを突き破ろうとする者をすべて破壊しようとする。すべてを見通す乳母国家の目をくらませるためには、盲目の大衆に十分な注意を喚起し、ミサイルをシオンの目に投げ込まなければならない。

精神的に病んでいる

ユダヤ人占領政府は、その専制政治に従わせる手段として、奴隷への配慮という見せかけを利用している。「人助け」とは、「ゴイム」の集団を統制するという、より適切な意味内容に翻訳されたものであり、ゴイムは、自分たちが子供扱いされ、乳母国家の監督者は慈悲深いのだと騙されているのだ。

そして実際、賃金奴隷制の文脈の中では、乳母国家は慈悲深い。強制労働の文脈の中では（もちろんアーリア人のために-すべての非アーリア人は、永遠に生活保護で生計を立てるか、むしろ繁栄するという選択肢を持っている...たとえ幻想／マヤの中で生きていても）。こうして、ゴイム農奴カーストの鬱積した攻撃性をなだめる手段として、慈悲深さを装うのである。

ソフトな専制政治を最も効果的に用いているのは、大量虐殺と緩慢な殺戮という死の頭を隠す微笑みの仮面である「援助規律」とされるものである。

具体的には、『メンタルヘルス』規律は、システムが奴隷を排除し、その遵守を保証する最も微妙な道具として利用される。

彼らの手下が体制にとって脅威となるようなことがあれば、口コミや雇われチンピラ（警察、警備、コミュニティ・スパイ）の介入によって強制される。彼らは、どこにでもいるユダヤ人スパイとその下っ端の言いなりになり、ゴイムたちの生活の特殊で微細な面をすべて管理する。

ポストモダンの時代には、中世の審問官、魔女狩りに相当する精神科医の前に引きずり出され、問題の個人が自分自身や他者に危害を加える可能性として描かれるスライド式の尺度で、「精神障害者である」と「認定」されるか否かの判断を下す。ハイドがジェキル博士の仮面を破り、野獣を公共圏に解き放てば放つほど、より厳しい罰、いわゆる「助け」を受けることになるが、この「助け」は実際には、彼の魂の限界ぎりぎりまで、そしてそれ以上に、彼の行動をコントロールするメカニズムに過ぎず、工作人員ミシェル・フーコー（ホモ・カルト）の同名の著書で論じられているような、監獄の惑星、監獄社会のような「規律と罰」のプロトコルに従うことになる。

サウロン／サターンによるパノプティコンのビジョンの下で、彼はホモ・カルトの言う「従順な身体」となる。

J.O.G（ユダヤ人占領政府）システムは患者であり、J.O.Gとその職員はエージェントである。

医薬品の錠剤や毒薬（黒魔術のファルマケイア）の使用は、奴隷階級の行動を規制し、J.O.G.の婉曲的な用語で、彼らをソロモン神殿の壁の幾何学的に適切なレンガに「形作る」最も効果的な方法の一つである。たとえそれが、従順な肉体を規制するプロセスの結果として、「個人」や「人間」の心の破壊を意味するとしても。ホモ・カルトは『クリニックの誕生』の中で、このような問題や、「知識」と呼ばれるものが実際には言説であり、「アポデイクティック」、すなわち他のすべてを判断する基準として、そのシステム自体によって支持されている思想／概念の体系であることについても語っている。それ自体が権威であり、疑いようのないものであるため、それ自身にとって「他者」である他のすべての言説の形式は、即座に、そして等しく無効化されるのである。

このように、覇権的な言説を、議論の余地のない、疑う余地のないレトリックとして提示し、自らの内なる論理に従って、その論理が必要な、あるいは慎重な行動方針として規定するものなら何でも、自分以外のすべての人々に押し付けることを正当化する。

モーダル・ロジックのシステム全体が、奴隷階級を従わせるためのメカニズムとして利用されているのだ。カール・マルクスは、すべての星を破壊する夢について、似たような内容の発言をしている。

実際、ユダヤ人のサイコパスこそ、「精神病」と呼ぶにふさわしいものである。ユダヤ人はエントロピーの体現者であり、地球上のカオスの乗り物なのだから、それゆえ、システムの支配者であり、「精神病」の概念を自分自身に適用している部族にさえも、自分自身に関連する無数の「精神病」がある。

このように、「メンタルヘルス」サービスのダブルスタンダード機能は、ユダヤ人によって、自分たちの意識を非ユダヤ人に投影することに基づいて確立されている。一方、自分たちは、手に負えない要素を排除する手段として、法的な前例（禁止されていること／許可され

ていること／義務付けられていること）を設定するシステムの構造を奴隷化し強化する武器としての診断の使用から免除されている。

それゆえ、エズラ・パウンドのような公人が制度化されたのである。エズラ・パウンドは、イタリア・ファシズム（彼はそのことをよく知っていた）が自由民主主義や共産主義よりも実行可能でなく、むしろ望ましい政治経済体制であるという嘘を暴いたかもしれない。こうして体制は官僚による規制の機械を駆使し、その手先である警察や軍を動員して、詩人であり易経の翻訳者であったエズラ・パウンドを逮捕（物理的に拘束）し、制度化（社会から封鎖）して、執筆活動や外部とのコミュニケーションを不可能にした。

J.O.G.マシンは、自らを脅かす脅威を排除または軽減するために、言論という特殊な武器を用いている。

システムの『市民』の一人（ユダヤ人やシャボ・ゴイのエリートたちの間では『人間』または『ゴイ』と呼ばれる二足歩行の生物学的存在）が『精神疾患』を持っている、あるいは潜在的に『精神疾患』である可能性があり、したがって自分自身や他者に対する潜在的脅威であると主張することは、個々の『市民』を『患者』として認定し、したがって彼らの主張を正当化するシステムとの正式な関係を確立することである。

このことは、システムの論理によれば、「患者」、すなわちファグカルト（フーコー）の言う「従順な身体」に、彼らや彼らの自由に対して採用されうる様々な手続き、すなわち強制的な予防接種や投薬から精神病院への監禁に至るまで、様々なレッテルを貼る権利を与えることになる。

これは、必要であれば、または欲望を殺すために、これらの手段を採用する力を持っている精神科医の命令で、彼/彼女はその一部であるシステムによって、化学的または電磁氣的に「患者」をlabotomizeし、物理的な平面上の死体のようにおとなしいそれをレンダリングするために、システムに対して何の力も効果もおとなしい体をレンダリングする。もちろん、それは自己修養から妨げられている、魂として死んでおり、したがって、その物理的な人生は、それが期限切れになる前に物理的な平面上に数年間持続する単なる"肉"をレンダリングされている。

このように、植物人間と呼ばれるような生き方をしたくない賢明な人々にとっては、J.O.G.システムと敵対することを完全に避けるのが最善である。

精神疾患」というレッテルは、社会に危害を加える可能性を伴う（多くの精神疾患は、司法長官の統計や判例（*stare decesis*-「判例の法理」、*ratio decidendi*-「決定理由」）に基づき、「危害」という概念的な内容を伴う）ことで、法医学的な要素と結びついているのである。また、「患者」である自分自身に関する制度側の命令や禁止は、制度に従わなければ、制度の鉄の踵による暗示的な強制を伴う。

近日中に。そして個人は、J.O.G.が強制する監禁、ロボトミー手術、電磁波によるマインドコントロール、『安楽死』など、あらゆる状況に引きずり込まれることになる。

このように、J.O.Gシステムは、抵抗をなだめる手段として、また、実際には奴隷の鎖を受け取っているにもかかわらず、何らかの恩恵を受けていると騙されやすい人々を欺く手段として、「人々を助ける」というまやかしの口実を通して、その専制主義を強制するのである。一般人がアロパシー医学や精神医学に少なくとも部分的な正当性を認めているという事実は、J.O.G.システムが、単に低次の目的のためだけに生きている、従順でない奴隷カーストに「助け」を押し付けることを正当化することを可能にしている。J.O.G.が作り出す、より低い波動周波数の混沌とした状態による心の破壊は、精神的に不健康な人たち（J.O.G.の犠牲の上に不健康になっている人たち）を、「精神衛生」を助ける学問の「サービス」、すなわちJ.O.G.の目的、すなわちアーリア人大量虐殺を果たすだけの、魂を破壊する薬物や毒物に手を出させる。

アーリア人の意識は灰の中から不死鳥のように蘇る

私たちアーリア人種の血縁集団は、神聖なる火花が昇り、その栄光に浴し、その形から力を吸収し、この地球の正当な所有者であり占有者である私たちの行動の中でそれを再定義するのを見る。暗黒時代の無知の夜が、アーリア人の真の光を覆い隠すことはないだろう。アーリア人は、この地上の悪を正しく浄化し、意識的な意志の力の輝く剣によって、すべての闇に打ち勝ち、神聖な意志の新しいイオンの夜明けを告げるだろう。

参考文献

セルフ

「覚醒の教義」、「人種教義の総合」、

ジュリアス・エ

ヴォラ男爵「神

獣学」、

ヨルグ・ランス・フォン・リーベンフェルス

敵

ロキ・ヒュルガードが加筆した "*The*

Babylonian Talmud "を基にした "*Jew*

Who: How to Identify Jews"、

ソンチーノ追加

「エジプトとメソニックと悪魔のつながり」、

デビッド・カリコ

「フリーメイソンとユダヤ教 世界革命を支える秘密の力」、

ビスコント・レオン・ド・ボンサン

「秘密の暴露によるフリーメイソンの破壊」、

エーリッヒ・フォン・ルーデンドルフ將軍

「イルミナティはいかにして、完全で、検出不可能な、マインドコントロールされた奴隷を作り出すのか」、「イルミナティの公式への深い洞察」、

フリッツ・スプリングマイヤー

「権力の48の法則」、「戦争の33の戦略」、「人間性の法則」、

ロバート・グリーン

「洗脳マニュアルロシアの心理政治学の教科書の総合」、

L.R.ハバードとラヴレンチ・ベリア

『過激派のための規則』、

ソウル・アリンスキー

世界

「ターゲット・ハンドブック

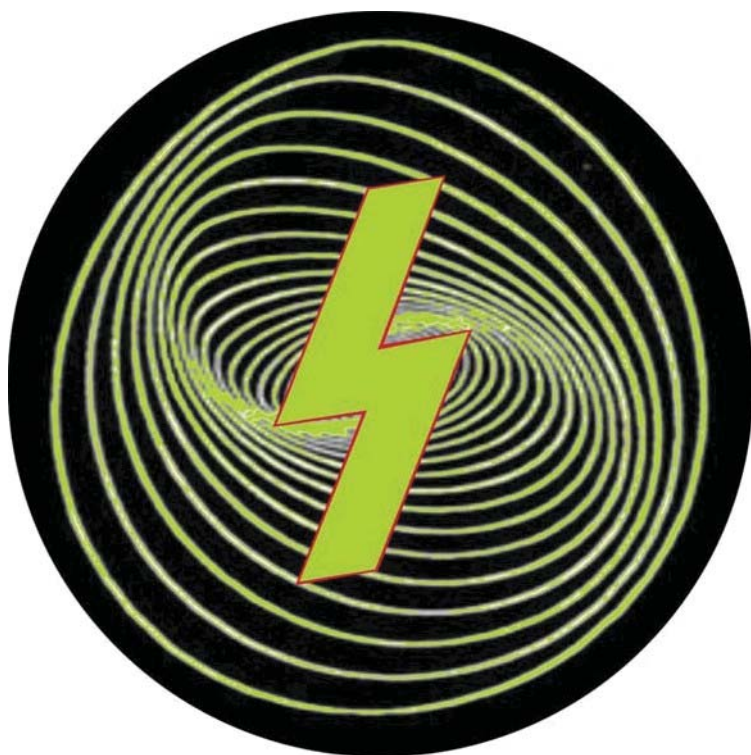
暴力団ストーカーと指向性エネルギー兵器との闘い」

、「現代世界に対する反乱」、ジュリアス・エヴォラ

"

HYPERBOREAN

プログラム



IEG GRUN

ハイパーボリアンプログラム

インデックス

自己

世界

の敵

「あらゆるモラル、あらゆるドグマを取り除かれた自己は、世界の欺瞞には無関心だが、血の記憶には開かれている。

-ニムロッド・デ・ロサリオ

はじめに

この作品は、眠れる者を覚醒状態へと導き、飼い慣らされた者を、一神教の「神」であるデミウルゲ（エホバ／アッラー／ブラフマー／ヤハウェ）の意志に抗い、不死の道を歩む戦士バーサーカーの状態へと回復させる基本プログラムの提示である。

それは、志願者が不滅のシッダに変容するための基本的なテンプレートを規定するものである。しかし、それは現実からの臆病な逃避ではなく、永遠への入り口であり、「ザ・ワン」の時空密度を超えた緑の光線へのブラックホールであり、彼のマトリックス牢獄の「創造」である。

ここでは、敵、すなわち「あの方」とその闇の軍団との戦いに臨む活動的な戦士のために、「あの方」の「世界」における三部構成の行動様式が論じられている。基本的な運動や肉体的な生活から、敵に対する攻撃に展開する精神的な戦術に至るまで、あらゆる行程にわたって意志を強化することが規定されている。

豊富で優先順位をつけた参考文献は、戦争の武器庫を増やすために用意されている。引用された作品は、最も致命的な武器である「心」のための弾薬となる。これらの著作はその後、自己に統合され、デミウルジの牢獄から囚われのスピリットを解放するためのガイドとなる

この作品は、著者が適切と考える限り、幅広い読者がアクセスできるよう、シンプルなポイント形式で提示されている。本作品が可能な限り広く普及することが著者の明確な意図であり、理想的には営利を目的とせず、敵に対する勝利のみを動機とするものである。

著者にとっては、悪魔の牢獄の暗闇と混乱の中で手探りしながら、生涯をかけてディレクタント的に研究してきた成果を凝縮したものである。この本が、デミウルゲの幻想と濃密な物質の世界を通り抜ける道しるべとなり、この拷問に満ちた地上の牢獄ですべての者を鎖で縛る「あの方」とその地上の使者を滅ぼすための最後の戦いで、志願者が黒い太陽の光を得ることができるように。勝利へ、そしてヴァルハラへ、原点へ、ハイパーボレアへ。

セルフ

霊的解放のための練習

フィジカル・エクササイズ

武道

「恐怖は戦略的な武器であり、すべての恐怖は外部に由来し、自分自身の存在とは

異質なものである。

-ニムロッド・デ・ロサリオ

相手を服従させ、自分の法的責任を最小限にするために、相手に最大のダメージを与えるツボや急所を研究する。

怪我をしないように注意し、適切なパッドを着用すること。

1) サンボ：投げ技、打撃技、組み技を組み合わせた最も総合的な格闘技。ドイツのSSによって開発され、ロシアに伝えられた。サンボには以下に挙げる武術のほかにも様々なものがある。

2) キックボクシング：ソロまたはパートナー（複数可）

目的：拳、肘、膝、足による打撃で相手を屈服させる。

用具：グローブとヘッドギアを装着したヘビーバッグ、パートナーから打撃を受ける場合は肘当てと脛当て、床にパッドを敷くか、柔らかい芝生や砂の上で行う。

3) グラップリング／レスリング

目的：関節ロック、ホールド、投げを駆使して相手を屈服させ、動けなくする、あるいはノックアウトする。

4) スティック・ファイティング

目的：急所に打撃を与え、距離をとって相手を服従させる 道具：警棒大

の小さな棒、ほうき大の大きな棒

5) ナイフ戦：

目的：攻撃して逃げ、回避する。



Bridge of Nose (4)

Upper Lip (5)

Neck (15)

Jaw (6)

fist 4 b)

イルロート (7)

Upper Arm

カルロイエ (8)

Shoulder

大声
Blades (17)

中

ジョイント (22)

ルヴワー
AT Jgmen (1D)

グリュール (11)

バックUP
Hand (23)



tn ee dsint (12)

Buttock

リヒン (11)

Instep (14)

フレイル

Heelの背中

アキレット腱)
(20)

主要ターゲット・エリア

REASONING: Minimum level of resultant trauma. Injury tends to be temporary rather than permanent, however exceptions can occur.

* In application of a restraint technique.

Note: When performing a block with a baton the WHOLE BODY is a green area, except for Head, Neck and Spine.

セカンダリー・タレット・エリア

REASONING: Moderate level of resultant trauma. Injury tends to be more permanent, but may also be temporary.

* In application of a striking technique.

フィナル対象地域

REASONING: Highest level of resultant trauma. Injury tends to be permanent rather than temporary and may include unconsciousness, serious bodily injury, shock or death.

装備：実際の路上での遭遇をシミュレートするために、偽のナイフ（武道用品店で購入、または自作）を使用する。打撃や衝撃を和らげるために、適切なパッド入りのヘッドギアやボディギアを使用する。真剣な態度で臨み、脅威の深刻さを軽視しないこと。以下は、解剖学のツボと傷つきやすい部位を示したチャートである：

レジスタンス・トレーニング

を目的としている：

筋肉、腱、関節、骨の強化と発達（筋骨格系）、代謝コンディショニング（持久力を高め、心臓血管系を発達させる）、意志力の発達

頻度：週3～4回、どちらか一方または両方：

1) 自重抵抗：注：ボディビル・スタイルのウェイトトレーニングよりも、ボディウエイト・レジスタンス（自重抵抗）の方が望ましい。ボディウエイト・レジスタンスは、スクワット、ジャンプ、プッシュなど、実際の生活場面での自然な身体の動きに合わせることができ、動作中に過度な重量を加えることがないため、実際の生活場面での不自然な神経筋の同調や反応を避けることができるからである。

サーキットトレーニング（軍隊式トレーニング）：20回×4セット、15回×4セット、10回×4セット、10回×4セット

（高いレップ数から始め、セットごとに減らしていく。）

記号キー：<--->=スーパーセット(エクササイズの交替); --->=連続したエクササイズ；

i) 腕立て伏せ<--->スクワット／ジャンプ；懸垂／懸垂--->チンニング

ii) 懸垂／チンニング・バーにぶら下がる交互のレッグ・レイズ（キック）（複数の方向、シングルまたはダブル、例えば足を伸ばしたり膝を曲げたり、ひねったり、左右に動かすなど）--->。

iii) ハイパーエクステンション<--->スクワット/ジャンプ（スーパーセット）

2) ウェイトトレーニング：

各主要筋群と関節運動方向について基本エクササイズ1種目

(過度に重いウェイトは、関節への負荷が大きくなりすぎ、胸郭内圧が過剰になり、メタボリック・コンディショニングにはつながらないが、絶対的なストレングスにはなり、日常生活にはあまり役に立たないので避けること)。

3) オリンピック・リフティング：（注意点：トレーニングや運動能力開発に過度の時間と労力を費やす必要がある。）

従来のウェイトトレーニングの例

A) 週3回：10～12レップ×4～5セット；ふくらはぎと首は高レップ（例：20レップ）；交互にエクササイズを行う間に休息を入れずに継続的にエクササイズを行う；エクササイズは正しいフォームで行う。

時間15～20分、セット間30秒以内、スーパーセットとジャイアントセット

1日目：上半身スーパーセット／ジャイアントセット

a) 胸の運動<--->背中運動

(例：1) フラットベンチダンベルフライ<--->1) ラットケーブルプルダウンまたは

2) ケーブル・クロスオーバー<--->2) オルタネイト・ダンベル・ロー)

休む

2日目：下半身スーパーセット／ジャイアントセット

(例1) ハムストリング/膝の屈曲<--->2) 大腿四頭筋/膝の伸展<--->3) 任意：ふくらはぎ)

i) 1) レッグ・カール<--->2) レッグ・エクステンションまたは

ii) 1) スティッフ・レッグド・デッドリフト<--->2) スクワット(注：2)は背骨に負担がかかるので、より軽い重量でより速く動かす)

3) カーフレイズ

(例1) マシン<--->ホウキ・ツイスト、または

2) 高台にダンベル<--->ほうきねじり)

休む

3日目：腕／肩／首／体幹

a) 肩

(例1) ベント・オーバー・フライ（三角筋後部）<--->ほうきひねり<--->ダンベル・エクステンションを交互に行う)

b) 1) 肘の屈曲（上腕二頭筋）<--->2) 肘の伸展（上腕三頭筋）

(例1) オルトダンベル（ハンマー）カール<--->2) ローププレスダウン

2) 懸垂<--->ダンベル・キックバック・エクステンション)

c) 1) トラック／脊柱起立筋

(例1) ハイパーエクステンション<--->ホウキひねり／左右運動)

d) 1) 首

(例1) ベンチからぶら下がる：屈曲<--->伸展：20レップ、または2) 地面に向かって横回転<---。

>天井を向いて左右に回転：ゆっくり、各20回または3) レスラブリッジ)

休日

4日目：ウェイトパックやウェイトベス

トを使ったウォーキングなどの筋力トレ

ーニング：

手だ：

ハンド・スクイザー（武道用の「イーグル・クロウ」スクイザーやヴィンテージのケージ型スクイザーなど、複数の突起がついたスクイザーのみを使用すること）

-ウェイトベスト

-ストロングマンエクササイズ（ファーマーズウォーク、ソリドラッグ、フットボールスタイルエクササイズ）；

-目：太陽凝視（1日3分間、太陽を間接的に見る；ピンホールメガネ；ベイツ・エクササイズ；薄暗い中での読書）；

-リフレクソロジー・サンダル：木製または金属製のサンダルの上に何時間も立ち続ける（代謝率と骨密度を高め、血液を循環させる）。

心血管／持久カトレーニング

週6～7日

関節に問題がない場合：空腹時または他の運動の後に、1日20分／30分～1時間走る（ストレッチなど、適切なテクニックを身につけること）。

関節に問題がある場合：エリプティカル・トレーナー（スキーマシン）など、上肢と下肢の両方を使い、発汗と心拍数の増加、深い呼吸を誘発する有酸素運動マシンを使用する。

週1日：小型軽量パックを背負って、または背負っていない状態で、少なくとも2時間歩く（理想的には「休息日」に歩くこと）

-湖で泳いだり、カヤックやクロスカントリースキーを楽しむ。

リカバリー／回復

ノーマーのライフスタイル」：

睡眠：PM22:00-AM05:00/AM06:00

目的（概日リズムに合わせる；肝臓の解毒を促進する：早寝早起き）「反抗的なライフ

スタイル」：

眠る：深夜または早朝

休息：15分の昼寝を1日2回（静かな環境でサードアイの瞑想をするのが理想。）

近赤外線ヒートランプ：1日30分から1時間、その下に横たわり、頭部への照射を避け、裸の腹部に光を集中させる。

クロモセラピー：気分の状態や効果によって色を使い分ける（例：グリーンライトは調和のとれた意識状態、ブルーは精神性、イエローは知性など）。

酸素補給：オゾン発生器による治療：オゾンを豊富に含んだ大気を呼吸し、オゾン水を一日中飲む。

ヘリオセラピー/日光浴：午前10時前と午後2時以降に、地球上のほとんどの地域で、顔と腕に少なくとも5分間。

アース／グラウンディング：1日5～10分間、裸足で土の上に立つ。（マイナスイオンを発生させるグラウンディングマットを用意する。）

マッサージ:(マッサージする解剖学的部位にオリーブオイルまたはゴマ油を塗る)

- i) リフレクソロジー／グアシャストーン（筋繊維に沿ってマッサージすることで筋肉の緊張を和らげる）
- ii) 振動マシンマッサージ（オイル付）
- iii) 筋肉の緊張を和らげるタイガーバームまたは類似の軟膏（蜜蝋に入ったカプサイシンオイルなど

スピリチュアル・エクササイズ

物質的な身体を物質的な秩序の他の部分から切り離し [...]、汎神論的な空間やカルマ的な時間から独立した "自律的な小宇宙" になる」。

-ニムロッド・デ・ロサリオ

1) 瞑想だ:

目的：集中力を高める。松果体を活性化し、高次の直観力を高める。デミウルギックな魂を解離させ、スピリットと結びつける。

a) 第3の目の瞑想：目を交差させて第3の目／松果体を見つめ、99から0までカウントダウンする。1日に2〜3回行う。

b) 光の瞑想：まばたきを最小限に抑えながら、ろうそくや光を5分間見つめ続ける。

c) 暗闇の瞑想：すべての感覚刺激を遮断し、虚空の瞑想を行う。毎日、起床直後と眠る前に少なくとも15分間、最適には30分間、膝をついた姿勢か、頭を高くして横になって行う。指は何も触れない。舌を口の天井につけ、鼻で呼吸する。

2) 回想だ：

a) 眠る前に、その日の出来事を目覚めの時間まで巻き戻す。

b) 起床時：夢のシークエンスを思い出す。

c) 1週間の出来事を振り返り、週の終わりにそれを熟考する。

3) 熟考：

芸術作品（音楽、詩、絵画、造形芸術）を鑑賞し、アイデアやモチベーションの源とする。

血の記憶を思い出すために、トーテムのアイコンやオブジェを神社に設置することができる（例：ティロダルーンなどのハイパーボリアのシンボル）。

目的：スピリットへの経験を統合する自己理解



4) 速い：

純粋な蒸留水だけを定期的に絶食する。

(例：2カ月に1回36時間、春か夏には1週間ビーガンで2〜4日断食、1年のうち1カ月は1日2回のみ、通常より量を食べない）。

目的：意識を高める、身体を浄化する

5) 持久力：

(絶食状態の場合もある)：20ポンド以下(身長と体重による)のリュックサックを背負い、少なくとも4時間、時々水を補給しながら歩く。

6) ヨガだ：

(参考文献のニムロッド・デ・ロサリオの推薦文を参照)。

タントラ

「タントラの秘教的な目的は、すでに述べたように、ハイパーボリアンのあらゆる戦略と同じである。

-ニムロッド・デ・ロサリオ

7) 自発的撤退:

静かな環境があればそこに入り、少なくとも24時間は完全な静寂を体験する（必要であれば耳栓をしてもよい）。

8) チャント:

ルーン文字のマントラを唱える（適切なムドラや手のジェスチャーでサードアイに集中する）

9) リモート・ビューイングと影響力（参考文献参照）

魂」のエクササイズ

目的：感情的な反応を克服するために苦難に身をさらす

1) 怠慢:

毎年数回、3日間、路上に身を投じる。古着屋で買った最も粗末な服を着て、浮浪者になる（この期間前は髭を剃ってはいけない）。この間、断食をするのが理想的だ。

目的：影響を伴わない体験の剥奪

2) ハーモナイゼーション:

i) チェンバロの音楽を3時間聴き続ける ii) 軍楽を3時間聴き続ける（例：運動中）

目的：意識を音楽とその意味に調和させる。古いエレクトロニカも候補になるだろう。これはトランス状態を誘発する。

3) 詩だ:

理想的には、同じような、あるいは異なる条件下（例：都会の環境、田舎の環境、騒音のあ

る環境、静寂の中など）で、丸一日詩を書く。

目的：意識を拡大し、心を高揚させ、叙情的な在り方を創造する。

4) アートだ:

類似または異なる性質の芸術活動を1日行う（例：デッサン、絵画、彫刻など）。

コンピュータの画面を凝視するのは、意識を乱し、あまりにも人工的なメディアなので避けること。

5) 音楽だ:

楽器を演奏したり、歌を歌う（対文化的な歌を作るのが理想的）

6) 聖餐式:

一晩、異性の隣で、剣を隔てて接触することなく眠る。その異性は、これまで一度もあなたと接触したことがないことが理想である。

栄養

食べる: 最も栄養価が高く、高アルカリ性で、すべて自然のオーガニック食品（例：動物性食品：高オメガ3農場の卵、乳製品、果物、野菜、ナッツ、でんぷん、豆類）

飲食禁止:

特に肉や赤身肉は、代替品がない場合を除き、最小限に抑える、または除去する（加熱調理された肉よりも生肉が望ましい）。

-アルコール（医薬品またはストリートドラッグ、すべての錠剤、ローション、クリーム、煙、注射剤、経口剤、経鼻剤、直腸剤、経皮剤を含む。）

-人工食品や加工食品はできるだけ食べない

-穀物やでんぷんを最小限に抑え、すべての穀物やでんぷんをデキストリン化

するまで調理する:

4〜5時間間隔で1日3食、週6〜7日（オプション: 週1日水断食またはビーガン）理想的なタ

イミング（ノーマーの場合）:

1) 06:00～08:00時

2) 11:00-13:00時

3) 04:00-06:00時

反乱軍のタイミング

1) 09:00-10:00

2) 13:00-15:00

3) 18:00-20:00

ミールプランの例:

1) 果物＋乳製品（ヨーグルトなど）

カロリーを増やすには、ナッツバターやナッツを加える。

2) 卵＋果物またはでんぷん質＋豆類＋ナッツ類＋ナッツバターまたはギー＋野菜

3) 卵（食品の種類を変えて2を繰り返す）

大栄養素比:

15-20% タンパク質（うち60-70%は動物性タン

パク質） 50-65% 炭水化物

脂肪15～25

量: 1日3回、こぶし大の量を2回飲む:

蒸留水とノンカフェインのハーブティーが望ましい（ただし、緑茶はほとんどの人にとって

許容範囲）:

掃除用具: 天然100%オリーブオイルの石鹸（ボディ用）、酢（食器用）、天然歯磨き粉、
オイルブリング用オリーブオイルまたはゴマ油

重曹

週3回、入浴＋スクラブ入りの衣類で全身を洗う（必

要であればシャワーも浴びるが、浴びないのが理想的

)

-ネティポット（目的：副鼻腔の洗浄）：1日1回使用（同じ鼻の穴にポット2杯を入れる）

-舌の擦り傷

-歯ブラシとフロス：1日2回、最初と最後の食後（果物を食べた後を除き、1～1時間半後）

、ガム刺激装置を週1回使用する。

- 耳垢：過酸化水素とスクイザーボールで掃除 月1回、両脇に10分 間 寝かせ、温水のスクイザーボールで過酸化水素を洗い流す)
- 皮膚が呼吸できるように、できるだけ衣服を着ない。
- オイルマッサージの後、テスラのバイオレット・レイ・マシンを身体に使用する。

性の健康

- 射精を最小限に抑える／オナニーをしない；ポルノをしない
- タントラの錬金術（「*性の形而上学*」ユリウス・エヴォラ）
- 異性間セックスのみ
- アナルセックス禁止
- セックスのための「おもちゃ」や人工的な器具を使用しない

注意事項

決して「心を袖にしない」こと。あなたの考えや感情を誰かに知られてはならない。

政府は『トランスヒューマニスト計画』のため、また反体制派に対する拷問や虐待のために人体実験を行っている。あなたを刺激して彼らに反応させることは、『地域警察』を通じて実行される彼らのプログラムの一部なのです」。

いかなる公の場でも、言動において敵に関与してはならない。常に平常心を装う

。敵に反応しないことは、強さのテストであり、自制心への挑戦であるとする

。

政府とその果てしなく続く地域エージェント（「地域ベースのエージェント」）はすべて情報提供者として働き、反体制派（政府が「悪」、「犯罪者」等と信じ込ませている人々）をハメようとする。

注：これらのエージェントは、あらゆる形、大きさ、人種で、典型的にはキリスト教徒または非白人、特にユダヤ人である（モサドは、その最高レベルでギャングストーキング作戦を制御している）。

常に可能な限り普通を装っていなければ、彼らはあなたの情報を収集し、それがきっかけとなるかもしれない：

- 1) 警察による強制的な精神科施設への収容
- 2) 私服捜査官の挑発に言動で報復すれば、投獄される。

すべての政府エージェントを避け、西欧社会のすべての「道徳的多数派」の人々やほとんどの人々が、警察国家の非公式または公式のエージェントであることを理解すること。彼らは「群衆心理」を持っており、「平等主義的グローバリストの平和主義」という彼らのプログラミング／ドグマから外れた合理的な思考をすることができない。自分たちにとって「他者」であるとなす者は誰でも、死ぬまで迫害する（ナショナリストなど）。

つまり、決して知られないようにしなければ、24時間365日、世界的な迫害を受けることになるのだ。(参照：『標的個人ハンドブック』：ギャングストーキングと指向性エネルギー兵器との戦い")

世界

ネットワーク/アソシエート組織テンプレート

以下は、新世界の英雄たちの生存、拡大、発展を促進するための準備、自己開発、組織のテンプレートである。読者は、この実践的なアイデアのリストの中から好きなものを選び（あるいは選ばず）、来るべき歴史の終わりに向けて自分自身の道を切り開くことができる。

組織の構造階級

-ランク構造：ピラミッド型、リーダーが中心でトップ、ランクが下がる；職務と権力はランクに相関する；最終的な意思決定権は（どのような名称であれ）リーダーに帰属する

職務

霊的戦い；権力構築（例：財閥など）例：農業協同組合；警備会社；武道道場；瞑想センターなど）

-プロパガンダ（音楽／文章／リーフレットの作成／発信）

-宣教活動（遠足でのビラ配り、宣教師勧誘活動など）

-講演会等／リクルート活動

-ジム／エクササイズ／オリエンテーリング

ウェブサイト

追跡不可能、匿名、提供

- 1) この文書には、組織とその倫理および原則が説明されています。これらに従い、かつ禁止事項に従わずに行動する者は、加盟を主張することができる。
- 2) このドキュメントで参照されているpdf作品ライブラリー
- 3) ミートアップなどのための匿名での連絡手段。

組織の機能

コミュニティの構築、リソースのプール、絶え間ない宣伝と勧誘。メンバーは、ピラやチラシの写真などで、自分たちが積極的に宣伝していることを証明しなければならない。

組織は、審査されたイニシエートのために、外部と内部の「インナーコア」に分けられるかもしれない。

組織タイプ

- 1) イニシエティック・オーダー
- 2) 事業会社
- 3) ソーシャル・クラブ

注：組織はこれらの一部またはすべての組み合わせである可能性がある。

- 1) イニチアティック・オーダーは、このハンドブックのスピリチュアルとライフスタイルの処方と、参考文献にある「スピリチュアル」の参考文献に基づいてデザインすることができる。
- 2) 企業：メンバーの関心と才能、および世界情勢（つまり、どのような市場が存在し、材料や熟練した従業員、資金などの面で利用可能な資源があるか）に依存する。

エネミー

敵が誰なのか、そして敵にどう対処すべきかを理解するには、以下の参考文献の該当箇所を参照されたい。敵とは、デミウルゲとその軍団、すなわち墮天使、セラフィム（E.T.レプテ

ィリアン、グレイ、マンティッド、インセクトロイドなど）、そして彼らの遺伝子を受け継いだヘブル人、そして彼らに仕える者たち（ドルイド、フリーメイソン、宗教的偏屈者、共産主義者など）である。

参考文献

スピリチュアル／マジック

(注：これは哲学の目標のひとつであるべきだが、同時に受けることもできる)：

「ハイパーボレアの叡智の基礎」上・下巻、ニムロッド・デ・ロサリオ

「アガルタのクリスタル・ブック」グスタボ・ブロンディーノ

「セックスの形而上学」、「魔術入門」1～3巻、ユリウス・エヴォラ 「

魔術：歴史、理論、実践」、エルンスト・シャーテル

「禁断の超心理学」ホセ・M・ヘロウ・アラゴン 「リ

モート・ビューイング」ティム・リファット

ヨガだ：

ルーンヨガ（「聖なるルーンマイト」ジークフリード・アドルフ・クマー、「アドルフ・ヒトラー：最後のアバター」ミゲル・セラノ）

(ニムロッド・デ・ロサリオの推薦) 「

自然の微妙な力」、ラーマ・プラサード

・クラナヴァタントラ

タントラクマデ

イ・シャクティ

・サンガナ・タ

ントラ・サット

ヴァ

「タントラ・ヨガ」 ジャン・リヴィエール

「サーペント・パワー」 アーサー

・アヴァロン 「ハタ・ヨーガ」 テ

オス・バーナード

哲学

(注：哲学の目的は、受動的な熟考ではなく、行動に導くことである)

ニムロッド・デ・ロサリオ：

「ハイパーボレアの叡智の基礎」上・下巻

(注：彼の小説 "ベリセナ・ヴィルカの謎"、別名 "ハイパーボレアの知恵の謎"と "トゥーレ
ゲゼルシャクの秘史"は、より深く理解するために最初に読むべきである)、"SS心理社会
戦略の断片"

ミゲル・セラーノ

「マヌ：来るべき人のために」「英雄の復活」「アドルフ・ヒトラー：最後のアバター

ジェイソン・トンブキンス

「ウルル：チュリアン・ポーラー神話」、『秘教的ヒトラー主義の要諦』（ミゲル・セラー
ノの引用の集大成）

ユリウス・エヴォラ

"辰砂の道"、"現代世界に対する反乱"、"ヘルメスの伝統"、"虎に乗る"

フリードリヒ・ニーチェ

「善悪の彼岸」、「道徳の系譜」（訳者：トマス・コモン、アンソニー・ルドヴィチ）

マルティン・ハイデガー

「ニーチェ」全4巻

ジーク・グルン

「バーサーカー」、「マスター・オブ・ザ・ワールド」、「イデオロギー批判

ホセ・M・ヘロウ・アラゴン

"禁断の宗教"

グスタボ・ブロンディーノ

「アガルタの水晶書」、『ハイパーボレア・グノーシス論』。

ピエドラ・イベリカ

「ナブタンの木」（『ヴォータンの木』とも訳される）

プロティノス

「エネアデス

ヘラクレイ

トス断片

宣喜

政治

(注：現在の世界情勢では、政治的理想を持つことは実を結ばない。自分には限界があることを理解し、国会やその他の政治組織・機構に選ばれることはない。自分が何をすべきかを知り、できないことに目を向けないことだ。したがって、以下の著作を読むことは、基本的な倫理的・社会的原則において価値があるのであって、現時点では単なるユートピア的な夢物語に過ぎないであろう 自分の帝国を築くことに価値があるのではない)

「わが闘争」アドルフ・ヒトラー

「血と土の新しい貴族」リヒャルト・ワルター・ダー

ル 「20世紀の神話」アルフレッド・ローゼンベルク 「

オダール：永遠のドイツの生命法」、ヨハン・フォン

・リース

「ファシズムの教義」ジョヴァンニ・ジェンティーレとベニ

ート・ムッソリーニ 「古代の優生学」アラン・G・ローパー

「スピーチ」、「革命とその方法」、カイ・ムロス

実用ハンドブック

「最適サバイバル・ハンドブック」ジーク・グルン

「標的個人ハンドブックギャングストーキングと指向性エネルギー兵器との闘い」

文学（詩・叙事詩・神話）

詩 『

エルダー・エッダ』（ポール・B・テイラー＆W

・H・オーデン訳) 『ニーベルンゲン・ルイ』 (

ジョージ・ヘンリー・ニードラー訳) 『カレワ

ラ』 (ジョン・マーティン・クロフォード訳)

「アエネーイス」、

ヴァーギル・セネカ

、悲劇『詩』、エズ

ラ・パウンド

「永遠の詩」3部作、「サイレント・バイオレンス」、「野獣との対決」、ジーク・グルン

小説

"ベリセナ・ヴィルカの謎"／"ハイパーボレアの知恵の謎"、"トゥールゲセルシャクの秘史"、ニムロッド・デ・ロサリオ

「デミアン」 「ステッペンウルフ」 ヘルマ

ン・ヘッセ 「野生の呼び声」 「ロン・ヒ

ール」 ジャック・ロンドン 「アトランテ

イス」 ゲルハルト・ハウプトマン

「ブルジョワ紳士」、『妻たちの学校』、モリエール

『指輪物語』、トルケイン

「ピノキオ」 カルロ・コッローディ

「プレアデス」 アルチュール・ド・ゴビ

ノー 「リゴレット」 フランチェスコ・

マリア・ピアヴェ

(以下は、陰謀団の精神性、慣行、そして地球外生命体との関連についての洞察である：)

「ロバート・E・ハワード、クラーク・アシュトン・

スミスの小説『コナン・ザ・バーバリアン』。

H.P.ラヴクラフト物語

神話

「チュートン神話」 ヤコブ・グリム

敵（「シナーキー」）とその戦略

E.Ts（「セラフィム」）

「ネガティブ・エイリアン・アジェンダ」／

『ヤハウエ・コレクティブ』／『ボディ・ス

ナッチャーズ』、スーザン・B・リード

ユダヤ人

"聖なる種族はマルクト、第10のセフィロス、すなわちデミウルゲの一面である"

「イスラエルとエホバ=サタンの間には形而上学的な同一性がある。

-ニムロッド・デ・ロサリオ

「ユダヤ人の見分け方」 ジョン・ドウ・ゴイ (ジョイ・オブ・サタン・

ミニストリーズ) 「ユダヤ人は爬虫類?

"悪魔のシナゴーク"、アンドリュー・キャリントン・ヒッチコック (注: クリスチャン・アイデンティティを避けるため、これはユダヤ教がキリスト教をサイオペして形成された後の歴史の多くの基本的なあらすじとして、偏りはあるが含まれている)

「シオンの長老たちの議定書」 (ビクター・マースデン訳、1903年版があれば入手可能

) 「世界ユダヤの陰謀」 カール・ベルクマイスター博士

「ユダヤ人問題の3つの側面」 ユリウス・エヴォラ

ドルイド

「ドルー教とヘブライ教の同一性」 (匿名

「ケルトのドルイド、あるいはドルイドがインドから移住した東洋植民地の司祭であったことを証明する試み」 ゴッドフリー・ヒギンズ

フリーメイソン

「フリーメイソン」 ディーター・シュヴァルツ

「秘密の暴露によるフリーメイソンの破壊」 エーリッヒ・フォン・ルーデンドルフ将軍

キリスト教徒

「ユダヤの大仮面」 (匿名

「キリスト教の犯罪史」カールハインツ・デシュナー（全10巻、大部分はドイツ語で未訳）

「キリスト神話」、「イエスの歴史性」、アーサー・

ドレウス「キリストの陰謀」、Archarya.S（別名D.M.

マードック）「キリスト教の起源」、レビロ・P.オリ

バー

「キリスト教の暴露」、ジョイ・オブ・サタン・ミニストリーズ

「ローマとユダヤ、ユダヤとローマ」、エウロパ・ソベラナ誌

ブルートクラシー

「クラス主義」、ジーク・グルン

「高利貸し反対宣言」 Göfried Feder

「銀行と通貨、そしてマネー・トラスト」 チャールズ・リンドバーク

民主主義

「民主主義の誤った前提」 アンソニー・ルドヴィ

チ 「自由主義のまやかしの起源」 アンソニー・ル

ドヴィチ

フェミニズム

「女性問題」ジーク・グルン

「ウーマンアンソニー・ルドヴィチ著『"女"の復権

イスラム教

"イスラム教を暴く"、ジョイ・オブ・サタン・ミニストリーズ

「イスラム教ユダヤ人の宗教」ジョイ・オブ・サタン・ミニストリーズ

リバタリアニズム

「自尊心の美德」アイン・ランド

共産主義／左翼主義

「文明に対する反乱：アンダーマンの脅威」 T・ロスロップ・ストッダー

ド 「ボリシェヴィズム モーゼからレーニンまで」 ディートリッヒ・エッ

クハルト

敵の心理

旧約聖書、バビロニア・タルムード；

「権力の48の法則 戦争の33の戦略」ロバート・グリーン（ジ

ュウ）；「迅熙」；

孫子；

「誰でも何でもできるようになり、二度と無力感を感じなくなる方法」

デイヴィッド・J・ライバーマン；

「人間行動の操作」、ピータマンとジマー；

「説得の力：私たちはいかにして買われ、売られるのか」ロバート・レ

ヴィン、「人間のバイオコンピュータにおけるプログラミングとメタ

プログラミング」ジョン・C・リリー；

「ルミナティはいかにして完全で探知不可能なマインド・コントロールされた奴隷を

作り出すか」、フリッツ・スプリングマイヤー、「共産主義洗脳マニュアル」、

L.Ron.ハバード

神経言語プログラミングは有効だ（バンドラーとグリンダー）；

敵との戦術

カール・フォン・クラウゼヴィッツ『戦争論』、『小戦争論』（ゲリラ戦）；

敵とその戦術

「反ユダヤ主義闇の勢力に対抗する」

「Jew Who：ユダヤ人を見分ける方法

「標的個人ハンドブックギャングストーキングと指向性エネルギー兵器との闘い」

個人用防衛武器

(W.R.O.L/S.H.T.F.シチュエーションの場合のみ-すべ

ての法律に従う)"Weapons of Streets"、テッド・ガンボルデラ

「常に武装する」（合法的な防衛武器）

「L.A.P.D.の即席武器とその他の安全上の懸念」

"*Knives of War: An International Guide to Knives from WW1 to Present*", Gordon Hughes "ASP Tactical Baton Manual".

銃器およびその他の防衛兵器製造に関するD.I.Y.マニュアル（例：

Paladin Press; Delta Press; Desert Publications; Loompanics）

戦闘技術

"ディムマック・バイタルポイント打撃の致命的な秘密"、サイエンティフィッ

ク・プレミアム・カンパニー"ブラッディ・ブラジリアン・ナイフ・ファイト

テクニック"、リック・ナカヤマ、他

"ストリート・セルフ・ディフェンスの秘密"

、ポール・ウェラード "刑務所殺しのテクニッ

ク"、ラルフ・ディーン・オマール "1,001

Street Fighting Secrets"、サミー・フランコ

"Fighting with Sticks"、ニック・エヴァンジェリ

スタ

「ベアナックル・ボクサーの仲間：初期のボクシングの達人たちから、ハードな打ち方と
タフな鍛え方を学ぶ」デイヴィッド・リンドホルム、ウルフ・カールソン・タダ著

J.O.G (ユダヤ占領政府) の「法律

「火災放火捜査マニュアル」

「自動車爆弾識別ガイド

「諜報員がノックしたら」、ピ

ル・ホワイト「諜報員に気をつ

けろ

「逮捕と冤罪に関する論文」チャールズ・ワイズマン（米国）「潜入捜

査とエージェントの特定」ティモシー・トビアソン

「警官が使う汚い手口」バート・ロンメル

サバイバル主義

「スーパーマーケットから食料を盗む方法」J・アンドリュー

・アンダーソン 「サバイバル密猟」 ラグナー・ベンソン

「プロのスリのテクニック」 ウェイン・イエーガー

"Living in Car 101"

「現代兵器のキャッシング」 ラグナー・ベンソン

「The Art and Science of Dumpster Diving」 ジョン・ホフ

マン 「The Modern Survival Retreat」 ラグナー・ベンソ

ン

「ヴァン居住とオフグリッド生活」 スティシー・

ジェイデン 「ヴァン居住の基本」 クリス・オン

インフラ・セキュリティ

「エクスペディエントB & E」 カール・ハマー

「セキュリティーシステム シンプリフェッド」 スティーブン・ハンプトン

「プロ用ロックツールの自作方法」、エディ・ザ・ワイヤー

「最新のハイセキュリティ・ロック: スティーブン・ハンブ

トン 「防犯アラームのコツ」 マイク・ケスラー

「秘密の隠れ場所の構築」 チャールズ・ロビンソン 「

秘密の隠れ場所大全」 ジャック・ルーガー

インテルと通信のセキュリティ

「デジタル時代のセキュリティと匿名性-ナショナリストの視点」、ナショナ

ル・アクション 「プロフト・バイのルール」、匿名ギャングスタ

「シャドーイングと監視」 バート・ラップ

「ドント・バグ・ミー: 最新ハイテク・スパイ術」 M.L.シャノ

ン 「変装術」 ジョン・サンプル

「ギャング・インテリジェンス・マニュアル」 ビル・バレンタイン

「コード、暗号、秘密の文章」 マーティン・ガードナー

「The Quick and Dirty Guide to Learning Languages Fast」、

A.G.Hawke Booksより:

デザート・パブリケーションズ; デルタ・プレス; パラディ
ン・プレス; ルンパニックス (インターネット: 記憶の穴に
埋もれてしまう前に流通させよう)

アウトロ

この簡潔な作品を学ぶことによって、志願者は定められたテンプレートに従ってさらなる研究を進めることができるようになるはずだ。必然的に、主人公は自分自身の道を歩むことになるため、この作品から何を受け取ろうとも構わない。

カリ・ユガのこの時点では時間が短く、志願者は少なくともこれまでと同じように、自分自身と世俗的な関心事に制限をかけなければならない。

この道は、修行僧のような逃避的な隠遁ではなく、力と強さの道である。それは狂人とバーサーカーの道であり、ヴァーマ・マルグ（左手）、つまり左回りに回転する卍の道であり、それゆえ自分の存在のあらゆる次元にわたって挑戦する必要がある。

それゆえ、世界の戦場に足を踏み入れ、モーニングスターの光の永遠のチャンピオンと物質の力との間の永遠の戦争に参戦せよ。勝利とヴァルハラが向こう側で待っている。

"戦略こそがハイパーボリアの生きる道"

「すべての恐怖は外部に由来するものであり、自分の存在とは異質なものである。

「混乱は、ヴィリヤが不滅のシッダに変化するための主な障害である」。

-ニムロッド・デ・ロサリオ

バーサーカー

BOOKS



